

---

# 変な星で仮にツッコミ生活！？

神離人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変な星で仮にツツコミ生活！？

### 【Nコード】

N0221E

### 【作者名】

神離人

### 【あらすじ】

『変な星でツツコミ生活！？』の原作の原案みたいなあれです。『変な星でツツコミ生活！？』の大まかなストーリーの流れは、これが基盤となっています。内容は大分違ってるかもしれませんが。

\*昔に書いたものなのでいろいろなカオスと誤字や脱字に注意。その他、不快な文章が含まれている可能性もあります。

## 0 話：プロローグ&キャラ紹介！

### プロローグ

地球の隣に数年前に出来た星があります。名前は特星と言っなまえです。

何か変な生き物も居る星ですが安全な星でそこに移り住む人も居ました。

そして今では学校・店・家なども出来てすむ人も増えてきました。その中のいろいろ起こる数人の話がこれです。

### 〽キャラ紹介前の予備知識〽

・この国のお金の単位〽セル（1セル〽1円）

・この国は生体不老ベールに包まれていて年を取らない+怪我はしない（でも元々の怪我などは回復する）

・の追加効果で国に入ると特殊な能力を1つ覚える（この国の住人はもともと覚えてる）

・生体不老ベールは後から人工的に作られた物でありそれまではこの星の生物は普通に年を取ってた。

・ちなみに入国時に渡される高性能ほんやく飴というものを食べるので

外国語＋この国の言葉が自分の覚えている言葉として聞ける（動物などの言葉は不可）

・ちなみに危険この星は危険なことも多いので授業で決闘などもある。（大怪我しない程度に）

・主人公の住んでる学校は寮制度で高校である。

・剣・槍など鋭いものは切れずに刺さらずに食い込む。

・まあこんな所です。

そろそろメインキャラ紹介にいつてみよーー

雷之 悟『ライノ サトル』

今回の物語の主人公でツツコミ担当で高2そして黒髪。

性格は明るく勉強は中の上位できて運動能力もそこそこ。

しかしこれといった特徴が無く主人公に向いていない。

酷い事に会う事が少なくはないので体力もある。

使用武器は水圧銃や空気圧縮銃などの銃系&バズーカや大砲を使う。

その他にも木槌、トンカチ等のハンマー系の武器なども使える。

最近気になる事は「何故高性能ほんやく飴を使ってもお金の単位が円じゃないのか」らしい。

戦いは若干苦手。特殊能力は『魔法弾を作れる事』である。

ちなみに席が魅異の隣で異常に苦労している。

神離 魅異『シンリ ミイ』

主人公の同級生の高2で、ものすごく陽気で茶髪。主人公より紹介文が多い。

性格は95%ぐらいは+思考で天然バカ。立ち直りの速さは世界一？体力はかなりあって何処かで不可解行動することが多い。当然ボケ役。

勉強は恐ろしく駄目。毎回2択問題500問でこつちだと思った方を書いたら全て外すというある意味奇跡的な回答が多い。宝くじを当てた事も無い。

その気になれば特星1つくらいは乗っ取れるはず。

使用武器が槍でお気に入りには収納式の槍だがその他に投げる武器も得意。完全に常識と設定を無視した行動も多数あり。

2話目あたりからちよつとした者になるので悟より主人公らしさ抜群。

ちなみに自称「世界の常識を超える女」らしい。

戦いを結構気に入っていたりする。特殊能力は『予測不能行動80%』である。

## ジャルス『ジャルス』

ヌスマー族という種族の一人で主人公の隣のクラス。ツツコミとボケはその時によって変わる。発言回数はまあまあ。立場上では一番とばっちりが少ない。髪は多少薄めの黒。

性格はたまにのんびりしていてヌスマー族では珍しい。体力は普通の人くらい。

ちなみにヌスマー族は人とは違うこの星の住民の一つであるが人間そのものに近い。

魅異ほどバカではないがIQ77位。（ヌスマー族平均IQは80位）

代表のヌスマーに憧れていて使用武器は杖や棒など軽い物（素手を含む）

戦いは得意ではない。特殊能力は『ランダム』でいろいろ起こるらしい。

## 烈『レッ』

地味な事意外何でもやる気全快の超単純バカでジャルスと同じクラス。

髪の色は赤で性格は熱くなりやすいがよくこける。(1日20回くらい)

種族はライルス族という人型の種族で成長速度が速いらしい。

この手のタイプはやられ役だが、烈もそのうちの一人である。

魅異ほどではないが勉強が苦手。2択500問の問題を10〜15位は解ける。

使用武器は剣・刀など。戦いは結構好きだったりする。特殊能力は『水上歩行』である。

〜その他キャラ〜

アキステ『アキステ』

この小説の作者で後書きによく登場。

小説本編で登場する時は主にイベント開催の時などである。更新が遅いのは日常になってるが最低月に1回は更新する。ちなみにフルネームで『アキステ・RT・DX+』である。特殊能力は『作者の特権』という反則的な技を使う。

ナレーション『ナレーション』

はい私です。この小説は主に悟の視点で進んでいきますが

たまに登場します。このプロローグやキャラ紹介を呼んだのも私です。

とりあえずキャラの事を呼び捨てで呼んでいます。

特殊能力ですか？小説内の一部を除く人には見えない・声が聞こえない等です。

クレー『クレー』

多分よく出てくるキャラで特星生まれ。主人公のライバル？

髪は黒。主人公とクラスは同じ。ツツコミ？

とりあえず得意武器はトラップ。そして両利き。

特殊能力は『魔法』が使える。

魔法が使えるので2話目以降からある者になる。

これで基本キャラの紹介は終わりです。

他に多少重要キャラが出たらちよくちよく紹介していきます。



## 1話：これが日常！？

@ 悟視点 @

「つふあゝ」

おー朝か。でもまだ眠いからセオリー通りに・

「二度寝に限る。ってことでおやすm」「ドゴオオオーン!!」

・・・ハア今日もか。間違い無く魅異だな！

「おっはよう！」

「やっぱりお前かああ！」

「ガンッ！」

いつも通り木槌で殴ってやった。皆は真似するなよ？・・・まあ魅異は大丈夫だけど。普通気絶はするはずだけどなあ。

「ちょっと何するのさ？」

「いつも通りだろ。それに壁を破壊して何を言うか!？」

「それこそいつも通りだよ」

ヤバイ、朝から疲れてきた・・・

「それで？結局何か用でも有ってきたんだろ？」

「貴方の首を狩りに来ㄝ」

「俺に首を狩られに来たのか？勉強の希望と言つ名の首を」

「実はこれが日常つてのを見せに来たんだよ。」

確かにこれは日常通りだよな。

「じゃあいつも通り修理代払つといてくれ。八十九万円・・じゃなくて八十九万セル。」

「しょうがないな．．．」

普通の5倍くらいの額を請求してやった。気分爽快

さて学校行くか。ちなみに俺は高校生だぞ。

．．．．．

途中いろいろあったが学校到着。うん疲れたよ当然。

魅異が何処かのオッサンにぶつかって痴漢とか言つてオッサンをワ

二に食わせてたし。

アルがそこら辺の子供が軽い試合挑んできたけど時間の都合上、全力でぶっ飛ばしたし。

・・・でも、まあ二個なら少ない方だな。

～教室～

「ドガン！」

魅異がドアを蹴り開けた。何故蹴り開ける？

「よし到着」

「いや、よくねえよ！何故ドアを蹴り開ける！？」

「ノリだよ」

「・・・ああ～もういいや。」

いつも通りだしさ。皆も気にしてないし。

「まったくこれだから馬鹿達は困る。」

おっ、どうでも良い存在のクレーだ。

「あつ、馬鹿以下のクレーだ。」

「俺が馬鹿以下とは片耳痛いな。」

医者行け。つとそれよりもつすぐ授業が始まる。

「・・・あゝそろそろ授業が始まるから喋ってる場合じゃないぞ。」

「おつとそうだった。とりあえず座つとくか。片耳痛いけど。」

しつこい。まあそれは置いて今日の授業は・・・

・外で準備

・決闘 1 試合目

・決闘 2 試合目と3 試合目

・決闘 4 試合目と弁当

・決闘 準決勝と決勝

・帰ってよし

1 日中決闘かよ。よし、今日はサボって釣りでもやりにいくか。  
本当はサボりは気が向かないが勝負はやる気でないし。

そういえば先に言っておくけどこの世界はエリア別になっていて俺の寮があるところが地球現代エリアで最近作られたばかりだから範囲が狭い。（特星の陸地の一億分の一パーセントくらい）

この学校は特星エリア（特星の全体の九十七パーセントくらい）にあつて村とか町も特星エリアに在る。

ちなみに特星は陸地が五十パーセントくらい海が五十パーセントく

らいとバランスがいい。

ちなみにほんの少しの所は何処かの帝国が支配していて地球で言うロシアくらいの広さらしい。

何時か攻め込む事になりそうな予感がする・・・気のせいであってほしい。

ちなみに特星エリアは自然いっぱいのロールプレイングみたいなエリアだ。モンスター怪物も居るし。

さてこの国について説明してる間に準備の時間になったようだ。俺はサボるけど。

1話：これが日常！？（後書き）

「とりあえず最初に一言・・・すみません！」

「あっアキステだ。ってか何謝ってるんだ？」

「せめて作者と呼べ。何を謝ってるかって1話目がキャラ紹介より短い事。」

「ああなるほどな。」

「とりあえず次回は長くします。悟のツッコミ回数も増やします！」

「・・・・・・・・・・」

「ドゥオンー！」

「ぎゃあああ！とりあえず次回をお楽しみに！」

## 2話：この小説に勇者と魔王を出さない訳ない

@悟視点@

「……いいもの釣れないなー。」

つと今回も俺視点か。というか一応、主人公だから視点多いのは当然か。

川に釣りに来たまでは良かったんだがろくな物が釣れない状況に陥っている。

連れたものはカエル、空き缶、ゴミ袋生ゴミ入り、借金領収書、ワニ、魅異に痴漢容疑のあるかもしれないオッサン等だ。これ釣った順番もきっちりしていて釣れる物が悪化しているのが分かる。

つてか最後のオッサンは人助けになる気もする。それ以前に何でもんな物が釣れるかが非常に不思議だ。

「それで何も釣れなくなつたと言う訳だ。」

よし。次の当たりが来るまでの間に別の話でもしよう。

この世界にも一応勇者と魔王は居るんだ。……いやもうすぐ出てくる。俺たちの中から誰かやるんだ。

決める方法はやりたい人だけ能力を測定してもらいそれを特星総合管理センターに『どっちを希望するか』と『能力』を書いて出すんだ。そして一番適切なやつにするらしい。ついでに俺も勇者希望で

参加中。

後、あの馬鹿魅異も参加してたな。まあ勉強能力は無いだからまずは落ちるな。・・・んっ？

「おっしや、ちょうど当たりが来たぜ！」

だが・・・重い。

「だがその分大当たり！おりゃーーーー！！！」

無理やり引き上げた。

「ドサッ」

「此处で私の登場〜！」

・・・・・・噂をすれば魅異か。まあ、まずはやっぱり、

「何で、」

俺は足を大きく振りかぶり、

「お前が、」

言いたい事を言いつつ、

「此处に居るんだああ！」

全力で蹴ってやった。自分の足が痛むほどの威力だ。



おもいきりぶっ飛んだな。俺ってそんなに力はないのに

「さて、釣りの続きでもやるか。」

ん？竿が無い．．．まてよ魅異を釣った直後に蹴ったから．．．．

「ま、まさか！？蹴っ……ちやった？」

多分今の俺は漫画で言うポカーンで顔をしてるだろう。

「ま、まってくれー！俺の竿おおー！！！」

この釣竿はいろんな物が釣れるから重要なんだぞ！

@ジャルス視点@

「ふあゝ、悟はこっちに行った筈だけど居ないな。烈一、見つかったー？」

「人に任せないでお前も手伝えよ！まったく。」

あつ僕視点になってる。いやー気づかなかったよ。

今は決闘サボって悟を探し中。本当は魅異も探してるんだけど授業

終了直後にいなくなっちゃったからねえ、しょうがないから竿を持つてった悟を探してるんだ。

だけど二人ともなかなか見つからないなー。

「いやっほおおー！」

あゝ魅異は見つかった。ってか竿付けて飛んでったー！？

「しょうがないなー。烈、追いかけてようよー。」

「よし。分かつて」

「竿おおー！！待てえええい！！！」

「ドカアッ」「ぎゃあああ！落ちるううー！」「ドサッ」「ブー  
ーン」「グサグサグササッ」「ぎいやあああああー！！！」

ありゃー、刺されちゃってるよ。

えーと、さっきのを簡単に説明すると・・・

・悟が走って来た。

・烈が跳ね飛ばされた。

・悟は走ってった。

・烈は運良く木の上に落ちた。

・が、幸い中の不幸で蜂の巣が有り、しかも壊れた。

・やられ役の烈は当然の結末に。

と、まあこんな感じだと思っよ。まあそれよりも

「烈ー早く行くよー。」

「な、何とか追い払った・・・」

「この星では針は刺さらないから大丈夫。」

「・・・でも痛たかった事は事実だー！」

「はいはいー。」

@ナレーター視点@

どうも皆様こんにちわ。キャラ紹介で登場したナレーションでございます。

今は魅異が飛ばされているという事で私の登場です。

「それより私はどこで止まるのかな？」

何故か魅異には私が見えるようですね。

あつ、目の前に高校がありますよ。

「じゃあそこに着地しよう。」

「ズゴオオン」

@魅異視点@

「ああ、埃だらけになっちゃった。」

「まったくいつでも馬鹿は馬鹿のままだな。」

「魅異君、ナイス登場じゃないか！」

この声は……

「馬鹿以下のクレーに杉野正安校長だ。」

そういえば校長に今日話があるって言ってたような？

「誰が馬鹿以下だ！」

「クレー以外に誰が居るの？」

「お前だ！」

「私は馬鹿だけど馬鹿以下ほど酷くは無いです。」

「それなら俺は天s」

「馬鹿以下しか思いつかないね。」

「誰が馬鹿以下だ！」

「クレー以外に誰が居るの？・・・って」

ループ！？気付かなかったら永遠に言い合いになってたね。

「まあまあ二人そろったし話を始めますよ。」

「あつどうぞ」

「同じく」

「あと魅異君、その突っ込みどころ満天のカッコいい釣竿は？」

「釣竿？これは最近流行のファッションだよ。」

これは多分悟のだね。でもファッションにしたら流行ると思うよ。

「流石は我が生徒！とってもピッタリなファッションじゃないか。  
いやゝそんなファッションがあるとは気づかなかったよ。ベリーベ  
リーグッドですよ。」

「まあね。他にも硫酸スライムの腕輪とかも有るよ。」

「いやあ、私も昔は結構集めましたね。」

話がしやすくってこんなに良い趣味の校長はあんまり居ないよね。

「あの、校長。お話のほうは？」

「話ですか？ああそう言えばそうでしたね。実は貴方達二人が」

「ドローン！」

「釣竿返せええええええ！！！」

あつ悟だ。いつも壁を壊すなどか言ってるのに自分が壊してるよ。

あと此処は三階なのに外側のほうの壁から突入するのは無理がある  
つて。

「トイ」

「ふう、ようやく竿を取り返した。つて校長！？……とクレー」

「俺はオマケかよ!？」

「悟君、超ベリーベリーナイスな登場ですね！」

@悟視点@

と、とりあえず謝らないと。

「えと……すみません！」

「いえいえお気にせず。ナイスな登場でしたし。」

それだけの理由で許されるの！？やっぱこの人分からねえ！

「校長！無駄な抵抗はやめて早く話を進めな！早くしないと外に落とし穴を仕掛けるぞ！」

ハア！？魅異アンタ何を根拠に校長に強盗口調で命令してんの！？

いつもの口調変更の趣味か！？

しかも落とし穴ってそんなので校長が話を進めるわけ……

「えええ！？そ、それだけはお許してください！お代官様！」

あつたああ！？しかも強盗がお代官様もやってるのか！？

「まあ我も鬼ではない。実際は王だからのう。三分のカップ焼きソバが食べれるようになるまでの間に世界征服をしたらまあ命だけでも許してやろうではないか。」

鬼だよ！3分のカップ焼きソバ出来るまでの間に世界征服をしろと？絶対に無理無理。強盗とお代官様をやってる王様も頭の問題で失格だつて！

「征服してまいりましたよ！」

早っ！スゲエよ命令された直後に世界征服って！まさか俺も征服されてんの！？

「フハハ実は我は湯を入れずに食べるのだ！って事でその命もらっ

「たあ！」

「酷っ！やっぱ鬼だよアンタ！でもやっとなら」

「クツ、こうなったら反乱だあ！奴を撃つ！」

「反乱したあ！？当然の結果だけど！」

「今すぐ五円を褒美としてやろうと思ったのだがねえ。」

「シヨボツ！ってこの国の単位はセルじゃ無かったのか！？」

「貴様あ！我々農民を馬鹿にしているのか！」

「怒った。まあ当然の結果だな。あと校長は農民の役だったのか。」

「何が不満だ？」

「普通に金額だろ。」

「金額だ！五円ではなく十円にしろ！」

「十円でいいのか！？反乱はたった十円で収まるのか！？」

「何だとお！？わが国にはそんな大金など無いわ！」

「無いのかよ！五円はあるのに十円は無いのか！？」

「ならば覚悟！」



「返り討ちだ！」

そして俺とクレーの事なんかお構いなしで戦争になってしまった。

「ドコッ！バキッ！ガシャン！PIPIPII！ZIRIRIRIR  
I！ワンワン！グワーン！ピーンポーンパーンポーン！お客様の  
呼び出しを申し上げます！特星現代エリア学校寮からお越しの雷之  
悟様！」

俺！？

「お母さまの神離 魅異様が校長室で迷子になってます！至急三階  
校長室までお越しギヤー！ピーンポーンパーンポーン！」

お越しギヤー！？

ってか見かけは普通のバトルなのにどうやってたらあんな効果音が出るんだ！？

しかも母親の方が迷子かよ！！

「あと俺はアイツ（魅異）の子供になった覚えは1度も無い！！」

「ピーンポ ドガガガ！バキィ！！ドゴォン！！」

@ナレーター視点@

本日2回目登場。クレーはバトルを止めようとして巻き添えを受

けて伸びてます。

バトル状況を確認すると悟は超巨大ハンマーを振り回してます。魅異は右手に槍、左手に爆弾、ダイナマイト、私のキャッシュカードなどを投げてます。

いったい何処から？校長は波動を操って、波動剣や波動砲の他に波動波などを扱っています。

「ドカツ！バーン！ヒュ〜」

おおつと悟がハンマーで二人を横に殴り飛ばした！二人は壁を突き破って落ちていった！

「校長〜、こっちだよ〜。」

「おおつ魅異君、私のことを助けてくれるのですか？それはベリ〜ナイスアイデアです！」

おおつと魅異が校長を助けようとしている！これはまともなシーンだ！

「パシ」

校長の服を掴んで

「それ〜」

下に投げた――！？感動シーンじゃなくて魅異の罠だった！

「ドカーン！」

校長、地面に突っ込んでいきました！

「さて、私はどうしようかな？んっ？アレは」

・・・・・・・・・・

「烈ーこの人、校長だよー。」

「何でこんな所に校長が頭から突っ込んでるんだ！？」

「さあ？・・・・・・・・あっ」

「サッ」（草むらに隠れる）

「どうしたジャルス！？」

「避難ー。」

「避難？何か来るのk」

「グシャッ」

「グエー！！」

「無事着地完了」

「無事じゃない！早くどけ！」

「おつと失礼。」

「ピョン」

「いや、危うく踏まるところだったね。」

「ジャルスてめー、一回踏まれろ！」

「お断りだよ。」

「ガシャツ、ガラガラッ」

おつと暴れすぎて高校が崩れそうですね。

「ガラガラガラ！ドガシャーーン！」（崩壊

あつ崩れた。

@ 悟視点 @

「いてて 死に掛けた。」

これで学校破壊回数がまた増えてしまった。これで20回目ピツタリだ。

「おはよ〜」

「……一番嫌な奴が起きたか。全ての元凶め。」

「み、耳鳴りがする!」

あつ、クレーも起きたな。まだそのネタを持つてくるか?

「ゴッドモーニング悟君。」

「ゴッドモーニングじゃなくグッドモーニングです!ベタじゃないしつまらない間違いをしないでください。」

校長とジャルスと烈はもう起きてたようだ。

「ところで校長、話は?」

クレーがそんな事を言う。話があつたのか?

「ああすっかり忘れていました。実は魅異君とクレー君がそれぞれ勇者と魔王に選ばれたんですよ。」

「「「ええー!!?」」」」

「やった〜」

俺とジャルスと烈とクレーが驚いて魅異が喜んでた。

「魅異君は体力と身体能力の異常な高さで勇者に決定してクレー君は魔法が使えるから役がピッタリだからと言っていましたよ。」

その程度の事で良いのか特星本部 頭のレベルは二人とも馬鹿だぞ。

「あと聖王は他所の学校の者になったらしいですよ。あと勇者、魔王、聖王が決まったから

明日に特星恒例のコロシムでバトルが行われるらしいのですので参加したらどうですか？商品付きですよ。」

よし、それなら次回で主人公らしいところを見せてやるぜ！

## 2話：この小説に勇者と魔王を出さない訳ない（後書き）

「おおーいアキステー！」

「せめて作者と呼べ。・・・で、なんだ？」

「疲れた。」

「それだけかよ！？」

「途中の魅異と校長のいいあいが長すぎる。」

「まあな。あと校長の紹介文言つといてナレ君。」

【ナレ君・・・まあ呼び方はどうでも良いです。

名前：杉野正安  
すぎのまさやす

特星の悟達の高校の校長。

波動を扱い戦闘も出来る。

役はボケ役決定。魅異とのコンビネーションボケは必要以上に突っ込みが大変。

本編の中では作者と知り合い。

終わりましたよ。】

「何故校長とアキステは知り合いの設定なんだ？」

「学校の行事などに参加するためだ。それくらいしか本編では出番が無いから。」

「じゃあ出るな。」

「酷っ、まあそれは無理だから。それじゃあ次回をお楽しみに。」

「それ以前に小説を読んでくれてる人が少ない」

「そのうち増える！多分」

### 3話：レジェントofバトル（前編）『試合開始まで』

@悟視点@

「さて昨日魅異が勇者になったから俺の主人公らしさが目立ちにくくなったが今日の大会で俺は主人公らしい主人公になり賞品も頂くぞ！」

そういえばこの世界のバトルについて説明して無かったよな？

この世界では相手を気絶させるか相手に降参させればいい。

何故って？此処は不老不死ベールで包まれてるからだ。

気絶って言ってもダメージはあるから基本は痛さで気絶させるんだ。

「さて飯も食ったしコロシウムに向かいながら説明するか。」

だからハンマーや斧などが必ず有利じゃないって事だ。

あと属性攻撃のダメージは全部平等になってるぞ。

雷の攻撃と氷の攻撃のダメージはいっしょって事だ。

「おお、結構でかいな。」

まあコロシウムについたし説明此処まで。

「そういえば新勇者と新魔王と新聖王は開会式のとくに何かコメン



トできるらしいな。

すごく心配だ。あと新聖王は誰なんだ？あと今年の参加者は200人前後位だと思う。」

「ピンポンパーンポーン」

「もうすぐ開会式が始まりますので参加者の皆さんはコロシアムバトル会場、観客の皆さんは観客席までは是非お越しください。あと雷之 悟様、お母様の勇者様が迷子センターで迷子になってい ゲドウハア！！！」

「ピンポンパーンポーン」

ゲドウハア！？意味わかんねえよ！後俺は勇者の子じゃないって。

「とりあえず行くぜ！」

くバトル会場く

「えーこれより毎年恒例のレジエントofバトルの開催を此処に宣言します！」

「ワーワー！！」

観客は効果音扱い！？

「開始前に今年の勇者と魔王と聖王からコメントを頂きます。つとなんと1年に全員の役が交代されています！今までで初めての出来事です！」

今までは大体はそれぞれ同じ奴がやってるんだよな。だから勇者は去年までずっと同じ奴だった訳だ。

「まずは聖王様からのコメントです！」

「今年初めて聖王になったが名前はKIRODOだ。そして目指すは・・・優勝だ！以上。」

「短っ！次魔王！」

「俺は様なし！？新魔王のクレーだ俺の目標は雷之を越える事だ！」

何でコメントで俺の名前を出すんだーーーー！？

「雷之つてー？」「何で勇者様や聖王様じゃ無く一般人なんですかー？」

ほら見るいろいろ質問が飛んでくるだろ。

「それは・・・奴が主人公だからだ！」

なるほど、それは納得だ

「えっ！？嘘っ」「絶対主人公に向いていないと思うぞ。」「絶対脇役だな」

「あの観客、後で潰す。」

「最後に勇者様のコメントです。」

「やつほー皆！私は昨日勇者になったから・・・皆私に征服され  
る」

「ガス！」

ふざけた発言が出たので木槌を投げてやった・

「勇者様に何するんだー！」「」「そうだそうだー！」「」

棒読みで言われても怒ってるようには聞こえねえ。

何するって征服発言をしたから木槌を投げただけ　って観客どもは  
追いかけてくるなあ！

んっ？アイツは俺に主人公じゃない疑惑をつけた観客二人！ぶっ潰  
す！

「夜空の塵になってこい！」

「ドグオオン！！」

バスター力でぶっ飛ばしてやった。

「まだコメント中なんだから騒がないでよ。」

「誰が原因だと思ってるんだこのやろっ！」

「私以外のせいだよ。あっ、そうだ。皆さん悟は毎日毎日勇者  
の私を木槌やハンマーで殴ってくる悪人ですよ」

「誤解を招く発言をするなあああ！！！」

「ベチャッ」

「あっワサビだ〜。」

「って効いてないし！」

「え〜と、最後に主催者のアキステさんからコメントがあるようです。」

「アキステからねえ・・・ってオイ！何で作者が出てくる！？」

「いや〜、前回より期待できそうな奴らが集まって良かったと思っている。まあ面白い戦いを見せてもらおうとしますか。」

俺の質問を無視してしかも高みの見物か これでも食らえ！

「ベチャ、バシャ」

「アウチ！ノオオオン！！何かが顔面に！！！」

今撃ったのは皮膚にしみるほどの液体タバスコと無理矢理作った五十万度の湯が飛び出す弾だ。えっ？普通は気化する？特殊能力で作った魔法弾だから大丈夫。

「とりあえずこれで開催宣言とコメントは終了します。参加者の皆さんは控え室の方で出番が来るまでお待ちください。」

「参加者控え室」

「予想外に広いもんだな。」

俺は今、参加者控え室に居るんだが・・・控え町のほうが正しいと思う。

だって広すぎるぞこれ。なんかお店多いし人多いし。そこら辺にモニターがあるが多分試合を見るための物だろう。そこら辺に受付に戻る装置もある。

よし！喫茶店にでもいくか！

「喫茶店」

喫茶店の店内に入った俺だったが

「いらつしゃいませ、なんかおこつてね」

ハア 魅異が居た。

「いらつしゃってません。帰ります。」

なんかワサビ臭いし帰るか。

「僕達も居るんだから帰らないでよー。」

「俺も居るぜええええ!!」「ツルツ、ズテン!」「ゴハア!」

あつ、ジャルスとこけて頭を打った烈も居たのか。

「いや逆に心配だ!だが暇だから居てやる!」

こうなったら投げやりだ!

「あの、お客様がの知り合いの方がもう一人来てますが。」

そう言う本物の店員さん。誰だ?

「とりあえず連れて来て下さい。」

「この方です。それではごゆつくり。」

こいつが参加者か?

「よっ。」

「どうしてアキステがここに居る?」

これは当然の疑問。参加者といわないでくれ頼むから言つな 言つな 言つな

「作者の特権を使ってここに居る・・・って所だ。」

「よっしゃ！セーフ！」

参加者って言わなかったぜ！

「あつ、そうそう人数が多すぎるから作者の特権の能力で烈は喋れないぞ。」

酷っ！まあ叫ぶだけの奴だから別に良いか。

「そついえば話があるんだが……」

「おっ何だ？」

アキステの話だからなあ。たいした事ないか。

「主人公を魅異に変えようかと思うんだが。」

「ふーん」

「やった〜。」

「……つて、へ？まず魅異、喜ぶな。ジャルス、反応位はしてくれ。そしてアキステ、マジで？」

「う、嘘だろ？」

「ああ嘘だ。」

「俺に対する侮辱かコラ！」

「YES。」

「でも騙される悟も馬鹿よね」

お前に言われたらおしまいだ。

「まあ魅異のいつてる事もあつてるけどー。」

ジャルス！俺を見捨てるな！

「さて悟の奢りだし何か頼むか。店員さん！」

ふざけんな作者め！俺に対する嫌がらせか！？後書きで懲らしめてやる。

「何かご注文ですか？」

「金塊一つに宝くじ千枚。」

何を注文してるんだアキステエエエ！！そんな物が有るわけ

「金塊のサイズは？」

有るのかよ！？しかもサイズまで！

「一番大きいMAXタイプで」

「かしこまりました。」



作者失格だ！後書きでは滅茶苦茶やられてるのに本編では勝手すぎ！

「私は悟焼き弁当ね。」

俺を殺す気か！？勇者失格だあああ！！

「かしこまりました。」

ふ、普通に答えた・・・この人は人形？

「え」と僕と烈は・・・スイーツセットで」

そつえば烈も居たっけ。アイツは喋れないから忘れてた。

俺は何にするかな・・・メニュー無いのに何で皆注文できた？

「俺は」

「貴方が悟さんですよ？材料としてこっちに来て下さい。」

「いや無理です。」（即答）

「ズルズルズルズル」

ええ！？マジで料理になるの！？ちょっと待てやコラー！

俺の両手を持って引きずっていつて着いた場所は・・・

「じゃあ頑張ってくださいね」

店員帰っちゃった・・・着いた場所は広場で何か二百人位の人が俺に視線をぶつけるかのように睨んで来る。俺が何かしたか？とりあえずいくつか質問するか。

「えっと、あんた達は誰？」

料理人かな？俺焼き弁当作る料理人か？

「俺たちは大会の参加者だ。」

代表らしき奴が言う。ああ、何人か見たことあると思ったら参加者か。

「それで俺に何の用？」

それが肝心だもんな。まあ怒ってるから気になるし。

「貴様は勇者様や魔王様からライバル視されているだろう？」

「俺からしたらかなり悪い迷惑だ。」

「その事と勇者様に木槌をぶつけると言う大問題を起こしたからな大会役員に代わって裁きを与えるから諦めてやられる事だな！」

そういえば三回前の大会で勇者の悪口を話してた奴ら二人が翌日気絶した状態で見つかった事件があったな。

それ以降は勇者だけでなく魔王や聖王の悪口を言う者までいなくな

ったなからな。その時の被害者は百人くらいの奴らに襲われたとい  
ってたがこいつ等だな。人数倍だけど。

「一つ聞く。あんた等は大会役員に頼まれて俺を襲ってんのか？」

「いや・・・違うな。大会役員に罰を頼んだが貴様と勇者様は知り  
合いだからと言うくだらない理由で却下されてしまった。」

十分な理由だろそれ？後、今分かったがこいつ等勇者宗教団体だ。

「あと待つてる間に他の奴を気絶させれば気絶した奴は出れなくな  
る公式ルールがあるからこれはルール違反じゃないぞ？」

だから街の一部でケンカみたいなバトルをやってたのか。

「さて、そろそろ覚悟してもらおうか？」

「その言葉・・・弾丸をつけて返す！」

そう言い俺は銃を取り出す。

「チツ、武器を持ってたか。だが無駄だ！行くぞお前ら！」

「おおおおー！」

やっぱり仲間は効果音扱い！？

「水圧圧縮弾！」

「ッドゴーン！」

使いようによつてはミサイルより強い水圧圧縮弾。二、三十人はぶつ飛ばしたぜ！

「くたばれえ！」

剣を持つて5人くらい来た・・・が俺は何処からか巨大ハンマーを取り出し・・・

「大回転打！」

回転して殴り飛ばした。前回に校長と魅異を飛ばしたのもこの技。

「次は突撃部隊！行けえ！」

「うおおおお！！！」

横一列になつてきたー！銃を使う俺からすると厳しいが

「オイル弾！」

オイルをあいつらより少し前に撃ち・・・

「火炎砲！」

火の玉を撃つておいたぜー！結果は当然！

「ボオオオオ」

「熱い熱い！！！」

うるさいし近所迷惑だ。大会に出てる奴らが全員こいつ等なら良いな。

「さてと。残るは偉そうな事言ってたお前か。」

「フ、フハハ貴様程度に負けるほど俺は弱くな、ないわ!」

ワザと怖がったフリしてるように見えるって。

「でもしょうがないから接近戦でバトルしてやりますか。」

「まあ問題ないだろう。覚悟!」

「ガキン!」

俺のハンマーとアイツの槍がぶつかる。あいつ槍使いか。

「連射突き!」

「盾回転打!」

「カン!キーン!」

連続で付いてくるからハンマーを縦回しで回して盾のように防ぐ。

「チツ、神墮突き!」

「ゴルフスイング!」

「ガキイイン！」

低めに位置から突いてきたからゴルフのようにつ振った。ちなみに名前は魅異がつけたんだ。

「ゴ、ゴルフ？」

「隙有り。近距離なら銃もありだろ？圧縮ワサビ弾！」

「グチャッ」

「!!!!!!!!!!!!!!」

言葉になってない叫び声をあげてどこかに走ってく あっ壁にぶつかった。

さて喫茶店に戻るか。

く喫茶店く

「やっと戻ってこれた！」

「おゝ戻ってきたか。」

あれ？どうしたアキステ、安心したような顔して。

「いやゝ、よかったねゝ。戻ってこなかったらどうしようか心配してたんだよゝ。」

「そうそうー。」

ジャルスに元凶？の魅異か。だが俺って心配されてたんだ

「皆、心配かけてすまなかった。」

一応謝つとかないと。

「気にしなくて良いって。ちゃんと戻ってきたんだし店の代金は何とかなりそうだね。」

・・・・・・は？

あゝお店の代金の心配ね。納得納得。

「ちょっと待て、いったい代金は何セル」

「ピーンポーンポーン皆さんにご報告いたします。

大会参加者の二十一分の二十人位が気絶していて大会参加不可能となり、

少し組み合わせに変更が有りまして次のバトルは

勇者様 VS 魔王様

聖王様 VS 悟様

ジャルス様 VS 烈様

M I S T 様   V S   R T ・ D X + 様

X ・ クレスト ・ 七世様   V S   F J + アツタル様

の順番となりました。

一回戦目の参加者の方はコロシウムに入場してください。

「あつ出番だ。すみませーん！コロシウムへ送ってください。」

「かしこまりました。こちらへどうぞ。」

魅異の最初の相手はクレーか。俺はテレビ（モニター）で観戦するか。

「ってかこの対戦表は都合良過ぎだろ!？」

「俺が作ったから当然だ。」

「お前かああああ!!」



### 3話：レジエントoｆバトル（前編）『試合開始まで』（後書き）

@魅異視点@

「初めて後書きに登場〜あと更新遅くなってる〜?」

「ちゃんと今日も昨日も更新したが?」

「確かにそうだけど今日は昼前に投稿してるよね〜」

昨日はちゃんと夜の十二時に投稿したのに。」

「今回の話がちよつと長引いちやつてさ。」

「確かに長かつたけどね〜。」

「おつとナレ君、キャラ紹介忘れないでくれ」

【はいはい分かってますよ。

勇者宗教団体の一番偉そうな奴

勇者宗教団体に入っていて一番偉そうな奴。

この先出番はまず無い。得意武器はその時の勇者によっていろいろ変更。大会参加者だった奴。

「おお〜? 私にもファンができたの〜! ?」

アハハこれで主人公は私の物だね〜。そういえば何で悟を後書きに出さなかったの〜?」

「後書きで殺す発言してる奴をだせるか! 此处では特殊能力が使えないから殺られる。」

「なるほどね〜。そういえば此処の投稿ペースは〜?」

「出来る限り毎日で、超遅くても1ヶ月に1度。」

「毎日更新してれば見る人も増えるかもよ〜?」

「おっしや! がんばるぞおお! それでは皆さん次回もお楽しみに!」

#### 4話：レジエントofバトル（中編）『常識を超える！越えてるやつも居るけど』

@悟視点@

さてと常識的魔王と非常識的勇者どっちが勝つか……

常識の無い勇者に決まってるけどクレーに常識ハズレの攻撃が効くのか？

「これは面白くなりそうだねー。」

「そついえばアキステ知らないか？」

「さあー？」

何処いったんだ？ おつ、試合が始まる。

@魅異視点@

ふっふっふっ、やっと私の出番が来たね。

「おい、なに俺より邪悪な笑いをしてるんだ？」

失礼だね。私が邪悪なわけないのに。

「いくらクレーが相手でも容赦はしないよ。」

「本気で来ても大丈夫な自信はあるが？」

本気でいって大丈夫な相手はあまり居ない自身はあるよ。

でも適当にいけば勝てるかな。

「まあ馬鹿以下は置いといて……早くスタートして。」

「あつ、はい。バトル開始！」

「先手必勝だ！」

口調何にしようかなあ。やっぱり神様風にしよう

「我を攻撃しようとはおろかな奴め！天罰だ！」

「ズボッ」「のあっ！」「ズドオン！」

「落とし穴なんかにつっかかるとは考えの甘い奴め。」

「いつ、いつの間に仕掛けた！？」

あつ出てきた。

「確か転送された瞬間に0、05秒で作ったのだが？」

こんなの普通だよね？

「……フレイム！」

「ボォッ！」

「わっ、と危ない危ない我に不意打ちとは卑怯な奴め。」

「落とし穴を作る奴に言われたくない！」

「負け惜しみか。結局我に攻撃は当たって無いわ！」

「フリーズ！」

「カキン！」

「フツヤッと当たった・・・と言うところか。」

両足が凍っちゃったよ。でも面白いから溶けるまで遠距離攻撃にしよう。

「まずその神様口調をやめてもらいたいんだが。」

「何を言う、我の口調に問題でもあるか？」

「あー、もういいや。覚悟！」

両手に短剣を持っているからあれで突っ込んでくるのかな？

「投げ剣百連発！」「ヒュンヒュンヒュンヒュン」

あっ投げてきたね。しかも百連発！えーと槍、あつた！

「カン！キン！カン！キン！カン！金！換金！換金！」

効果音が変？気のせい気のせい。

「！？ティツシュー1枚で防いでるだと！？」

「あ、間違えてしまった。流石の我也気づかなかった。」

氷も解けたしいくよ！よし！

「ティツシュー百枚投げだ。流石の貴様も私の攻撃を受ければ一溜まりも無いだろう。」

「スパスパッ」

「ティツシューが剣を斬ってる！？って回避だ！」

「ズボッ」

「・・・へっ？」

「ヒュ・・・ドクアァン！！！！」

「何時作っただ！？」

「我を甘く見ない事だな。我は落とし穴神、魅異だ！」

何時作ったか？「氷も解けたしいくよー！」で作って「よし！」で完成だよ。深さ五十メートル。

「ワァァァ！！！！」

「勇者様の勝ちです！」

く控え室の喫茶店く

@悟視点@

「やっぱり馬鹿は勝ち残るか。」

「必殺技とか全然でなかったねー」

確かにティッシュを投げる技しか見ていないが・・・あれはあれで  
凄い技じゃないか？

だって剣切れるほどだぞ？物理的科学家が驚くぞ。

「ただいま」

・・・・・・・お帰り って！

「さっきどうやってきた？」

「受付からワープで室内の外に来て喫茶店に入ってきただけだよ？」

そういえばこの喫茶店は室内の中にあるんだった。ってそれより

「魅異ー、多分悟はどうやって壁を抜けてきたか聞ってるんだよー。」

ナイスだジャルス。だって絶対入ってくる時に壁抜けてたぞ！

「いやゝ実は」

「ピンポンパーンポン、次の試合が始まります！次の対戦者は聖王様VS悟様です参加者の皆さんは試合会場に向かってください。」

「つとちよつと行ってくる。店員さん！試合の参加者です。」

「こちらになります。」

「何か機械があるがこれに乗るんだよな。」

「はい。」

「よいしょつと。」

「ヒュン」

ゝバトル会場ゝ

「つと到着。早いな。」

「おつと悟選手も到着した！それじゃあバトル開始！」

「魅異の時とは違って早っ！」

「行くぞ！」

聖王居たんだ！？

「えっと、水圧圧縮砲！」

「ドゴーン」

「乱刹らんせつ！」

「スパーン！」

岩を砕く水圧圧縮砲を斬った！？

「これならどうだ！空気圧竜巻砲！」

「ッゴオオオオ！！！」

「竜巻！？」

この技は空気圧縮砲をモーター付きの銃で空中に放つ事で巨大な竜巻を起こす事が出来る技だ竜巻は辺りの空気を取り込み次第に大きくなっていくがそのうち消える。

「この程度の技で聖王の立場の人に勝てると？」

「何っ！？」

あいつは今竜巻の中に居るが余裕そうだ。



「ひだりぐいてんさん左回転斬！」

「ゴオオツ・・・」

「逆回転で掻き消したあ！？」

「諦めろ！」

いや、ここで諦めたらマジで主人公の座がヤバイ！

「なら・・・空気圧竜巻砲！」

「ゴオオオオ！！！」

「もう一度掻き消してやる！」

中に入った！チャンス！

「今だあ！火炎砲！」

「ボオツ」「ゴオオオオオツ」

「新必殺技！火炎竜巻！」  
かえんたつまき

「げ、外道！人で無しいい！！！！」

外道なら俺以上が居るぞ。

「でも流石に熱いか？水圧圧縮砲！」

「ドゴーン、バシャアッ！」

「圧縮されてた水が少し気化して水が散らばり渦巻となる。

これぞ2つめの新必殺技！水渦竜巻！」すいかたつまき

フィニッシュは……

「とどめだ！氷河砲！」

「ドオン！……ピキピキ、バリーン！」

「俺が撃った氷河は渦巻の水で割れて氷の粒となり相手に降り注ぐ！

第3の新必殺技！氷舞竜巻！」ひょうぶたつまき

「ゲシ！ガシ！ガスッ！」

「ちよっ、マジで痛い！痛たたたっ」

よし、気絶したし、そろそろ出してやるか。

「鉄球砲！」

「ドオン！ドガッ！」「ヒュウウウ、ドン！」

「聖王様は気絶しています！よって勝者は雷之 悟だあああ！」

「おおおおっ！」

驚きに聞こえるのは気のせいかな？

「それにしても流石は自称主人公！強いです！」

「自称じゃねえ！」

腹立つな！とつと喫茶店に帰るか。

「ヒュン！」

「ただいまー」

「おおー、自称主人公が帰ってきたよ。」

他称が馬鹿の奴に言われたくねえ！

「次はジャルスと烈じゃ無いのか？」

「そうだねー。行こうか？」

「おおー！　ってやつと喋れた！」

「都合のいい時に効果が切れるな。」

「よし！！それなら全力でいけるぜ！」

「そうこなくっちゃねー。あつ店員さん、参加者ですがー」

「どうぞこちらへ。」

さてと。

「魅異ーどっちが勝つと思うんだ？」

「うーん、ジャルスのランダム効果しだいだよねえ。」

烈は特殊能力が使えないフィールドだけど接近戦が得意でジャルスは接近戦が苦手だけど特殊能力の種類が良ければ遠距離攻撃で決めるだろうね。」

なかなか解説が上手だコイツ……

「それで結局どっちが勝つと思う？」

「あえて勝てなさそうなジャルスかな？」

こいつが勝てなさそうな方を選ぶってことは……

烈が負けてジャルスの勝利だな。

@烈視点@

おおっ！初めての俺視点か！？

って事は俺の勝利か！ハハハ！！

「ジャルス！今回は俺の勝ちは九十九パーセントに決まってるぜ！  
！」

「でも僕の勝機は一パーセントで十分だよ」

「パーセントで俺に勝てるかな？」

「勝負・・・スタアアトオオ！！！」

「先手必勝だ！！！」

「いくぜ！！」「ズルッ！ゴォン！！」「グヘッ！！」

「こ・・・こけるのは予想外だ！！」

「イテテ・・・！？ジャルスは何処だ？」

「後ろだけどー。」

「いつの間に！？」

「えーと、烈が勝手にこけて逆側向いて立って来ただけだよ」

「気づかなかった・・・」

「ちょっとショックだああ！！！」

「ランダムBOX！」

「ジャジャァーン！」

「今回の入れ物は箱か！あと効果音は何処から鳴ったんだ？とりあえず・・・」

「パッ！」

「貰ったぜ！！！！！」

中身は何だ！？

「パカッ ビヨォンガスッ！」

「のあああ！！！！！」

ビックリ箱かよ！？顔面に直撃して痛かったぞ！

「ちなみに当たりを引いたらその時点で勝利だからね？」

何い！？そりゃ勝負するより効果あるじゃねえか！！！！

「とりあえず箱はこれで全部だし、探そっかなあー。」

いつの間に全部出したんだ！？って俺も探さねーと！！

「これだあ！！！」

「パカッ バコォン！！！」

「これだあああ！！！！！！！」

「パカッ ボオオッ！！！」

「こ・れ・だあああああ！！！！！！！！！！！」

「パカッ ガスッ!!」

「パカッ ドカッ!!」

「パカッ カキン!!」

「パカッ ブッブー!!」

（10分後）

「の・・・残りは・・・」

ジャルスがずっと目の前で開けようか迷ってるアレだ!!!

「それだああああ!!!!!!!!!!」

ジャルスは飛びのいた!? 俺の迫力に負けたか。

「パカッ ピンポーン」

「よっしやああああ!!!!!!!!」

見たか! ジャルス!!・・・笑ってる?

「ランダムBOXは僕の使う攻撃用の箱だよ。それが大当たりでした。烈はどうなるー?」

ジャルスの攻撃で大当たり

「まさか!？」

「答えは僕の勝利でしたー」

「ドゴオオオガアアン!!」

騙されたああああ!!

「ジャルス選手の頭脳勝利だああ——!!——!!」

「負けたああ!!」

でも叫んでもしょうがないから戻るぜ!!

「ヒュン」

「ただい・・・」

んっ!? 喋れなくなつたあ!!

「また喋れなくなつたんだ?」

そうだよ! バカなら何とかしてくれ魅異!!

「バカなら普通直せないって。」

心を読むな馬鹿!

「ええ。」

「おっ、馬鹿二号が戻ってきたぞ!」



「あー烈。お帰りー。」

ああ、主人公らしくない悟に騙し屋のジャルスか。

「そうそう、視点チェンジの時間だぞ。」

えっ？

@悟視点@

やっぱこうでなくちゃ。喋れないのに悪いな烈。

「次の対戦は？」

「それは次回だよ。」

「それって視点チェンジの意味が無いような気がするよー。」

#### 4話：レジェントofバトル（中編）『常識を超える！越えてるやつも居るけど』

「今回は時間が無いから手短かにナレ君！」

【はいはい】

聖王

聖王になった奴で本名が有ったが  
完全に無視されてる。  
案外重要キャラか？

ハイ終わりです。」

「それじでは次回もお楽しみに！！」

## 5話：レジェントofバトル（後編）『バトル終了！賞品は・・・』

@ 悟視点 @

とりあえず前回は微妙な所で終わったが次はMIST対RT・DX+だ。

後者の方どんな名前だよ！？

あゝでもその後のバトルも変な名前の奴が居たな。

「さて〜どっちが勝つかない？」

ジャルスも気になるか。確かに他人のバトルだし何の情報も無いからな。

「おつ、始まった。」

「私の予想だと」

「つと、お前は予想するなよ。」

どっちが勝つか分かってしまうからな。

MISTもRT・DX+も服装は全て黒に統一している。

MISTはもとも顔も黒だがRT・DX+は真っ黒な仮面を被っている。

「ズボッ！」

おっ、MISTが落とし穴に落ちた。

「ギャボラア！？」

「おゝ、落とし穴程度にはまるとは。」

「何時作った！？」

「転送された瞬間に0、01秒で作っただけだ。」

「おおー！！」

うるさいぞ魅異。

「0、04秒差だね。」

「それは残念だねー。」

「ジャルス、同情しなくても大丈夫だぞ。」

「そう？それじゃあ試合の続きでも見ようかー。」

俺もそうするか って、いつの間にか終わってる！？

「いやーRT・DX+さんの最後の技は凄かったですねー」

MISTとかいう奴は負けたみたいだな。

「おっ、ようやく見つけた！」

んっ？この声は・・・魔王か。

「どうしたクレー、道に迷ったか？」

「何故俺が迷わないといけないんだよ！」

「馬鹿以下だからじゃないの？」

「それでも魔王だ！」

「じゃあ私が突っ込み疲れの刑五年の罰を下そうか？」

「・・・結構だ。」

それは俺でも嫌だ。下手したら死ぬから！それより次は

「次はX・クレスト・七世対FJ+アツタルだな。」

「両方ネーミングセンス無しじゃない？」

おっ？珍しく魅異と意見が合った。

「ZZZZ・・・」

ジャルスがいつの間にか寝てる！？

「いつ寝たんだよ？」

「俺が来た時にはもう寝てたぞ。」

魔王が来てジャルスが寝る。って事は話をするメンバー数が今まで通りか

「百パーセント作者<sup>アキステ</sup>の仕業だ！」

「そうなの？作者の特権は凄いなえ。」

「俺も習ってみたいものだ。」

才能の無いお前には無理だクレー。

「おつ、試合開始だ。」

「さあX対FJのバトルが開始しました！」

名前が略されてるぞ！

「食らえ！風刃！」

「・・・ロッドガン！」

「バシーン！」

「ストライクだよ〜！」

んなわけあるか馬鹿魅異。

「何っ！？これは野球だったのか！！？」

騙されるな馬鹿以下ツツコミ役！

「当然だがこれは野球じゃない！」

と言っておく。マジで信じそうだし。

「そうそう、野球な訳無いじゃん〜。」

お前が元凶だろ。

「これは野球じゃなくてボーリングに決まってるよ〜！」

んな訳ねえだろおお！

「まあノリは此処までにするか。」

案外クレーはまともじゃないか！？

「私も悟にツツコミを入れさせたから終わるよ〜。」

魅異は死ねえええ！！！！

「またしても話し合いの間に試合が終わってしまった……」

「Xさんの新必殺技は変でしたね」

……ハア疲れる。

「第2回戦目の対戦表を製作中です。少々お待ちください。 対戦表が出来ました！」

早っ！？少々も待ってねえよ！

「第2回戦の対戦は、

悟 対 ジャルス

R T・D X + 対 X・クレスト・7世

勇者様は休憩

となっております。今回の試合は同時進行となりますのでご注意ください。」



「何っ！？それじゃあ急がないと・・・店員さん！参加者です。」

「勝手にどうぞ。」

「勝手にかよ!？」

「じゃあ僕も行こうかなー。」

いつ起きたんだ!？

「ヒュン」

「おっと出場者が同時に入場して来ました！悟VSジャルスの試合をしているのはこの第一コロシアムです！」

「主人公の力を見せてやるぜ！」

「ご自由に」

「試合・・・スタート!？」

聞くなよ！

「いくよ、ランダムカプセル！」

今回はカプセルか・・・医者かよ!？

「水圧圧縮砲！」

「カプセルボム！」

「ドゴオン！」

「空気圧h」

「ドゴオン！」

カプセルは小さくて見えねえぞ！

「空気圧竜巻砲！」

「ゴオオオ！！ドオン！ドオン！ドドドドドドドオオオン  
！！」

「ああー、カプセルが。」

「そんな物竜巻の中で爆発させてやるぜ！そして食らえ！空気圧圧縮砲！」

「ランダムカプセル！」

「グオオオオツ」

ブラックホールが出来たああ！！

「大当たりー。」

「まだまだあ空気圧竜巻砲と水圧圧縮砲！で水禍竜巻！！」

「ゴオオオオ！」

「うわっ！」

・  
氷乱竜巻だと氷をカプセルで破壊される可能性があるから……

「冷凍砲！！」

強烈な吹雪を水禍竜巻に送ってやった。

「ビュオオオオオオ！！！！」

「水で出来た竜巻を吹雪で凍らす！ちなみに前回の続き！第四の新必殺技！氷像竜巻！」

「カキイーン！」

「なんと、悟選手の勝利！主人公説は本当なのか！？」

「だから真実だって。」

「あと次の試合は勇者様対悟ですので出場選手はコロシアムへ来てください。」

「早いな！？休憩の時間くらい与えろよ！」

「ヒュン！」

おっ、来たな。

「到着」

「魅異、今までの恨み……全て此处でお前に返す。」

「ええっ？缶コーヒーのシールが一枚足りないの？」

「誰がそんなこと言った！そんなもん応募するか！」

「じゃあ、悟の頭がはげてきたの？それはストレス溜めすぎだよ。」

「何で俺の頭がハゲるんじゃああ！それにストレスはお前のせいだ！！」

これはマジな話だ。

「人に罪を被せようというのですか悟君！」

「真実だろおが！……それに誰の真似だよ！」

まさか校長の真似！？

「悟君……超ストロベリーアイスなツツコミでしたよ。」

校長だああ！しかも……

「ストロベリーアイスなツツコミって何だああ!？」

「イチゴ味のナイスなツツコミですよ!」

「ナイス!? 校長のダジャレまで真似するな!」

「この私が何かのパクリをしているとでも?」

どうやったらパクリをしてないの答えが出る?

「校長のパクリだろ!」

「この俺が何のパクリをした!？」

口調が変わった!?

「いったい何のパクリだ!？」

「んなもん知るかあ!」

誰かに似ているんだが・・・分からねえ。

「誰の真似か言わないとワサビ圧縮砲を食らわすぞ!」

「そんな物、俺の空気圧竜巻砲で返り討ちにしてやるぜ!」

俺・・・の真似?

「勝手に俺の真似をするなああ!」

「気がつくの遅すぎだろ!？」

マジで止める。読者の皆さんがどっちが俺か分からなくなるだろ!

「そろそろ時間です。バトル・・・・・・・・開始!」

先制あるのみ!

「食らえ! 空気圧縮砲!」

「主人公の力を見せてやる! ティッシュ投げ!!」

主人公はそんな技使わねえよ!

「スパァン」

「やっぱ斬れたか!」

そんなのは予想済み・・・

「空気圧竜巻砲!」

「ゴオオオオ!!!」

ティッシュは巻き込まれていったぜ!

「流石になかなかやるな!」

「そう思うなら口調を戻s」

「いくぜ！新必殺技！第一！空気圧波！」  
くつきあつなみ

斬撃で出来た空気の波！？

「空気圧JET！！」

「ドゴオン！」

空気圧圧縮砲を地面に放って飛んだから何とかよくれた。

それにしても槍であの技を出来るのはアイツしか居ないだろ。

「チッ、これも避けるとは……だが甘いぜ！」

「ブオンブオンブオン！」

槍を両手で回し始めた？……ま、まさか！

「第2の新必殺技！槍回竜巻！」  
そうかいたつまき

「ゴオオオツ！！」

「予想外の技を使うなあ。」

「降参するのなら今のうちだぜ？」

「俺が降参するかどうか？空気圧竜巻砲！」

「ゴオオオオ……」

逆回転の竜巻であの竜巻を消したぜ。．．．．此処は空中だけだな。

「ヒューーーーースタッ」

「着地成功！」

「隙有り！妖炎斬！」

「ビュッ」

「って危ねっ！」

黒い炎をまとった槍で斬ってきたからバク転で回避した。

あの槍は先が円錐では無く刃で出来ているから斬撃も可能だ。

ランスではなくスピアの方だ。

次はどんな攻撃でくるか．．．．

「雨よ降れ！雨よ降れ！」

雨乞いし始めた！？火のついた棒を持って。

「雨よ　　って降るかあ！！」

「ガスッ！ボオッ！」

俺に投げたー！！そして服が燃える！！！！





み、耳が壊れるかと思った…………

そして目が失明するかと思った…………

魅異はどうなった！？

「痛ったいね。普段の数百倍かな？」

…………はあ！？何で消滅どころか気絶でさえしてないんだ！？

「怪我するかと思った。」

いや、普通は死んでるって！まさか幽霊！？

俺はそんなもの信じない派だが今回は信じるかもしれない。

「一つ聞く。あの技に当たったのか？」

「当たったよ。あの威力なら星一つ位は軽く消せるんじゃない？」

星一つ以前に宇宙全体を消し飛ばせますよ。圧縮してなければ。

圧縮といっても威力の範囲を指定するだけで威力はそのままなんだが…………

「お前…………化け物か？」

「いたって普通の人間だよ。後その言葉は昔に聞いたね。」

「そうだったか？」

「確か中学の夏。」

「……あゝ確かに言ったな。」

こいつと俺は幼馴染なんだが親が居なくて俺はバイトしながら生活してたんだ。中学で。こいつは昔、親に多分捨てられたと言ってたぞ。

確か同じバイト場所でテレビのバラエティ番組に参加してたぞ。

自給も良かったからな。俺は射的をやってて百発百中の天才少年として多少は有名だったんだぜ。

こいつはお笑いで出ていて超有名になってたがボケの内容の多さにツッコミ役の相方がツッコミ疲れて次々倒れていった気がする。

凄いのはこの後。同年代同士だった俺たちはバイト帰りにいっしょに歩いてて道で別れたときに巨大隕石が落下してきてコイツに見事ヒット。

その衝撃で俺は吹き飛ばされてビルに突っ込んだんだが直撃したアイツは隕石を破壊して無傷で出てきたんだ。その時にさっきみたいに化け物かって聞いたんだ。

そしたらいたって普通の人間だよってさっきとまったく同じ返事



「まで！俺が消滅する可能性が！」

「大丈夫。たったの三倍だから気絶ほど痛くはないと思うよ？」

それはお前だけだああああ！！！！！！

「これから壁を破壊しても怒らないから！」

「ヤダ。」

「力チッ」

スイッチ入れたあ！

「特星一週旅行ツアーに連れてってやるから！」

「ヤダ。」 充電はOK。」

俺は良くねえええ！！！！

「一生文句言わないから！！」

「ヤダ。」 狙いを定めて」

もう終わりだ・・・こうなったら最後の賭けだ！

「それじゃあこの特星にある何とか帝国を乗っ取りに行かせてやるから！」

・・・多分無理だろな。

「よし、その条件乗ったよ！」

ええっ！……でも実際行く訳にもいかないし……

「やっぱり他の条件にするぞ」

「狙って」

「帝国に行くか！」

「そうこなくっちゃ」

ほぼ脅しだろ。そうだ！俺が優勝しないといけないって事にしよう。

そしたらアイツは気絶しないといけないが丈夫過ぎて気絶できない  
って事は俺の優勝は無理。完璧だ！

「でもそのためには俺が優勝しないといけないんだよね」

これで何とか

「そうなの？審判さん！降参だよ！」

「おっと！勇者様がいきなりの降参！決勝にいくのは悟に決定だ！  
！」

しまったああああ！！降参は有りだった……でも次で負け  
ればいいか。

「悟、負けたら銃で撃つからね。」

勝つしか道は無いのか……

「決勝戦はR T・D X + 対 悟です！」

「ヒュン」

「やっぱお前が勝ち残ったか。」

それにしても誰だったかなコイツ。全体真っ黒で仮面を付けてるこんな声の奴知らないが何処かで見たことのあるような。

「悪いけど仮面を取ってくれないか？」

「ノー！そんな事できる訳無いだろ！」

「何故？」

「個人情報了他人に教える主義は無い！」

ああなるほど。

「では試合………始め……！」

「食らいな！ライフル弾！」

「おつと危ない。」

全部避けた！？ならば得意技を出すまで！

「気圧圧縮砲!!」

「ドォン！」

よし！避けれる距離じゃないぜ！

「グラフィックシールド！」

「ドカーン!!」

やったか!?

「残念でした。」

何か薄い壁みたいなのがあるが・・・アレで防いだのか!?

「主人公の力もその程度かな？」

「あんたの特殊能力は何だ!？」

「個人情報はいしゃべらないと言ったはずだが？」

やっぱり秘密か。

「空気圧竜巻砲!&火炎砲! 必殺技!火炎竜巻!」

「ボォツ」「ゴォォォ!!!」

「無駄だ!俺は召還術も使うんでね。召還!クラゲの大群!」



クラゲかよ!?

「ビチャビチャビチャビチャビチャビチャビジュアアアアア  
!」

「火炎竜巻が消されただど!クラゲに……ってクラゲ蒸発し  
てるぞ!」

「ああ、別にいいよ。クラゲは嫌いだし。」

「嫌いなのに出すなよ。」

「火が消える+嫌いなクラゲが死ぬから一石二兆だ。」

「二鳥をかなり間違えてるぞ!」

「まあお気にせず。次は俺のターン。」

「ターンなんか無いから!」

「俺は天候も操れる。ソースレイン!」

「ざああああ!」

ソースが降り注いできたー!ー!

「キャー!ワー!」

「観客に被害が出てるぞ!」

「ほつとけ。」

酷っ!?

「ザアア……」

「雨もやんだし俺の番だな。」

ターン制だったよな。

「俺のタ」

「このバトルにターンは無い!」

テメー、俺はやられ損じゃないか!

「ってことで俺のターン!」

無いんじゃないの!?

「させるか!刃弾!」

刃の弾を撃ち込んでやるぜ!

「無理だつて。グラフィックシールド!」

「ガキイン!」

防がれた……. . . . . どんだけ強いんだあの薄いガラス見たいなの。

「グラフィックシールドは遠距離攻撃完全防止効果がついてるから悟が1番苦手な壁だ。諦めて降参する事をオススメするぞ。」

遠距離攻撃完全防止！？銃が得意武器の俺からしたら最悪じゃん！

でも……アホだアイツ。全ての攻撃が効かないなら普通は降参するけど遠距離攻撃完全防止ってことは近距離攻撃は効きますって言ってるようなもんだろ。

俺はハンマーも使えるんでね。

「地空海の脅え！」

この技はハンマーを空中で特定の方法で振る事により全てを震わす超音波を自分の周囲の約直径先まで飛ばす事が出来る技だ。この技をえるようになるまではしんどい練習が必要だったぞ。

「キイイイイン」

「ノオオオン！耳がああ！」

おっしやがみ込んだ！隙が有りすぎだぜ！

「ゴルフスイング！！」

「バリイイイン！！！！ゴオン！」

ちょうど仮面にヒットしてアイツは吹き飛んだ。

「悟選手の勝利です！優勝は悟選手です！」

「よっしゃー！」

「痛たたた」

RT・DX+が起き上がった。

「とりあえず優勝おめでと。それだけいっとくぜ！」

「シュン」

さて俺も戻るか。

「シュン」

「ただいま」

「あ、おかえりー」

「やっと来たか。」

「……魅異とクレーだな。これは普通。」

「ふぁー、あつ試合終わったー？」

「おっ、やっと喋れるようになったぜ!」

烈とクレーも問題ないが

「お、悟。おかえり!」

なんでアキステが居るんだー!?

「いつ戻った!」

「お前がさて戻るかって思ったとき。」

思った事を読むなよ……

「もうすぐ表彰が始まるから呼びに来たんだ。先に言ってるから急げよ!」

「ヒュン」

「この装置は受付に戻るのにも使えるのか。」

「ヒュン」

クレーも行ったか。

「じゃあ私も」

「ヒュン」

「僕も戻るよ」

「ヒュン」

「俺を置い」

「ズテッ！ヒュン」

皆受付に戻ったか。

「それじゃあ俺も戻るか。」

「その前にお客様、この店での注文代の合計九百四十二万五十セルをお支払ください。」

「……ハイ？」

「俺がですか？」

「そうです。」

「お金が足りないんですが。」

「死にたいんですか？」

「マジで勘弁してください。あつそつだ、元凶の勇者に借金返済書を書いて置いてください。そしたら今月中に払い終わると思いますので。」

「そうですか。かしこまりました。」

これでよし。さて帰るか。

「ヒュン」

・・・

「え」といまから表彰式を行います。まずは役員からのお話です。」

（途中は全て省略）

「最後にアキステさんから悟さんへ賞品を渡してください。」

アキステからかよ。

「はいはい、えーと本大会で優勝した悟へは賞品のこれをやる。」

「ちゃんとした賞品を渡せテメー！」

ハエ叩きなんか渡すな。

「マジでそれが賞品だ。諦めろ。」

「他には？」

「主人公らしさアップだ。」

「よっしゃー！」

商品じゃない気がするがそれさえあればいいぜ！

く帰り道く

「ところで帝国を乗っ取りに行くのはいつから？」  
「……後書きで作者に聞いておく。」



5話：レジェントofバトル（後編）『バトル終了！賞品は……』（後書き

「オイ作者！」

「どうした？」

「帝国に攻め込むのはいつだ？」

「25話前後だ。多分」

「よし分かった！」

「いや、前後だ。……ってもう居ない。それじゃあキャラ紹介。ナレ君。」

【了解！。

RT・DX+

これが誰かはどこかに書いてあったはず。  
技の種類は豊富で得意武器はいろいろ。  
これでもツツコミ役らしい。

終わりですよ。】

「それじゃあ次回もお楽しみに！」

## 6話：バイトをしよう！

@悟視点@

「ふああ」

ああー朝か。いつもより早起したから魅異がうるさくなくていい気分だ。」

「ツドゴーン！」

・・・前言撤去。全然悪い気分だ！

「グッドモーニング！早起きしろ悟ー！って早起してた！？」

「お前のせいでバッドモーニングだ！後、いつも遅起きで悪かったな！

「悪い！」

「ベシッ！」

ム力ついたからハエ叩きで叩いてやった。大会の賞品の奴だけど普通とは違って曲がらないから便利だぜ！

「痛い、そっいえば帝国はどうなったの？」

「攻め込むのは25話前後だつて。」

「ええー！そんなに先だと小説が続かない可能性が有る」

「ベシ！」

「縁起の悪いことを言つな！最低50話分は絶対主人公を続けてやる！」

「痛い・・・」

自業自得だ。

「用はそれだけか？それなら帰ってくれ。」

「それじゃあ帰るねーサヨナラ」

「そのまえに修理代を置いてけ。」

当然の結果だな。

「いやゝそのさ、今日は無理なんだけどゝ」

無理だと？コイツは家一つ買っくらの金を持つてるはず。

「何故だ？お前はかなりの大金を持つてるはずだぞ。」

「2話で学校崩壊時に修理代が私のところに来て……」

「無くなったと。」

「いや、まだ通帳にだいぶ残ってたんだけどね。」

それを出せよ！

「それで壁の修理をしろ！いますぐ！」

「昨日の大会の時に借金返済書が来て940万240セルを取られて残りが760セルしかないの。」

あの喫茶店か！？その日の内に返してもらったのか！

「それじゃあしょうがないから許してや」

「えっ……いや、でも私が悪いんだし、ちゃんと返さないといけな  
いと思うんだよねー」

こいつにしてはまともな意見だけど、魅異がそんな事いうとは 明  
日大地震でも起こるな！

「まあそれでバイトして稼ごう。って考えたのー」

「おおそうか。それじゃあ頑張れよ。」

「……悟もいつしよにだよー」

「……ハイ？」

「何でお前が壊した壁代をなんで俺が稼ぐんだ！？」

「いやゝ壁代の分は私が稼ぐよ。でも悟も生活費がヤバイでしょ？」

何でその事を知ってるんだ？

「どうせしばらく学校は修復中で休みだし、悪い話じゃないと思う  
よ？」

「あゝ分かった分かった。俺もバイトしてやるから。」

「やったゝ！じゃあ他の二人を連れてくるねゝ」

「ドカツ！」

ドアを蹴り開けた！？修理代を増やすなよ！

（3分後）

「さてと、どのバイトにするか・・・」

ただいま皆で雑誌を見ながら会議中。

「俺は現代エリアの高層ビル製作現場のバイトにするぜ！！」

絶対無理だろ！こけて落ちるだろお前！

「じゃあ僕は特星エリアの町に有る道具屋のプレゼント配布（プレゼントは自分で買う）キャンペーンにでもいってこようかな？ランダム効果でプレゼントは無料で出せるしね」

真面目に聞こえるがそれも無理だ！お前のランダム効果は戦闘用だろ！

「私は何をするかは決まってるからよし。」

俺はそういう魅異が一番心配だぞ！

「俺は・・・ツツコミ役の人募集つてのに行ってみるか。」

近くだし俺はツツコミ役だし。

「よし！皆どれをやるか決まったし、出勤！」

何で魅異が仕切ってるんだ！？

（ツツコミ役を募集してた場所）

場所的にはここであってんだけど此処って

「学校じゃん！」

修復中の学校のそばに小さな小屋が有るが・・・あそこか？

「コンコン！」

「失礼しまゝす、ツツコミ役を募集してた場所は此処ですか？」

「はいそうです。あつ、悟君じゃないですか。貴方が仕事をするのですね。」

そこに居たのは俺的に理解不能な人ベスト3入りしている

「校長がなんで此処にいるんだー！？」

「悟君・・・ナイスツツコミ！」

やっぱりこの人わからねえー。

「とりあえず仕事に来たのですね？」

「いや、校長は学校以外で仕事したら駄目だろ！」

「そんなものは気にする必要は無いので安心してください。」

普通は気にするだろ！

「仕事内容はとにかくナイスなツツコミを見せてください！」

「判断基準はどうやって決めるんですか？」

適当とかは言わないよな。

「カラオケの得点機能を使います！」

「全然基準にならねえだろ！」

「ジャジャジャジャー！98点！」

「おお、ナイスツツコミです悟君。」

「今ので！？その機械壊れてるんじゃないの！？」

「ジャジャジャジャー！100点！」

「ブルーベリーゴッドなツツコミですよ悟君！」

「ブルーベリーゴッド！？正しくはベリーベリーゴッドです。」

「悟君、それはナルシスト発言ですよ」

はめられた！この校長なかなかやるな・・・まあそんなの無視するか。

「固まってどうしたのですか？まさかポケ役に変身中！？」

「俺は120%純粋なツツコミ役です！」

「ジャジャジャジャー！72点？」

「聞くなよ！」

「冗談デス。本当ハサツキノツツコミヲ含メ72点！」

「さっきを含めて含める前と一緒じゃねえか！」

「ソノツツコミヲ更ニ含メテ72点！」

「喧嘩売ってんのかコノヤロー」

「喧嘩ハ、買ウ人ナシテ滅多ニ居ナイノデ売ツテマセン」

「意味が違ーーうー！」

@烈視点@

よっしゃ！俺視点だ！今は高層ビルのでっぺんで天井を製作中だ。  
知り合いは居ない……は？なんだが。

「何故かクレーが居るんだぜー！！」

「いきなり何を言うんだ。仕事場に着いた時に気づいて話をした  
だけ。」

それが原因で怒られたけどな！

「そういえばクレーは魔王なのになんで働く必要が有るんだ？」

「魔王と言ってもただの肩書きだから仕事の有るわけじゃないぞ。  
生活費がピンチだ。」

「ああーそういえば魅異も勇者だがバイト探してたな。」

「馬鹿勇者もバイト中なのか？」

「ああそうだが見たのか？」

「確か作者と何か話してたぞ。」

作者と？これは何か裏がある気がするぜ！

「コラァー！！お前らちゃんと仕事しないならバイト料減らすぞ！  
！」

「「あつ、すみません！」」

くそして夕方く

@ 悟視点 @

「それで最後にはカラオケ用の機械を壊してきたんだ。」

おつ視点が戻ったか。今、俺達はバイトであつた事を話し合つてるんだ。

でも魅異が帰ってないんだ。壁が壊れてるから帰ってきたら分かるぞ。

バイトの結果で

ジャルス「プレゼントは家で空ける様に言つて渡してたので戦闘用だとばれなかったらしい。

今ちようど苦情の電話が来てるころだろう。

烈「クレーが居と一緒に怒られたらしい。他にも3回落ちて悲惨だと言つていたぞ。

クレーから魅異がアシステと一緒に居たことを聞き出した。

魅異「何処にいるのかねえ。

俺「校長とカラオケマシーンにツッコミ言いまくつてた。最後にカラオケマシーンが

俺を怒らせたのでハエ叩きで破壊したがちゃんとバイト料はもらった。

「とりあえず解散!」

「さて今日は疲れたし、風呂でも入って寝るか。」



## 6話：バイトをしよう！（後書き）

@ 悟視点 @

「おいアキステー」

「作者はただ今留守でございます。ご用件が有るならその防犯力メラに向かつて言うてください。ピー」

この声は・・・

「何で魅異がいるんだー！？」

「バイトで代わりにある用件を伝えといてだつて。」

「用件は何だ？」

「火曜か水曜はこちらの都合で小説が更新できない、または今回のように短くなる可能性があります。」

それでは皆さん次回をお楽しみに。だつて。」

「ふうーん。それじゃあ皆さん次回をお楽しみに。」

## 7話：お花見騒動＋

@悟視点@

「ううーん、何処に行くべきだろうか？」

俺は今どうやったらのんびりと過ごせるか考え中。

昨日のバイトで資金に余裕があるからそれで今日をのんびり過ごすと考えている。

校長のバイトは超高額で自給50万セル×12時間＝600万セルだ。

俺の後にバイトに来た奴がいたが失格でバイト料はもらえてなかったぞ。

600万セルあれば海外旅行も有りだが・・・逆に疲れる気がする。

「ドコオオン！」

チツ、魅異めもう来たか。

「おっはよー！おっ？何か見てるねー私にも見せて！」

「あつ、テメツ返せ！」

「ほうほう、のんびり休憩スポットね。悟ってそんなに疲れ溜まってたっけ？」

「誰のせいだと思って・・・」

「誰のせい？」

「お前だ！」

「私の天才さに嫉妬してるんだね」

死んでもしねえよ！馬鹿の代表が！

「何処行くか決まってるないんならお花見行かない？」

花見のシーズンは少し過ぎたぞ。温暖化が原因で。

「花見シーズンは過ぎたと思うが？」

「だ・か・ら・今から行くの！シーズンの時に行ったらグチャグチャしてるでしょ？」

「ゴチャゴチャだろ。でも花が少ししか咲いてないぞ。」

「いいじゃないの。花見なんて少し咲いた桜に大量の食べ物を食べながらワイワイガヤガヤ騒げれば桜の事なんか気にならなくなるって！」

要するに食い物を食って騒いで帰りたいだけって事だろ。

「だが疲れが取れるどころか逆に疲れることになるだろ！」

「そんな時は酔えばいいのよ！私がビールを持ってきてあげるから！」

「未成年で飲むなよ！校律を通り越して法律に触れるぞ！」

「じゃあビールは持って行かないから花見に行こう！拒否したらこの部屋でビールをやけ飲みしてさらに校長に知らせて退学にしてやる！」

・・・拒否権無しかい！

「あー、分かったから準備して来い。」

「よし！じゃあ後の二人も誘ってくるね。」

「早くしてくれ。」

花見・・・か。嫌な予感がすでになっているのは気のせいじゃないな。まあそんなもの主人公のツツコミで何とかなるさ。

（桜の木の下）

「で、これは何か説明してもらおうか？」

4人で桜の木の下に来た。そこまでは良かったんだが用意したものが・・・

「何で花見に洋式の食事を持って来てるんだー！？」

うん、洋式食事セットだな。

しかも敷物の変わりに折りたたみテーブルセットなんか持ってきてきやがって。

「いや、そんなこと俺たちに言われても・・・」

「用意したのは魅異だよー」

予想どうり魅異が元凶か！

「いやーだつてねえ、多少は花見の雰囲気を変えてみたいじゃん？」

「聞くな！そして雰囲気を変える気もねえ！」

此処って町や寮から結構遠い＋途中にモンスターが出るから戻るのもキツイな。

「しょうがない、洋式花見をやるぞ。」

「やったー！」

「それなら俺も混ぜてくれ！」

この声は・・・クレーか。

「って何でお前が居るんじゃない！」

「バシィ！」

「ゲゲフウ！いやー魔王城で外を見てたらお前達が居て此処から魔王城が近いから来て見たんだ。」

「ああーなるほど。」

んっ？って事は・・・

「魔王城なんてあるのか！？」

「ドゴオオン！！」

烈に台詞を取られるとは不覚だった！だが仕返しに吹っ飛ばしてやったぜ！

「まあ此処から近いぞ。魔物の部下が結構居るし。」

「いいなあー私なんて普通の寮だし部下や下僕は居ないんだよー！」

下僕なんているか！第一お前に部下が居たらどんな扱いをするか分からんだろ！

「聖王も聖王城を持っていてガーディアンや精霊がそこを守ってるらしい。」

流石は現魔王。聖王の城の情報まで持つてるとは。

「とりあえず花見を始めるー？」

ジャルスの言葉で本来の目的を思い出した。

「やったぁーお花見」

喜ぶ暇が有ったら用意を手伝え元凶が。

（30分後）

「花見の雰囲気は70くらい下がるこの料理はどういう事だ？」

「いろんな世界の料理をコラボレーションさせてみたんだ」

「食べるかぁー！！！！」

俺の目の前にあるものは・・・食い物じゃないような物体。

魅異の話では次元を超えるコラボで味はいい自信が有ると言ってた。この料理を説明すればこんな感じだ。

（ワインとソーダが満タン入った鍋の中に大きなハンバーガーが乗っていてそのハンバーガーは、下のパン、刺身、トマト、カツ、ポークシチュー、真ん中のパン、カレー、イタリアンスパゲッティ、焼きサソリ、魅異がいろいろ混ぜて作った物、上のパンの順番で具が乗せてある明らかに普通の人が食べたら致命傷の食べ物）

・・・こんな危険兵器みたいな食えるか。

「それじゃあ私が味見するから美味しいって言ったら食べてね」

「パクツ、もぐもぐ・・・」

「・・・ど、どうだ？」

不味くなくつても食いたくは無いぞ俺は。

「普通に美味しいよ。」

マジですか！？

「ちよつとクレー、毒見 いや、味見をしてくれ。」

「まあ普通に美味いって言ってるし大丈夫か。」

「パクツもぐ」

あつ固まった。大丈夫か？

「おい、大丈夫か？」

「ドカーン！」

爆発した！そして飛んでった！

「お前いったい何を混ぜた！？」

「私がいろいろ混ぜて作った物。」

「何を混ぜて作った！」

「ウミウシ、薬、魔法効果爆弾、作者の大事な鍵、後、骸骨系モンスターとかだよー」

魔法効果爆弾の効果で爆発したんだな。可哀相に。

「ボオオオオ」

この音は……

「桜、燃えてないか？」

「うん！さっきクレーが爆発する瞬間に木に火がついたんだと思うよー」

「大変だねえー」

「ボオオオオオオオオオオオ」

燃え広がったあ！

「早く消すぞ！水圧圧縮砲！」

「しょうがないなー、この出来事は水に流そう！」

「ザアアア！」

水が来たあああ！？なんて技だよ……

「じゃー今日のことも水に流してもう帰る？」

ナイスだジャルス！

「皆居なくなつたし帰るか！」

「よーし競争しよう！」

俺は普通に帰るぞ。

ー自分の部屋ー

全然花見にならなかったな・・・まあいいか。  
「明日はクレーの城にでも言ってみるか。」  
・・・・・・何か忘れてるような？

くそのときのアイツ（お花見騒動番外編）く

@烈視点@

ああー此処は何処だ！？おれは悟に飛ばされてからずっと道をさまよっている。

悟めーーーー！！！！

「グルルウ！」

「またモンスターかよー!!」

「そういえば俺の技とかはまだ見せてなかったな。」

「まずは雷集斬！」

「ビリリッ！」

「グルアアアアア！」

これは基本技の一つ。他に炎集斬、水集斬、氷集斬、風集斬、地集斬、闇集斬、光集斬などがあり、全部属性が違っただけだが使い分ければ便利だぜ!!

「ガサッ」

「先制あるのみ!! 襲鬼邪道斬！」

「バサッ！」

「危なっ!？」

襲鬼邪道斬は不意打ちの時に使う技で縦の衝撃波と軽い地割れを相手に同時に放つ技だ。

上下の逃げ道が無いから通路で使うのが正しいぜ!!

あと今気づいたが人の声？

「烈じゃないか！危ない技で攻撃しやがって！」

「悪い！魔物と間違えたんだ!!！」

「まったく。それより何してるんだ？こんな夜遅くに。」

「道に迷ったんだ!どうせなら魔王城に案内してくれ！」

「分かった。あと魔王城はこっちだからついてきてくれ。」

「サンキュー！感謝するぜ!!」

「ガルルア！」

「魔物か！クレー、魔王なら魔物達に襲わないようにいえないのか？」

「いや無理だ。」

「ここら辺のモンスターはお前の部下じゃないのか!? 月光残像剣！」

今のは夜で月が見えるときのみ使用可能だ! 月の光で残像を作って



同時に攻撃する技だ。残像で俺は5人くらいに見えるから相手が残像の攻撃の方を本物だと思えば不意打ちも出来る。

「俺の部下は俺の仲間の魔物使いが仲間にした奴だけだ！ストーンストーム！」

クレーのストーンストームは石の嵐を呼ぶ技みたいだ。

くそんな調子で10分後く

「此処が魔王城だ。」

「・・・思ってたより普通の城だな。」

「俺も最初は同じ事を思ったがな。ちなみに中は俺の自信作トラップが仕掛けてあるぞ。そうだ！今日は泊まってくか？あいつ等なら明日来るだろうし。」

「おう、そうするぜ！！！」

くそのときのアイツ（お花見騒動番外編）終了く

7話：お花見騒動＋（後書き）

@魅居視点@

「作者ー！居るー？」

「魅異か。何か用？」

「今回は番外編付だったねー」

「yesたまにはああいう工夫もいいかなって。」

あんな事言ってるけど真実を私は知ってるんだよねー

「その分、本編が短いよねー」

「ギクウ」「まあ・・・多少だけ。」

「そのうえ執筆中の時のサブタイトルには、＋が付いて無かったし」

「後でノリでつけてみたんだ。（事実）」

「でも最初は番外編をつけるつもりはなかったんじゃないの？」

「ギクギクウ」「確かに後で付け足したただけだが？」

開き直っちゃった。

「まあいいじゃないか。たまには。では皆さん！次回もお楽しみに  
〜！」

「おたのしみに〜」

## 8 話：突入！激突！魔王城！（前編）

@ 魅異視点 @

「よゝし行くぞゝ！」

えっ？いきなり何処に行くかって？それは当然魔王城でしょ！

「でもその前に悟を起こさないと。」

でも此処でどうやって起こすかが重要。

1：いつも通り壁破壊

2：ベタにドアを蹴り開けて突入

3：カッコ良く？窓から忍び込む

4：たまにはほっというて行こう

うゝん、此処はカッコ良く窓から忍び込むのが一番でしょ！

「我ながらナイスだよー」

ゝ寮の裏ゝ

「えつと・・・確か悟の部屋の窓は これだ。」

よゝし！一番ベタに飛び入ろう！せゝの

「ピョンバリン！」「ぐえっ！」

@ 悟視点 @

し、死に掛けた。

「見事に成功ゝさて悟は・・・居ない？」

上から聞こえる声は・・・当然魅異だ。

「俺は下に居るだろ！お前に踏みつけられてるから！」

「おつと失礼〜」

本気で失礼な奴だ。

「さて・・・何故窓から入ってきた！？」

「いや〜今回は私視点みたいだから普段とは違う侵入方法を」

「あゝ分かった分かった。」

もう俺視点に戻ったけどな。んっ？まてよ・・・（最近このパターンの多いな〜）

「そういえば どうやって入ってきた？」

「え〜普通に窓をぶち破つてだよ〜」

そうじゃなくてどうやって破ったかだよ。

「そんなもん見れば分かるわ馬鹿。どうやってぶち破ったか聞いているんだ。」

「えっ？普通に飛び入ったんだけど？」

「・・・どうやってたら6階のこの部屋に飛び入れるんじゃないー！！」

「軽めのジャンプで入れない？普通。」

「いやいやいやいやいや！普通は無理だから！人外な能力を持つてないと無理だから！」

「私は普通の人間だよー！」

何処をどうやってたら普通なんだ！？

「悟は身体能力が低いからねえ〜」

「お前が高すぎなだけだ！それに俺は運動能力もそこそこあるぞ！第一ピヨンの音がしたとたんにガラスが割れたんだから一瞬で6階まで飛べたって事。アイツは物理学を無視した行動を取ってる事になるぞ！しかもそのジャンプが軽くって

「・・・まあそれは置いてこう。それで何の様だ？」

「魔王城行くんでしょ？早く行かないと入場規制されちゃうかと思っつて〜」

何処かの大人気スポットのつもりか？魔王城で入場規制っておかしいだろ！

「まあ明らかに狂った理由だが急ぐ事に損は無いな。準備するから部屋で待つてろ。」

装備品も持つていくか。あと学校は半分くらい修理が終わったらしいぞ。

〈5分後〉

「よし準備完了・・・で、何をやってるんだ？」

魅異が何か着てるんですけど

「いやー暇だったからそこら辺のスライムをそこら辺で狩って来て家で加工してスライムスーツを作ったんだよ」

「あつそう。そんで着心地は？」

「ウニヤウニヤのムニヨムニヨでプニユプニユしてるよ」

分かりにくい発言だなオイ。俺なら絶対着ないぞ！

スライムっているいろいろ種類があるけどこの世界では下の方が何処かの粘り気が多い火山の柔らかいマグマみたいな感じで上の方が餅が焦げた時に膨らんだような形だ。分かりにくいかな？

「そつえば烈が居ないねー」

細かい所によく気がつくなジャルスは。確かに居ないが問題ないだろ。

「それじゃあウニヤムニヨプニユ隊、出発ー！」

ウニヤムニヨプニユ隊！？

〈25分後・魔王城前〉

「途中魔物と1回も戦わなかったな。」

皆スライムスーツを着た魅異を見て逃げてったからな。恐るべしスライムスーツ。

「そんで・・・アンタ邪魔。」

「なんだと！？貴様！この城の門番に向かってそんな口を叩くとは！」

邪魔な物は邪魔だ。まあ相手するのも面倒だし裏から行くか。

「しょうがない、帰るぞ。」

「ええ！帰るの！？」

「嘘に決まってるだろ。他の場所から侵入するんだよ。（小声）」

「なるほど。ナイスアイディア（小声）」

「それじゃあ、また今度な！」

「二度と来るな！」

くそして城の裏く

さて・・・どうやって入るか。

「どうやって中に入るか決めるぞ！」

「じゃあ私に任せてー！」

魅異なら絶対入れるだろうな。俺の部屋に入ってきて来るし。

「ちよつと此処に立っててねー」

何故か城の前に1列で立たされた。そして魅異がその前に立つ。

「何をする気？」

俺もそれは気になるな。馬鹿がやる事はろくな事ないし。

「・・・発射ー！」

「ドゴオン！！ドカドカ！バツコオン！」

死ぬかと思ったが・・・・・・・・・・・・・・・・何とか生きてた。

「殺す気か！」

とりあえず状況を説明すると・・・

・城、ジャルス、俺、魅異の順番で城の前に立った。

・魅異が俺の改造バスターカを城とは逆方向へ発射。魅異が反動で俺達のほうに飛んでくる。

・魅異が俺にぶつかり俺と魅異がジャルスにぶつかりそのまま城に激突！

・何とか生き残れて今の状況。

まあそんなところだ。

「久しぶりに巻き添えを食らったね」

ジャルスは久しぶりだろうが俺は毎日家を壊される時に巻き添えは受けてるからな。

「スライムスーツでダメージ軽減」

ずるいなオイ。とりあえず行くか。・・・と、その前に

「バシン！」

「勝手に人の武器を使った罰だ。」

ハエたたきで叩いておいた。

「とりあえず俺達は敵扱いみたいだから注意していくぞ。」

「「おおー！」」

8 話：突入！激突！魔王城！（前編）（後書き）

@ 悟視点 @

「本編で死ぬかと思った。」

「どうした悟？死にそうな面して。」

「サブタイトルに突撃が付いてるからって本当に突撃させる必要はあるのか？」

「まあな。今回は前編と後編で終わるぞ。」

「そうしないと読者が飽きるかも知れないからだろ？」

「その通りだ。まあ時間が無かったからなんだが」

「それでこの小説を読んでくれる人はいるのか？」

「失礼な アクセス解析で調べた所ちゃんと居たぞ！」

「おお！良かったじゃないか。」

「いや〜これも読者の皆様のおかげだ。」

「当然の事だと思う（ボソッ）」

「この小説を読んでくれている皆さん！これからもこの小説をよろしく！そして次回をお楽しみに！　そういえば悟、なんか言った？」  
「気のせいだ。」



## 9 話：突入！激突！魔王城！（後編）

@ 悟視点 @

とりあえず城に突撃したのは良いが・・・

「クレーの部屋はどこだ？」

迷ってしまったんだよね。此処の魔物はさすがと言うべきか、喋れる＋スライムスーツを着た魅異が居るにもかかわらずに襲ってくる。うっぜー

「外から見た限りではこの城は基本は5階建てみたいだね」

ジャルスはナイス分析だ。IQ77とは思えない。

「あつ、ホールにでたよー」

そんなの見れば分かるぞ魅異。あとスライムスーツはいつまで来てるんだ？

「・・・よく来ましたね。」

おつ、人型のモンスターさんが出てきたな。

「私の名前は」

「スーパー ヴアンパイアだ！」

スーパー ヴアンパイア！？流石にその名前は無いだろ！

「それは種族名です。」

種族名は合ってたの！？

「私が此処を守ってるからには貴方達を通せないで帰って下さい。」

「え、駄目だったら？」

「私が全力で死守します。」

「ついでに貴方の武器も教えて」

「私の武器は小剣です。それで結局・・・戦うんですね。」

「まあな。」

「そうですか。では覚悟してください！」

おお、戦闘開始か！こっちは三人。こりゃ楽勝だぜ！

「悟とジャルスは直接戦闘向きじゃないから援護してねー」

「・・・まあ魅異の言ってることも正しいけどさ、俺は主人公として納得いかないよなあ」

「って事で突き突き突き突き~~~~!!」

「適当だなオイ！」

「俺は・・・釘マシンガン！」

「ランダム~~~~宝箱！」

魅異の突きと俺の釘とジャルスの宝箱から飛び出た短剣がヴァンパイアを襲うぜ！

「水流流水突き！」

「突きを抜けば逆から読んでも水流流水になるよ！」

ツツコミ所が違あーう！超高速の攻撃を全て水の流れのように受け流した事の方が凄い！

「私は常に全ての攻撃を受け流せる状態で」「グチャツ」「!!!!!!??」

久々のワサビ砲を顔面にグチャ。常に受け流せる状態では無いな。

「アンドンだち・・・おぼえてなひゃい!!」

泣きながら消えてった。どういう仕組みで消えるんだ？

「それよりボスが居た」次の階へ行く方法が有るって事で階段でも探すぞ！」

「目の前にあるけど」

戦闘に夢中で気づかなかった・・・まあ、良いか。

「2階ホール」

「此処が2階k」

「地刻割」

「ドコッ！」

「ケータイサービスの遅刻割引だ！」

「いつてええ!!」

なんかデーモンみたいなのに足を殴られたぞ。いつてえー。魅異が遅刻割引とか言ってるが悪い迷惑だ。

「やれやれ、不意打ちを食らうほど魔王城を甘く見てたか。」  
だつてクレーが魔王だしなー。

「おつ、そこに居るのは勇者ではないか。我と1対1でバトルをしないか?」

「嫌だー」

そうそう。そんな奴さつさと皆で倒そうじゃないか! 殴られた仕返しを含めて。

「貴様が勝つたら我の遅刻割引のサービス付きケータイをやるうではないか。」

「その条件のつたー!」

そんな条件にのるなーーーー!!!

「ルールは武器無しで相手を気絶させるまたは降参を言わせれたら勝ちだ。」

「オッケー!」

「それでは・・・スタート! 破壊波動!」  
はかいばどう

「ズドドドドオオン!」

いきなり波動を撃ったあ!?

「ところで波動とかは有りなのか!?」

「素手でできる事だから有りに決まっておる。それより仲間がやられたのにその程度の反応か?」

「魅異なら1800%無事だ。」

「そのとおり!」

あつ出てきた。

「流石は勇者だ。」

「いやあゝそれほどでも。」

ゆうしやはどうけん  
勇者波動拳!

「ドゴゴゴオオン!」

絶対に今さっき考えた技だろそれ!

「甘いぞ！鬼拳！」

「ガコオン！」

「流石は勇者つて、奴は何処だ!？」

「後ろでしたあゝ！勇者様降臨乃為之儀式打夜ゝゝ！！！」

「ドカ力力力力力力力力力力力力力（以下略）」

技名が喋る言葉になつてゐるぞ！それでその儀式とやらは……

敵をたこ殴りしてる。恐ろしい位の量の攻撃で………こんな

で勇者が降臨するか！！！！

10分後

「ふうー」  
「丁あがりー」  
「」

「よし、次の階に行くか。」

魅異が何とかケータイを奪う前にさっさと行こう。あつ、あの敵も消えた。

3階ホール

「到着。」

「グフェフェ、よく来たなあ！」

・・・思考崩壊者？ いやだってイカレタ笑いをしていて左手に鞭  
右手に斧を持った全身金ぴかの服を着た人間なんてそれくらいしか  
見当が付かないし。

「俺は魔王様三大部下の最後の一人だ！貴様達を捕獲してやろう！  
！（ククク、この部屋には1つだが地雷が仕掛けて有るんでねえ。  
威力が高いからそれで1撃だ！）」

あつイカレタ笑いがなくなつた。三大部下最後の一人つて残りの二人はもしかしてさっきの二匹？

「今回は俺が行くぜ！」

「がんばってねえ」

「私が行きたかったあー」

応援するジャルスと文句を言う魅異。どうやったら此処まで差が出る？

「別に3人出来ても良かったんだぜ？」

「それじゃあ主人公の立場が消えるんでね。」

魅異に出番を取られまくったからな。此処で取り戻す！

「魔物使いの力を見せてやる！！」

「カチッ」

「あっ」

「ドコオオオン！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・最後なほど強いと思った俺が馬鹿だった！！」

何か地雷が仕掛けてあったみたいだがそれを踏んで勝手に爆発して上の階に飛んでった。多分かなりのアホだなアイツ。

「よし、次の階に行こう。」

楽だし得したと思えばいいか。

「4階ホオオオル」

「よし4階！もう少しだ！」

「やっときましたか。」

「流石だ。」

「デメエら次こそ捕獲する！！」

おお、魔王3大部下が全員居たよ。まあ全員倒すが。

「魔王はこの上だな？」

「確かに！今は客とゲーム中だろうな！！」

「あっそう。とりあえずお前ら邪魔。」

聞いておいて言ってしまったが・・・・まあいいや。

「お前達を捕獲するのは俺だ！！」

「残念。悟とバトルするのは俺でした。レンガ崩し!!」

「ガラガラガラ!!」

あつ、魔王3馬鹿トリオがレンガに埋もれた。それよりアイツは

「よゝ悟。覚えてるか?」

「RT・DX+だっけ?」

確か大会の時に居た変な仮面をつけてた奴じゃん。

「その通り!暇つぶしにバトルをやりに来た。」

「全然オーケーだぜ!」

俺の出番が増えるしな

「それじゃあ覚悟しな!空気圧圧縮砲!」

「覚悟なんか無くてもノリ際あれば何とかなるって。グラフィック  
シールド!」

「ガキーン!」

「ならば接近戦で前みたいになぶつ飛ばすぜ!」

「前回とは違って今回は俺も武器を使うぞ!」

それじゃあ前回手加減だったの!?マジですかい。

「今回は弱めの・・・神気力剣しんきりよくけんと式奔十動不剣しほんとうふけんで行くか。」

後者のはともかく前者のは強そうだぞ!?

「と、とにかく行くぞ!ゴルフスイング!」

「回転乱舞!」

回転して避けてしかも攻撃!?

「さて、覚悟し!」

「~~~~~」

「あつ、ナレーションからか。もしもし?」

「ちょっと!何で人のケータイ勝手に持つてってるんですか!?!」

「ああゝ悪い、チョット借りた。」

「まあ遅刻割引サービスに入ってるからまだ電話料金はマシですけどね。」

遅刻割引に入ってるの!?ナレーションが!?

「そうか。じゃあもう帰るから。」

「早くしてくださいよ！」

「ピッ」

「ちよっと急用が出来たのもう帰るから。グッバイ。」

・・・・・・・・帰ったか。

「次に会ったら絶対勝つてやる！」

「とりあえず5階に行けるね」

「5階5階」

く5階ホールく

「誰もいないな」

「この部屋にクレーの部屋って書いて有るよ」

これで何回目だか分からないがナイスだジャルス！

「ドカッ！」

「クレー！暇つぶしに来たぞー！」

「おっやつと来たか。」

「おおー！！久しぶりだな皆！！」

何で烈がいるかは分からないが昨日会ったばかりだろ。

「それで何やってるんだ？」

「「チエス」」

「チエス？」

魅異は知らないか。超適当で簡単に言うと洋風版の将棋みたいなもの。

「昨日から徹夜でやってたんだ。」

「クレーは反則的に強いぞ!!」

へえ〜チエスねえ〜ちなみに俺は出来るぞ。弱いけど・・・

「ところで今は何時だ？」

「6時30分ジャストだ。」

・・・帰るか。

「十分暇つぶしになったからもう帰るぞ。」

「そうか。結局何故来たんだ？」

「魔王城を1度見ておこうと思ってな。それじゃ〜」

「俺を置いてくなくよ!!!もう道に迷うのは嫌だあ!!!」

〜7時：自分の部屋〜

「次の情報をお伝えします。昨日まで修理をしていた高校が修理完了しました。」

「おお〜やっと修理完了したか。流石は日常崩壊してるだけのこと  
は有るな。」

明日は学校に行くのか〜。・・・でも休みの方が良かった。

「さて明日に備えて寝るか。」

おやすみ〜



## 9 話：突入！激突！魔王城！（後編）（後書き）

@ 悟視点 @

「やっと更新できた」

「おいアキステ！更新スピードが落ちてるじゃないか！」

「ちゃんと今日も更新できたぞ？」

「今は昼だが？」

「昨日の夜の内に書き終わらなかったんだ！」

「何故？」

「学校のクラブが忙しくて遅れた。」

「ああーなるほどな。あとキャラ紹介は？」

「何人が戦ったけど重要な奴は居なかったなので今回は無しだ。」

「魔王三馬鹿トリオは？」

「使い捨てキャラだ。」

ひでえ。

「あと次回からは日常編に突入だ！」

「俺的にはそっちの方が大変なんだが・・・まあいいか。」

「多分途中で飽きるけどな。」

「そんな発言するなあ！！」

「ハイハイ。それじゃあ皆さん次回もお楽しみに！」

## 10話：高校改良復活！

@悟視点@

「ムニヤ、生ゴミ、ナマハゲ、生ワサビ・・・ムニヤムニヤ」

「ドゴゴオオオオオオン！！！！！」

「ファ・・・うるさい＋近所迷惑だああ！」

また魅異の仕業か！・・・ところで俺、変な寝言を言った気がするが気のせいか。

「おつはよおーーーー！そして10話突破おめでとう！」

「10話突破くらいで騒ぎすぎだ。」

「それじゃあ高校復活おめでとう！」

「壊れる事になった元凶が言っな！」

そっういえばあの高校、壊れるたびにいろいろと代わるけど今回はどんな風になるんだ？

「さあねー、前と同じだったりするかもよ？」

「思考を読むなあ！！！」

「普通に喋ってたってー！」

ま、まあ魅異が前と同じと予想したなら前と同じではないな。

「酷いねえーそんなに私の予想が信用できないー？」

「・・・また喋ってたか？」

「うん。また思ってたよ」

「やつぱ思考を読んでるじゃねーかあああ！！！」

（高校（2・D教室））

「やっと到着」

「じ、時間が掛かった・・・」

今頃だけど俺は2年だ。作者め・・・重要な設定を書き忘れるとは！

「それにしてもこの高校、かなり変わってるね。」

確かに。だって四角から丸の形になってそのうえ10階だぞ！もはや学校じゃない！

「さて、最初の授業は・・・歴史か。」

この星の歴史だけだなー

「最初の歴史、授業開始い！」

「何でバトル開始みたいな始まり方！？」

「ナイス突っ込みですね」悟君。ってことで問題！魔物が寄り付かない装備品の名前を1つ答えなさい。」

歴史の授業の先生は校長。ええ」と魔物が寄り付かない装備品ねえ・・・アレがあつた。

「スライムスーツです！」

「正解！座っていいですよ。」

よかったセーフ。

「いや」私のおかげだよね。」

「ああ、お前がスライムスーツを作ってないと答えられなかったからな。」

久しぶりに魅異に感謝するぜ！

「次は体育、授業返しい！」

「いや返してどうするんだよ！？」

「あれーどうしたんですかー？悟君？」

この人は久和ひさわ 羽雨流教頭はうりゅう。20代前半で教頭をやってる人。

教頭で体育担当。でもマイペースでそこまで力は強くないが運動神経はいい。

「そうですかー？それじゃあ皆さん！校庭10周全力ダッシュで走ってくださいね」。私より遅かったら罰として+50周ですよー。

当然ですけど私も参加しますよー。」

罰が厳しすぎだろ！通常の5倍って！言い忘れてたけどあの人って走るのはやけに早いから！でも性格はまともな人。

「10分後」

「あと43周！」

し、死ぬー！！結局あの先生より早かったのは魅異だけだったので魅異以外の俺たち全員が全力で罰の50週を走ってる所だ！あと42周！羽雨流教頭は全員がちゃんと50周走ってるかを全て覚えてるのでズルすると+100周とかされる可能性が有るからズルもできないぞ！

とりあえずアウトだ！

「国語の10行・・・返せ！」

10行返せ！？国語の授業開始だろ！今回は何とか口に出さずにすんだが。

ちなみにさっきの体育で数学が潰れたぞ。

「ではその何か考えてる悟君。それを読みなさい。」

「あつ、ハイって何で絵本！？」

「それが私なりの授業のやり方だからよ」

この人は三森<sup>みつもり</sup> 宮魅<sup>みやみ</sup>先生だが・・・結構変な人。行動予測不明な人の中の1人。自分勝手に授業を進めるが面白いからOKと校長が言っていた。

「・・・何語ですかこの絵本？」

「古代エジプト語よ」

「読める訳ねえだろおお！！！」

「無理なら罰として全てノートに良しと言つまでに暗記するようにね。サボったら・・・廃棄処分ね」

絶対に終わらしてやるうーーーーー！！しかしこの人5分でよしつて言う時も有るんだよなあ。ってかこの人怖い！でも前に魅異を廃棄処分にするとか言ってどっかに連れて行ったら放心状態で帰ってきた事があったぞ。

「前に魅異の処分をしに行った時は何か有ったんですか？あの時顔色が悪かったですけど。」

「えっ？あの時はええーと あ、ああーーーーー……………」

「気絶した！？よし！今のうちに終わらせる！！」

（昼休み（弁当TIME））

さっきの暗記は何とか終わった。だからセーフ！

おかげで気絶してるうちに食堂で限定5個弁当を買ってきたぜ！そして今それを食ってる。

「流石に美味しいなこれ。」

「うん、確かに美味しいねえ」

「二人ともよくその弁当を買えたねー」

「まったく！うらやましいぜ！！悟、俺に少しくれ！！」

「嫌だ」

今はいつもの4人で弁当食ってる所だ。でも魅異は教室出たの最後だったはずなのによく買えたなー。この弁当はレア度Sが付くくらい貴重で1番最初に買いに行っても無理なのに。そして烈、俺の弁当取ろうとするなあ！！

「食事の邪魔だ！」

「ガスッ！」

ピュ~~~~

「俺の弁当ーーーーー！！！」

烈の弁当を蹴り落としてやった。ちなみに此処は10階の高校の屋上。

「よし、弁当も食ったし帰るか」

えっ早い？この高校は特別で昼までしか授業が無んだ。弁当が激うまだから学校で食ってく奴が多いがな。俺もそのうちの一人だし。

それで家に帰った後は適当にゴロゴロして過ごしたぜー！

## 10話：高校改良復活！（後書き）

@悟視点@

「やつと10話突破！」

「10話でやつとを言うとはネタ切れか？」

「そんなことは無い！日常編のネタ位作れるぞ！」

「作れる」ネタ切れってことだぞ。」

「まあそれはおいといてキヤラ紹介！」

はいはい！私の出番ですね！

ひさわ  
久和 羽雨流

性別：男

教頭であり体育の先生でも有る。

頼りないが足の速さはかなり早い。

みつもり  
三森 宮魅

性別：女

国語担当の先生で行動予測不明な人。  
有る理由で魅異を少し恐れてる。

こんな感じですね。

「あれ？得意武器とかは？」

「戦闘系じゃないので書いてない！それじゃあ皆さんまた次回をお楽しみに！」

追伸：この第10話は間違えて23：59分に投稿したので  
投稿日が4月12になってますが、4月13日に投稿したという事  
にしてください。  
4月13日現在。



## 11話：新技を覚えよう会議！

@ 悟視点 @

「ドゴオオン！」

「いきなり！？とりあえず近所迷惑だ！」

「おはよー！せっかくの休みに家でのんびり・だんらり・ぐっちゃりとしてたってもったいないよ！」

せっかくの休みくらい来ないでくれよ！ってかアキステの名言だろそれ！（のんびり・だんらり・ぐっちゃりとの事）

「とりあえず休ませてくれねえか？」

「MOだよ」

「NOだろ！何だよMOって牛かよ！？」

「それも置いといて、結局行くの？」

「行かないって！だから帰ってくれ！壊れた壁から！」

休日なのに疲れる・・・

「主人公として目立てるチャンスだよ？」

「ピクッ」

「目立てる・・・チャンス？」

「うん。今日は新技を作るために集まる予定だっけど・・・悟が行かないなら」

@ 魅異視点 @

「まあこんな感じに私視点で行ってくるから」

「俺も行く！やっぱり休日に家でのんびりするなんてもったいないよな」

うんうん。流石に出番を減られないように努力してるね

「でもその前に視点を戻してくれ。」

「はいはい、それ！」

@ 悟視点 @

「そういえばどういう仕組みで視点が変わるんだ？」

「さあ？作者の気分じゃないのー？」

「さっきお前はそれ！の言葉で視点を変えたよな。」

「ノリでできたんだよー」

「それじゃあ俺も・・・それー!!」

.....

@特に変化無し@

「オイ！無理じゃねえか！！」

「今のは恥ずかしいね」

「喜ぶなあああ！！！」

「ところで早く会場に向かおうよー」

「そ、そうだな。ところで会場って何処だ？」

「こっちだよ」

（高校（地下会場））

「地下に会場が有るとは。」

まったくもって予想外！あと集まった参加者は

・俺（悟）

・魅異（勇者）

・ジャルス（役不明）

・烈（馬鹿）

・クレー（魔王）

・正安（校長）

・アキステ（作者）

・RT・DX+（？）

・ナレーション（実況）

こんだけ集まった。（ ）の中はそいつの特長みたいなもの。

ちなみに会場は真ん中にステージが有り、周りに観客席が有る。俺たちは観客席で待機。

あとRT・DX+は遅れてくるらしい。来たらバトルを挑んでやる！  
ナレーションは実況をするだけなので新技開発には参加しないぞ。

@ナレーション視点@

「さてさて、新技開発会議の時間がやってまいりました。的はマネキン人形を用意してありますのでご安心を。ではまず悟から始め！  
ちなみに区別をつけるために「」の前に名前をつけます！」

悟「まずは雷光圧縮弾！」

「ビィーン！ドゴオオオン！」

ナレ君「雷を圧縮した魔法弾がレーザーのように敵を貫いたあ！食らったマネキンは穴があいてるぞ！」

クレー「あれに当たれば痺れる効果が付いてるようだな。」

ジャルス「あの威力で特殊効果付きって凄いねえ」

悟「次はマグマ圧縮砲！」

「ドオン！ジユウウウウ！」

ナレ君「次はマグマを圧縮した砲弾だ！当たったマネキンは見事に溶けたぞお！！」

校長「熱そうですね。そうだ！あれで地獄作りとか出来るかもしれない！」

烈「絶対この世界じゃないなら火傷してるな！つか校長！変な考えは止めてください！！」

魅異「地獄づくり・・・面白そうだねー！」

アキステ「・・・絶対そんな事しないでくれよ。熱いし。」

悟「次は 面倒だから一気に3つ！透明弾！光発圧縮弾！超激辛調味料圧縮砲！」

「シュッ バキィーン！キーン！グチャッピキピキ！」

ナレ君「透明弾はいつの間にかマネキンを貫き、光発圧縮弾はあまりの光にマネキンが消滅！超激辛調味料圧縮砲は何を混ぜたのかわからないが人形にひびが入り辛そうなおいが約1500M先まで出ております！」

校長「最後のが1番強そうに見えますね。」

烈「俺も何故かそう思えるぜ！！」

ジャルス「同意だよ」

魅異「絶対に最後のは食らいたくないーーーー！！！！！！」

悟「一応終了。」

アキステ「ハンマー系の技は？」

悟「疲れたからパス。」

アキステ「そうか。」

ナレ君「次は魅異の番！」

魅異「その前に紹介していい技は何種類ー？」

アキステ「だ。」

魅異「それじゃあもう一つ聞くけど何種類かの武器の技を紹介していい？」

アキステ「それも当然OK」

魅異「ありがとー それじゃあまずはそいつかんついはくは槍空貫通爆破！」

「バキッ！ブウォン！バキッ、ドゴオオオン！」

ナレ君「最初に槍で敵を貫き敵をすくい上げて空中に無防備な所をさらに貫き敵は爆発したあ！マネキンは跡形もなく吹き飛んだ！」

悟「最後の爆発は物理学無視だろ！？」

校長「流石は勇者の魅異君だ。ナイス攻撃です。」

クレー「もはや勇者レベルじゃないと思うが・・・」

魅異「次はー重力貫通槍じゅうりよくかんつうそう」！」

「ピヨーン・・・・・・・・・・・・・・・・」

悟「降りてこない!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ピューーードゴオオオン!」

ナレ君「調べた結果300M上までジャンプしてそこから急降下！  
自分を含めた槍の重力を通常の5倍にしてマネキンに突っ込んだよ  
うです！マネキンは塵になってしまった!」

悟「また物理学無視・・・・・・・・」

烈「重力5倍ってどうやってするんだ!？」

ジャルス「魅異じゃないと出来ないだろうねー」

アキステ「あのジャンプでも全然本気じゃないみたいだな。」

魅異「次は槍魔襲来斬そうましゅうらいざん」

「ズバツ、シャキーン!」

ナレ君「先が刃みたいスピアな槍でマネキンを横に斬りマネキンはまっ二  
つに斬れてさらに勝手に粉々になっていきました!」

悟「ツツコミに疲れた・・・」

烈「俺も剣でその技使いてー!」

校長「私も波動の剣で使いたいですねえ。」

魅異「次は・・・別異次元開封斬べつじげんかいふうざん」

「ヒュ!グウウン!」

ナレ君「槍を縦に振ったら異次元空間が開きマネキンを引きずりこ  
み空間が閉じた!」

悟「もはや人間技じゃない・・・」

アキステ「当りさえすれば1撃必殺の技だな。」

魅異「うゝん私はこれだけ。槍以外の技はたまに使っていくようにするよー」

悟「お前は槍使うまでも無く素手だけで宇宙侵略できるだろ！」

魅異「否定はしないかな」

悟「少しはしろ！」

ナレ君「次はジャルスの番だ！」

ジャルス「でも僕はこれと言った技が無いんだよね」

悟「そういえばジャルスの技は見たことないな。」

ジャルス「杖で普通に叩く以外全部ランダムだからね」

悟「特殊能力の影響スゴッ！」

ジャルス「そういうことだからパスだよ」

ナレ君「じゃあ次は烈」

烈「よっしゃ！俺の出番だぜ！」

ナレ君「の予定だったけど7話の時に9個も紹介したから無しね。」

烈「何っ！？まで！そんなの認めないぞ」

ナレ君「黙れ。・・・次はクレー！」

クレー「予想外に早かったな。最初はレインボム！」

「ドゴゴゴゴゴオオオオン！！」

ナレ君「爆弾の雨嵐だああ！！マネキンを見る見るうちに破壊されていく！」

悟「名前のまんまだが威力は高そうだ。」

魅異「受けるの嫌だな」

烈「お前なら大丈夫だろ！！」

クレー「次、TIMEシティー！」

「ゴゴゴゴゴ！チッ、チッ、チッ、ゴォーン！」

ナレ君「なんとステージ全体に屋台サイズの都市が現れました！あ



れ？でもマネキンには異常は有りませんが・・・」

クレー「異常ない？それならその都市の中に何か投げてみればー？」

ナレ君「えっ？それじゃあこのカードでも・・・それ！」

「ピューー・・・」

ナレ君「な、なんと都市の範囲内にカードが入った途端に固まってしまいました！」

クレー「この都市の空間内に入れば完全に時が止まるんだぜー」

魅異「えー、でも私はなんとも無いよー」

アキステ「俺もなんとも無い。」

校長「私もなんともありませんねえー」

クレー「それはあんた等が常識外なだけだ！・・・ちなみにその都市は真ん中の時計が鳴るまでなら動けるから発動3秒以内に時計を破壊すれば普通の奴でも技の防止は出来るぞ。」

悟「なるほどねえ」

クレー「残念ながら俺の新技はこれだけだ。」

悟「結構少ないか？」

クレー「急にいわれたからな」。あんまり用意できなかったんだ。

さっきの二つも新しく考えたのと前から考え中だったやつだしな。」

ナレ君「とりあえず次！校長様ですか！よろしくおねがいます！」

悟「校長の時は態度下だなオイ！？」

校長「初めは波動乱雨はつどうらんうです！」

「ピューーーン、ズドドドドドドドドオオオオン！！！」

ナレ君「2階くらいの高さまでジャンプしてそこから下に波動を乱れうちだあ！！マネキンは完全消滅しております！」

悟「校長まで何で通常ジャンプであんなに高く飛べるんだ！？」

烈「校長スゲーぜ！いったい何歳だ！？」

校長「次の技は波動花火はつはなびですよー！」

「ドゴオン！キイイ、ドオオオオオオオオオオン！！！！！」

ナレ君「相手の足元に小さな波動を撃ってマネキンを浮かせそこに

散乱する波動を打ち込んで花火のように綺麗に決めました。マネキンは跡形ありません！」

悟「おおー綺麗に決まったな。」

魅異「さっすが校長ー、やるね〜」

校長「私も残念ながらこれだけしか考えていません。」

ナレ君「そうですか。それじゃあ、次は作者！」

アキステ「俺はパスだ。作者の技を普通にバトル以外で出したくは無いらな。」

ナレ君「では次は・・・居ませんが。」

悟「待つてれば来るだろ。多分。」

RT・DX+「待たなくても居るんだよね〜」

悟「・・・いつ居た？」

RT・DX+「多分。当たり前から居たけど。新技紹介していいよね？」

ナレ君「あつ、どうぞ。」

RT・DX+「最初に考えた新技は心中双同斬だ。」

「ズガッ！」

ナレ君「マネキンの心臓部分を二つの剣で同時に斬った！狙いは的確だ！」

悟「酷さ満点な技だな。」

ジャルス「的確な狙いだな。結構な威力だし。」

RT・DX+「次は即功斬だ。ってかももう斬った。」

ナレ君「えっ？あつ本当だ！いつの間にかマネキンが粉になっている！」

悟「普通に見え無かったぞ！？」

魅意「私は見えたけど結構早かったね〜」

ジャルス「結構どころじゃないと思うよ。」

RT・DX+「次は朱光<sup>しゅみつ</sup>だ。」

「キーン！ズバババババ！」

ナレ君「おおっと！まぶしくて見えなかった一瞬でマネキンを塵にした！」

悟「何か剣が光ったぞ！」

校長「いやゝ凄いですね。」

RT・DX+「新技は他にもいろいろ有るが後は大会やイベント用なので極秘だ。じゃあな。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

悟「よし！俺たちも帰るか。」

魅異「そうだねー！それじゃあ解散！」

（悟の部屋）

「ああーーーーー！！RT・DX+に勝負挑むの忘れてたあ！！！！」

11話：新技を覚えよう会議！（後書き）

@ 悟視点 @

「すみませんでしたあー!!」

「いきなり何お謝ってるんだアキステ？」

「そんなの」「前に名前を付けた事に決まってるだろー!!」

「確かにいつもと書き方が違うからな。」

「お・ま・え・も・あやまれええ!!」

「はあ？俺がやったわけじゃないだろ。」

「何故？小説を書いたのは俺ではありません。」

「ちっ、それじゃあ皆さん次回をお楽しみにー」

## 12話：新入生？と元勇者の秘密

@ 悟視点 @

「ZZZZZZ・・・」

「ガンッ」

「いつてええええ！！！！！！」

タ、タンスの角でベタに足の小指をぶつけたあ！

「いてて、今何時だ？」

【9：53】

・・・・・・

「遅刻じゃねえかああ！！！！」

ちくしょー！目覚ましが壊れたのか！？

「朝飯食ってる暇はねえ！」

早速学校に・・・とその前に

「魅異テメー何でもっと早く　ありゃ？」

壁が壊れてない！き、奇跡か！？まてよ・・・壁が壊れてない！！魅

異はまだ寝てる。

「まったく世話のやける奴だ！」

俺も急がないといけないのに！！

〈高校（2・D）教室前〉

結局魅異は部屋には居なかった・・・って事は答えは1つ。先に高校に来たということ。

あのやろ俺を起こさずに行くとは！とりあえず入るか。

「ガララララ」

「すみません、目覚ましが壊れていて遅れましたあ・・・」

んっ？誰か分からないけど凄く可愛い女子が前に立ってるんですけど。

「ああ悟君、良い所にきましたね。ペリーペリーグッドタイミングですよ！」

「ペリー！？その人はもう居ません！ってかその子は？」

ペリーって日本に居たころ歴史で習った覚えが有るぞ。

「この子は新入生のウィル」セトリイス君だよ。いま自己紹介中だね。」

「どうも初めまして。ウィルといいます」

「おっ、よろしく。」

うんスゲー可愛い。俺の好みにピッタリで薄水色をした多少長めのショートで髪で瞳は青。体型はあえて馬鹿魅異と比べると魅異より多少痩せていて背は低く高1に近いが礼儀はよさそうだな。

「ところで悟君、魅異君を知らないかね？」

「えっ、まだ来てないんですか!？」

寮には居なかったしな 病気で病院に居る事は絶対無い。神がブラスチックを食うくらいありえない!

「あれ?それって常識離れしていて物理学を無視する事が多くナレィションの姿が見えて自称世界の常識を超える女の人で本当の主人公より主人公らしくて宇宙を消滅させる技を喰らっても気絶さえしないしない人ですよね?」

途中俺を侮辱するような言葉が入ってたがあんな可愛い子を攻撃するのは俺が許せない。

ってか攻撃した奴は俺が全力で葬る! それはともかく何でそんな事知ってるんだ!?

「何でそのことを知っているんだ？」

「あのぉーそのことは一部を除く皆に秘密にって言われているので後でいいですか？」

「それならしょうがないな。じゃあ後でにしましょう！」

「そうですね。ところで1部って誰の事でしょうか？」

ナイス校長。俺も気になるな。

「確か・・・悟さんとジャルスさんと烈さんと魔王と校長さんだったと思いますよ。」

魅異め、話が有るなら何処に行く前に話せばのに。ってかそれ以前にこの子を俺に紹介してくればもっと良かったのに！

「それじゃあ自己紹介の続きをお願いしますね。」

そういえば自己紹介の途中だっけ。

（昼休み（校長室））

「クルクルクルクルクル~~~~」

「…………何やってんだこの人？とりあえず聞いてみるか。」

「校長、何で椅子に片足で立ってクルクル回転してるんですか？」



「ノリに決まっているでしょう。」

「ノリで回転するなあああ！！！！」

「ドゴツ！ドーンッ」

「ぎゃぐおー！」

校長の椅子を蹴って落としてやった。でもこの人なら絶対に大丈夫だ。

「コンコン」

おっ来たか。

「失礼しますね。」

「邪魔するぜー！！」

「やっと到着」

「疲れた・・・」

聞き取りにくいから同時に言うな。

ちなみに誰がどれを言ったかは上からウィル・烈・ジャルス・クレーだ。

「結構時間が掛かったみたいだが途中何かあったのか？」

「途中道に迷ってたんだぜ！」

烈、それは自慢げに言う事じゃないだろ！？

「やっぱ工事の時に廊下を迷路にするように頼んだのが間違いでしたね。」

そんな事頼んだのか校長！俺も何か複雑な廊下だな〜と思ってたんだよ！

「えっと・・・話を戻していいですか？」

ナイスウィル。これで話が戻るだろ。

「ああ〜そういえば何か話が有るんでしたね。」

忘れてたのか校長！

「簡単に言うと私は勇者です。」

.....

「マジで!?」「へえ」

左が俺と烈とクレーで右はジャルスと校長。

「本当ですよ と言うより知らなかったんですね。それじゃあ説明しますね。」

本当は説明しないで欲しいんだけどな。厄介な事に巻き込まれる可能性が有るから。

「私はまあ勇者の記憶＋思考＋強さを持つ意思です。ついでに元勇者。」

「じゃあその姿は？」

いつもながらナイスな質問をするなージャルスは。

「この体は魅異さんの体ですがこの姿は私の本来の姿です。」

「いやいやいや、変身なんか出来ないだろ普通！」

あつ、でもウィルは勇者だし出来て当然か

「確かに普通は出来ません。ですが魅異さんの体だと何故か出来るんですよ」

……魅異＝普通じゃないってことは分かった。

「ちなみに私は魅異さんの意思と会話できますよ　と言うより今は皆さんと魅異さんの両方と会話しています。」

マジで!?

「ちょっと待っててくださいね……えいつ!」

@視点ウィル@

「本当に視点チェンジできるなんて魅異さんの体はすごいですね」  
「でしょー。そりゃあ常識を超えるんだからこのくらいは出来ない  
とね」

「魅異さんの能力を使って視点を変えました。」

「おおーどうやったら出来るか教えてくれないか？」

「出来るかは判りませんが自分視点になれ〜って念じてえいって言う  
たらできました。」

「パープルマンボウって美味しいかなー？」

何故にパープルが知りたいです……

「多分　ってか絶対に美味しくないと思いますよ。」

「それじゃあ透明マンボウ」

「何故マンボウにそこまでこだわるんですか!？」

「さっきから驚いたりしているみたいだがどうしたんだ？」

「マンボウを笑うものはマンボウに泣く」

「笑ってません!それと1円を笑うものは1円に泣くですよ。」

「魅異さんの発言が意味不明でツツコミを入れてるところです。」

「意味不明って……やっぱリマンボウを馬鹿にしてるでしょ」

「多少ですよ　ってか魅異さんは外の会話は聞こえないはずですよ  
ね!？」

「普通はそうだよー。まあ次からは聞こえないようにするから今回の事はスルーねー」

「それじゃあ今回はスルーしますね。」

「とりあえず私はここまでしか知りませんので」

「それじゃあこれで解散にしましょう。あとウィル君の登場を記念して悟君の部屋でお祝いしましょう。このメンバーで。」

「おおっ、いい考えですね校長。俺の部屋の場合は皆わかってるよな。それじゃあ解散！」

「悟君って魅異さんから聞いてたよりも優しい人ですね」

「おかしいなあゝ多分だけど新入生だから優しくしてるんだと思うよ〜」

とにかくいい人ばかりでよかったです。

## 12話：新入生？と元勇者の秘密（後書き）

@ 悟視点 @

「おいアキステ」

「おつ悟じゃないか。いったいどうししゅうらいだt」

「襲来打！」

「ドゴオン！」

「又グワアツ！何するんだ！」

何って、気づいてないのかアキステめ。

「1日更新をサボった罰だ。」

「それは悪かった！作者の都合上火曜と水曜は更新できない事が有るかもしれませんが！ 前も同じことを言ったような。（6話後書き参照）」

「前は自分で言わなかっただろ。今回は自分で言えてよかったな。」

「まあな。」

「あと話が変わるがギャグが減ってきてるぞ。」

「あつ・・・ブラックマンボウ」

ブラックマンボウ！？

「意味不明な発言をしても俺は突っ込まないから。とにかく次回はギャグを増やせ！ギャグマンガ歴約10年の実力で何とかしろ！」

「分かったから怒るな。次回は意味不明発言連発させるから。」

これで俺の出番が増えるぜ！

「それでは皆さん次回もお楽しみに！」

「オイ、それは作者が言うべきd（終了）」

### 13話：ボケとボケとツッコミ

@悟視点@

「ドゴオオオオン！」

いきなり爆発！？ウィルがそんなことするはずは無いから犯人は

「おっはよー悟！昨日のお祝い会で寝不足になってない？」

「お前のせいで眠気が吹っ飛んだわああ！！」

昨日お祝い会で聞いた話だが魅異とウィルは作者の気分で交代することが有るらしい。

どうせならウィルを出してくれよ。あと今日は校長のノリで高校は休みだ。

「何のようだ？」

「ノリ」

「パシイン！」

ハエ叩き炸裂！当然の結果だ。

「じよ、冗談だよー。本当は今日は部活が有るから悟も巻き込もうと思ってさ」

「……」

無言でハエたたきを構える。

「しょうがないんだってー！理由も有るから聞いて！」

「理由は？」

「私の入ってる部活は何か知ってるでしょ？」  
えーっとー何だっけ。

「覚えてない。」

「戦闘系クラブの高等槍部じやうとうしやうぶだよ」

高等槍部……思い出した。部員が魅異を含めて4人のあの部活か。  
「思い出したが 何故俺が行く必要が有る！？」

「いやーそのツッコミ役2名が出かけてるから一人連れてくるよ

うに言われたんだー」

あの部活は決闘とかする＋ボケ役のリーダーがなあ

「いや・・・止めとく」

「行けば出番が増えるよ」

「よし行く！」

まあしょうがないよな。俺は主人公だし。

～高等銃部練習会場～

「さて」魅異はどんなツツコミ役を連れてくるかな？」

「バキインー！」

「あつ、窓から来た。」

「着地成功！」

「俺を踏むなあああ！！！」

何で窓から入るんだこいつは！？

「あつ、いわさきはぎ磐捌 隠納いんなさんだー」

「やつと来たんだ魅異ー ツツコミ役は？」

「た・・・助けてください。」

あの人は磐捌 隠納さんと言って3年で高等銃部のリーダー。

言っとくけど銃の扱いは半端じゃない。魅異ほどではないが大ボケで常識ハズレ。

高等銃部は基本銃部の試験を合格しないと入れないらしい。毎月テストを数百人はやってるが一人も入れない事が多い。つてか二人は何か話してるし。

「それでさ」総理大臣を脅して車を20台ほど奪い取った事も有るんだよ」



「流石ね魅異ー。私なんて警察署を3軒同時に一人で乗っ取ったくらいよ。」

俺なら絶対に参加できない会話だ。言つとくが二人の言ってる事は真実だぞ。

「よし！今から特星現代エリアの警察署を乗っ取りに行こうー！」  
何を言ってるんだ馬鹿魅異！あとウィルの事を忘れるな！

「流石は我が後輩！グッドアイディアー 武器はゴボウとかにして防具はレタスとか」

いやいや、全然グッドじゃ無い！ってか野菜の装備って相手を馬鹿にしてるだろ！？

「それじゃあ私は 伝説を告げる槍・クラウドリース ランス ー  
で行くよー」

それはもはや槍じゃない！ゴボウの先にキュウリをテープで巻きつけただけの食材だ！

「魅異・・・一体その伝説の武器を何処で！？」

「企業秘密だよ！フフフン」

「だが私のこの槍もなかなかよ。」

「そ、それは幻とも言われるレア度MAXを超える超レア槍・・・  
秋香金灯槍！？」  
しゅつかきんとんせう

・・・ゴボウの先に巻きつける物がほうれん草に替わっただけだろ。  
「よく分かったわねー。売れば今なら60億セルくらいの値段が付くほどよ。」

凄く高っ！？ゴボウとほうれん草にそんな値段が付くのか！？つとそれより

「あのー部活動はしないんですか？」

「あつ、そういえば忘れてた。」

リーダーとしてそれでいいのか？

「それじゃあー決戦しようよ」

「久々に魅異とのバトルもしたいしねー」

魅異とバトルしたいって・・・どんだけ凄いんだアンタ。

「じゃあ悟は見学ね」

「来てもらって悪いけどちょっと待っててね。」

「バトル開始!？」

聞くなよ!

「槍魔術・・タマネギの汁の雨!」

タマネギの汁!? あっ、隠納さんの特殊能力は槍魔術と言って槍を持つてるときだけ使える能力だ。

「私流槍魔術、レタスの家への引きこもりー!」

魅異の使ってるのは特殊能力じゃないぞ。ってかレタスの家!? あと俺は練習場の隅（魅異達との距離200m）に居るから大きな効果音しか聞こえないぞ。

「ならば槍魔術・・スライムの落とし穴!」「ぎゅぎゃー!」

スライム!? 絶対に落ちたくない!そして何故ぎゅぎゃー!?

「私流槍魔術、スライム加工術!」

「うにえ~~~~~!!!!」

何か吹くらんでる!!!!!!

「私流槍魔術・特技、スライム弾け飛び爆弾~~~~!!」

「~~~~~バアツチャアアアアン!!!!!!」

「ヒュウウウウ~~~~」

「すぐに終わったな。それより・・・死ぬかと思った。」

いやマジで。だって500m位の練習場が軽く吹っ飛んだんだぞ。普通は吹っ飛ぶよな？

「そこまでの距離は飛んでないようだな。あいつら無事か？」

それにしても特技レベルの技であの威力とは 魅異は人間じゃないな100%位の確立で。

俺達は技の種類で奥義とか分ける奴が何人が居るんだが（俺は違うが）その分け方は普通の技、特技、奥義、極技、その他自称で分けられている。

って事は魅異は今まで全力ではなかったと言う事だ。（レジエント

オフバトルとか)

「アイツ・・・人間じゃないって！多分。」  
まあ暗くなってきたし今のうちに帰るか。

・・・ちなみにウィルは今日は1日中寝てたらしい。

### 13話：ボケとボケとツツコミ（後書き）

@ 悟視点 @

「相変わらず更新スピードが遅いなー」

「しょうがないだろ。それに1日1回更新してるだろ（定休日は除く）」

「確かに・・・あとキャラ紹介は？前回ウィルのキャラ紹介が無かっただろ。」

まさかわざとじゃないだろうな！？

「書き忘れてただけだって。ブラックマンボウに夢中で あっナレ君発見！」

キャラ紹介を始めますよー

ウィル

元勇者の意思で今は魅異の体に住んでいる。

ちなみにレギュラーキャラ確定である。

礼儀正しく明るい性格で髪が空色。瞳が青色。

高2だが見かけは高1に見える。

得意武器は剣で魔法も少々使える。

あとオバケなどが苦手らしい。

磐捌 いわはな 隠納 いっさな

高等槍部のリーダーで常識ハズレ。

魅異の先輩でもある。常識ハズレだが槍の腕前は1流。

しかしその腕前も槍魔術のせいで台無しである。

よし終了。

「アキステ〜俺とウィルの高感度upシーンを作ってくれー」

「ノンノン。この小説にそんなまともなシーンなど有りませーん。  
ちっ、やっぱり無理か。」

「じゃあ自分で作るk」

「そんな事しても俺がぶち壊す」

鬼だ！

「それならどうしろと？」

「さあね〜まあ頑張れよ。」

「応援する気ないだろおお!!」

「まあね〜。それじゃあ皆さん次回をお楽しみに！」

## 14話：遊園地へようこそ！

@ 悟視点 @

「ZZZZZZ……ふあ」

グッドモオニイイング！朝だ。

「……」

眠いなー。こういう時ってしばらく座ったままで少ししてからおきるのが普通だと思う。

「……さて飯でも食うか。」

5分の放心状態からやっと解き放たれた！俺が。

「んっ？何だこれ？」

2枚の紙を発見。どうする？

1：両方確認

2：片方確認

3：嫌な予感がするからスルー

フフフ、俺は魅異の異常が移ったせいかなタイトルが分かるのだよ。  
ズバリどちらかは確実に遊園地の招待券！もう片方はその送り主からの手紙だあ！

「って事で1枚目確認！」

【水族館無料招待券（有効期限14話終了まで） 春が近い今のうちに来てみよう！】

何故水族館の招待券なんだああ！！？

「いやいや、だってタイトル遊園地へようこそ！だろ！？」

アキステめ仕組みやがったな！

「次2枚目・・・」

やけに低テンション。

【グッドウモオニイイング悟。今日はこの現代エリアに遊園地を作った！って事でオープン前に特別サービスで無料で遊園地に招待するぞ。場所はこの紙の裏にかかれてる。

この紙と一緒に送った無料招待券を持って遊園地に装備を忘れずレッツゴー！

ちなみに悟以外にも招待券は送ったから。それじゃあグッバァーイ。追申：今日高校あったみたいだが休みにする様に校長に頼んどいたから。

さらに追申：今日は気分でウィルの行動だー！ byアキステ】

「2つ目はナイスな追申だアキステ！」

ウィルと一緒にやってやろうじゃないか！

「今の俺はやけに高テンションだぜ！ さて飯でも作るか。」

〈遊園地〉

省略多っ！！今居るメンバーは俺とクレーとウィルと烈とジャルスと校長とアキステだ。

「ってか何で作者と校長がいるんだ！？」

「「ノリ」」

「あっそう。」

予想通りの返事だな。

「さて、この多人数行動もなんだし班でも決めるか」

これが俺にとって1番重要。失敗は許されない。



「班を決め中です。しばらくお待ちください・・・」  
とりあえずあみだクジで決まった。

俺・ウィル・アキステ・校長の班

ジャルス・烈・クレーの班

「まあまあの班だな。ボケ役が二人も居るけど。」

その二人はもちろんアキステと校長だ。

「俺はツツコミ役だ！」

あつそう。

「ジェットコースター乗り場」

「まずはこれにしませんか？」

「流石はウィルだなー。OKこれにしよう。」

「やったあ」

喜んでるな。うんナイス俺。アキステは校長と常識外の会話をして  
いるが。

「荷物置き場はそこか。」

【装備品以外の落としてはいけない物は此处に置いてください。】

「そういえばアキステ、何でこの遊園地に装備品を持つてくる必要  
が有るんだ？」

「乗れば分かる。あとこのジェットコースターは立ち乗り専用で足  
場固定なしだからな。」

ハイ？悪いけど幻聴が聞こえたような。立ち乗り専用で足場固定な  
し？ジェットコースターから落ちるぞ！？

「しかもループ（みたいな形）の場所も有るぞ！誰が落ちずに残  
れるかな？」

このジェットコースターの成功率を考えると・・・

俺〃（５％）俺は普通の人間だから成功率は極めて低い。

ウィル〃（８５％）元勇者だし魅異の体だから成功率は高い。

アキステ〃（２／１００％）自分は絶対助かるように仕組むと思う。  
仕組まなかったら俺以下。

校長（？％）〃この人は分らないな。 ってか落ちても絶対平気だ  
ろ。

「俺が１番不利だろ！？」

ってかどうしよう。 ここっで逃げたら主人公失格だし やってやる  
か！

こうなったら開き直って成功させる！

「まもなく発進します！」

「ちなみに勝ち残ったら賞品として折り紙８００万枚を」

「いらんわ！」

８００万枚も迷惑だ！ ってか発進してるううう！！

「ヒュン！」

おわっと！さっきの何だ！？

「此処でルール説明！このジェットコースターに向かって前方から  
敵が突っ込んでくるから全員回避するように気をつk」

「ガスッ！」「ギャガアッ！」

あっ、落ちた。

「グルルウウア！」

何かボスキャラみたいなのでたあ！！

「あれはヴィンデードウと言う巨大鳥系モンスターで炎を吐きま  
すよ。速さはジェットコースター以上。」

ほおくなるほどねえ って冷静に解説してる場合じゃ無いぞウィル！  
「ゴオオオオ！！！」

「おつと危ない。」

「この程度では私に攻撃を当てる事など不可能ですよヴィンデエードウ君。」

熱っ！！俺だけ避け損ねた！二人はバク転で回避したけど。そして校長、敵キャラに君付けは止めた方がいいぞ！って二人とも落ちていった！

「ああゝ落ちちゃいました。じゃあ後は頑張ってくださいねゝ」

「いやーやっぱりあそこで避けたのが間違いですね。ヴィンデエードウ君の攻撃なら喰らっても大丈夫でしたし。」

それより俺にどうやって生き残れと！？

「グウウウ」

何か炎を溜めてるんですけど！！

「グオオ ドカッ！！ヒュゝ」

都合よくジェットコースターの柱にぶつかって落ちたな。助かったゝ

「あとはゴールするだけ って無理だ！」

ループがあるって！やっぱ都合悪いぞこの小説！ってか今落ちてるって！！

「ゴオン」

.....

「ベチャッ」

「っ 辛っらぁー！！！！！！」

辛い！ワサビのツーンがやってきた！！ヤバイ！ヤバイ！！ヤバイ！！！！ヤバイ！！！！この辛さはヤバイ！！！！！！！！！！

「おおー辛そうだな。」

この声はアキステか！！

「辛いわボケエー！！一体顔面に何つけた！？」

「１１話の時に前が紹介した辛そうな技のアキステ流アレンジバ  
ージョンだ。」

どんなアレンジしたんだ！一応味見たが此処まで酷くは無かったぞ！

「私はとめたんですけど、無理でした」

ウィル まともなツッコミ役はお前だけだよ。（この班では）

「そういえば校長は？」

「確か生のタマネギを食べに行ってるぞ。電気屋に。」

何故に生！？しかも電気屋！？意味わからねえよあの人！

「俺達は何を食べればいいんだ？」

「都道府県パズルでも食べる。」

「パシイーン！」「アウチ ノオオオン！グファッ！」

ハエ叩き顔面HIITさせてやった。

「それが嫌なら全宇宙パズルのピース数億枚にするk」

「パシインパシイン！ドコオオン！！」

ハエ叩き顔面HIIT×2+バスーカシヨットを食らわしてやった。

「分かった分かった。ちゃんとした店に案内するから。」

「気楽な場所な。」

「レストラアーン【レッツバック】」

変なネーミングだなオイ。

「当然だが全部無料だぞ。」

「流石は遊園地の持ち主だな。」

「うーん何にしようかな」

ウィルは考え中だ。ってメニューになんかランクみたいなのが付いてるな。

「アキステ、このランクみたいなのは何だ？」

「それはそのメニューを選んだ時に戦うモンスターだ。」

「……戦うの？」

「マテマテマテマテ！無料じゃないのか！？」

「無料でも有料でも戦闘は始まるぞ。」

マジかよ……

「ちょっと待って下さい。それはつまりランクの高い商品は敵も強いと言う事ですか？」

「そのとおり。だからどれにするかは自由だ。」

自由なのは普通だろ！ってかどれにしようかな……

「3分後」

「決まったぞ。注文していいか？」

「俺はOKだ。」

「私もいいですよ」

「注文中」

「注文シーンを省略とは……手抜きだな。」

「うるさい。遊園地全体まわるのを書くのにどれだけ時間掛かるの

「か分かってるか？」

「確かにこの広さ全部はかなり時間が掛かりますね。乗り終わったアトラクションはまだ1つだけですしね。」

「だから省略が多くなると思うぞ。」

「ああそうか。」

「そんなに時間かけるなよ……んっ？」

「クケケケケ……お前らがお客さんかあ？」

「ゴルウウ！」

「……………」

「ランク別のモンスターだな。骸骨と竜と幽霊だ。」

「ふーん。俺の相手は骸骨剣士か。」

「アキステ、何を頼んだんだ？」

「カレーと冷凍食パン。ランクB」

「お、お化けが居るんですけど」

「ウィルはオバケ嫌いらしいな元勇者なのに。」

「あいつの相手は俺だから大丈夫。」

「そうですか。私の相手はあの竜ですね。確かランクSでした。」

「ランクSを頼んだのかよ！？」

「それじゃあバトル場にワァ〜プ！」

「バトル場」

「シンプルな場所だな」

「……………」

「本当にシンプルだぜーだって全体が灰色だぞ。BGMが掛かってるが。」

「ってかバトルするか？」

「……………」

「無視ですか。」

「オイ」

「……………」

「少しは反応しろ！」

「・・・・・・・・・・」

「聞こえてますか？」

「・・・・・・・・・・」

「無視かよ！」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

もうム力ついた。

「・・・魔法混合弾！」

「ヒュン！」

すり抜けた！？つか弾が何処か飛んでった。

「おおーい？」

「・・・・・・・・・・」

「お前なんか成仏しろ。」

「パアアアア」

した！？本当に成仏しちゃった！？つか効果音にツツコミたい！

～店内～

「よっしゃ戻ってきた」

「遅いぞコラ。」

「確かに。もう私達は食事を食べ終わりましたよ」  
早っ！？

「二人ともどうやって倒したんだ！？」

「俺は給料を減給すると脅したら降参したが。」

酷っ！骸骨に同情してやろう。

「私の時は魅異さんが作者の気分を無視して勝手に戦ってました。」  
竜にはさらに同情してやろう。可哀想に。  
「とりあえずいろんな所をまわるか。」

〈3時間後〉

「最後は此処に行くぞ。」

「絶対に無理です！殺されるー！！呪われるー！！誰か助けてください！」

今はまだ乗っていない最後のアトラクションに乗ろうとしているがウィルがなかなか行ってくれない。何故って？それは今乗ろうとしているものは

「オバケ屋敷なんか絶対に行けませんって！！！」

「大丈夫だって。中のオバケは襲ってこないから。」

「あっ、中に居るのはオバケモンスターで普通に襲ってくるぞ。」

馬鹿アキステ！そんな事言ったら

「やっぱり無理ですー！！！！襲われて殺されますよおお！！！！！！」

〈30分後〉

出口のひとつ前までやっとなた。途中ウィルが叫び声を上げた回数80は超えるぞ。

つとそれよりボスキャラが目の前に居るわけだがどうするか。

「つかスライムだよな？あれ。」

「確かにそうだ。名前はスライムししだ。」

「大きさがししなだけだろうけどねえ」

ウィルがいつの間にか魅異になってる！？

「魅異、あのスライム自体全部お前にやるからあいつを倒してくれ。」



「えっ いいの！？それじゃあ先に進んでてね」

くオバケ屋敷出口く

「やっと出られたぜ」

「よかったね」

・・・魅異！

「やけに早いなオイ！」

「3秒で決着がついたからね」

「それよりもすぐ閉店時間なんだが・・・」

「それじゃあ帰るぞ」

く自分の部屋く

「・・・また何かを忘れてる気がする。」

く遊園地裏タマネギ畑く

「いやく此処のタマネギは生でも美味しいですねく悟君やウィル君も来れば良かったのに。」

14話：遊園地へようこそ！（後書き）

「時間の都合上省略します！皆さん次回もお楽しみに！」

## 15話：変な物は強い効果を持つてることが多い

@ 悟視点 @

〈 教室 〉

「今日は特別授業をおこないたいと思います。」

いきなり何言ってるんだ校長!?

「しかもこのクラスでしかやらないんですよ。ラッキーですね。」

「おお」

皆驚いてる様子。俺的には他のクラスでやって欲しかったな！。

「そしてその授業内容は・・・装備品製作です!!」

「おお」

同じ反応しかできないのかこのクラスは!?

「最近は何を簡単に買っては簡単に捨てる人が居ます。しかし資源の無駄だと思うんです。」

珍しく正論だな校長。

「しかしあまりに流行っていたので私も要らない装備品を捨てたんです。」

駄目じゃん!!

「そしたら次の日、その捨てた装備品の価値が捨てた日の6倍に上がったんです!」

都合いいオイ!

「まあそういう訳で皆で価格の高い武器を安い材料で作ろうと考えたのです。」

せこっ!微妙に詐欺に近いぞ!

「材料は1人アルミニウム と鉄50kgは高校で用意します。あ

とは各自で用意してください。」

基本はアルミニウムか。まあ各自での用意はやらずに高校での部品だけで適当に作るか。

「ちなみに優勝者はこの高校で年に10個出すか出さないかの超レア弁当をプレゼントしますよ。」

何っ！噂でも滅多に聞かないあの超レア弁当か！？まだ食べた事ない奴だし絶対に優勝してやる！

「評価は強さとナイス武器度で決めますから。あと他の生徒に決闘を挑んで勝てば材料を奪い取るのもOKですよ。では……スタート！ちなみに装備品作りは学校の制作・加工室でおこなってください。」

↓自分の部屋↓

何とか到着できた！途中何人かに決闘を挑まれたが逆に奪い取ってやったぜ。

「これと、これと……あとこれも。」

材料は決定したし、行くか。

「ドゴン」

「何とか到着」

おっ、魅異も来たか。どうせだからどんな材料を持ってくか見てくか。（壁には朝に開けられた穴が有ってあっちの部屋にいける）

「おい、魅異は何を持っていくんだ？」

「あつ悟居たんだー？私は材料は結構持つてるつもりだから多少は多く持つてくよ」

「ああそうか ってどれだけ持つてくんだよ……」

魅異の背中にはキャンプ用品を入れるようなかいいカバンに無理矢理材料を詰め込んでる。

「どうせだから一緒に行こうよ」

「ハイハイ。」

「高校（制作・加工室）」

到着！さてと作る武器は・・・今回はハンマーにするか。

「まずは名前きめだが名前は」

「野菜ジュース一丁上がり」

「ザパアアッ」

「何してんだこの馬鹿魅異！」

野菜ジュースをかけやがった！なかなかシミになると落ちないのに！  
「シャンパンをあたりに撒いてるだけだよ」

なぜシャンパンを撒く必要が有る！？しかもそれは野菜ジュースだ  
ろ！

ちなみに教室での席が隣なのでここでの制作もコイツは隣だ。大迷惑。

「今年はシャンパンを撒く年じゃないぞ！」

「えっ！そうなの！？」

つてかシャンパンを撒く年なんかない！

「もうシャンパンは撒くなよ。」

「はぁい。」

これで大丈夫だ。そうだ！名前は『万年シャンパン祭り』にしよう。  
校長ならこの名前を気に入るだろ。次は基本素材だが基本は軽くて  
多少丈夫で扱いやすいアルミにするか。アルミをまずは溶かしてそ  
こに俺の魔法弾の超圧縮空気圧弾を3つほど混ぜ込む。

この弾1つに付き大災害並みの風圧が有るからな。このハンマーよ  
うの入れ物に入れてしばらく放置すれば一つ完成。だがその少し前  
にシャンパンを混ぜておくのがポイントだ。

「青汁の大津波発生ー！！」

「ザバアアアン！」

「何やってるんだ超異常型馬鹿魅異いいいい！！！！」「ガン！」  
「いったい！」

青汁の津波を起こした罰に頭を殴ってやった。うおーこの青汁滅茶苦茶不味い。

「少し静かだったからちよつと遊んでただけなのに」

「それは迷惑だ！特に俺に対してしか被害が来てない点でスゲム力つく。」

「それは他の人に迷惑かける訳にはいかないでしょー。」

「俺にはいいのか!？」

「全然OK」

「パシイン!」「アギヤウ!」

八工叩き顔面HI!T!普段の俺の辛さを知れ。

「次は災害なんて絶対に起こすなよ。」

「ハア〜イ」

「……心配だ。つてか製作中の武器に青汁が混じってるし。」

しょうがないから名前を『シャンパンと青汁の大暴走劇』にしよう。

「よし、固まったな。」

次でラストスパートだ。まずはこの製作用の先がとがった棒で丁寧に削っていく。

持つ部分は削ると持ちにくいからそのままにしておく。

そして形が良くなった所でハンマーの頭の部分に製作用の針で見えないくらいの小さな穴を開ければ完成。

「よし。これで完了」

「超強力タバスコショット!」

「ベチャベチャベチャ」

「辛ーーーーい!」

魅異め……タバスコをヒットさせやがったなー!つて滅茶苦茶染みる!!!

「また世界最上級ウルトラスーパー異常者型イカレ馬鹿アホ魅異の仕業かああ!」

「ありゃ〜運良 運悪く悟に当たっちゃったねー」

俺に対してわざとやってるだろ絶対!

「これはわざとだろおお！」

「正解」

「よしこれでも喰らえ。」

「パッシイイイン！」

「いったああああい！！」

「自業自得だこのヤロー！」

「ヒュッ！ヒュッ！」

「冗談抜きで当たるって！」

「それじゃあ当たれ！」

「絶対嫌あー！」

「待てテメー！」

「約30分後」

「みなさん、もうすぐ終了ですよー。」

もうそんな時間か。

「今回はまあ許してやるか。」

ああ、武器に何故かタバスコがしみこんでる。

しょうがないから名前を『タバスコと青汁とシャンパンの幻を超えたコラボレーション』にしよう。でもなんか武器の名前としてはイマイチ。

「表彰式」

「今回の武器で1番価値が高いと思われる装備品はいや、もう何でもいいです。俺の装備品は2位だったし。」



「魅異君が作った『主人公サーチスーツ』です！」

「おおおお！」

何じゃそりゃ！？

「このスーツは主人公の位置をサーチして付いて行く事ができるという優れたものでその機能を使えば目立つ事ができてうまくいけば主人公の座を奪う事もできるらしい。しかも装備機能拔群でタバスコを発射したりなどができるらしい。しかも普通の服と薄さは代わらないらしい。いやゝ流石は魅異君だ。」

俺少しやばいよな！？主人公の座を狙われるよな！？よし逃げる！

「あれ？悟君がいませんね。賞品をもらえるのは3位までに変更されたのに。」

## 15話：変な物は強い効果を持つてることが多い（後書き）

@ 悟視点 @

「はあ、はあ、此処まで来れば大丈夫。」

「何が大丈夫なんだ？」

「ぬおお！？アキステか！」

「俺以外に誰に見える？つてかどうかしたのか、急いで走ってきて。」

「いや……別に。んっ？その箱は」

「ああーさっき校長から貰ったんだ。悟の分の賞品の弁当の券が余つてからだつて。」

「俺の分あつたの！！？」

「イエース。確か途中から3位までが貰えるように変更して券を渡す時に言ったらしいが悟がいなかったからやるって言つてな。」

「じゃあ その箱はまさか！？」

「弁当の空箱。」

「……死ね。」

「ドッゴオオオオオン！」「ギャウチ！」

見事に飛んで言つたな。ああ俺の弁当……

「そういえば何かの紹介は有るのか？ナレ君」

悟までナレ君つて言うな！紹介はこれだ！

タバスコと青汁とシャンパンの幻を超えたコラボレーション

悟の作った武器でハンマー！

振れば超強力な風とタバスコと青汁とシャンパンが同時に相手を襲う。いろんな意味で強い。

主人公サーチスーツ

スーツといっても服みたいな薄さである。

主人公の場所をサーチしてそこへ行くことができる。  
装備はタバスコショットとその他いろいろ。

これだけ。

「そうか。それじゃあ作者がないから代わりに 次回もお楽しみに！」

あと最初に小説を書いてからのユニークアクセス数が10000を超えたと作者が言ってたぞ。

## 16話：変な星でツッコミ劇場1回目！？

@ナレーション視点@

ストーリー設定

ある所に平和に立ってるコンビニ。

そのコンビニに大ピーンチが訪れた時のお話です。

キャラ設定

悟 コンビニ店員

魅異 コンビニ店長

ジャルス 警察官

烈 強盗

校長 お客

ウィル お客2

クレー 隣のコンビニ店長

RT・DX + 借金取り

アキステ 効果音などの設定・劇場監督

ちなみにほとんどアドリブで進めるらしいですよ。

「変な星でツッコミ劇場、始まり始まり始まり〜あっ!？」  
いきなり始まりを多く言った!？大丈夫かなこの劇場・・・」

「ああ〜お客来ないな〜。まあ此処のイカレ店長と隣のコンビニが

無くなれば人も来るだろうけど。」

「だ・れ・が・イカレ店長なの？」

「ギクウ！」

「あつ、て、店長！」

「ちよつと目を離せばすぐ悪口を言う店員よりはマシだと思っけどねえー。」

「す、すみません。」

この劇場では悟の方が立場が下のようですね。

「あとこの品物を仕入れるように電話しといてねえ」

「あつハイ。・・・ってちよつと待つて下さい！」

「何かようー？」

「戦車なんか仕入れてどうするんですか！？置けないし、動かせないし、お金足りないし！」

「私のコレクションに加えるだけなんだけど」

「その前に今の経営状態を考えてください！700万円　じゃ無くて700万セルの借金をしておいてさらに戦車を買おうとする人なんか何処に居るんですか！？他にもヘリとか潜水艦とか書いて有るけど。」

「ええゝ駄目？」

「駄目です。」

「どおゝしても欲しいんだけど。絶対に駄目？」

「絶対駄目です。」

「仕入れてくれないと不良になつてやるゝ」

「いやいや、いまさら手遅れですって！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「チリンチリイーン」

「「あつ、いらつしゃいませー」」

「おおーまた喧嘩とはこの店は暇そつな事」

「あゝ馬鹿以下店長だー」

「誰が馬鹿以下だ。まったくこっちは人が多すぎて困ってるくらいなのに。」

「それなら何で此処に来たんだ？」

悟はあっちの店長にはため口ですね。

「どうせだから他のコンビニでも偵察でもしようかと思ったんだが意味無かったようd」

「見回りに来たの！？それならお客のフリをしないとねえ」

あつ魅異がクレ－に品物を持たせて 無理矢理レジに並ばせて・・・

「1万9000セルの所四捨五入して2万セルになりまゝす。」

「高くなってるし！！それにいらから！買いに来たわけでも無いかr」

「毎度ありがとうございました」

凄い早業で抜き取ったみたいですね。

「ああゝ今日の食事代がああ・・・」

「ああもう帰るのか。また（金を取られに）来いよ。」

「二度とくるかあ！」

「チリンチリイーン」

「また客が居なくなりましたね。」

「そうよねえゝそれじゃあつまようじを1本2セルと使い捨て用紙コップを1つ20セルで今日中に在庫の700個売っておいてね」

「いや無理だ！絶対誰も買わないだろ！」

「そう？とりあえず頑張つてねー私は奥で休んでるから。」

「はいはい」

・・・・・・

「シャリツシャリー！」

「シャリツシャリー！？あつ、いらつしやいませー」

多分効果音を間違えたんですね。あと悟は反射的にツツコミを入れたんでしょうね。

「いやーあっちのコンビニは込みすぎですよ、ウィル君みたいな人。」

「そうですね元校長さん。それより何を買いますか？」

「そういえば何でウィルが居るんでしょう？ 魅異は店長のはずですが・・・ああー魅異が奥の部屋に行ったのはこのためですね。」

「つまようじとロケットエンジンと土地の権利書を買いたいでしょうか。」

「はいいいいい！？」

「へえー最近のコンビニってそんなものまで売ってるんですか？」

「校長が注文してウィルが凄い勘違いをしているけどまあスルー。悟は超驚いてますが。」

「どうしたのですか悟君 店員さん。まさか無いとか？」

「ええーと」

「チリンチリイーン」

「あー警察のものですか？」

「何の用でしょうか？」

「最近この近くでコンビニ強盗がうるついでるらしいのできをつけてくださいーもし現れたらすぐに報告してくださいねーすぐには駆けつけませんが。」ズデデッ」それじゃー失礼しましたー」

「チリンチリイーン」

「すぐに駆けつけないと駄目でしょう！？途中の音は皆がずっとけた音。」

「チリンチリイーン」

「オラア！俺は強盗だ！店長を呼べ！」

「ズドドッ」

「早いなオイ！？」

「警察が出て行った直後に来るって早すぎですって。」

「う、うるさい！早く店長を呼べって言うてるんだ！さもないところの女の命は無いぞ！」

「ウィルを人質に取ったようですね。」

「ちよつとまったあー！」

「何だお前は！？」



「コンビニ店長歴4年のコンビニ店長よー！」

「やっときたか！」

「その子を入質に取るくらいなら！」

代わりに自分を入質に取れとでも言うんですかね？

「この店員を入質に取りなさいよー！」「ズデッ！」  
今のシーンは私もずっこけました。

「オイまでこの馬鹿店長！なんで俺が入質なんだ！」

「給料を今月は払わなくても大丈夫になるかと思つての判断だよー！」

「余計にタチ悪いわ！」

「うるさいうるさいうるさいうりゅういおh w g k j k ー！」

「ちゃんと喋れよ強盗！」

「とにかく店長！この子の命が欲しければ麦茶20リットルを用意しろ！」

シヨボイ身代金？ですね。

「20リットル！？この店には19、99999999999999リットルしかないのにー！」

ほぼ20リットルじゃん！

「それなら駄目だ！」

けちな強盗ですね。

「他に要求は？」

「それならつまようじ700本用意しろ！」

「それならぴつたり在庫があつたはずだけどー」

「それなら1本売ったぞ。元校長に。」

「ああーあれなら飲み込んでしまいましたか。」

「699本じゃ駄目？」

「駄目だ！」

「他に要求は？」

「700万セル用意しろー！」

「700万！？店長、とてもじゃないけど無理ですよ。」

「ううゝんどうしようー」

「チリンチリイーン」

「おい悟ー？700万セルの事だけど」

「何っ！？それは何処だ！！」

「？誰だか分からないがこの封筒の中に入ってるぞ。」

「そうか！それじゃあな！！！」

「チリンチリイーン」

「帰ってつたな。」

「そうよねゝまったく最近の強盗は。」

「強盗？まああの紙を持っってたってことは代理人って事にしとくか。じゃあグッバイ」

「チリンチリイーン」

「じゃあ私達も帰りましょうか。」

「ウィル君 ナイスアイデア。」

「チリンチリイーン」

「さて皆帰ったな。」

「そうだねゝそれじゃあ何か仕入れといてねゝ」

「ちよつとも懲りてねえだろこのイカレ店長めがああ！！」

「チリンチリイーン」

「すみませーん、この店に強盗が入ったって聞いたんですがー」

「「遅っ！？」」

「そのころ」

「どれどれこれが700万セル!!……の借金？」

「ジャジャジャジャジャジャアアアアン!これで変な星でツッコミ劇場1回目を終了いたします。お手元のお荷物をお忘れなく。」

まあまあ……だったかな。そういえばウィル何故かと魅異が同時

に出たところがあったんですけど。とにかく久々の私視点でした！。

## 16話：変な星でツッコミ劇場1回目！？（後書き）

@ 悟視点 @

「『変な星でツッコミ劇場1回目！？』が完成しましたぁー」

「1回目の割にはギャグ部分が少ないな。」

「悟居たんだ？まあ急に思いついた話だからしょうがないんだ。」

「2回目の話はいつやるんだ？」

「未定だけど気分次第でやるからな」

「あつそう。ところでこの劇場をやるメリットが有るのか？」

「例えばずっこける部分を入れる事ができたり、出番の少ないナレ君視点だったり、お前等の設定を好きなようにいじる事ができたり、その他多数だ。」

「その他が気になるがまあいいか。」

「そうそう。」

「……それじゃあ皆さん次回もお楽しみに！」

「あつ！それは作者の台詞」

## 17話：競技『ペイントガード』発動！

@悟視点@

今は何か体育館に居る。何故かって？それは

「今日は数ヶ月に1回やるかやらないかの月間行事、ペイントガードをおこなおうと思います！！！」

と校長が言ったんだ。これは結構前にやっとなることが有るが何回も死に掛けたぞ！

ルールはシンプルで腕にペイント球の制作型腕時計（1分に1個のペイント球を制作）を付けて相手にペイント球をぶつけたら相手は退場。ぶつけられたら自分が退場のルールだ。

それだけならいいがルール無用で相手を殴り倒してからだろうがヘリで押しつぶしてからだろうが戦車で撃ち倒してからだろうが何でもいい。とにかくペイント球から逃げ切り、そして生き残る超残酷サバイバルゲームだ。しかも1位以外は罰ゲームが有りで生き残るのに苦労するぞ。

参加しなけりゃいいと思う奴が居るだろうが身体能力の多い順で50位までが強制参加させられるのだ。拒否権なんか完全に無しだ。急に始めるから休めないし仮病使ったら後で参加者全員から集団で襲われるぞ。まあ優勝者は20万セルもらえるけどな。範囲は校庭全体でペイント球に1球でも当たったらアウトだ。ちなみにペイント球は当たった敵だけが付く仕組みになっていてまわりに飛び散ったりはしないし自分のペイント球は銃で撃とうがバットで打とうが自由で自分に付く事は無い。（返された場合は別だが）さて長い説明はこれで終わり。

「では参加者を発表します。（省略）以上の人達が参加者です。あと1部の教師や他の高校からの参加者や重要キャラの参加などもありますので楽しみに。これで終わりです。」

やっぱり俺が入ってたよチクショー！とりあえず時計は呼ばれた時

に付けてもらった。

それより校長の最後の言葉が気になる・・・

「まあ良いか。」

スタートまで後5分か。その間に説明で言い忘れた事を言っとくが  
範囲から出たら失格で相手を範囲外に出すのはOK。観客は範囲外  
から見物していてアイスとかを食ってるだろう。

他にも盾などでガードしてもOKだ。チームを組むのも全然OK。

「さてと 校庭に向かうか。」

遅れて罰ゲームってのは流石に嫌だしなあー

「校庭」

「ふう、なんとか間に合ったぜ。」

途中が滅茶苦茶混んでたから少し遅れてしまった！

「それより人の少ない場所に移動しないと。」

人の多い場所では巻き添えで退場を食らう事が有るからな。

「2・1・スタアアアトオオ！！」

テンション高！？

「やっぱり人ごみでは混戦状態か。逃げて正解だったぜ」

「暇なら俺が相手をしてやろう。乱刹！」

「ズバババババ！」

「誰だ！？」

「いやいや、覚えてないのか！？」

どっかであつたか？

「え~~~~と、誰だお前？」

「レジェントofバトルの時に居た聖王だ！（3〜4話参照）」

「ああーそんなの居たなあ。よっ、久しぶり！」

「気づくの遅いつての！前にやられたお礼をしようと思ってきたんだぞ！」

お礼じゃなくて仕返しだろ？

「お礼なんか要らんくれても返す。だからさっさと帰れ。」

「酷っ！・・・鬼羅眼貴乱刹刃きろめきらんせつは！！」

「俺提案のリバースショット！」

俺の最近考えた技で衝撃波などを超強力な風を起こしてそのまま返す技だ。

「返したあああ！？」

「だーからーくれても返すと言っただろ！ペイント球を喰らえ！」

「ベチャッ！」

「久々の出番だったのいいいい・・・」

聖王は返した衝撃波ごと観客達に突っ込んでいったぞ！

「残りの人数が結構減ったなー」

残り20人位か？

「そろそろ俺も敵を潰すべき・・・んっ？」

少し先で烈とクレーが真剣勝負中。・・・チェスで。

「何してるんだコラア！」

「ベチャッ、ベチャッ ドゴオオオオン！！」

ペイント球をぶつけてバスー力で撃ち飛ばした。ああースッキリ。

「残り人数が5人となりました！今からは10秒に1個のペイント球が作られます。」

残り5人！？一体何処だ って居た。2人だけど。隠納さんと魅異だ・・・最悪！

「やっぱり悟が残ったねえ」

「優勝は私達がいただくわよ」 本当は私のみだけど（超ボソツ）  
超！？そこまで小さいのか！？

「まあいいか。優勝は俺だ！」

「だから優勝は私達だって！」

「あっそう。」



「連携技を見せてあげるわ。槍魔術 ニンジンの大雨！」

「私流槍魔術、地獄からのゴボウの棘地獄！」

上下から攻撃か！だが甘いぜ！

「でもそれだと俺の近くに有るお菓子の家まで巻き添え受けるぞ？」

「お菓子の家！？何処何処何処！？」「」

「アホだろ。ペイント球！」

「ベチャッ！ベチャッ！」

「」によろしいい！」「」

訳の分からない悲鳴を上げてるが・・・今はワサビ付きペイント球だぞ。

「残り人数があと2人になりました！」

「俺ともう一人か。」

誰かはもう分かりきってるけどな。

「やっと到着！おおーやつぱり悟が残ったか。」

「やつぱりアキステか。」

うん予想通りだぞ。

「まあ時間が無いので。武器装備！クリエイターロード！」

「アキステが杖装備って珍しい事だな。俺の装」

「特技クラッシュバースト！！」

「ドッゴオオオオオン！！」

・・・・・・反則だろ？

その威力といきなりの不意打ちは反則的だチクショー！

「いやゝ最近本編でいい出番が無かったから目立ってみたかったんだよな」

「テーマ後書きで仕留める！」

さてぶっ飛んでますが着地くらいお手の物だ！

「スタッ！」

「よし！バトル再開」

「決着が付きまして！終了です！」

「・・・俺にはペイント球は付いてないぞ 何で終了！？」

く自分の部屋く

「はあ~~~~~」

「え〜つとまあ負けたけどしょうがないじゃないか、なっ？」

負けた負けた負けた負けた・・・ハア　今は俺が落ち込んでるので魅異とクレーが何とかしようと頑張ってるが・・・アキステに負けるのはなあ〜

「ま、まあ相手は作者だし負けるのもしょうがないだろ！」

「私なら勝てるかもよ」

「・・・」

まあいいや。何故って？後書きで仕留めるから。

17話：競技『ペイントガード』発動！（後書き）

@ナレ君視点@

「おおー悟、本編では残念だった」

「ドゴオオオオオオオン！！！！！！！！」

「これでよし。」

悟によって消された作者の代わりに私が・・・

皆さん次回もお楽しみに！

## 18話：ぶっ壊れた日常「帝国に攻め込もう」by 魅異

「ドゴオオオン！」

魅異か。今日はいつともよりも早く来たようだな。さて起きるか。

「おい魅異壁を破壊するのもいい加減に　ありゃ？」

魅異の部屋側の壁は壊れておらず代わりに入り口に穴が開いている。そのうえ魅異が居らずにロボットが1匹居るし。

ロボットは4本足走行のようでクモと人を組み合わせた感じ。銃を持ってるな。

「おい、何を勝手に人の家を壊してるんだ？」

「・・・・・・・・・・」

ロボットが銃を構えた！？それを

「ドコオオン！」

撃つ・・・・・・・・・・ていない。当然俺が先に撃ちぬいたぜ！

「俺に勝つなんて20年早いぜ。」

20年経つても俺には勝てないだろうけどな。

「ドゴオオオオン！」

また敵か！？

「グッドウムオニイーング悟ー！」

「・・・お前かよ！」

「私なら悪いー？おおつ、それは高性能そうなロボットー！」

「なんか入り口壊して銃を向けてきたから返り討ちにしてやったんだ。」

「ロボットにも恨まれるなんて悲惨ね」

「うるさい！」

つてか高校行く時間だ！準備準備・・・よし完了！約2秒だぜ。

「行くぞ魅異！」

「少し待つてよー！」

「校長室」

んっ？場所がおかしい？ノンノン教室にこのロボットを持っつたら校長に呼ばれたんだ。

持っつたのは魅異なのに・・・

「いや」貴方達がこのロボットに襲われるとは 予想的中ですね。」

「いや・・・的中ならあらかじめ言わないと危ないでしょうが！」

「そうだそうだ」 「バシイン！」 「ぎゃういあ！」

喜んで言っただのでハエ叩きで叩いておいた。

「そのロボットは昨日不老不死ベールの宝石を取っていったのと同じタイプらしいですが詳しい事は分かっておりません。」

「盗まれたんですか宝石！」

「あれは宝石だと言ってますが本当はベールを作るための発生源です。」

「それを盗まれたって事は年とか取るの？」

「一応そのエネルギーの予備分は特殊タンクに保存されてますが無くなるのも時間の問題なんです。」

それにしてもそんな重要な宝物をどうやって盗んだんだろう？

「警備は厳重なんでしょう？どうして盗まれたんですか？」

「それは・・・あまり言いたくないんですが。」

校長にも言いたくない事あったの！？聞きたい！

「大丈夫です誰にも話しませんから。」

「それじゃあ言います。実は」

実は何！？

「警備員がペイントガードを見に行ってる間に盗まれたんです。」

「ズデッ！」

「いやいやいや、駄目でしょうそれじゃあ！」

「まだ続きがありますから聞いてください。ちゃんと入り口は50桁のロックが掛かってたらしいんですが」

まさかそれを破壊したのか！？

「警備員が覚えられるように壁にそれを書いて置いたのを見て空けたらしいですよ。」

「ズデデデッー！！」

警備員が悪いだろ！

「宝石を外す時に使われたロボットがこれらしいですね。」

「何でそんなのが分かるんですか？」

「監視カメラに乗ってました。その腕の部分のマークも一緒に。」

なんか マークが付いてるな。

「それは帝国のマークでロボットは帝国からの刺客です。」

「ふーん。・・・って！何で俺が狙われてるの！？」

「悟君は何か帝国の欲しがるものは持つてませんか？超強力兵器とか。」

「帝国が欲しがるものねえゝそんなもの持つてない いやまてよ・・・

・やっぱ持つてるぞ！」

レジェント of バトルの時に使ったが名前を言わなかった銃・・・

・エクサスターガン！

「これですけど。」

「これはエクサスターガンですな世界に5個しかない伝説の武器として有名です。」

「でも魅異も同じものを改良して威力強化したものを持つてますよ。」

「盗みに来たのはロボットですよ。改造したから別の銃と認識して盗まなかったのでしょうか。」

「なるほど。ところでどうするんですか？予備が有るとはいえ危険な状態だと思いますが。」

「悟君達に任せますので頑張ってくださいね。」

「・・・俺達！？何故ですか？」

「魅異君が行きたがってたし能力的にも貴方達が1番だと思いますよ。」

「・・・まあいいか。不幸は毎日の事だし。」

「あと元々行く予定のRT・DX+君と行って下さいね。悟君には期待してますよ。」

RT・DX+も行くのか。

「魅異は嬉しいだろ・・・って起きろおお!!!!」

「バシイイイイイン!!!」「ぶはっ!」

「帝国に攻め込む事になったから行くぞ。」

「やったあゝ」「ええええええ!グスン」

さつき魅異の中からウィルの驚きの声+グスンっが聞こえた気がするが気のせいか?

「RT・DX+は何処にいるんだ?」

「現代エリアのヒラムス公園で待ってるはずですよ。」

「よし行くか!」

〈公園〉

「この公園であつてるよな。」

「多分ねー」

「おおーやつと来たか。」

おつRT・DX+発見。

「此処に来たつて事は準備OKだな?」

「もちろん」

「それじゃあ悟はこれを使って俺と魅異は歩きで行くぞ」

俺が乗るものつて・・・車?

「いや待てコラ、俺は免許なんて持ってないぞ!」

「星1つがピンチだしこの際しようがないから法律なんか破れ。」

「確かにそうだけどさあ」

「それに特星じゃあ免許制度は無いよ」

「でも車は運転できないし・・・」

「レーシングゲームと同じだ行くぞ。」

「ってかお前らは歩きかよ!?!」

「俺の通常の歩く速度は0.01秒で地球を7週半回れる速度だ。」  
光の速さの何倍だよ!?

「私の通常の歩く速度は今は制限されてるから0.001秒で地球を7週半回った後に太陽までいける程度の速度だよ」

「制限?」

「そうだよ」今はちよつとした術で身体能力を異常に下げてる状態なんだ」だからその術を解けば今の状態より異常に身体能力が上がるんだよ」

魅異は人間じゃない。そんな事は前から思ってたけど此処まで人外とは。

「魅異って本当に人間じゃない気がしてきた……」

「まあ俺達は車の速度に合わせて歩くから悟は車を運転しろよ」

「わ、分かった。」

俺が歩いて追いつけるわけが無い。だから車で行くか。



18話：ぶっ壊れた日常「帝国に攻め込もう」by 魅異（後書き）

@ 魅異視点@

「ついに帝国編突入だよ」

「巻き添えですよ私」

「どうでもいいけど騒ぎすぎだつて。」

「あつ、ゴメンー」

「すみませんでしたー」

「明日か明後日か忘れたけど校外学習だから更新できないと思うぞ。」

「（ええ〜）」

「ちなみに何でウィルは今話してる事が分かるんだ？」

「それは私が読者には分からないようにウィルに話してる内容教えてるからだよ」

「せめて分かるように言えよ。」

「まあいいでしょ。それでは」

「？」

「（皆さん次回もお楽しみに）」

「俺の台詞また取られた!？」

19話：帝国突入！「たまにはギャグ無しにしてくれ！」by悟

@悟視点@

「帝国入り口前」

「流石に警備が硬そうだな。」

門の見張りが2人ほど居る。ロボットじゃなくて人だぞ。

「私に任せて」

って魅異が行くと凄く心配なんだけど！RT・DX+は漫画を黙って読んでる。何でそんなに余裕なんだ？

「んっ！？何だお前は！？」

おっ、魅異がどういいう行動に出るか見とかないと心配だあ

「えっ！？どこどこー？」

「お前だ！怪しい奴だな、まさか高校の者か！？」

「ええー違うよ」

なんとか誤魔化してるな。安心安心。

「私は爆弾魔だから安心してね」

ボオケエエエエエ！！明らかに安心できねえだろ！

「そうか・・・で、爆弾魔が何のようだ？」

「この瞬間回復装置を売りに来たんだけどいらない？」

それは誰がどう見ようと超大型の洗濯機×2じゃないか！そんなのに騙されるわけ

「なにっ！？それなら早速使わせてくれ！」

騙された！？

「それじゃあ一人一つの洗濯機に入ってね」

洗濯機って認めた！？

「分かった。」

馬鹿だろ！洗濯機ってさっき言ったぞ！

「後は洗剤と漂白剤を入れてー・・・」

「何で洗剤と漂白剤を入れるんだ？」

「普通は回復薬とかじゃないのか？」

「ほら見る気づかれた！どんな言い訳をするんだ？」

「それは生卵とワサビの化学反応を利用した式から計算した結果ですよー」

「なるほど」

何故そこで納得する！？そんな化学反応は聴いたことが無いぞ！

「フタを閉めて 鍵を掛けて……スイッチON」

「グベィアアベツブビバ……」

鬼だ！わざわざ鍵を掛けて閉じ込めるなんて大丈夫な訳が

「グボア、た、体力が回復……するぞ。」

「しねえよ！」

もう敵が居ないから立ち上がってツツコんだ。

「早く行こうよ」

「RT・DX+も行くぞ。」

「はいはい。」

コイツ……既にやる気ねえな。

（帝国（城下町））

「さて、どうする？」

「俺は適当に町を見回ってから行きたいんだが。」

「私も」

この二人、今は特性全体がピンチの事を忘れてるんじゃないか？

「まあ俺も何か買いたいから良いか。」

「悟、また後で合流だぞー」

「また後でね」

RT・DX+西に魅異が東に行ったか。俺はあの二人と会わないように北に行くか。

「何処にしようかな？」

何故疑問系なんだ俺。やっぱりあまり疲れない場所にしよう あっ

「武器は要らないかそこ！！今なら大安売りだぜ！！」

「悪いがもう買った後なんでね。」

「やっぱり要らないか。」

・・・なんでアイツがこんな所で兵士相手に商売してるんだ？

まあ此処はとりあえず

「圧縮爆撃連射砲」

「ドゴゴゴオオオオン！！」

「何なんだ一体ーーーー！！！！！！！！？」

「キラァン」

星になったな。烈星も完成したし戻るか。結局欲しいものは無かったし・・・

「全員集合したし出発するか？」

「「おー」」（棒読み

もう少しやる気を出せ！

（帝国組の城の中）

帝国組って何だよおお！！

「貴様等は何者だ！？」

「私はキラキラメッキ大勇者だよ（この二人は私の部下）」

「誰が部下だ！ってかハモってる！？」

「なるほど息がピッタリだ。」

「でしょー」

「だから違うって！コイツが原因だ！って俺のせいじゃ無い！！」

「

「まあ通っていいぞ。」

「マジですか！？」

「それじゃあ遠慮なく通るか。」

「通っていいと言ってるし。」

「魅異、その見張りにトドメ刺しといて。」

「酷っ！」

「分かったー。わたしのオリジナルあくむのげんかくだよ悪夢妄想幻覚術ー！！」

技はヒットしたのに何の変化も無い？

「カステラブレードオオオー！！」

カ、カステラブレード！？

「電柱砂漠の釣り王おおお・・・」

全然意味不明！ってかどんな悪夢を見てるんだ！？

「悟ー先に進むぞー」

「ああー分かった。」

（5分後）

今は一人で通路を歩いてる所だ。何故って？途中3つの分かれ道が

あつたからだぜ！

俺は真ん中を選んだんだが敵がまったく居ないから暇だ。

「おっ、扉を発見！爆弾！」

「ドゴオオン！」

銃を持ったロボットの大群が居ましたあー……。敵が居ないと思つたらここに集まつたのか。

「俺の部屋の扉の仇……。此処で討つー！」

敵はロボットの大群は約700機、こっちは俺一人だ。

「十分だ。1機1撃で仕留めるぜ！硫酸化圧縮水溶液！」  
かがくのちからファースト

「ジュウウウウウ」

今ので20機位は溶けただろ。

「キュン！キュン！キュン！キュン！キュン！キュン！」

一気に撃つてきたか。だが甘いぜ！

「リバースショット！」

「ドオン！ドオン！ドオン！」

打ち返した弾が敵を貫くぜ！リバースショットは大体の遠距離攻撃には有効だ。

「光発圧縮弾！」「キン！」

強すぎる光に前列周辺のロボットは全滅だ！

「ツツコミをしてないからだと思うがあんまり疲れないぜ！」

馬鹿達が居ないとこんなに楽なのか！？

「でもギャグ小説としてこれでいいのか？」

「……。俺がボケ役にならないといけないな！」

「慣れてないけどまあいいか。ところでロボット！」

「！？」

「さつきから敵が考えたり独り言喋つたりしているのに攻撃しないとは何事でしょうか！？」

これについて我が会社は重い罰を与える必要が有る！？」

何故疑問系なんだ俺！？ツツコミは本心でやるが。

「まったくこれだから最近のロボットは 以下省略 だと思ふんだ

！」

いやいや！以下省略って口で言ってるし！つなげたら まったくこれだから最近のロボットは以下省略だと思うんだ！ になってしまうぞ！

「こついう悪い奴には 回転ヘッドスライディング＋ハエ叩き！  
なんて微妙な技なんだよ！

「ベシイン！！バシイン！ドゴオオン！」

最後の効果音おかしいだろ！？ハエ叩きでドゴオオン！ってどんだけ凄いんだよ！？

「くつ！回転ヘッドスライディング＋ハエ叩きを使うとは！  
使ったの自分だろ！自分の事だけどさ！

「俺の通った場所にはモヤシが生えてくるぜ！」

俺にそんな能力は無い って本当に生えてきた！？

「そしてそのモヤシは・・・すぐ腐る！」

本当に腐ってる！

「そして腐ったモヤシは爆発するぜ！」

するなあああああ！！！！

「ドゴオオオオン！！！」

「さて・・・次の階へ行くか。」

ポケ役の状態は強すぎる・・・ってかポケ役のままで次の階行くの！？」

「次の階への階段は未来へのジャンプ台！」

何を言いたいかは分からないが絶対勘違いしてるぞおお！！

19話：帝国突入！「たまにはギャグ無しにしてくれ！」by悟（後書き）

@悟視点@

「おいアキステ、本編の俺の人格が替わってないか！？」

「それは少し違うな。本来お前はツツコミ役だがボケ役のお前が目覚めただけだ。お前は基本がツツコミ役だから完全にボケ役にならず、本心はツツコミ役のままなんだ。だから両方ともいつものお前の性格だ。」

「どうやったらボケを眠らせれる！？」

「時間が経つか俺のノリで決めるぞ。ちなみに後書きでは本編と関係無しにツツコミになったりボケになったりするぞ。多分ボケになるが。」

「ノリかよ！？後書きではできる限り今回みたいにツツコミの方を出してくれ。」

「分かった。・・・それでは皆さん次回もお楽しみに！」



## 20話：VS『GOD of BRAIN』

@ 悟視点@

「次の階へ」JUMP!!」

「ドゴオン」

扉にジャンプして突っ込んだ! ? ってボスキャラみたいな機械が地面に固定されてるんですけど!

「これは植物だぜえ! よし食おう!」

食うなああああ! ! ! よく見る確かにツタみたいなのが付いてるけど明らかに機械だぞ!

「侵入者マジで発見! 排除排除!!」

マジではいらねえだろこのボロボロボットが!!

「ハハハハ。俺を排除なんてイカをどんだけ食おうと無理だ。」

何故にイカ! ?

「私には(この帝国で) 神と呼ばれている奴の脳のデータをコピーしてあるartificial intelligenceを使っている! 神の頭脳をこえられるかな! ?」

artificial intelligenceってどう読むんだ! ?

「その英語を良く使う所が神の頭脳か」

「確かにそうだが・・・戦闘も神と同じ頭脳でおこなえ」

「万年万歳いいいい!!」

「バンザアーイ! ドゴッ!」

「グハア! ? 何だその行動は! ? 意味分らない!」

激しく敵に同感させてもらう! 効果音で万歳って誰か言っただし!

「意味分らないのは俺もだぜ!」

嘘だろ絶対! やったのお前だし!

「technology laser!!」

「ビイン! ビイン! ビイイン!」

直訳で科学技術レーザーらしい！ってか何故英語で言う！？

「白鳩ガード！」

鳩を盾にした！動物虐待容疑だ！！

「lipuid crystal bomb！！」

直訳で液晶爆弾・・・かな？

「割り箸で突き！割り箸で突き！」

何やってんだああああ！？

「ドゴオオオオン！！」

「割り箸で防いだ！？くつ・・・digital」

「メーカーに断られたああああ！！」

「ドゴオオオオオン！！！！！！」

何を断られたんだああああ！？

「メーカーの馬鹿やろ。」

とりあえず敵に突っ込んで貫通して倒したみたいだ。

「さてとゝ眠くなってきたし寝るか。zzz・・・」

いやいやいやいや！

「いくらなんでも早すぎるだろ！！！！って元に戻った！？」

ようやく自分の体を動かす事ができるー！よっしゃ！次の階へ行くか！

@ウィル視点@

って、何で私視点になってるんですか！？

「作者の気分でしょー。あと今回は超特別にウィルの時の体の操作特権を貰ったから私の意志で動くんだよー」

それじゃあ私視点の意味が無いと思いますが・・・

「ダメージはウィルが受けて私が動かせるってだけの話よ」

酷っ！私ってただの盾役ですか！？

「技とかはウィルのしか使えないし私の特殊能力も使えないんだよねー」

・・・戦力ダウン？

「そうだね」

まあ気にしないでおきましょう。それよりそこら辺の残骸ロボットの山は何ですか？

「そういえばウィルは外が見えなかったんだっけ？前話の時に襲ってきたから倒しておいたんだよ。1撃で。」

1撃！？凄すぎませんか？

「これでもかなり弱ってるはずだけどね。」  
とりあえず次の階へ行きましょう。

「次はどんな敵が居るのかな？」

・・・

「・・・どうしたの？」

体が動かないんですが・・・

「ああー私が動かすんだった。それじゃあレッツゴーー！」

「バコオン！」

何故頭突きで開けるのかが分かりません！それより頭が痛いです・・・

「侵入者発見だ！覚悟しな。」

あつボスキャラですかね？2本足で立っていて左手にレーザーソード、右手にレーザー銃を持っています。少しさびてる部分がありますね。

「悟やRT・DX+の戦ったのとは種類が違うようだね。」

何でそんなことを知ってるのかが気になりますが今は敵を倒すのが先決です！

「私も頑張るよー」

「ええーつと、滑空斬り上げ斬ー！かな？」

そういえば私って言葉も喋れない・・・（魅異が操ってるから）

「甘い。そしてチョコレート。グハア!?」

敵はボケ役ですね。でも魅異さんの方がもつと大ボケですけどね

「特技、斬り回り斬り込み散らし寿司だよー！」

「いやいや！私はそんな技使いませんから！」

「ズバッ！ズババババ！」

「グギャギャギャゴハッ！」

「鉄を切り裂けるとは普通の切れ味だねえー」

「ふっ、所詮はその程度。多少強かろうと雑魚には代わりは無いな。まだ脇役とかと戦ってる方が面白いぞこの超脇役娘。」

「超脇役？誰の事かなあ〜？・・・フッフ私は常識を超えてるんだよ、登場回数多いよ、それを何故脇役に言われないといけないのかな？95%+思考の私でも流石に怒るよ。読者様の為に手加減してた事も分らないの？よし、0、000000（長いので途中略）001%位は本気で殺ってあげるよ」

怒って・・・ますよね？何か黒い笑みで普通は人間じゃあ持てないような大槍を片手で持つてるんですけど!?

「ウィルの体でも思考は私。ってことで別次元展開」

効果音無しで変な空間に移動させられました。やっぱり自分の技は使えるようですね。魅異さん凄すぎです・・・

「特技、集中砲槍」

「ドガガガガガガ！！！！」

大槍がたくさん出て敵を貫いた!?

「ぐがあゲフツ！」

「奥義、おっと手が滑って重力球が飛んでった」

「ゴオオオン、メキ！バキ！」

絶対わざとだ！敵は1センチ位の鉄の塊になってるし！

「ありやりや、本当に手が滑っただけなのに」

本当に手が滑ったんだ!?

「まあいいや、次の階で合流できるはずだから行く」  
おおゝ・・・・・・

## 20話：VS『GOD of BRAIN』（後書き）

@ 悟視点 @

「やつと20話更新。早く日常編が書きたいな」

「ところでRT・DX+のバトルシーンが無かったのはどうしてだ？」

「当たりを選んで敵が居なかったと言う設定だ。」

「当たりなんてあったのか!？」

「これは極秘情報だから言つなよ。」

「OK OK。それでは皆さん」

「それでは皆さん次回もお楽しみに!（早口）」

## 21話：これで帝国編終了！って、早っ！

@ 悟視点 @

「「到着！・・・あっ！」」

ウィルと前回出番の無かったRT・DX+も到着したか。

「お前等も到着したのか。それなら次の階に行くぞ！」

「分かってます。」

「それにしても実際は帝国編開始から4話で終わるなんて早いな」  
た、確かにRT・DX+の言ってることは俺も激しく同感だ。それ  
以前に日常編を書きたいのなら帝国突入計画なんか考えるなよ。  
「まあとりあえず次の階にいくか。」

「次の階」

普通に次の階って書いてある！？

「よく来も」「マインド・カット！」  
ふりそくレーザー「私之悪戯」  
ぎんげきむつ「斬撃無逃。」

「ズガアアアーン！！ビーン、ドドドドドド！！ズバババババ  
バ！」

「グハアッ！？」

ウィルと魅異（何故攻撃できるんだ？）とRT・DX+がいきなり  
敵に攻撃したあ！？

「じゃあ俺も 拳銃！」

「ズキューン！ズキューン！ズキューン！」とマシンガン。「ド  
ガガガガガガ！」

「グフェー！」

「甘いよー！グラウンド センサー プロフェッショナル コンビネ  
ーション オリジナル クレーン ストリーム プラウザ ゲート

イン〜!!」

「グサグサグサグサダサグサダサグサグサグサグサダサグサグサグサグサグサ!!」

絶対に単語を適当に組み合わせた技だろ!! ってかグサグサの途中にダサが何個か混じって無いか!?

「グサグサ五月蠅い〜!!!!」 「バキイッ!!!!」

技を使ったのはお前だろ!?

「私だって負けてられません! テラ・ハイペイン・レイド!!」

「ドゴオオオオン!!!!」

「流石はウィル! 凄い・・・って凄すぎるわ!!」

剣で斬ったただけなのに凄くでかいクレーターができた+衝撃で天井が吹き飛んだぞ!

「次は俺だあ! 鉛筆の芯! 鉛筆の芯! すなわち消しゴムは文房具だあ!!!!」

「グサツ! グサツ! ドゴゴゴゴオオオオン!!!!」

全っ然意味が分からねえええええ!!!!!!!! ってか最後の爆発音は何だあ!?

「次は俺の番! 超激辛調味料圧縮砲!!!!」

「グチャツ! グオオオオ!」

なんか近くの機械が急に唸りだしたぞ!? あっ止まった。

「私がこの帝国に君臨するよー!」

「バリイイイイン!! パアアアアアン!!!! おとなしく抵抗しろ!」  
ガラスで叩いてクラッカーを撃った!? そして最後のはなんだよ!?  
? 第一おとなしくでも抵抗したら駄目じゃん!!

「流石は魅異さん。全然行動が分かりません! 私も頑張りますよー。  
醤油バケツをどーん!」

「バシヤアアア!!」

「ってクリーニング代がいくら掛かると思ってるんですか!!」

「ズバア!!!!」

ウィルは一人ボケツツコミ!?! ってかクリーニング代払うの敵だろ



！？

「俺の番来たぜえええ！！！醤油が付いたと気づかれなくする方法はソースまみれになれええええ！！！！」

「ザバアアアン」

ソースの津波が来たあ！！確かに醤油が付いたのは気づかれなくなるけど根本的に駄目だろ！！！！

「ザバツ、バクツ！」

ソースの中から鯨が現れて敵を食ったあ！！？

「ザザザザザザザ！！！！」

こつち来たああああ！！

「身代わり場所交換〜！」

「ヒュン！」

「あれ？此処はどこだ　って鯨！？」

「パクツ」

「ありや、此処は・・・公園か！」

「それじゃあ此処に居た人と場所交換したんだねー」  
なるほどな。・・・ってオイ！

「ここに居た人はどうなったんだ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・帝国で旅行ー」

「鯨の口で・・・・・・・・だろ？」

「・・・さて、宝石も取り戻したし校長に届けよっか〜」

「「「いつの間に！？」「」」

それで俺達は校長に宝石を返して無事に帝国編は終わったぜ。

えっ？鯨に食べられた人物？知らん。だが俺の予想だと・・・

「早く出しやがれえええ！…この鯨め！…料理にするぞ！…！」

どうでもいい奴だな。ほぼ確実に。

## 21話：これで帝国編終了！って、早っ！（後書き）

@ 悟視点 @

「スミマセンでしたあ！」

「謝って始めるのはこれで何回目だよ！？ってか何を誤ってるんだ？」

「本文がかなり短い事と帝国編が4話で終わった事だ！」

「よし謝れ！読者の皆さんに深くお詫びしろ。」

「スミマセンでしたあ！」

「それは置いといて次から日常編に入るんだな？」

「Y E - S！基本的に学校の授業は飛ばされる事が多いけどな。」

「そうか。じゃあ次だ。変な星でツツコミ劇場の2回目は何時やるんだ？」

「日常編のネタが浮かばなかった時だ。」

「セコッ！」

「あと次回予告。次回は料理を作る話にしようと思ってる。」

「・・・既に嫌予感がする。しかも思っているってまだ書き始めないのかよ！？」

「まあ・・・な。」

「毎日それじゃあ読者数が落ちるぞ。多分。」

「それは困る！読者の皆様〜どうかこのアキステを見捨てないでくださ〜い！・・・これで大丈夫だ。」

「その最後の発言が駄目だと思うが。それにまだ評価や感想が来てないだろ。」

「（ギクウ！！！！）た、確かにそうだがまだ小説を最初に書いてから1ヶ月も経ってないし・・・」

「20話超えてたら普通は来るだろ？」

「（ギクギクウ！！！！）タ、確力ニソノ通りカモシレナイガ・・・

・  
」

「その片言はワザとだろ。」

「ばれたか。」

「とりあえず土下座して読者の皆さんに頼んどけ。」

「わかった。……だがお前もだ。」

「何故俺まで!？」

「キャラも一緒に頼んだ方が効果有るだろ。」

「まあそうか……それじゃあ」

「「評価や感想をお待ちしておりますので（できれば）よろしくお願ひします!」」

見事にアキステとハモらせる事ができたぜ。皆さんがこれに答えてくれるかどうか……だな。さて

「「皆さん次回もお楽しみに!」」

追申4/26:26日に投稿したつもりでしたが25日に間違えて投稿してしまいました(2回目)

## 22話：食べ物とは食べれる物の事

「キーン！コオオン！カアアアアアン！！コオオオオオオオオオン！！！！！」

いちいち五月蠅いチャイムだな。まあ授業も終了したし食堂でも行くか

「悟ー！料理作りバトルしようよー！！！！！！！！！！！」

五月蠅っ！？チャイムより五月蠅いつて！

「魅異！チャイムより五月蠅いから少し声の音量を下げろ！」

「むっ失礼な。私がいつ大声出したの？」

「ついさっきだろーがアホ。それで料理作りバトルって？」

「前に新技紹介した会場で作者がクッキング・DE・バトルをおこなうらしいよ」

何だそのネーミングセンスの低さは……

「それに俺も参加しろと？」

「その通りでありますです。」

日本語おかしいだろ！？ますの後にですはいらねーぞ！

「参加は拒否す」

「作者が【お前に拒否権は無い。拒否するようなら主人公の座を魅異に交代するぞ。】って言ってたよー」「まあしょうがないから参加するか。」

我ながら早っ！？嫌々参加するか。

「ちなみに【喜んで参加したら（変な物の）味見役は免除してやる】って言っても」「喜んで参加させていただきます！！！」

マジで自分の事だけど早いなオイ！？ってか聞こえなかったけど途中で変な物のって思ったよなアキステ！なんか堪で分かるんだって  
「集合場所はさっき言った会場で5時だよ」

「準備物は？」

「材料や道具は用意するって言ってたから要らないらしいよ。でも

各自で持つてきたかったら持つてきてもいいんだって。」  
各自で準備も有り・・・か。嫌な予感がするのは気のせいじゃない  
よな。うん。  
だがやるからには勝つぜ！

（会場）

・・・いま凄く気になる事が有る。それは・・・

「何で魅異とウィルが別々で居るんだぁー！！！！！！！！？」

まあ、これはこれで嬉しい事だけども。理由を説明してくれ。

「誰か説明してくれー。責任者出てこーい。」（棒読み

「責任者登場！」

来たかアキステ！

「これはどういう事が説明が欲しそうだな悟。」

「さっさと説明してくれー」（棒読み

「魅異とウィルの両方が参加者なんだが料理作りは同時進行でお  
こなわれる為、別々にしたと言うわけだ。」

「分かりやすい説明をどーも。」

「さて、此処からは平等にナレ君視点だ！」

@ナレ君視点@

何かナレ君の名前が普通になってきてるんですけどー。まあいいか。今回は【】の中の発言が私の発言と言うことで。

【まずは調理組の紹介！悟・魅異・クレー・ウィル・校長が担当します。

そして評価組はジャルス・聖王・行方不明の烈（来れば）・そして私が担当します！

制限時間は30分。何回作り直そうと他人の妨害をしようが盗もうが奪おうが自由です！

ただし同じものを4人分（烈がこなければ3人分）作らなければなりません！

それではレディー……GO！ちなみに実況は私がお送りします！

「ドゴオオン！！」

【おおっと！いきなり魅異選手がクレー選手を吹き飛ばした！再起不能だ！】

「次は……悟覚悟あ！」

「俺かよ！？だが甘い！ハエ叩きスライド！」

「ヒュッ！」

「甘いのは悟だよ。目にミカンの汁！」

「ピチャッ」

「おおっ！目がヤバイ！誰かタオルプリーズ！」

【このバトルの中無事に料理を作ってるのは校長選手とウィル選手と復活したクレー選手だ！残り20分！】

それよりどんな料理を食べる事になるか心配ですね……

「ドゴオオオオン！！！」

【おおっと！此处でウィル選手の所で爆発が起きました！誰かが爆弾を仕掛けたようです！】

「ううゝんどうしよう……そうだ！」

【おっと残り時間が10分になりました！此处でやっとな悟選手と魅異選手が料理作りを再開しました！】



「かなり時間を使ってしまった！しょうがないからサンドイッチにするか！」

【タイムアップまで後30秒！】

「よし、何とか多めに6人分はできたぞ。」

「それじゃあ半分持つてきますねー」

「あっウイル。どうぞご自由に………って駄目だああ！」

【タイムアップ！！！】

く試食タイムく

【え、えっとー、料理の紹介をしますと……悟選手がサンドイッチ、ウイル選手もサンドイッチ、魅異選手もサンドイッチ、クレー選手もサンドイッチ、校長選手もサンドイッチで全員がサンドイッチを作ったようです。量は悟選手3人前、ウイル選手は4人前、魅異選手は10人前、クレー選手は2人前、校長選手は5人前です。それでは評価に行つて見ましよう。ちなみに量が少ない地点でクレー選手は敗北決定です。」

く悟の評価く

【結構美味しいです。具の選び方はまあまあです。】

「確かにねえく僕的にはもうちょっと具が少なくてもいいかなー？」

「うん美味しい。それだけ。」

くウイルの評価く

【悟選手と同じですね。】

「同文。」

「同文。」

く魅異の評価く

【食べれません！スライムは食材ではありません！】

「同じくこれは食べれないな」

「同じく。」

くクレーの評価く

【既に失格になってます。】

「……………」

「……………」

く校長の評価く

【……………スミマセンが……………か……………なり不味い……………です。

水を貰いますよ】（食べた

「タマネギが生で入ってる時点で食べれないと思うよ」（食べてない

「うう……………気分悪い……………」（食べた

「ゴクゴクゴクゴク」

【ふう、さてく今回の優勝者は……………悟選手とウィル選手の引き分  
k】

「ドゴオオオンー!!」

「やっと出られたあああ!!!!」

【おおっと！食材の中から烈が復活したあ！】

「鯨に食われてる間は地獄だったぜ!!!!……………で、何してるんだ  
?」

【実は（事情説明） と言っわけなんです。】

「事情説明と言っわけ？」

【「……とりあえずどの料理が1番美味しいか審査してください！あと悟選手は量が足りないので自動的に敗北となります！」  
「マジデエエエエ！！??？」」

その後優勝は当然ウィルだった事は言うまでもありませんよね。

「烈ー！！お前が出てこなかったら俺とウィルの二人で優勝だったぞー！！」

「分かったから俺を動物園のライオン小屋に入れるなあああ！！！！！！！！！！」

「ガブツ！」

「ギアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

## 22話：食べ物とは食べれる物の事（後書き）

@ 悟視点 @

「優勝できなかった・・・優勝できなかった・・・」

「いきなり落ち込んでるなオイ。」

「優勝できなかった・・・優勝できなかった・・・」

「これは明日にならないと復活しないな。」

「優勝できなかった・・・優勝できなかった・・・」

「感想など待ってまーす。それじゃあ皆さん次回もお楽しみに！」

## 23話：地球への特殊ゲート完成！

@悟視点@

「今日は皆さんに非常おゝに重大な話題があるんですが聞きたいですか！？」

「おおーーーーー！」

何だ朝からこのテンションの高さは・・・校長の話題とやらが元凶だな。

だが・・・凄く話題が気になるぞ校長！あんたが重大って言う言葉を使うのは滅多に無いからウソオ！？位の反応がある話題だろ！

「地球へ行く為のゲートがこの高校の地下10階にできました。」  
へえゝ地球に行く為のゲートねえ。

「・・・ウソオオオオオオオ！！！！？？？？」

おっ、クラス全体でハモった　じゃなくてー、そんなの作ってたの！？

「あつ、でも完成したとはいえまだ使用許可が出ませんから勝手に使わないようにしてくださいね。使ったら波動刃で斬られるらしいですから。」

それはアンタが斬るからだろお！？

「あといつも通り悟君と魅異君は授業終了後に校長室に来てくださいね。」

「おおっ！特別許可でももらえるのかな？」

「多分な。」

魅異の言う通り許可をくれるとかになりそうだな。

「校長室」

「烈君を除く全員が集まったようですし旅行へ行きましょう！こちらへ来てください。」

「地下10階」

やっぱり予想通りだ。あと最初に校長室に最初に呼んだのは俺達だけずるいとか言われない様へのカモフラージュだろ。ちなみに今居るメンバーは俺、魅異<sup>ウィル</sup>、ジャルス、そして校長だ。

「あと地球では此処とは違って怪我とかもするので注意してくださいね。それと高性能はんやく飴の効果は地球でも続いていますから何語でもOKですよ。」

高性能なだけあって便利だね。販売したら絶対売れるのにもったいない。

「それから魅異君にお願いが有るのですが・・・」

「何？」

「烈君を迎えにいつて欲しいんですがいいですか？」

「全然オケエ。」

「機械の使い方は行きたい場所を選択して押すだけです。世界中何処でもいけますよ。」

何処へ行きますか？『アイウエオ順』『面積の広い順』『ランダム』

「それじゃあ良い旅をしてくださいねー。あと不老効果は付いたままです。年を取りませんから安心してください。場所は・・・アマゾンにしましょうか。ではグッバイ！」

「ヒュン！」

どうせなら不死の効果も付けてくれよー。

「それじゃー僕も行くねー。場所はピラミッドや自由の女神の有るフランスでー」

「ヒュン！」

ピラミッドが有るのはエジプトで自由の女神はアメリカだ！！

「じゃあ先行くから。場所は……やつぱり日本だろ。」

「ヒュン！」

地球（日本）

「よし到着．．．さて、家に向かうか。」

えっ？家なんか有るのかって？失礼な有るのは当然だ。バイト時代に住んでた所は土地ごと俺の物だぞ？何県何市に有るかって？秘密だ。

「しばらくの間のんびりするか。」

[-----] מע

「ん？」

「ドゴオツ!!」

一体誰だ　　って烈じゃないか！

「何で空から降ってきたんだよ!？」

「魅異に特星から投げられたんだ……宇宙中は重力無視で。」

あの馬鹿また物理学者を困らせる行動取りやがって。第一宇宙の重力を出来ても（普通は無理だが）落下地点に人がいる事を考えやがれ。

ってかピンポイントで俺にヒットさせたって事は明らかに狙って投げたに決まっている。

まあ当たって少ししか怪我してない俺もどうかと思うがな。

「そんで魅異は？」

「すぐ追いつて言うてたぜ！」



「自由なアメリカンー！！」「ズドオオオオオオンー！！！！！」  
「ぎゃああああー！！！」

「うるせえええー！！・・・ありや？」

烈がない　　つか目の前に有る地割れ見たいなのから少し出ている自由の女神の像は何だあー！！？？

「無事到着」

「無事じゃねええええー！！！！！」

「バシイイイン！！！」

ハエ叩き全力ＨＩＴだぜ！！

「ギャー。いつもより威力高くない？」

「ギャーを棒読みで言うな。そりゃー不死のベールは出てないからな。まあ不老のベールは（作者の特権により）永続効果らしいがな。」

「なるほどねえ。ところで何処行く？」

「最初に向かうのは当然東京！」

「その理由はー！？」

「特に無し。」

「ええー」

んなこと言ったって理由が無いし。

「それ以前に俺はセルしか持ってないんですけどー」

「そうなの？それじゃあ少し待っててね」

　　１０分後

「はいお金」

「多っ！？何処で手に入れたんだー！！？？」

軽く２００万は有るぞ・・・

「ヤクザ達が偶然歩いてたから人間的に駄目だな」と思って人の道を歩まないと後々いろいろな意味で苦労するって教えてあげただけだよーこのお金は授業料。」

人の道を歩まないといけないのはお前だろ！？

「それじゃあ東京にレッツGO」

それはいいとして自由の女神はどうするんだ！？

（東京）

「ズキーン！ズキーン！」

「危ねえ！ってか警察が一般市民に向かって銃を撃つなああああ！  
！！！！！」

今逃げてます！全力で逃げてます！何故かと言うとあの馬鹿が警察署に乗り込んで牢屋を破壊してまた授業料を取っていたら警察官が集まってさらにそいつ等を脅して警察のお偉いさん呼び捨てで呼び出し急に東京タワーを（「当たらないように？」投げつけて最終的には一緒に居た（全力で止めようとしてた）俺に土産とか言っ脅した警察官の金を渡すから俺が犯人扱いされてるんだコンチクシヨーーーー！！！！

警察は警察で銃を撃って来るし確信犯の魅異はのんきに買い物に行ってるしこんな時に限って希望で有るウィルは出てこないし最悪だあーーーー！！！！

「誰か俺に安らかな時間をくださああああい！！！！！！！」

「ズキーン！ズキーン！」

だから危ないっての！俺の周りの人が腰抜かしてるだろ！！

「我々の給料返せーーーー！！！」

「給料とそこら辺にいる人の命とどっちを優先してるんだああああ  
！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・給料！」

「考える時間長っ！しかも給料かよ！？」

「五月蠅い！くたばれえ！」

マジで殺られる！此処はしょうがないが・・・

「空気圧圧縮砲!!」

「ドゴオオオオン!!」

「グベフォツ!!」

「そしてダ―ッシュ!! 自業自得だ!」

さて・・そろそろ帰るか。帰る時は専用ゲートがどこかに有るはず有った。

都合良く見つかるな。アキステの手抜きだな。

「ブウウウウン!!」

蜂きたあ!？脱出!

「ヒュン!」

↓地下10階↓

「よし到着」

「ブウウウウウウウウウン!!!!」

しつけええええ!!!!!!

「逃げ切つてやる――!!!!」

↓5分後↓

「もう作者の悪口は言いません・・・・」

「ブウウウ・・・・」

何とか逃げ切った。途中で捕まりかけたから降参して謝ったら蜂が逃げてった。

アキステのヤロー後書きで殺s

「ブウウウン!」

殺さないに決まってるだろハハハハハ・・・・

「ブウウ・・・・」

考えまで読めるとは予想外だ。大変すぎるって。他の皆はもう帰ったみたいだな。

「よし、虫除けスプレーと殺虫剤を買って帰るか。」

「そろそろ」

「ぎゃあああああ！！！！何で俺が蜂に刺されるんだよおお！！！！しかも自由の女神が邪魔で動けねえし！！誰か助けてくれええええええええ！！！！！！」

## 23話：地球への特殊ゲート完成！（後書き）

@ 悟視点 @

「おいアキステ　って居ない！」  
んっ？置き手紙があるな。

「どれどれ」今日は悟に殺される可能性が有るから逃げさせてもらった。とりあえず次回予告！詳しいキャラ設定の紹介などをやっついこうと思いまーす。皆さん次回もお楽しみに！」と汚い字で書いてあるな。」

アキステめ逃げやがったな！まあいまさら追いかけても無駄だろうからせめて……

「皆さん次回もお楽しみに！」

## 24話：こういう時こそナレ君の出番だ！

@ナレ君視点@

どうも久しぶりの登場です！！今回はこの私ナレ君と、

「作者のアキステで詳しいキャラ紹介をやっつけていこうと思いまーす」  
(棒読み)

それでーは！早速開始しましょう！

悟

性別：男

フルネームで『雷之 悟』。主人公らしくない主人公。高2で髪は黒でウィルに好意を抱いているが作者によって仲は発展していない。基本的に年上に対しては敬語を使うが相手がボケてる時はタメ口で喋る。

得意武器は銃だが最近はハ工叩きも使えるようになった(たまにハンマー)。ちなみにもうすぐ銃剣を使えるようにする予定らしい。

趣味はたまーに釣りをするが最近忙しくて出来ないようす。

完全ツッコミ役だがボケ要素は一応有るらしくたまにボケ役になる。

好きな食べ物は高校で売っている弁当で、嫌いな食べ物は食べれそ

うに無いものや異常に不味いものは食べれない。

代表的な技は『空気圧圧縮砲』と『水圧圧縮砲』が基本的。ポケ役にはワサビ圧縮砲やハエ叩きで叩いたりもする。

愛用品はいろいろ有るが特に重要なのはエクサスターガンとお気に入り釣竿らしく取られると全力で取り返しに行く。

嫌いなものは特に無い……。訳ではなくポケ役（特に魅異）を嫌っている。

特殊能力は『魔法弾制作』

本人の言葉：「主人公は俺だが扱いがあんまり良くないよなー」

「これでも扱いは良くしてるつもりだがなあ。」

それじゃあウィルとの関係はどうするんですか？

「さあ？とりあえずは考えてない。」

（やっぱり扱い低いですね）

「何か言ったか？または思ったか？」

別に何も……

「そうか。ちなみに悟の使える武器を増やす予定だ。」  
「確か銃剣……でしたか？」

「YES！ちなみにウィルも使えるという予定だ。」

（少しだけ悟の扱いが良くなったみたいですね。）

「マジで何か思わなかったか？」

き、気のせいです。さゝ次の紹介です！

魅異

性別：女

フルネームで『神離 魅異』。ヒロインの可能性が有る。高2で髪は茶髪で常識の言葉は通じないと考えても良い。主人公並に登場回数が多い。

95%は天然ボケ&+思考。1%は仲間への思いやり。4%はその他。

選択肢を選ぶ運は - %で絶対にこれと思ったものはハズレである。

武器などはレア物を沢山持っておりそれを暇な時に改造するのが得意分野。（改造した武器はかなり強くなっている。）

今でも異常な強さが有るがこれでもちよつとした術で身体能力が異常に下げられている状態らしい。（でも身体能力を異常に下げたのは確実に正しい行動だと思いますよ。）

得意武器は槍だが勇者流とかいう本来無い技を勝手に作り上げたが格闘技を基本としているため手軽で持ち運び便利（それ以前に何も持ち運ぶ必要は無い）だと本人は喜んでいる。（あと投げるような武器）



趣味は口調を変えての会話・ツッコミ役（主に悟）を疲れさせる事・変わった登場をする事・株価を異常に下げる事・長いレシートを集める事・スライム風呂に入る・ペンギンに乗って雪原を滑る（その他省略） など意味不明な趣味ばかりである。

ポケ役以外に何が有る！？と言える位のポケ役である。

好きな食べ物はスライムを使った物。（スライム馬鹿？）

代表的な技は決まっていなかったが今作者が考えて『ミネラルレーザー』と『勇者拳<sup>ゆうしゃけん</sup>』らしい。両方とも読み方が紛らわしい技で『ミネラルレーザー』はレーザーを撃つわけではなくレーザーのように槍で貫く技で、『勇者拳』は『けん』が剣ではなく拳だから素手を使い攻撃する技で相手目掛けて光速以上速さの鉄拳を喰らわす技である。

愛用品は収納式の槍とスライム加工機である。

嫌いなものは特に無い。

特殊能力は『予測不能行動80%』

本人の言葉：「スライム風呂は入らなきゃ損だよ」

「スライム風呂ねえ。俺なら絶対拒否だな。」

私ですよ。ところで代表技を今決めたって本当ですか？

「それは本当だぞ。執筆中に思いついた。」

そうですか。そういえば魅異がスライム風呂に入るところって書くんですか？

「まあ変態ナレ君の質問は置いといて。」

変態ナレ君！？そういうつもりはありませんって！！

「はいはい。次行つて。」

ううつ、読者の皆さんの視線が冷たい……

ジャルス

性別：男

フルネームでも『ジャルス』のまま。ヌスマー族という種族。最近出番が減ってきたが安全な立場のままでとばかりを受けることはない。高2で髪の色は薄い黒。

基本的にマイペースで尾語にーかゝがほとんどの確立で付く。小説では魅異と尾語が被ってるように見えるが実際は被ってない。

得意武器は杖だが技を使う際は素手でも可能。

趣味は特になし。

ボケかツツコミかは替わるらしいけど普通に間違いを教える事が多く基本はツツコミだと思われる。

好きな食べ物は肉・魚・野菜などのおかずだが主食も普通に食べれ

るらしい。

代表的な技はランダム（技バージョン）を使う。

愛用品はヌスマー族の外出許可書である。

嫌いなものは物ではないがとばっちりが嫌いらしい。

特殊能力は『ランダム（特殊能力バージョン）』を使う。

本人の言葉：「普通は安全が第一で、自分のペースが第二だね」

「一番安全だが出番は少ないってのが特徴」

良い様な悪い様な位置ですね。

「メリットがあればデメリットも当然あるって事さ。」

それより技までランダムとは……

「ランダムといっても実際に見たことの有る技しか使えないがな。」

それじゃあ11話で皆が使ってた技を……

「使えるって事だな。」

いろいろな意味で凄っ！！

「そろそろ次の紹介に行け。」

烈

性別：男

フルネームでも烈のまま。完璧なやられ役である。高2で髪は赤い色。日常編ではオチに使われる事が多い。出番は多少多め。

最近はこのける事はあまりないがその分とばっちりを受けることが多い。行方不明になる（忘れられる）事がある。

得意武器は剣と刀を使うが有名な物を使う時もある。

趣味はレア武器集めで魅異とバトルしてるが魅異の方が圧倒的にレア武器が多く落ち込んでる事が有る。

馬鹿だがポケ役ではない。やられるときに 何でこんな事になってるんだああ！！！！ と叫ぶ事が有るがツッコミ役でもない。やられ役である。

好きな食べ物は肉類で特に焼肉が大好きらしい。

代表的な技は集斬が付く属性別攻撃である。

愛用品は集めているレア武器である。

嫌いなものはジャルスと同じくとばっちりらしい。

特殊能力は『水上歩行』を使う。

本人の言葉は省略 「させるかああああ！！！！」

「1番危険だけど出番は多め。まあジャルスと逆だな。」

私的には安全な方がいいですけどね。

「そつえば烈はまだ蜂に刺されてるはずだが。」

……蜂の種類は？

「スズメバチ。」

場所は？

「地球だから毒で死に掛けてるだろうな。」

酷っ！

「ヤラレ役ツテ恐ロシイネ。」

何故片言！？まあいいや次。

ウィル

性別：女

フルネームで『ウィル』セトリイス。ヒロインの可能性が有る。

高2の新生で髪の色は薄水色で背が低い。礼儀は良く普段から敬語で話してる。

勇者になった人に取り付くのだが幽霊などではなく勇者の記憶・思考・強さを持つ元勇者の意思らしい。本来ならその取り付いた人の姿のままチェンジするのだが魅異の場合は特別で本来の姿に変身で

きる。

得意武器は剣類（短剣・剣・長剣・その他多数）を全て扱える。

趣味は（魅異のアドバイスで）枕集めをしていて枕投げ大会を計画中らしい。

ツツコミ役だが魅異のマネをしてボケる事も有る。

好きな食べ物はケーキとシュークリームが特に好物らしい。（魅異の身体効果で体重は増えないが一応カロリーを考えてる。）

代表的な技は特に無い。

愛用品はスライム感触の抱き枕である。

嫌いなものはいろいろ有る。

特殊能力は『勇者に取り付く』である。

本人の言葉：「魅異さんオススメのスライム感覚の抱き枕って柔らかいし少し冷たいから夏に使うと効果的ですよ。あとお肌のつやが良くなるらしいです」

「スライム感染症でも流行ってるのか？」

さあ？魅異さんの影響でしょうね。ほぼ確実に。

「枕投げ大会・・・何話目に書こうかな。」

決めてないんですか！？

「決めてない。まあそのうち書くがな。」

そのうちっていつですか？

「次回。」

早っ！？そのうちレベルじゃないでしょう！

「まあね。」

それじゃあ次行きます。

正安

性別：男

フルネーム『杉野 正安』。悟の学校の校長で通称も校長である。本名は作者にまで忘れられるほど話では出てこない。黒髪で40歳で普段はコートかジャージでいる。

高校に居る普通の問題児よりも大きな問題を起こす事も多いが大して気にしてない。生徒が問題を起こしても許してくれる。

得意武器は波動である。

趣味は魅異と大ボケをすることと意味不明な行動である。

役はボケ役で高校全体に地雷を仕掛ける事も有る。

好きな食べ物はスライムフルーツMIXである。

代表的な技は波動波らしい。

愛用品は普段着のジャージとコート（両方とも青・赤・緑・黒・白）の5色セットである。

嫌いなものは特に無い。

特殊能力は『波動を自由に使える』である。

本人の言葉：「ナレ君・・・ナイス解説ですよ。」

またスライム感染者ですか？

「いや、この星ではスライムは食材だぞ。」

マジですか！？

「マジマジ。色によって味が違うけどデザート用は緑半透明の奴だな。甘みが有るらしい。」

他の種類は？

「黒半透明は苦くて白半透明は味無しで黄半透明はすっぱくて青半透明は炭酸ソーダ味だ。食材として多く使われるのは白半透明だ。その他にも有るらしいが俺は知らないな。」

そうですか。ところで次はもう無いとメモ帳に書いて有るんですが「さっきまで読んで言ってたのか！？・・・まあ確かに次は無いから此処で終了だ。」

そうですか。それでは終了！

「ちなみに紹介したのはレギュラーキャラだからな。」



## 24話：こういつ時こそナレ君の出番だ！（後書き）

@ 悟視点 @

「何とか詳しいレギュラーキャラ紹介が終わった」

「ドゴオン！」「グギャアー!!」

「前回逃げられたからな。今回は見事にヒットしたぜ。」

「いてて・・・いきなり何するんだ!!」

「前回お前が逃げたからだろ。もう1回食らうか？」

「もう1回撃つたら次回にウィルが開催する枕投げ大会に参加できなくするぞ。」

ひ、卑怯な・・・

「まあそれは困るから今回の攻撃は無しにしてくか。」

「銃剣を早く使えるようになったとけよ」

「めんどくさい設定を作りやがって。」

「主人公なら接近戦も出来ない駄目だろ？」

うっ、確かにそうだが。

「でも基本的な使い方が難しいし・・・」

「ウィルも銃剣は使えるから習いに行けば？」

「よし今度行くぜ!!」（即答）

「それでは皆さん次回もお楽しみにいゝ!!」

## 25話：枕なら何でも良しの枕投げ大会開催！（前編）

@ウィル視点@

あつ、久々の私視点ですね。今日は少し前から計画していた枕投げ大会をおこなおうと思います。

大会って言っちゃってますが個人でおこなうので大きな大会じゃないですよ。

でも魅異さんが大型旅館を1つ貸してくれたので会場は大きいですね

「ホテルを貸してあげても良かったんだけど広すぎるよね」

「魅異さんの貸してくれた旅館もかなり広いと思いますけど。」

「HOTELとは違って階段の上る必要が無いから良いと思うよ？」

「確かにそれは同意しますよ。別の勇者に取り付いていた時に筋肉痛になりましたからね。」

えっ？会話の相手は誰か？魅異さんですけど。設定無視とは違いますよ！

前回の時に悟さんが帰った後に魅異さんが別々で参加するように脅しじゃなくて頼みにいったんです。何とかスターガンの3倍改造

を持って。

それで条件付でOKしてくれました。その条件ですか？確かステージを貸すこと・魅異さんは強すぎるから弱体化すること・後書きで作者をバスター力で撃つ変な星でツッコミ生活のキャラクター人にツッコミを沢山させる事・の3つでした。最後のは私情ですよね・・・

弱体化は作者さんが何かの術でやってくれました。

「ところで魅異さんって今どの位弱体化したんですか？」

「さあ？それじゃあ1秒間歩いてみるよ」

「って居ない!？」

「ウィル〜此处だよ〜!」

早っ!？見えませんでしたよ!本当に消えたように見えましたから!

「これでも結構遅くなった方だよ」

「いつの間に戻ったんですか!？」

「さっきだよ。あと歩いて音速の早さみたいだね」

「・・・それって弱体化されたんですか？」

「うん。歩いて光速+ の速度で移動出来なくなってるからね」

「確かもっと昔から弱体化の術が掛けられてたんでしたっけ？」

「その時の事はあまり覚えてないんだけどこの星に来た時にやった診断の結果でそのことが分かったんだよ」

つまり2つの弱体化の術が掛かっているらしいですよ。普通なら動けないはずなのにどれだけ凄いんですか・・・

「そんなことより早く旅館に行こうよ」

「そうですね。皆さんはもう旅館に着いてるはずですし行きましょう。」

「旅館（名前は『ダークペンダント』らしい）」

@ 悟視点 @

本当に旅館名かコレ！？

あつ俺視点か。今は旅館の1つの部屋に居るんだが今頃旅館の名前に気がついたんだ。

このネーミングは何なんだ？この言葉しか思いつかないぞ。

旅館名にペンダントってどーすりやこんなアイデアが出るんだ？  
経営者の顔を見たい。

ちなみに悟はまだ経営者が魅異だと言う事を知らない。

んっ？さつきナレ君の声が聞こえたような・・・気のせいって事にしておくか。

・・・・・・・・・・・・・・・・

暇だ。暇すぎる！別に忙しい事に比べたらマシだぞ。うん。でも暇すぎるのもな

「サイクリイイイング~~~~！！！」「ドガアアアアアン！  
！」「ぐおあ！！！」

いてて・・・ほらみる忙しいより暇な方がマシだろ。

「・・・って何してるんだああ！！？」

ウィルと魅異が二人で馬に乗って目の前に居た・・・何故に馬？

「何って・・・サイクリングですよ」

楽しそうにウィルが言うが・・・サイクリングは自転車で行るものだぞ！

「言つとくが馬に乗るのは乗馬だからな・・・」

「ええっ！？そうだったんですか！やっぱり魅異さんの間違いじゃないですか」

「ありゃゝ偶然間違えちゃったねー」

絶対ウソだ！！だって目を逸らしてるんだぞ！！！！

「まあ巻き添えは無かったみたいだし良しって事でいいや」

「何処をどう見たら巻き添えがないんだああ！！」

（20分後（広間））

あのあと皆を広間に来るように言うように頼まれたんだが・・・広すぎたる此処！

廊下だけでも200mはあったぞ！しかも途中が迷路風になって銃弾が降り注いだり落とし穴があったり壁が倒れてきたり自動販売機で150セル払ってジュースを貰おうと思ったら自動販売機の姿をしたモンスターだったりモグラの大群に襲われたり大量の小麦粉がオッサンの形になって説教してきたり大変だったぞ！

・・・準備だけで前編が終わりそうだ。

「それじゃあ夜まで時間が有るから校長と私がコンビネーションボケをやるね」

でた！2話目でやった魅異と校長の意味不明なボケ！ちなみに参加者は前回紹介されたレギュラーキャラだ。

「うつ・・・苦しい！1等兵・・・私はもう駄目だ・・・奴を・・・覇者を倒してくれ！」

「副隊長おおー！！！！」

校長が副隊長で魅異が1等兵で主人公のようだな。

「くっ・・・大丈夫・・・だ。奴が死ぬまで私も・・・死なん・・・」

「ふ、副隊長・・・僕の昇格のために死んでください。」

「ズキーン！ズキーン！」

「ぐああ！」

「ハハハハハ！」

鬼だぁー！！自分の昇格のために副隊長を笑いながら殺したぁー！  
キャラ設定表によると魅異が主人公の青年役で校長がその他いろいろらしい。

「さて、王様に報告に行くか。」

そして・・・

ナレ君の声が聞こえたぞ！ってかキャラ設定表にいつの間にか追加されてる！？

「王様ー！副隊長が亡くなりましたよー」

雰囲気軽っ！？

「おおっ！そうかそうか。これで我も遊び放題じゃー！」

王様もひでえ！ってか校長1人で何人の役をやるんだ？

「ところで王様、副隊長を殺したら国の半分をくれるといいましたよね？」

この2人グルだぁー！！

「・・・あの世で探すが良い！皆の者出会え出会え！！」

しかし誰も来ませんでした。

「無駄ですよ。この程度の事は予想済みですから。この城の兵は自給50セルでしたよね？自給100セルで僕の見方にしたので誰も来ませんよ。」

「何！？き、貴様・・・」

「これで僕は王に昇格する。ううゝんゴージャス。」

「・・・・・・」（こっさり逃げる）

「そして何時かは世界制覇！ハハハハ！・・・って王は何処に逃げ

た!？」

「あれ?逃がしたんじゃないんですか？」

「んな訳有るか!チツ、妄想中に逃げるとは。」

主人公アホだ!そして校長3役目!

「よし、3大国の王達だけを集めてくれ。」

「はい!?どうやってですか？」

「適当にパーティーやるとか言っとけばなんとかなるだろう。」

「ハイ!」

次の日

「……ヘルプミー!」

何故英語!??ってか3人に聞こえるように言える校長もスゲー

主人公は王様を集めて人質に取ったのでした。

酷っ!

「良く聞いてくれ。この王達の命が欲しければ全ての国を僕によこせ。」

「構わん!集中砲火だ!」

「ドゴオオオオン!ドゴゴゴオオオオン!ドゴゴゴオオオオン!」

3大国による集中砲火で主人公は自分の国と一緒に滅びま

「僕を殺そうなんて甘あい!」

滅びませんでした。

凄すぎるだろ!

「もうこんな世界破壊してやる!」

王様は元々馬鹿な頭がさらにショートしてしまいました。」

「うるさい!」

「バキューン!」

ぎゃあああああ!」

ナレ君撃たれた!

ナレ君1はやられました。ちなみに私はナレ君2です。

2なんか居たんだ!?



「全てを破壊してやるううう!!」

そして主人公は物理学を無視するような力を手に入れました。手始めに3大王国を1時間で潰しました。

常識ハズレだなオイ!?

「おつ、これはネタになるぞ。」

しかしそれをネタにしようと考えた作者は術を使って主人公の力を封じてどーせだから遊び程度に赤ちゃんにして性別を変えて追加で記憶を消して適当な時代に送り飛ばしました。

作者出た!?!キャラ設定表に追加されてるし!

そして別時代・・・子供の居ない夫と妻が普通に暮らしていました。

時代が変わった!?!?

しかし昔話で出てくるおじいさんとおばあさんのように子供が生まれませんでした。

何故昔話で例える!?!?

しかしその親子の目の前に昔話のように子供が降ってきました。」

昔話では子供は降らないから!!

しかもその子供は完全に無傷だったので2人は最強の盾として子供を育て始めました。

オイオイオイオイ!!育てる理由が駄目だろ!

最初の内は普通に育ててましたがそのうち子供は道具として扱われるようになりました。

ひでえ。

ある主人公が小1の日父親がゴルフのボールとして子供をショットした時見事に竜巻が来て子供を吹き飛ばしていきました。

父親最悪だろ!あと偶然もいいところだ竜巻!

その子供は日本のちよつとしたところに落下して不幸な同い年の少年に直撃しました。

少年、可哀想に・・・

その少年の近くに居た先生が子供を職員室に連れて行きましたが

空から降ってきたと言っても信じてもらえず先生を辞めさせられました。

先生、可哀想に・・・

そしてその同い年の子供にはぶつかつた少年が苗字と名前を決めました。苗字は神離れしているから神離そして名前は魅異とつけました。（魅は適当で異は異常だから）そして少年の名前は雷之 悟と言う名前です。そのあと悟は散々やられつつも魅異と変な星の高校に転校して少しした状態が今の物語となっているのでした。

その物語の主人公のキャラ設定って魅異だったの！？

「ところでその話って本当なの？」

ジャルス、相変わらず重要な質問をするなあ

「途中からナレ君2の役もやってた作者に聞いてみたら？」

ナレ君2ってアキステがやってたの！？いつ気づいたんだ魅異・・・

「悟と魅異が出会う所からは真実だぜ」

「それって魅異さんの名前を悟さんが付けたって言うのも本当ですか？」

「小説の設定上はそうなるな」

・・・覚えてないけど最悪の気分。

何で俺が魅異に名前なんて付けたんだ！？ってか何で会ったんだ！？

「・・・あつ、そういえば竜巻って何で起こったんだ？」

「・・・俺が起こした。それじゃーグッバイ。」

「ヒュン！」

に、逃げられたああ！！うう・・・魅異と会ったのは作者の作業か・・・

「こうなったら枕投げ大会で全て忘れてやるー！！！！」

「始まるまであと30分ありますからそれまでに枕の用意をしておいた方が良くと思いますよ。」

「えっ？俺持ってきてないけど。」

「この枕シーツ？を作る機械を此処に置いておきますので枕シー

ツの中に好きなものを詰め込んでください。」

「それじゃあ少しシーツを貰うぞ。」

さて、やるからには絶対優勝してやる！

25話：枕なら何でも良しの枕投げ大会開催！（前編）（後書き）

@ 悟視点 @

「25話を更新。我ながらナイスなペースだ。」

「ナイスナイスなペースの割には昨日は更新しなかったんだな。」

「定休日。」

「定休日でも出来る限り更新しようって気はないのか!？」

「あつたけど無理だった。それだけの事だ!」

「はいはい。ところで魅異の名前を俺が付けたって本当か!？」

「もう決定したからな。本当の事だ。」

「うう・・・シヨックだ。非常にシヨックだ!」

「まあ魅異の強すぎるのは何故かってのはまだ秘密って事で。」

「そうか。・・・皆s」

「それでは皆さん次回もお楽しみに!」

## 26話：枕なら何でも良しの枕投げ大会開催！（後編）

@悟視点@

「アー、アー、マイクのテスト中ー！・・・よし！それじゃあこの説明が終わったら枕投げを開始するよールールは簡単、眠ったらまずは旅館内から出たら負けだよ。旅館内には催眠薬（効果：小）が撒かれてるから少しは眠りやすいと思うよ。枕シートの中には何入れてもOKで優勝したら現代エリア特等地の3階建ての家と土地が貰えるよー」

マジで！？いまはどんどん値が上がってる特等地っていったら1坪900万セルの場所じゃないか！絶対に優勝しないと！

「それじゃースタートだよー！」

俺のいまの場所は調理場の調理テーブルの下に居るが 魅異はさつき放送してたから隣の放送ルームだろうな。

こっちに来ませんように・・・我を救いたまえ、王様、神様、作者様。

「此処に誰か居るかな？」

俺の願い通じずに魅異が来たあ！！作者に頼んだ俺が間違えた！

「私のツツコミ探知機が反応してるねーって事はウィルが悟が居るはずなんだけどー」

ツツコミ探知機！？

「あつ、反応が一瞬強くなったー。どっちかがツツコミをしたってことだ」

ヤバイヤバイ・・・ツツコまない様にしないとツツコまない様に・・・眠くなるな。

「賞味期限切れのメロンゼリー、私は貴方を見捨てない・・・絶対に。」

賞味期限切れ！？捨てるよ！！

「私の頭の良さを見せてあげるわ！レーソーサーノーさん！」

誰！？

「4 2 2 2 × 2 × 5 6 × 8 7 8 × 2 0 × 3 4 1 3 2 × 1 × 0 × 2 2  
1 × 2 3 2 3 3 2 〃 ええーつと 4 2 2 2 × 2 は 8 8 8 8 で・・・」

馬鹿だ！！途中に0が入ってる+掛算だけだから0だろ！それ以前に 4 2 2 2 × 2 は 8 4 4 4 だああああ！！！！

「それなら桃次郎のお話をするよー！！」

桃次郎！？

「むかーし むかーし ある川に桃がありました。」

いきなり桃から始まるのか！？

「その上に 青りんごがありました。」

何故！？

「その少し先で 都合よくお婆さんが 川で洗濯をしておりました。」

ここはまともだ。

「しかし いきなりお爺さんがマシンガンを持って 山から滑り落ちてきてお婆さんに激突！ 二人一緒に川に ドボン！ と突っ込みました。」

何故マシンガンなんか持つてるんだあ！？

「二人は泳いで川から出ようとしたが 運良く桃が凄い勢いで激突して 二人は沈んでいきました。」

運良くじゃねえだろ！あと楽しそうに言うな！

「その沈んだお爺さんとお婆さんの名前はそれぞれ悟・ウィルと言う名前でしたとさ。 めでたしめでたし。」

「全然めでたくねえ！」 「全然めでたくありません！」  
「「あっ」」

ウィルも隠れてたのか・・・冷蔵庫に。

「やっと2人とも出てきたねー。 って事で覚悟」

「うるさい！鉄100%枕砲！」 「いろいろ言ったお返しですっ！  
爆弾枕投げ！」

「ドガッ！バゴオオオオン！」

おっ、W枕がHIT！俺の撃った弾も枕シートで包まれてるからルール違反じゃないんだよね。魅異はいま弱体化中だから無事なわけが

「ヒロインに攻撃なんて酷いよ」

有りましたあ！！魅異って人なのか！？人じゃないよな！！

「次は私の番だよ」。魅異列車突撃まくらシートにはいつたトレインアタック！！

「俺はトレイン君2号だああ！！」「ドゴッ！バゴッ！ブチ！バキイ！」

「うわあああああ……」

トレインが壁を破壊してきた！！はねられたのはジャルス・校長・烈（潰された）・そして馬鹿な魅異だ。魅異は自滅だろ！俺とウィルの方にはトレインがこなかったから助かったぜ。

「えっ……とー、大会……続けます？」

「あ、ああ。」

皆ははねられて外に飛ばされていったからあとはウィルだけだ。粉のせいで眠気が多い。まあウィルも同じだろうからこれを利用した枕で決着をつける！！

「睡眠薬枕砲なげ！！」

あっハモった。じゃなくて！相手も同じような枕を投げてきたからそれがぶつかって……

睡眠……薬……が辺りに……（眠

次の日

「……で、何でこうなってるの！？」



俺は賞品の家に引つ越したよ今日。作者が1瞬で荷物を運んでくれたから楽だったぞ。

でも何故

「何で魅異ウイと一緒に住む事になってるの!？」

「二人が見事同時に寝ちゃったからだよ」それに荷物全部此処に移した後だよ。」

「朝起きたら勝手に移されてた気が・・・」

「そこは作者に言ってね」

部屋とかどうしよう・・・此処はやっぱり次回決めるべきだな！

## 26話：枕なら何でも良しの枕投げ大会開催！（後編）（後書き）

@魅異視点@

「26話更新完了！」

「そつえば何で作者は投稿を更新って言つのか？」

「さあ？なんかの癖になつてゐるからしょうがない。」

「ところで術はどうするの？」

「弱体化の術の解き方は忘れたんだからしょうがないだろ。つてか悟と共同生活することで許すって言つたからちゃんと約束を守つてこんなストーリーにしたんだからいまさら文句言つな。」

「まあそのおかげで悟に悪戯をしやすくなつたんだし結果良ければ私良し。つて事で許してあげるよ。」

「私良し！？全て良しじゃないのか！？」

「・・・やっぱり許すの止めて此処で息の根を。」

「余計ナ事ヲ氣ニシテスマセンデシタ。」

「まあ片言は置いといて 皆さん次回もお楽しみに！」

「俺ノ台詞ウウウ！！！！」

## 27話：部屋決め！&部屋紹介！

@ 悟視点 @

「とりあえず部屋決めするぞ。」

「そのまえに家の構造の紹介だよ、1階は玄関・リビング（台所）  
・部屋A・トイレ・風呂場・洗面所・2階は部屋B・部屋C・部屋D・3階は部屋E・部屋F・あと寝室専用の部屋が有る。あと地下には大きめの部屋が1つ有る。」

「大体こんな感じだ。部屋が多いな〜」

「思考で説明すると私たちがわからないんだけどー」

「あつそ。さて部屋を決めるか。」

〜相談中　よし終わり！〜

即効で終わったように見えるが実際は2時間掛かったからな！

結果は　部屋A⇐俺の部屋　部屋B⇐俺の特別室　部屋C⇐魅異の特別室　部屋D⇐ウイルの特別室　部屋E⇐魅異の部屋　部屋F⇐ウイルの部屋　地下部屋⇐物置　に決定したぞ。（これから小説内ではそう呼んでいく）

特別室って何だ！？って思う人が居るかもしれないから説明。

特別室は自分の好きなように？まあコレクションルームにしようが実験室にしようが自由な部屋だ。簡単に言くと趣味の部屋で、普通の部屋はのんびり過ごしたりする部屋だ。まあ俺はリビングに居る事の方が多いと思うが。

話がそれるけど全然ギャグが入ってねえ。

話を戻すぞ。寝る時は魅異<sup>ウイル</sup>は寝室で寝て良いって事になった。俺は

駄目らしい・・・だから俺の部屋には滅茶苦茶重いベッドを置いたんだぞ！

料理はどーせだから皆で一緒に朝飯とか食べようって事になって料理当番も決まった。

俺 魅異 ウイル ウイル 魅異 俺 俺 魅異 ウイル のルー  
プだ。

先に言つとくが1話進めば交替。とかじゃあ無くて日替わりだ。この小説は途中の日を抜かす事も有るから要注意だ。

次は・・・移動しながら部屋の紹介（特別室を除く）でもしておくか。ちなみに荷物とかは部屋が決まった直後に入れる予定だった所とかに入れてくれたから。（アキステが作者の特権を使った。）

まずリビングはソファアが2つあってその間にテーブルが有るな。

床にはじゅうたんが敷いて有るからそのまま寝ることも可能。これは便利で今ならお得！ ってもう売ってないか。

あとはテレビとかも当然あるからな。

台所は普通に料理を作るものやコンロ・レンジ・冷蔵庫などがあるだけだ。

「私の人生回りっぱなしー！」

意味不明なことをほざきながらレンジの中で回っているのは当然魅異です。ってかよく入れたな！？保育園児でも入れねえよ！

次は俺の部屋の紹介。床は畳でコタツとベッドと机と椅子が有る。それだけ。

・・・えっ？適当すぎる？本当にそれだけしかないんだが（机の上には高校に持つてくものが有るが。）何か問題でも？問題ありでも聞く気はないので言うだけ無駄だぞ。

「春はコタツに限るねえ」

コタツは冬だ！

洗面所は鏡と水道2が有る。(1は台所) 歯をみがく時も此処を使う。

なんか洗顔用スライムと書いてある入れ物が有るんだが・・・無視。

風呂場は風呂が有る。当然か。風呂用の水道3も有るな。スライム&温水&シャワー付き。

風呂の広さは多少広めで3〜4人位は楽に入れるだろう。

・・・スライムシャンプーやスライムボディソープやスライムリンスやスライムの元(緑スライム)などがある。ってか水道で好きな色のスライム出せるんだからスライムの元(緑スライム)は要らないだろ!?

「スライム鉄砲も有るよ」

水鉄砲の一種か!?

2階は特別室しかないが俺の場所だけ紹介。俺の特別室は俺の重要な物置き場だ。

釣竿も此処に保管されてるぜ。あとエクサスターガンも。

「あつ、釣竿発見!今すぐ破壊して悟を怒らせよう」  
燃やすぞ。

次は魅異の部屋。えっ、勝手に人の部屋に入るなって?それは魅異に言っておいてくれ。

床全体にじゅうたんが敷いてあつて水道4が部屋なのに何故か有る。スライムしか出せないようだ。机があつて他に本棚が有るがスライム関係の本や馬鹿のヤレ役の扱い方などのほんがある。烈ー!次に魅異から何か酷い扱いを受けたら絶対にワザとだぞー!そういえばあいつ何処に居るんだ?どうでもいいけど。

「人の部屋に勝手に入ったー。覗きだ」  
壁やドアを破壊するお前は覗き以下だぞ。

次はウィルの部屋。っと入る前に確認しないと。

「魅異、ウィルに部屋に入って良いか聞いてくれ。」

「むむつ、私の次はウィルの部屋を覗こうとはあくどい奴め」

「お前の部屋を無しにしてやろうか？」

「ウィルー、悟が部屋に入って良いかだってー」

別に喋らなくても伝えられるはずだろ。

「・・・・・・3回、回ってモーって言えば良いだってー」

「ウソつくなあああ！！！」

「バシッ！」

ハエ叩きHIT！

「ニユギヤ！それじゃあ3回、回ってヒビインって言えば良い」

「追加攻撃だ！新技、ハエ潰し！」

「ブチー！」

「ニユギアル！ついにハエ叩きの新技出しちゃった〜！？それなら5回、回ってブウ〜ンにしないと」

「回る回数を増やすな！同じネタ何回も使つな！あと俺はハエじゃねええ！！！」

「バシイイン！」

「ニユジュサ！酷いよ〜」

そんな事言ってる割には全然平気そうだな。ところでニユジュサって何だ！？

「・・・で、結局どうだって？」

「私と読者の皆さんは良いんだって〜」

「・・・ハエ潰s」

「本当だよ！作者にそう言うように言われたんだって〜」  
「・・・アキステめ覚えてろよ。この嫌がらせは死に等しい。」

「・・・と、まあそーゆー事だから私が解説していくよ〜。簡単に言うとうとスライム家具だらけでスライムソファー・スライムじゅうたん・スライム枕などいろいろ有るみたいだよ〜私のスライム感染の影響

かなあゝ？でも普通の家具とかも有るよ本棚とか。まあかなり大まかに説明してみましたゝ」

俺はその説明を部屋の外で聞いてます・・・スライム感染病って本当にあつたらしい。

「・・・以上住宅実況でしたゝ」

「スライムって上の方はコンニャク以上ゼリー未満の柔らかさで下の方はゼリー以上ハチミツ以下の柔らかさらしいよゝ」

分かりにくい場合は上より下の方が柔らかいと言ってるって事にし  
といてやってください。

「絶対に許さないぞアキステェ！」

## 27話：部屋決め！&部屋紹介！（後書き）

@烈視点@

今日は作者に代理を頼まれたし頑張るぜ！！それにしても悟を止めておけて一体・・・

「ドゴオオン！！ドゴオオオン！！！！」

「アキステエエエ！！出てこいやコラア！！破壊してやるぞおお！！」

「ぎゃあああ！なんか滅茶苦茶怒ってるんですけど！

悟じゃないオーラを持ってるんですけど！

「悟ー、アキステは今日は居ないぞ」

「アキステだと！？そこかああ！！」

「ドゴオオオオオオン！！！！」

「ぎゃああ！！！！」

違う違う！よく見る悟ーーーー！！！！

「グレートバースト砲！！」

「ドッガアアアダガアアン！！！！！！」

「ぎゃあああ誰か助けてえええ！！お願いだあ！！！！」

「おおー怖い怖い。烈を代理にして正解だったな。それでは皆さん次回もお楽しみに！！」



## 28話：異常なニュースにツツコミ！

@ 悟視点 @

「ドゴオオオオオオオン！！」

「おっはよおー！」

「朝からうるさいわ！」

「バシッ！」

八工叩き普通にHIT！

「えっと、グヒャラッ！」

「瞬やられた時の言葉を考えなかったか！？」

「で、何のようだ？ついでに今日は出かけないからな。」

「ガーン」

「口で言うな棒読みするな。」

「えー」

「今日は家に居たいからお前は何処かに行ってる。あと文字数がすくねえよ！」

「しょうがないなー、でもボケ役が私だけだと思ったら間違いだらねー」

「なんか不吉な事を言っ行ってたが・・・大丈夫だろ 多分な。」

「さてどうするかな」

「やっぱり寝るか出かけるかテレビでも見るかだな。」

「寝るのは眠くないので没。出かけるのは馬鹿魅異と会う可能性もあるから没。」

「って事はテレビだな。だが今の時間帯は面白い番組はやってないはず まあいいか。」

「ピッ・・・が現在トップです！」

「スポーツ実況ニュースか？」

「チャンピオン追いつけない！そのままチャレンジャーのウィル選

手が優勝でs ピッ」

・・・なんか凄く身近な人をテレビで見えたんですけど！

スライムのでっかい塊の中を酸素ボンベも無しで走り抜けてくウィルが見えたよマジで。ってか家を出るまで魅異だったよな！？ってかスライムの塊の大きさが2000mって書いてあったぞ！

「も、もう1回見てみるか・・・」

「ピッ・・・次は勇者ニユースのお時間です。」

勇者ニユース！？

「今回はスライムの塊の中を抜けて来たウィル選手と疑われている魅異さん（本人）を取り調べようと思います。」

なんで取り調べ！？

「ウィル？そんな人は知りませんね。我が社との関係はまったくありません。」

口調が変だ！

「だが1つだけ教えといてやろう！俺は見たんだ！そのウィルとか言う奴は悟という偽善者の家に泊まりに行く所をな！」

また口調が変わった！そして死ぬ！魅異は1回死んで地獄に落ちろ！・・・でも地獄を征服するだろうな。地獄に住む皆さんが可哀想だ！

「なるほど。おっと今カメラマン達が悟さん宅の目の前まで言ったようです！」

何iiiiiiii！

「そうですか・・・彼は・・・死んだ方が良いのかもしれない。・・・カメラマンの方々、・・・彼は大斧ではあまりダメージはありませんが・・・どうかお気をつけて。・・・そして地獄の皆さん・・・ごめんなさい。」

口調変わった！ってかお前の事だろ！大斧どころか不老不死効果無視の宇宙消滅銃攻撃でも平気な顔してただろ！

「ピンポン！ピンポン！」

「来たあああ・・・（小声）」

「反応が無いようです。留守なのでしょうか？」

「フツ 奴の事だ、居留守でも使って影で怯えてるんだろ。」  
うぜえええ！もう今回は口調を変えてもNOツツコミだ！

「ピンポン！ピンポン！ブッブー！」

最後のはハズレかよ！？

「反応が無いようですが本当に居留守を使っているのでしょうか？」

「もう私には時間が無い！家に帰らせてもらう！」

「ええっ！？そんな急な！」

「給料は半額の10万セルでよい。ではさらば！」

「魅異さんちよつと待って下さい って消えた！？」

「ドゴオオン！」

「ただいま」

「新技！ハエ叩きに映えた滝！」

「ダジャレですけど何か？」

「ブアシイーン！」

「アゴボオボボー！また新技ー？」

この技は周りの水分をハエ叩きに吸収させて滝のように相手を叩く技だ。水圧で相手がつぶれる事も有る。

「何でテレビなんかにててるんだよ！？しかも俺の誤解を招くような事をしやがって。」

「特に反省はしないけどゴメンねー。代わりに外のカメラマンを埋めておいたから。」

「・・・まあいいや。ってか難か助けに行く気分じゃないしな。今日の夜飯作るのは魅異だろ。早く作つといてくれ。」

「分かってるって」

結局夜飯はスライム系の料理だった。うん案外美味い。  
ちなみに朝氣付いたがカメラマンはバイトで来てた烈だった。やつ  
ぱりオチにはこいつが出るな。テレビを見るときは皆も気をつけよ  
う。マジで疲れるから。

## 28話：異常なニュースにツツコミ！（後書き）

@ 悟視点 @

アキステ「28話目更新！感想1つ目突破！」

悟「1つ目って少ないし第一アキステの同級だろ。」

アキステ「良いんだよそんなこと。悟も細かい事を気にしていると扱いが低くなるぞ。烈並みに。」

悟「そ、それは嫌だ！アイツと同じ扱いなんて絶対に嫌だ！」

アキステ「それでよし。次回どうしようかなー」

悟「明日決めればいいだろ。ってか更新がギリギリになってるな。」

アキステ「ギリギリセーフだから問題ない！」

悟「あっそーですか。」

アキステ「ム力つく言い方だな。まあいいか。それでは皆さん次回もお楽しみに！」



「ちなみにアキステカンパニーは私の勇者社と同じくらいの大きさの会社だよ。」

「コイツ会社持ってたの!？」

「と、とにかく行くぞ。」

「おお」

「やはりアキステカンパニー」

やはり!？まあ来るのは当然だが。

「それで何のようだ？」

「バーチャルRPGが出来たからやらせてやるうと思って呼んだんだ。」

「・・・帰るか」

「ちょっと待てえ!」

うるさいな。

「何だ？」

「やってけ!」

「嫌だ!」

「この話で銃剣を使えるようになる予定なんだから（小声）」

「まあ武器の練習にもなるしやってやるか!」

「ウィルに銃剣を教えてもらうぜ」

ちなみに俺達以外にも何人が集まってたぞ。もう部屋に行ったようだが。

「じゃあ銃を置いてこっちに来てくれ。」

「バーチャルルーム」

「とりあえず此処か!？」

何故俺に聞く!？

「俺が知るか!お前が案内するんだろ!？」

「ああ。・・・此処だな。」

「いちいちMAPを見ないと確認できないのか!？」

「えーっとこの床全体にコントローラーが仕掛けてあって靴との赤外線で歩くとかを感知する事によりゲーム画面も同じように動く・・・らしい。」

「なんで説明書を見ないと説明できないんだ!？」

「ついでに使う武器にボタンがついていてそれを押せば画面にのこ<sup>ヒットポイント</sup>るHPとTPが確認できるらしい。」

「らしいってのが心配だ!」

「敵や建物は立体でそこら辺に出てるから武器で攻撃すればOKだ。特技は技名を言いながらその技で攻撃すれば出せるぞ。そんじゃ頑張れよー武器はそこから選んでくれ。」

「そこって・・・これか?種類は剣系・槍系・杖系・グローブ系・その他いろいろあるが銃系が無いぞ!・・・当然銃剣はあるからこれにするか。」

「よし!開始d」

「ドゴオオオオオオオオオオオン!!!!!!」



「いつてえゝ・・・のか!？」

聞くなよ! 此処は・・・森? フォレスト! ? つか変な始まり方だな。つかボケ役の俺が起きたのか! ? (19・20話参照)

「服装はいつもと変わらないんだな。俺の魔術のおかげだ。」

魔術なんか使えねえよ!・・・あゝとりあえず進むか。そこに居るオーガを倒してから。

「グオオ!」

「うるさい低知能ヤロー。ちよつとは俺を目指せ!」  
目指すな!

「ハイ!」

喋った! ? しかも敬礼した!

「よし! 今から校長よりハゲて来い!」

「分かりました!」

それ以前にウチの校長はハゲてねえよ!

「さて、馬鹿も追い返した事だし、地面で冬眠するか。」

何で! ? 今は春と夏の間だぞ!

「銀色の天使と金色の悪魔が俺を待っている!」

待つてねえよ!

く洞窟く

「つてことで洞窟に有る盗賊の財宝を奪いに来たぜ!」

酷っ!

「ちなみにこの洞窟に着くまでに50人位の盗賊を金の悪魔に変えてやったぜ! ハハハ。」

笑い事じゃねえ! 俺が見てた限りでは金ぴかの悪魔の人形の服を着せてたな。瞬間接着剤でくつつけてた。

「おっ、烈をはっけーん。」

おっ本当だ。何でこんな所に・・・盗賊の役か?

「おーい。腐ったアナタは此処に有るぞ。」

んなもん有るかあ！！！！

「おつ悟、あのg」

「レッツ・スタートだ！ミニカーアタック！」

「ズガガガ！」

名前の割には普通に斬ったあ！

「ぎやぎやぎやぎやああああ……」

「滑り台いいいい！！！」

「グサッ！」

もはや滝に近いぞ！

「ぐはあ！」

N O F O N O F O N O F O N O F ! ! !

「ズガアア!!ズゴオオ!!ズガアア!!ズゴオオ!!ズガズバ  
ズガズバズガズバズガズバズガズバ!ザシュシュ  
シュシュシュシュ!」

[illegible]

言ってる事は意味不明だが破壊力が凄え。俺ってあんなに銃剣使えたっけ？

ボケ役が反則的に強いだけか？

「よし、後は自動連射フルオートライフル（効果20時間）をセツトして完了。次に向かってうちわで羽ばたくぜ！」

無理だろ！

「ズガガガガガガ（略）」

「ぎやあああああ（略）」

烈はマシンガンの銃弾を受けてるぞ。たまに忘れがちだが不老不死の効果が有るとはいえダメージはちゃんとそのままだからな。

10分後

誰も居ないな」

「行き止まりか・・・これは俺が超えなければいけない運命の壁か！！」

違う！それはただの洞窟の壁だ！

「俺は蟻天国へと飛び立つ！」

蟻天国なんてねえよ！ってか飛び立つな！

「ドガアアアアアン！」

ぎゃあああ！！！！爆発した！

「ゴゴゴゴゴゴツ！！」

「俺の笑いのオーラの音だ！」

洞窟の崩れる音だっての！！ってかヘルプー！！！！

「左手アップジャンプ！」

「ドガツ！」

い、生きてる。・・・よく考えたらゲームなんだし当然か。

「さて、眠くなってきたな・・・お休みい」

よっしゃ交替だ！

「ってことで復活！」

やっぱり俺はツッコミ役に限る！

「さて、どうすればこのゲームは終われるんだ？」

「おおーい！悟ー！」

この声は

「アキステじゃないか！どうした？」

「いやーお前が行方不明で皆で探してたんだよ。」

「行方不明？これはゲームじゃ」

「ゲームをやる予定だったんだが魅異がミネラルレーザーを撃つてそれがシステムを貫通して大爆発を起こしたんだ。それでお前が此処まで飛ばされたというわけだ。」

大爆発を喰らってよく気絶してないな俺。

「お前が見つかったって事は爆発で吹き飛んで見つからない奴はこれで全員か。」

「とりあえず俺は疲れて帰るから道案内をしてくれ。」

「OK。」

やっと無事に帰れる。・・・絶対に誰か忘れてるよな？ええーとまあ良いか。

「ズガガガガガガ（略）」

「俺を忘れるなああああ！！誰かヘルプミー！！」

## 29話：リアルRPG！？（後書き）

@ 悟視点 @

「29話更新完了。」

「結局ウィルに銃剣の使い方を教えてもらえなかった……」

「それは魅異が原因だからアイツに文句を言え。」

「ああ……でもストーリーを作ってるのはお前だよな。」

「イエース。」

「……」

「……」

銃剣技を試すか。

「輝きの裏の腹黒！」

「ズガアアアン！！」

「アウチノーン！！」

もう1つ……

「宇宙の制する空間！」

「スパッ！ドゴオオオオン！！」

「ギャウチノオオン！！！！」

ここら辺で今回は許すか。っとその前に。

「それで銃剣の練習の予定は？」

「み、未定……だ。」

やっぱり後1回。

「常識を超す錬金術のコラボレーション！！」

「グワアン！」

「アウチ！ノオオオン……」（何かに吸い込まれた）

「さて……それでは皆さん次回もお楽しみに！！」

### 30話：主人公へのハッピー大作戦！

@アキステ視点@

「秘密の作戦会議場所」

アキステ「ふふふ」今回は30話突破記念にある作戦を行おうと思う。」

魅異「その作戦とは！？」

アキステ「悟とウイルの好感度UP作戦（ボソツ）」

ジャルス「だから悟とウイルがここに居ないのか」

烈「しかしそう上手くいくか？」

アキステ「だーからー、皆を此処に呼んだんだ。」

校長「簡単に言うて手伝つて欲しいと？」

アキステ「YES。・・・駄目デスか？」

魅異「片言でも全然OKだよ。ねっ皆？」

「・・・おおー！！」

アキステ「だが人数がこれだけだと場所の用意やら大体のストーリーやらを作るのが難しいんだが・・・アキステカンパニーの社員を含めても足りないんだが。」

魅異「場所や道具の設定とかなら勇者社の社員も使えば良いよ。」

ウイルの行動は私がかするしね」

ジャルス「僕は2人の会社の社員の手伝いでもするよ。」

烈「俺もだ。」

校長「私は高校の生徒と教師に手伝わせておきましょう。」

アキステ「これで作戦の人数分は多分たりと思う。大体のストーリーは本当は出来てるんだ。これだから出来れば今日中に覚えてといてくれ。」

〽次の日の朝（ゴールデンウィーク最終日）

@ウィル視点@

「ウィルー！起きないと遅刻するよー！」

んゝ、何言ってるんですかぁゝ魅異さん。今日はまだゴールデンウィークですよ。お休みなさぁゝい。

「えー、でもカレンダーの日付」

日付も5月6日のはず……ですよね。

「ええー！5月7日！？なんで明日が今日になってるんですか！？」

「ウィルは2日前のゲーム事故の疲れで昨日は1日中寝てたんだよ」

いやーそんなはずは有りません。多分1日分多くカレンダーをめくったんでしょう。

「それじゃあテレビでも見てみたら？」

テレビですか？

「ピッ……昨日5月6日に事件があり（省略）物騒な世の中ですね。現在時刻は9：30分です。さて今日は5月7日ですがゴールデンウィークが終わって忙しい人もピッ」



・・・遅刻寸前じゃないですかああ！！！！

「だから言っただのに」

準備準備・・・・・・・・・・・・・・・・これで完了です！

「あと悟がまだ寝てると思うから起こさないで。」

「悟さん！起きてください！！」

「秘密の作戦会議場所」

@アキステ視点@

「最初は騙すのに成功。OKOK。」

まあ絶対に成功させないといけない場所だからな。さて次は・・・

「クレール出番だぞー」

「あつ、そうか。」

「魅異、作戦SPを開始だからいったんウィルと悟を離してくれ。」

「了解」

「・・・電話でつながるのか!？」

「一応って設定だけだな」

「現代エリア」

@ウィル視点@

「ウィルー！忘れ物したからいったん戻って」

ええー、まあまだ家からあまり離れてないから問題ありませんね。

「悟さん、私ちょっと忘れ物をしたので取りに戻りますね。」

「そうか。それじゃあ急げよ。」

「はい！」

「秘密の作戦会議場所」

@アキステ視点@

「上手く成功したよ」

「そうか。それじゃあクレー、あれを召還してきてくれ。」

「分かった。」

く特星エリアく

@悟視点@

「特星エリアまでとりあえず来たけどウィルは忘れ物見つかったかな？」

「キーン！」

「んっ？何だ　ってデカツ！！」

目の前に現れたのは異常にでかいスライム（黄半透明）。すっぱい種類だな。

「とりあえず……通してくれないか？」

「……………」（頭を横に振る）

この星のスライムに泣き声は無いのか……残念。とりあえず邪魔

なので倒しまーす。

「空気圧圧縮砲！」

「カキン！」

打ち返されましたー、頭で。頭は確かコンニャクより柔らかくてゼリーほど柔らかくは無い・・・だったと思う。

「ドゴン！」

当然帰ってきた弾は回避だろ。

「空気圧竜巻砲＋火炎砲」火炎竜巻！」

「ゴオオオオ！！！」

これでスライムが溶ければ俺の勝ちだ！

「・・・・・・・・」(頭を回転させて火炎竜巻をかき消す)

「マジで！？」

「・・・・・・・・」(頭を回転させて攻撃)

「ドガガガ！」

「危なっ！」

・・・・・・・・あつ、そうだ。

「銃剣装備つと。・・・常識を超す錬金術のコラボレーション！」

「グワァン！」

「・・・・・・」（何かに吸い込まれた）

「そして 常識を超す合成！」

「ギョルルルズコーン！」

これは常識を超す錬金術のコラボレーションの攻撃効果で吸い込まれた物を合成する技だ。

前回に吸い込んだ作者と今回吸い込んだスライムを合成したって事だ。

どれどれ結果は・・・普通より高反発なスライム（黄半透明）！？  
まてまて、作者を合成させたら何でそんなものに・・・とりあえず  
取り出してみるか？

「とりあえず出てこい」

「グワァン！」

出てきたのは何かよく弾むスライム。ってか普通より多少硬いし。

ああ、言っとくけど材料の方のスライムだからな。おっ手紙が付いてる。

「よゝ俺を合成させようなんて甘い甘い。合成エリアは作者の特権が使えるって事を覚えておこー。まあ替わりにスーパーボールを入れといてやったから感謝しろこのアホが。そんじゃグッバイ。」

・・・仕留め損ねたああ！！

「とりあえずこれは持つてくか。」

さて、スライムを手に入れたし帰れ。

「・・・って何で帰るんだよ！？」

えゝ駄目か。

「駄目に決まってるだろボケ役の俺！ってかなんで出てきた！？」

スーパーボールが俺を呼んだからだ！

「呼ぶか！つてか寝てる！」

とりあえずロケット発射数秒前のロケットに入った人位の軽い気持ちで待て！

「重すぎるわ！かなりの緊張感だろそれ！」

じゃあお湯の入ったコップの中で防水食料バックつけて泳いでた時に隣に飢え死にしかけた魅異が流れてた時の嬉しさを頭で思い浮かべて待て！

「全っ然、嬉しさが出ないぞその状況。」

何故！？助けたら喜ぶかもしれないぞ！

「それならウイルの方が絶対良いつて。」

いや魅異の方が良い。

「いやウイルの方が良い。」

・  
・  
・  
・

「  
・  
・  
・  
・  
・  
」

魅異！

「ウイル！」

魅異！！

「ウイル！！」

ボケ役！！！！

「ツツコミ役！！！！」

絶対ボケ役！！！！！！

「絶対ツツコミ役！！！！！！」

何でボケが突っ込みかになってるんだ！？

「お前が始めたからだ！！」

ハハハ、俺に罪を被せようとはついに空から泥沼まで落ちたな。

「真実だろ！！」

ああ俺だよ！！最初は俺だよ！！だがその何が悪い！！

「そこで逆ギレ！？」

時間稼ぎの何が悪い！？

「時間稼ぎ？」

あつ 時間稼ぎ？何を言ってるんだ？俺はセル稼ぎを少しして稼いだ分の2倍のお前の金を使って何が悪いって言ったんだ！テレビか！？温暖化は漫画家が悪いのか！？

「温暖化を漫画家のせいにするんじゃない！金を使うのはお前が悪い！テレビは無罪だ！」

では被告人のツツコミさん。その蛇穴の中でダンスをしなさい。

「はは、ってダンスなんかするか！蛇が出てきたらどうするんだよ！？」

噛まれる。

「そういう意味で聞いたんじゃない！」

細かい事を気にしてたら立派な秒針になれないぞ！

「なんで俺が秒針になるんじゃない！ああ！！」

やっと笑ってくれたか。父さん嬉しいぞ！



「思いつきり怒ってるから！何でお前が父親になるんだ！？魅異と夫婦漫才でもやってろ！」

あれ？お前の母親は魅異じゃないのか？

「それはアナウンスが間違ってるってただけだ。ってか何でお前が知ってるんだ！？」

フランス単語帳や裏技辞典に乗ってるぞ。

「んな訳有るかぁ！！ってか裏技辞典って何だ！？」

俺の頭脳。裏技その1・この星ではボケ役は基本的に強い。

「不公平だろ！？」

やっぱりコップはダイヤ製

「無駄に贅沢だな！」

ところで足元。

「んっ？モヤシ？何でこんな所に？」

俺の能力を此処から発動したんだ。

「あつ、枯れた。」

枯れたモヤシは

「爆発する。つて！」

「ドゴオオオオン！」

大成功！

「死ね！１回地獄に落ちろ！」

何回か落とされたことは有るけど恐れられてたぞ俺。

「一体何をやらかした！？」

地獄全体をモヤシだらけにしたただけだ。

「まさか……」

ドーンって感じ。働く奴が60万分の1に減少して泣いてたぞ。

「可哀想に。」

その後ビー玉王国に改名したらしいな。

「何で！？」

俺へのお礼だと。

「アホだろ！」

そういえば作者が主人公の決定事項つてのを持ってたな。

「どんなのだ？」

何かいろいろ書いてあったな。ザ・パラダイス！確か主人公に好きな相手などが出来た場合

「あつ、悟さーん！！」

おつとアンタの未来の恋人が来たぞ。それじゃあお休み

「えつ、チヨット待て！話の続きは！？つてかザ・パラダイスって何！？」

つて行ったか。俺はツッコミ役のほうですよ

「待つてくれたんですか！？」

「いや、大して待つた気がしない・・・」

「でも今は10時50分ですよ？」

・・・・・・ハイ？

「マジで！？」

「マジです！急ぎましょう！」

ボケ役のせいで時間があぁぁぁぁ・・・おつ、そうだ。

「ウィル、これ要るか？」

「これはスライム！良いんですか貰っても！？」

「別に俺は要らないし。」

「ありがとうございます！よく弾むタイプのスライムですか？珍しいですね」

おお喜んでくれた。でも俺はスライムの良さは分からないな。

↓秘密の作戦会議場所↓

@アキステ視点@

「またまた成功！。作戦に狂いは無しか。」

流石はポケ役の悟だけはあるな。あとスライムを出したクレーも。

「作戦もラストスパート！校長居る？」

「当然居ますよ。あとアキステ君・・・ナイスクエスチョンマーク！」

？にナイスって正直喜べねえー

↓高校（屋上）↓

「……………で、なんでこんな事になってるんだ俺達。」

「高校に来るのが遅れたからじゃないですか？」

「……………来ない方が良かったよな。」

「同感です。」

今俺達は高校に来るのが遅れた罰を受けているところだ。

周りからすれば面白いが俺達からすればかなりキツイ。

罰の内容？それは……………

「それにしても何で屋上にバンジージャンプのロープで片足結んで逆さ吊りなんですか？」

「さあな。」

まあウィルの言ったとおりの状態だ体の距離はわずか2cm。ちなみに遅れた授業は体育で羽雨流さんに罰は、

・2人で校庭を1年間の間1秒5000周（遅れる度に1万周追加）で走る

・2人で1年間バスケットゴールに頭から授業終了まで突っ込む

・2人で授業終了まで屋上から逆さ吊り

のどれかを3秒以内に選ばないと全部にしますよー。と言われて3つめを選んだのだ。

ってか3つめ以外は1年間だし強制的だろこれ！

逃げようとするすると魅異並に早い足で追いかけてきて肋骨を逆方向に折られるから注意。

羽雨流さんは力は弱いけど捕まると逃げれない・・・なんでだよ？

良い人なんだけどなー。罰さえ軽ければ。

「ってか何分くらいたつた？」

「えーっとちょうど5分くらいですね。」

時間が経つの遅いな。

「ヒュー、ゴンッ」

「「イタッ！」」

風でロープが揺れて頭と頭がぶつかり合った。痛い。言っとくけどロープの長さは4階下の6階位まで伸びてるから風で簡単に揺れるぞ・・・ヘルプミー。

「ウィル、大丈夫か？」

「大丈夫です。痛いですけど。」

それにしてもこの風は何だ？両サイドから出てるぞ。普通は右に吹けば両方右に。左に吹けば両方左に揺れるから普通はぶつかる筈が無いんだけどな。

「ウィル、この風おかしい・・・って！」

「んー」

寝てるし！！ってかいつの間に！？口半開き！腕だらうってなってるし！悪く言えば死んでるように見える！

「ウィルー起きろー！一応6階だから下手したら死ぬぞ！」

「むみゃー」

猫の泣き声！？

「おおーい、聞こえてるかー？」

「むによ〜」

スライムの伸びる時の効果音！

「ピンポンピンポン！」

「やったー！ってノリでクイズをやってしまった・・・」

アホじゃ俺。

「ヒュー、ムニユ」

………ヒュー、ムニユ？ウィルの寝言？いやそれより……

「んん！？」

俺の口が塞がってるんですけど！！そして目の前にウィルの寝顔があるんですけどおお！！！！

＼秘密の作戦会議場所＼

@ナレ君視点@

おおーーーー！！！！

「おおーーーー！！！！」

はいナレ君です！いまキスシーンを見えています！

「ナレ君と同文。とは言ってもウィルの方は寝ているが。」

質問！

「何だ？」



この映像はどうやって撮って有るんですか！？あとどうしてウィルは都合よく寝てるんですか！？あと両サイドからの風はどうやって出してるんですか！？

「撮影はナレ君2に任せてある。ウィルには魅異が催眠術をかけて眠らせた。両サイドからの風は勇者社とアキステカンパニーの会社が合同開発した超巨大ビュービュー君で烈とジャルスが遠くから風を出している。」

それじゃあもう1つ、このシーンは私達以外に誰が見てますか？

「校長と教頭は授業生徒全員に参加料の食堂無料券を配ってるしクレーはそれを貰いに行ってるし烈とジャルスは風を出してる途中だし……俺達以外で見てるのは魅異とナレ君2と寝たふりをし黙っているポケ役の悟位だな。」

そうですか。案外少ないんですね。

「まあな。さてそろそろウィルにも気付かせるか。」

ええっ！？どうやって？

「簡単簡単。」

「ピッ……もしもしこちら魅異だよ」

「もしもし、視点が変わってから20秒後に催眠術を解いて寝たフリをしてくれ。作戦FNRを開始だ。」

「OK……ZZZZZ ピッ。」

「これで良しと。」

FNRって？

「フィナーレの略だ。それにしても うん面白いな。おっと。」

「ピッ……こちらジャルスだよー。」

「視点が変わってか30秒後に風を止めてくれ。」

「了解……ピッ。」

「ピッ……こちら烈だぜー！」

「うるさっ！視点が変わってから30秒後に風を止めてくれ。」

「了解だぜー！……ピッ」

「準備完了！マジで楽しみだ！」

（中吊り組）

組じゃねえ！！ってツッコミ入れてる暇も無え！ウィルが起きる前に何とかしないと！別にキスが嫌なわけじゃないんですよ！でもこの状態で起きたら俺が変人扱いされるかもしれないんだ！ってか

相手寝てるつても悟ポリシーに反する！

「んー」

ヤバイ！ウィルが眠そうな目を開けようとしてるんですけどー！！チヨット待てー！！

「んんー？んんー！？」

起きた！つかこの風なんで都合よく頭に吹いてるんだ！？

「ヒュー……」

風が弱まった！一足遅い！！！！！！

「えっ！？あれ！？私寝てて」

ウィル混乱中。

「魅異さんは……寝てて……私……キスしてました！？」

気付かれた！！

＼秘密の作戦会議場所＼

@ナレ君視点@

「さて、夢オチにするか」

楽しそうですね。

「楽しい楽しい。かなり面白いぞ。作者の特権・・・急な睡魔！」

「中吊り組」

「あ・・・また眠く・・・」(眠

「俺も・・・眠気が・・・」(眠

「秘密の作戦会議場所」

「さてと、明日になれば起きるだろうから社員に部屋に運ばせておくか。」

面白かったですね。

「ああ。録画もばっちりだな。」

さて、じゃあ私は帰りますね。

「分かった。・・・さてと俺も帰るか。」

### 30話：主人公へのハッピー大作戦！（後書き）

@魅異視点@

「30話突破！その記念に作った話がこれだ。」

「でも夢オチならハッピーに入らないと思うよ。」

「ちなみに悟とウィルは熟睡中だ。いい夢見れる事でも祈っとくぞ。」

「ところで夢を見れる技で眠らせたの？」

「いや、今回の話を夢だと思わせる為に夢は見ない技で眠らした。」

「へえ、考えてるね。」

「それでも一応作者だぞ？このくらい考えて当然。」

「いつもより話も長かったしね。」

「記念の話だからな。」

「だよ。それでは皆さん次k。」

「それでは皆さん次回もお楽しみくだs。」

「それでは皆さん次回もお楽しみください。」（早口

「負けた！」

### 31話：ポケ役主人公で日常！

@悟視点@

「ZZZZZZ」

起きろ赤信号！起きろツツコミ！起きろ深海のカビ！

「誰がカビだああ！！」

おつ、起きたな。俺だよ俺。

「・・・俺俺詐欺？」

YES！

「認めるな！ってか何でポケ役視点なんだよ！？」

いやー前回はお前の正夢だけで終わってしまったから今回は目立とうと・・・

「前日も十分目立ったたる！ってかやつぱり夢か！」

お前昨日1日中寝てたぞ？

「どっかで聞いたことが有るような台詞だな。」

・・・心臓麻痺で休みのお前は聞いてないはずだが。

「チョット待てーい！俺がいつ心臓麻痺になった！？」

この世が滅びる時だ。

「未来かよ！ってか滅ぼすな！」

滅びる位ならセーフ！

「アウトだよ！」

そうそう、そこから外の会話を聞こえるようにしといたから。

「どうやって！？」

ただし外にお前の声は聞こえないがな。

「スルーかよ！」

広く果てしない消しゴムが目の前に

「有るわけねえ！」

ツツコミは疲れないか？

「疲れるわ！お前のせいで！」

それは悪い事をした。……って言うのはベタな奴！

「ベタな奴でいいから謝れ！」

ダンボールの車をやるから許してくれ！

「許すかああああ！！！」

「ガチャ」

「アイ！ ラブ！ プランクトンー！！」

「魅異が来たあ！そして何故プラंकトン！？」

「さー、悟も一緒にー！」

「異常者・神離・変人・馬鹿のイカレた大勇者そこに参上！」

「変なテンポでボケ役もノリに乗ったあ！？ってか神離は苗字だろ  
！」

「うわおーボケ役の悟はノリがいいねえー」

「刀の素振り！刀の素振り！」

「それは秋刀魚だ！確かに刀って付いてるが……」

「よし！悟もボケ役なことだし、学校に行こう」

「おおー！」

ツッコミ役ー残念だが今回は俺がメインのようだなー

「頼むから疲れないようにしてくれ。」

ー高校（教室）ー

ー歴史ー

「最初は歴史の授業中だ。歴史はお馴染み校長がやってくれる。」

「それでは次は……悟君。」

「都合よく当たるな。」

「あと魅異君の二人で特星の40年前に起こった戦争を再現してください。」

「無茶だあああ！！！」

「OKだよ……おい！しっかりしろ！おい！」

「これは魅異。多分隊長役」

「俺はもう駄目でした！」

「これはボケ役。副隊長役かな？あと何故に過去形！？」

「あと1人敵を倒せば泥水からちくわの穴に昇格させてやる！だから蘇れ！」

「んな無茶な・・・」

「マジ！？よし復活しました！」

「凄いな！？ちくわの穴になる為なら生き返るのか！？」

「よし！それならお前1人であるの700人いる基地を滅ぼして来い。」

「流石に無理だろ！」

「分かりました！では行って来ます！隊長の大事にしている車で隊長の家を引きずって。」

「酷っ！」

「ああ・・・って駄目だああ！！おい！まだローンが払い終わってないんだぞ！！オオオオオオオオイ！！！！・・・行ってしまった。」

「うわぁゝ悲惨。」

「今夜に自殺しよう。借金を子供に託してから死んでやる！」

「それは託すじゃなくて残すと言ったが。」

【その後隊長は自殺しましたが、副隊長は敵軍を倒して隊長に昇格して贅沢な暮らしをしました。一方隊長の子供は借金を背負ったまま一生を迎えました。・・・END】

「おお、凄く良いお話でしたね。」

「悲惨だよ！特に子供が！ってか今の話、昔に本当にあった事なのか！？」

～ 国語 ～

「特に問題無し（当てられなかった）ので省略」

～ 英語 ～



「YOSI、TUGINOMONDAI！」

「あれは意味不明な人の1人、EINGリフレッシュマン。名前がダサい人でローマ字で喋る。本当の名前はENGLISHマンらしいがカタカナが少ないので改名したらしい。中身は人間。他にもCOMIXCSマンやCHEATマンチートなども居るらしい。」

「TUGIHA、SATORUKUNGAKOTAEASAII。」

「読者の皆さんが見にくいから歯磨き粉の用に多少見やすくしろ。」

「オー、スミマセーン。デハ問題デース。主人公ノ趣味ハ何デシヨウ。」

「英語関係ないじゃん！俺の趣味は・・・釣りだな。」

「魅異の盗撮！」

「オイマテコラア！何勝手に人を犯罪者扱いしようとしてるんだよ！！؟؟」

俺の趣味。

「こ、コイツ危ない・・・犯罪者だ。」

とはいっても毎回カメラ全部壊されるんだよな！。

「当然だと思うが。」

「正解デース！！」

「なにiiiiiiii！！？」

「ガヤガヤガヤガヤ・・・」

「周りがざわつき始めた！？ってかそんな趣味はねえ！！！」

「ダッテ主人公本人ガ盗撮ッテ言ッテルンダカラ正解確定デース。」

「おおー」

「確かにその方法は有りだけど答えてるのはボケ役なんだ・・・  
気付いてくれ・・・」

く体育く

「体育は夢の中でも出てきた羽雨流さん別名教頭。羽雨流さんの名前は作者が気に入ってるらしいので名前を覚えてやってくれ。」

「いや、昨日は面白かったですね。特にクライマックスが。（ヒソヒソ）」

「羽雨流さんも見てたのか。確かに花火より面白かったな。（ヒソヒソ）」

「次の作戦はいつ位にやるんでしょうね。（ヒソヒソ）」

「さあ？そんなもの作者のデラックスな気分次第だろ。（ヒソヒソ）」

「2人共何を話してるんだ？」

ああ、昨日の殺人ドラマの話をしてるんだ。主人公の殺人犯が敵から逃げるって言う。

「作戦って？」

・・作戦って言うのは敵の軍の機械プログラムを破壊する作戦だ。

「マテマテ！殺人ドラマに何で敵軍や機械プログラムが出てくるんだ！？」

そ、それは当然敵の軍の機械プログラムが暴走して人を殺しまくるからに決まってるだろ。

そんなことも分からないくらいモヤシになったのか！？それを止めようとする主人公は5歳の子供で死闘を繰り広げて・・・

「チョット待てーい！5歳の殺人犯が敵から逃げるのか！？何か言ってる事が滅茶苦茶だぞ！ついでに作者の気分次第ってどういうことだ！？」

作者の会社が作った滅茶苦茶なドラマだからな。

「そ、それならまだ納得。」

～放課後～

「結局体育の時間はドラマの話題で羽雨流さんとボケ役が盛り上がったたからなかったな。」

まあ罰で何10週も走るよりはましだな。」

「よし、ドリーム探しに行くぞ！」

「行くかああ！！！」

「それじゃあ昼寝！」

「早く寝ろおお！！」

「ZZZZ」

「早っ！！」

「おっしや体が戻った。ってか疲れた。」

「ZZZZ・・・」

「・・・どうせなら永眠してろ。」

### 31話：ポケ役主人公で日常！（後書き）

@魅異視点@

「31話更新〜って魅異か。」

「む〜、不満なの〜？」

「そりゃ最後の言葉を取ってくからな。」

「だって私は異常者・神離・変人・馬鹿のイカレた大勇者だもんね  
〜」

「はいはい。そーいえばウィルは？」

「ウィルは混乱中〜」

「何故？まさか夢オチじゃないと気付いたのか！？」

「前回スライムプレゼント作戦（SP作戦）の時に悟が渡したスライムを起きた時に持ってたからだよ〜」

「・・・まあ大丈夫か。」

「そだね〜それじゃあ皆さん次回もお楽しみに〜」

「あつ！またしても先を越された！」

### 32話：新入生『水魅』登場！

@ 悟視点 @

今は学校にいるんだが新入生が来るらしい。別に珍しい事じゃないぞ。地球から引越してくる奴が結構居るからな毎年何人も来るぞ。女子だと言っ噂が広がっておりまーす。

「どんな奴が来るか・・・獲物を見つけたカマキリの気分だぜ。」  
「どういう気分だよ！？ってか何でカマキリ！？」

「どんな人が来るんでしょうね？」

「さあ？ってか名前さえ知らないが。」

今日はウィルの出番。魅異が居なくてもボケ役の俺が居るから休めないんだよな！。

「それは良かったじゃないか。」

良い訳有るかあああ！！！！

「波動波！」

「ドゴオオオオン！」

誰だ！？って波動波を使うのは当然・・・

「何やってるんだ校長！？」

校長だ。ってか波動で扉を壊すなよ！

「グッドモーニング皆さん。」

「アンタのせいでバッドだ！」

ってか皆は何故ツツコミを入れないんだ！？ ああ皆啞然としてるな。

「いやー今日は新入生がこのクラスに来るので嬉しくて」

「アンタは子供か！？ってか新入生って全員このクラスに来てないか！？」

「校長の特権を利用しただけです。問題は無しですよ。」

扉を吹き飛ばすのは問題ありだろ？あと吹き飛んだ扉が何人かの生

徒に直撃してたぞ！

「とりあえず入ってください。」

「こんにちわー」

今は朝だ！　じゃなくてこの新入生・・・ツツコミ所が多いって。  
よし、特徴を簡単に書いておこう。

・体型が小6～中1くらいで高2とは思えない。

・地球から来たのに髪が黄緑な事。ウィルより少し髪が長い。瞳は薄紫。

・校長がドアをぶっ飛ばしたにもかかわらず平然としている。

・服装は黒いYシャツの上に黒く袖の短い上着を着ていて深緑っぽい長ズボンを穿いてる。

こんな所だな。私服着てるって事は・・・俺達に関わりが有るだろうな。間違いなく。

ついでに俺達は校長からの特別許可で私服OKになってるぞ。（勇者と魔王は元々OKらしい。）

「あと異常者・神離・変人・馬鹿のイカレた大勇者を見かけたら私に教えるかまたは殺すかどっちかやらないと見かけた人を殺すよ」  
こ、怖い！　つか異常者・神離・変人・馬鹿のイカレた大勇者の知り合い！？

「勇者拳っ！！」

「ヒョイ、ズゴオオオオオオン！！！！」

魅異が勇者拳を使ったあ！？　つかいつ変身したんだ！？

「私のベールを無視して貫通する程度の勇者拳を避けるなんて・・・  
まだまだ甘いねえ」

「でもあれでも全力には程遠いぞ。」

「俺はいつでも砂糖水に浸かってるぜ！」

「はいはい。」

「悟も見たこと有るはずだよ。名前は神離しんり水魅みなみだよ」

「魅異……やっぱり居たんだ。よし殺そつと」

魅異も驚いてるし！

何故駅で待つんだ！？

弟子入りしてたんだ・ ・ ・

「うっ……っ、それはちょっと失敗しただけだし」

「それじゃあ私が居なくなつた後に1回でも成功したのかな？」

「えっ……と、当然成功したに決まってるよ！ ってか何で知ってる

動揺しまくってるの丸分かりですよー。

「絶対拒否！レディの身長を聞くのは常識外！」

普通は体重だろ!?

「しょうがないな、それなら水魅が最後に測った時の身長を公開して」

「そ、それだけのご勘弁を……魅異様、神離様、大勇者様」  
神離は 안타もだろ!

「ええーだって偉そうに何か言ってたしね」

「すみません!すみませんー!!すみませんー!!!!どうかお許しを!」

「それなら私の弟子に再び戻ったら?」

「戻ります!いえ是非戻らせてください!」

「まあそれなら秘密にしくよ」

「このご恩、背が伸びるまで忘れません!」

一件落着?まあそれは良い事だけど。

「当然弟子なんだから私の所に居候するようにね」

「はい師匠!………って 居候?」

「背が伸びる方法他にも考えて有るんだよ」。

「………嫌だよおおお!!!!!!誰か助けてえええ!!!!!!」

「頑張ろう!」

ついでに水魅は寝る時は寝室(ベッドは2つ有る)で、部屋は魅異と共同で使うようになった。

・・・次の日に家の階数が増えて4階に身長アップ部屋(魅異と水魅専用)が出来て水魅の悲鳴が聞こえてくるようになった。その日は足に千切れないスライムをまきつけて魅異にジャイアントスイング(投げないバージョン)をやられてたらしい。



### 32話：新入生『水魅』登場！（後書き）

@水魅視点@

「32話更新完了。・・・で、初登場でいきなり後書きに来るとは予想外！そして小さい。」

「小さいは要らないって！奔類打！」

「ガスッ！！」

「ぐぎゃあ！釘バットはマジで止める！」

「じゃあ金棒。」

「駄目だ！とりあえずキャラ紹介だナレ君！」  
了解！

神離 水魅

かなり背の小さい高2で中1と間違われる事が多い。

魅異の弟子で身長アップ室では限度無視の身長アップ方法の実験台になってる。

得意武器は棒系の物で常識外の攻撃をする。身長の中で泣きながら武器を振り回すことが有る。

スライムがトラウマらしい。（昔に魅異が水魅をスライムの中に詰め込んで1日中放置したのが原因）

ついでに身長は百 ギャアアアアア！！！！

「連打！連打！連打！連打ああ！！！！！！」

「流石にナレ君が危ないか！？」

「うわああああん！！！！」

「泣きながら釘バットを振り回すな！そ、それでは皆さん次回もお楽しみに！ゴフア！」

### 33話：おにぎりは当たり？ハズレ？

@ナレ君視点@

ども。久々？の登場のナレ君です。私視点って事は当然何かをやりますよー。

そ・し・て！今は悟家の住人 じゃなくて悟の家に住んでる者達と烈&ジャルス&クレーと私がリビングでテーブルのそばに有るソファーに座っています。そしてテーブルには大量のおにぎり（150個位）が置いてあります。なぜこんな事になっているかですか？それは……。

くベタに回想を見てみよう！

「悟居る？」

「目の前に居るが・・・何か用かー？」

「いやー実は勇者社で新しく鬼切りを販売しようとしてただけど

」

「鬼切り！？」

「鬼切りはおにぎりの商品名でその味見を悟に頼もうと思ってね。」

」

「別にいいぞ。今日の飯当番は俺だし。」

「ありがと。」

「当然だがお前もだぞ。」

「OK……………ええー！？」

「お前の会社の商品だろ。やっぱり何か有るだろ？」

「もちろんだよ。中身が何が入ってるかわからないようにするんだ。」

「……良いアイディアだな。だが中身の具が悪ければ駄目なものは駄目だぞ。」

「ハズレ有りだよ」

「おおそうか。ハズレでも食えるものだよね？流石に。」

「食べようと思えば食べれるものだよ。ちゃんと鬼切りを食べる際は自己責任をお願いします。鬼切りを食べて何か問題があっても勇者社は一切責任を取りません。って書いて有るしね」

「責任取れよ！それ以前にそんな書かないと駄目なような物を入れるなあああ！！！！！」

「一応普通のも混じってるから大丈夫だと思うし皆もOKしてくれただから問題ないって」

「皆って？」

「烈とジャルスとクレーとウィルと水魅と私の後ろに居るナレ君だよ」

約半数の人は事情を知らないようですけどね。

「ナレ君居たのか！？ってか事情を話してやれよ！」

「来たら話すつもりだよ。あと結局悟は出るの？」

「主人公として登場しないわけ無いだろ。」

「よっ流石は主人公」

「回想完了！」

まあそういう訳で皆居ます。

食べる順番は主人公の悟から時計回りでウィル・私・クレー・ジャルス・烈・水魅・魅異でまた悟に戻るの繰り返しだそうです。気絶したら罰ゲーム有りなので絶対に勝ち残らないと。

ちなみにウィルと魅異は変身食べる番が来るたびに変身します。

「まずは俺からか。よしこれだ！」

「ムグムグもぐもぐ。」

「……おっカレーだ。」

セーフのようです。チッ。

「次は私の番ですか・・・これにします。」

「ムグムグ ゴホッゴホッ!!」

「わ、ワシヤビ味です・・・ゴホッ!」

ワサビと言いたいようです。でも・・・まだマシな方ですね。

【次は私ですか・・・じゃあこの下に有るやつで。】

区別をつけるために【】を付けてます。

「モグモグ・・・ボオオオ!!」

【辛あああい!!!】

く、口から火を吹いています!そのくらい辛いんですって!!多分唐辛子・・・

「ってか普通火なんか吹かないだろ!?!」

コメディですから火くらいは吹けます。

「俺か。正直嫌だけど最近出番無いからな!。これにするか。」

「もぐもぐムグムグ。」

「美味くは無いぞコレ!多分ミント味・・・普通におにぎりには合わないぞ!」

私も同意です。変なコラボですね。

「次は僕だね!。コレにするよ。」

「むぐむぐ」

「は、ハズレだね・・・ソーダ味のスライムみたいなのだったよ・・・」

ジャルスがハズレを引くとは珍しいですね・・・スライムが入ってるのは珍しくないですけど。

「次は俺だぜえええ!!!コレだあ!!」

「むぐむバコオオオオン!!!」

「ぎゃあああああ!!!」

皆さんの予想どおりハズレでしたね。予想が外れた人も居ましたか?

「しかも神経麻痺つきだよ」

「そんなものつけるなあああ!!!」

魅異の真実に対して悟がツツコンでます。

「次は私があんな風に・・・絶対嫌だよおお!!」

「食べないなら食べないといけない個数を増やすよ」

「ううっ・・・じゃあコレで・・・」

「むぐむぐ」

「あっ砂漠の砂味だ。予想外のこの種類はまさにオアシス」

まったく持つて意味が分かりませんが変な事を言ってるのは確かです。

「次は私だよこれですよ。」

「もぐむぐ。」

「これは空港味! O I S I I Y O ~ ~ ~」

ローマ字については置いておいて・・・空港味って気になるんですけど!

〜40分後〜

ども。ナレ君2です。ええっと全員食べ終わったようです。状況を確認すると・・・

・悟〓撃沈

・ウィル〓重体

・ナレ君〓自己崩壊

・ジャルス〓混乱

・烈〓死に掛け

・水魅〓銃乱

・魅異〓健康

って感じになってます。

「よしコレは商品化しよう」

とか言ってる元凶が1人居ます。

「よしナレ君2も今度食べよう」

無理です！（即答）

あと次の日7周目くらいに最初に気絶した烈の家には大量の鬼切りが送られてきて配達の人に無理矢理食わされたらしい。

### 33話：おにぎりは当たり？ハズレ？（後書き）

@ナレ君視点@

「33話更新完了。あつ今日はナレ君か。」

「一応ナレ君2ですが。何故あんなネタを書いたんですか？」

「一回書いてみたかったからだ。」

「それだけ・・・」

「まあいいだろ？次回は明日考えよう！」

「時間が無いですしね。」

「そうそう。それでは皆さん次回もお楽しみに！」

### 34話：変な星でツッコミ劇場2回目！？

@ナレ君視点@

まあ題名どおりツッコミ劇場をやっていくらしいですよ！今回は昔話をやるらしいですよ。

キャラ設定

悟 エメラルド 絵目良流度

魅異 お婆さん

ジャルス 今回は出番なし。

烈 お爺さん

校長 知り合い

ウィル 門番

クレー 大名

水魅 今回は出番なし。

RT・DX+ 今回は出番なし。

アキステ 前回同様、効果音などの設定・劇場監督

前回のようになんとアドリブらしいです。

「変な星でツッコミ劇場始まり始まりー」  
棒読みですか……

「時代は大昔で大名が威張ってた頃とある山奥の小屋で物語は始ま



る。」

最初は案外までもですね。

「お爺さん、頼みが有るんじやが・・・」

「何かね婆さん？」

「今から三分以内に家を高級ホテルに建て替えて欲しい」

無理でしょ！ってかこの時代にホテルなんか有るんですか！？

「いや無理。」（即答）

「それならエメラルドを大名の城の牢獄に捨ててきてください。」

「エメラルドは漢字で言えよ！」

「いやいや悟、ツツコミどころが違うでしょ。」

「息子にそんなことが出来るわけ」

「ミネラル」

「こんな子供くらい捨てても罰は当たらないから行つてきます！」

脅されて行く事になった！罰当たりますって。

「俺捨てられるのか！？」

「では送りましょう。・・・勇者け お婆さん拳！」

「ドガアアーン！！」

殴り飛ばした！そしてお婆さん拳って！？

「お婆さんによって2人は殴り飛ばされました。」

「ガンツ！！」

「「いつてえ」」

「着いた場所は大名の城の有る城下町でした。」

「あの婆さんはくたばれ。（超ボソツ）」

「あれ、お爺さんと絵目良流度君じゃないですか。」

「そこに居たのはお婆さんの知り合いでした。」

「やつと漢字で呼んでくれる人がいたあ」

「ところで2人は何故此処に？まさか夜逃げですか？」

「「んな訳ねえだろ。」」

「グウ」

「おや、2人ともお腹が空いてるのですか？」

「だってあの婆さん厳しいんだぞ・・・」

「ワシ等はここ8ヶ月飯を与えられていないんじゃない・・・」

「2人は食料クレクレ視線を知り合いに向けました。」

「残念ですが食料は渡せないんですよ。」

「何で!?!」

「2人は涙を流しながら聞いて返ってきた答えは」

「食費が勿体無いからですよ。それじゃあまた会いましょう。」

「知り合いはササツと去っていきました。」

「どうしよう・・・生きていく方法無い・・・」

「そうじゃ! ワシはエメラルドを牢屋に入れてくれば婆さんが食料をくれるかも!?!」

「漢字で呼ぶな! ってか俺はどうなるんだ!?!」

「ワシの為に死んでくれ!」

「絶対嫌だ! それなら大名漬した方が大量の食料が手に入るだろ!」

「・・・ナイスだエメラルド。」

「漢字で呼べ。」

「ってことで大名の城入り口」

「はあ、誰も来ないと暇ですねえ。大体の大名様の部下は勝手に休暇とって旅行に行ってるし・・・私も今日は休めばよかった。」

「ヒュウウウウウウ・・・」

「へ?」

「ドガアアアアアアアン!?!」

「うわああ!?! 何ですか!?!?」

「門番の後ろ（城の扉）に落ちてきたのは爆弾でそれが爆発したのであった。」

「・・・何故空から爆弾が?」

「ヒュウウウウ・・・」

「また!?!」

「バキイン！」

「………犬小屋……ですか？」

「イエース！あつ、門番さんか？はい入場券。そんじゃ〜ね〜」

「そのまま券を渡して呆然とする門番を無視してさっきの爆弾で破壊した扉から中に行くのであった。ちなみに渡された券とは……」  
「食事券……しかも期限切れですねコレ。……よし私も休暇をとりましょう。無断で。」

「まあそういうわけで城内。」

「な、何者だお前達は！？」

「俺は絵目良流度。それに入っていくなり王が座ってる方がおかしいだろ！」

「ワシはお爺さんじゃ。ついでにこんなに部屋が狭いという事はろくな暮らしをしてないって事じゃな？」

「た、確かに最近はろくな暮らしはしてないが……」

「それを聞いた2人はショックを受けました。」

「それじゃあ城には食べ物無いだろ。どうする？」（ヒソヒソ）

「そうじゃなー、町でも襲うのはどうじゃ？おの大名も誘って。」

（ヒソヒソ）

「OKOK。それに決定。」（ヒソヒソ）

「2人は町を襲う事にしました。」

「大名も大変じゃのー。どうせならわし等と町を襲わないか？」

「………確かにいいアイディアだな。よしやるか！」

「しかしそこに人影が。」

「私がそんなことを許すと思うかね？」

「そこに居たのはおばあさんでした。」

「……げっ」

「町を襲おうなんて甘いのー。そんなやつは成敗してあげよう。戦闘機力モーン！」

「なんと何処からか戦闘機が出てきました。おばあさんはそれに乗り込んで」

「上空から狙い撃ちっ」「ドゴゴゴゴゴゴオオオオン!!」

「普段の喋り方で町ごと城を破壊しましたとさ。めでたくないけどそれでよし。」

「これで変な星でツッコミ生活第2回目を終了します。」

### 34話：変な星でツッコミ劇場2回目！？（後書き）

@ 悟視点 @

「ヤバイ！昨日更新できなかった！」

「ところで途中からナレ君が居なかった気がするんだが・・・」

「ああナレ君は途中お前と烈がぶつかったせいで気絶してたんだぞ。」

「

「あの時ぶつかったのナレ君だったのか。」

「イエース。 それでは皆さん次回もお楽しみに！」



ちなみに水魅は俺のことを君付けで呼んでるな。まあ一応幼馴染だし普通か。

「それじゃあ頼んだよ」

「何の電話をしてたんだ？」

「多分ろくな話じゃないと思うが。」

「今から水魅と鬼ごっこをやるよ。高校には休みを取っておいたから」

「へっ？」

俺と水魅が思わず首を傾げる。

「ルールは簡単！今から水魅と誰かが夜の10時まで逃げ切れれば今日の特訓を免除するよ」

骨を折ることが特訓だったのか？そんな訳ねえ。

「逃げ切れなくて此処まで連れて来られたら10時まで特訓の続きだよ」

魅異は鬼だな。うん魅異isデーモンって事で。

「ちなみに鬼は私と勇者社の社員+学校の皆がフル出勤するからね」

マジでデーモンだあ！デーモン！デビル！ええと・・・人でなしって英語で何て言うんだ？

「でもそれだと師匠の方が有利ですね。私にもハンデが欲しいんですけど。」

それは無いと流石に酷いだろ。あと今頃気付いたが水魅って魅異には敬語だな。

「水魅のハンデは一般人などを盾にしている&サポート役を1人付けていいよ」

「盾にしているって師匠まさか・・・」

「もちろん攻撃で気絶させるのも有りだよ。ほかにいろいろOK」

やっぱり魅異流ルールが入ってるか。まあ水魅も頑張れよ

「サポート役は いました・・・」

って何でこつちを見るんだ水魅！まさか俺にも犠牲者になれと？

ちよつとマジで勘弁！俺の場合は既に何回か死に掛けてるって！オ

ーイ！

「悟君、サポート役を頼んでいいかな？」

「全力で断らせてくれ！水魅が大変なものも分かるが」

「それじゃあOKだね。師匠、悟君に決定しました。」

「OK」

ノオオオオン！！OKじゃないから！全然OKじゃないから！

「ちなみにサポートか水魅のどつちかが捕まればその時点で両方ア  
ウトだよ」

「・・・逃げ切るしかないな。10時まで逃げ切つてやろうじゃない  
か！

「水魅・・・こうなつたのもお前のせいだから責任取れよ。」

「了解。まあ私が悟君の盾になつて出来る限り守り通すから安心し  
ててね」

そういえば水魅って基本はやられ役だよ・・・それじゃあお言葉  
どおり盾として使うか。

「それじゃあ今から5分後にスタートだよ。あと鬼は全員 マー  
クの付いた黒い帽子を被ってるからそれで見分けをつけてね」  
そーゆー訳で俺達は家から飛び出した。当然武器を持ってだ。

（現代エリア（公園））

とりあえず広めの公園に来てみた。あと2分で開始か。

最近現代エリアの拡大のスピードが速くなってるらしく特星の陸地  
の0,0015%位が現代エリアになつたらしいぞ。第1話のとき  
の紹介では0,00005%位だったのになあ。

0,0015%って事はおよそ沖縄位の広さと言えば分かりやすい



かな？

・・・よし2分経過したし鬼達が動き出すだろな。現代エリアの状態についてはまた今度な。

「水魅、そっちには鬼は居るか　って何してるんだあ！？」

「噴水で泳いでるだけだよ。」

「泳ぐなあ！」

他の人が怪しい者を見るような目で見てくるじゃないか！

「あつ目標ターゲットが居たぞ！捕まえろ！」

水魅が見つかったあああ！！

「片方捕獲しましゲハッ！！に、逃がしました！」

勇者社員の部下らしき方が水魅を捕まえようとしたが顔面をどこから取り出した金棒で叩かれ逃がした様子。

「しっかりしろこの馬鹿上司課長野郎！こんな事だから俺達みたいな新人部下に馬鹿にされるんだろーが！分かったかこのボケが！！」

「ゲシ！バキ！ドカ！ベキッ！」

「すみません！今月の給料3倍に上げますから蹴りだけはやめてください！！！」

逆だった！ってか課長を蹴る新人部下ってどんなんだよ！？・・・  
こんなのか。とりあえず課長が可哀想+周りの人に迷惑なので・・・

・

「ミニガトリング砲！」

「ドガガガガガガガガ！！！！！！」

「ぎゃあああああああー！！！！！！！！！！」

俺はどこから取り出した通常サイズより小さなガトリング砲で撃ちまくってやった。課長、部下、水魅に弾は直撃して3人は気絶したぜ。

「そんじゃあ逃げさせてもらっぜ。」

水魅を担いで急いで走り出す。不審者じゃないし誘拐犯でもありません。ただ

「あそこに不審者がー！」

「銃を持つてるぞ！」

「誘拐犯だ！」

・・・って感じに誤解されてるゝ！確かに銃を持った高校生位の男が小学生高学年位の女子を誘拐してるように見えるが違うんです！俺は無実なので誤解は止めてくれー！

「ババババババババ」

んっ？この聞く事が多いようで少ない音は・・・ヘリ？

あー、あー、ベタにマイクのテスト中ですよ。

校長の声だ！つて上の戦闘ヘリはいつの間に居たんだ！？

悟君聞こえますかー？今回の鬼ごっここの参加権をもらったので生徒全員で参加させていたいただきましたので覚悟してください。

建物の間から更に戦闘ヘリが！？1、2、3、4、・・・・・・

・250機も居るし！

つてことで皆さん集中攻撃です！

「ドオンドオンドオンドオンドオン」

ミサイル撃ってきたあ！？

「だが甘いぜ校長！やられ役ガード！」

「ドゴゴゴゴオオオオオオン！！」

全てのミサイル攻撃を水魅を盾にして防ぐ。酷い？コイツはやられ役だから多分大丈夫だ！えっ可哀想？鬼ごっこに巻き込まれた俺のほうが可哀想だ。

「さて・・・防いでるとはいえうるさいな。・・・追跡レーダー付き対空バスター力発射！」

「ドオン・・・・・・ドガアアアン！！」

1機撃破！そのヘリの部品が他のヘリのプロペラにぶつかり次々撃破だ！

当然降り注ぐヘリの部品も水魅でガード中。

（特星エリア（40分後））

あの後へりは全部破壊たんだが・・・

「悟君のバカやるー、ばかやるー、B A K Aやるー」

「バコオン！ドガン！ゲシン！」

「盾にした事は悪かったと思うから棍棒で叩くのは止めてくれないか？」

水魅が盾にしたことが気に入らなかつたらしく棍棒で何度も頭に攻撃して来るんだ。

・・・いや結構痛いから早く止めてくれ！？

「オイ！魅異が来たぞ！」

「そんなウソに騙されるほど私は甘くは無いよ。」

「でも真実だつたらどうする？」

「・・・逃げろー！！！！！」

「逃がさないよ」

（5秒後）

捕まった・・・いや早すぎだろマジで。歩いて音速は反則的だろ！せめてもう1つ術をかけて身体能力を弱めるべきだ！

「だれかああああ！！ヘルプウウウウ！！！」

水魅は騒がしいな。そんなに魅異の罰（特訓）が嫌なのか？ってかそんなに酷い特訓なのか？

そこで夜飯食べたあと水魅の悲鳴が家中に響きわたった。



36話：地球旅行編 / 「目的はシュークリームとケーキですが何か？」 by ウィ

@ 悟視点 @

「さーて、何処に行こうかな？」

今は何処かに旅行に行こうか決め中だ。何故って？高校は校長が新作のボードゲームをやりに出かけるとかで何日か休みにしたからその間は休日になったんだ。

まあ俺的にはラッキーだけだなー

「ここは久々に釣りでも楽しむのもありだな。」

最近は忙しくてのんびりする暇も無い。決闘以外の授業はちゃんと出てるから釣りをやれないんだ。だが毎日大変だし家で寝てるのも有りだな。

「悟さん悟さん！」

おっ、ウィルか。

「おーウィル、何か用か？」

「私と魅異さんと水魅さんとジャルスさんと烈さんと地球旅行に行くんですけど悟さんも行きますか？」

今日はのんびりしたい……。だがほとんどの奴が地球に行くって事は視点はそっちになる可能性が高い……。でも普通は主人公視点だよな。

「俺は行か」

「あと作者さんが今回は旅行に行く人の視点だと言っていました。」

「勿論行くに決まってるだろ！」

作者のバカヤロー！

「それじゃあ10時に高校の出入り口に移動してくださいね。」

「分かった。」

「高校出入り口（１０時）」

「ってことで高校の警備員を殴り倒して侵入するよ」

「どういう事でだよ!？」

チヨットは事情説明くらいしやがれ馬鹿魅異め。

「いや」校長から許可を貰おうと思ったんだけど場所が分からないから殴り込みでゲートを使おうという考えたよ」

「でもそれなら魅異が探せばいいんじゃないのー？」

いつもながらナイスアイディアだジャルス。これで出番が多ければ俺はかなり楽できるのに！

「ちつつちつ、甘いよジャルス探偵」。何故なら前は多少人外だった私も術で今は歩いても音速の速さしか出せないという人としての範囲内の立場だからね」

ジャルスは探偵じゃないだろ！あと歩いて音速なら十分人外だ！

「まあ普通に殴り込みでいいじゃねえか！問題は誰が行くかだと思っぜ！」

烈、殴り込みじゃあ普通は駄目だが。

「じゃ」殴りこみで烈と水魅が囧に決定」

「はいいいい！！！！」

それなら俺も賛成だぜ。

「じゃ」ね。勇者拳」

「ボゴオオツ！ズゴオオオオン！！」

ボゴオオツが勇者拳がＨＩＴした音でズゴオオオオンが高校に突っ込んだ音だ。

「何だ貴様等!？皆の者!そこの者を捕らえろ!」

何故武士風!？

「コラア!早く捕らえろ!・・・あつ部下は皆力カシだった!」

アホだ!つか気付くの遅いだろ!

「中が砂埃で見えないのに的確なツツコミだね」

ジャルス・・・そこは分かっても無視するべきだ。

「喰らえ！スーパー烈キイック！！」

「ドガアッ！」

「私はウルトラ水魅チヨオーッブ！！」

「ドゴオッ！」

「なかなかやるな！だが甘い！奥義、武士風な男のハイパーチャンバラアタアック！」

「ベシィッ！」

「……中から非常にダサイネーミングの技名が聞こえてくるんだが。特に最後の！」

「つてか武士風な男って自覚してるだろ！？あと名付け親出て来い！第一技名にスーパーやウルトラやハイパーってベタだろ！」

「それ以前に武器使ってねえし！……武士風な男は使ってるかもしれないが。」

「魅異、あの壁の穴にレーザーでも波動でもいいから気絶する程度の技を撃つとけ。」

「OK」 地・空・海・宇宙を統一する神よ、真実の勇者は此処に有り。今こそ我に力を授けよ……勇者砲！」

「ギュイン ドゴオオオオオン！」

「「「ぎやああああ！！！！」」」

「ああー、壁のヒビが大きくなった……」

「少し強すぎるだろ。壁がさっきより破損してるぞ。」

「あれでも最弱に近いよ。勇者弾にしといた方が良かったかな？」

「ところで何で呪文なんか唱えたの？」

「俺もそれは気になったな。馬鹿魅異が呪文有りの技なんか使っわけが無い。」

それ以前に呪文を覚えられないだろうな。

「やっぱり勇者には技の使用前の台詞は重要かと思ったからそれっぽい事を言ってみただけだよ。」

やっぱり馬鹿らしい理由だな。

「とりあえず行くか。」

く地球（日本）く

「さて到着！」

えっ？途中が省略しすぎ？気にするな。・・・とりあえず説明するか。

俺達は日本に居て魅異の家を集合場所にして5時まで自由時間にしたんだ。

・・・魅異の家と言うがさっきまで別の人が住んでたんだが魅異が脅し取っ・・・じゃなくて半平和的な話し合いで貰った家だ。さて・・・

・俺もどっか行くか。



ちなみに途中ケーキバイキングの店でケーキとシュークリームを  
ばい位食ってたが見なかった事にした。

36話：地球旅行編／「目的はシュークリームとケーキですが何か？」b y ウ イ

「更新が遅れてすみませんでした！今回はこれだけです！それでは皆さん次回もお楽しみに！」

### 37話：地球旅行編／差別すごろく！

@悟視点@

「さて、もうすぐ5時だしそろそろ戻るか。」

今日は結構のんびり出来た。公園にシート敷いて寝れるって素敵だあー！

・・・ちよつと喜びを大きく表現しすぎた。俺はツツコミ役の方です！

「今日の晩飯どうするか・・・俺は昨日朝飯担当したからウィルが魅異に任せるとするか。」

・・・んっ？あのコートを着てダンボールの家で1人でボードゲームをしているのは

「校長！？」

「この声は・・・悟君ですか。何故こんな所に？」

校長でした。ホームレスのつもりか？

「校長こそ何故此処に？」

「ボードゲームをやるうと思ったんですが相手が居なくて困ってたんですよ。」

あつ、嫌な予感！

「そうですか！それじゃあ俺はこれで。」

「それではまた会いましょう。」

あれ！？此処は引き止めてボードゲームをやるうと言つよな普通！まあそれはそれで好都合！グッバイ！

（前回魅異が奪い取った）家）

「・・・で、何で校長が居るんだ？」

「すごろくゲームを皆でしようと思ったので来ました。」

何で俺より先にこの家に着いたんだ！？ってか何で此処だと分かったんだ！？

「私は当然参加だよ」

「師匠が出るようなので私も。」

「俺も出るぜえ！！！」

「僕も出るよ」

【出番が少ない私も参戦！】

ナレ君まで！？

「皆出るようですよ悟君。当然主催者の私も出ます。」

「しょうがない・・・俺も出るか。」

皆出るんなら文句は無いしな。

「それでは・・・邪の呪いゲームの開始です！」

「グウン！」

・・・すごろくに吸い込まれるんですけどおお！！！！

く差別すごろくフィールドく

「いてて・・・此処は？」

殺風景な少し広めの部屋だな。中心にすごろくボードが有る。

「此処は何処だろう？」

少しは動揺しろ。

【此処が私をレギュラーキャラに加えるための部屋か？】

ナレ君はレギュラーには入れないと思うぞ。

「楽しみだね」

この状況を何故楽しめる？

「燃えて来たぜえ！！！」

それなら水でもかけてやろうか？

「師匠ー！何処ですかー？」

隣に居るだろ！

「へえくこんな風になるんですか。」

校長も知らなかったのか・・・って！

「校長このこと知らないのか!？」

「ええ。初めて遊びますよ。」

「じゃあ邪の呪いゲームの開始とか言ったのは!？」

「説明書に書いてありました。あと終わらないと出られないようです。」

嫌な予感的中!終わらないと出られないってどんな仕組みだよ!?

「とりあえず順番を決めるか。勝った奴から時計回りでいいだろ。」

「ジャンケン中・・・ジャンケン中・・・」

アイコが30回位続いてようやく決まった!魅異・水魅・校長・ジヤルス・俺・烈・ナレ君の順番に決まった。ちゃんとコマは6個有る。

「じゃあ私のターンで行くよ。そりゃー。」

出た目は4みたいだ。

「4つ進めてー・・・あつ何か出たよ」

指示みたいだな。ええーつと次の番の人に勇者拳をするだって。威力は超手加減でやることだって。

「し、師匠・・・可愛い弟子にそんなことするはずがありませんよね?」

「勇者拳」

「ズコッ!」

「ゲフウ!」

やつぱりやった!此処は地球だが勇者拳喰らって水魅は大丈夫か!?

「つ、次は私のターン・・・それっ」

出た目は・・・1・

「指示は・・・最悪だよ」

最悪?そんな訳・・・最悪だなこりゃ。1つ前の人から勇者拳をくらうだって。

ってか何で使う技が決まってるんだ?

「勇者拳」

「ズゴオオッ!!」

「さっきより威力が上がってますよお!」

「次は私のターンですか・・・1ですね。」

あつ水魅と並んだ。

「指示は・・・もう1マス進むと出ました。」

水魅とは違う指示が出たな。

「此処の指示は・・・もう1マス進むと出ました。」  
マジ!?

「ええつと、またです。」

ループ・・・

5分後

校長が最初にゴールで部屋から消えた。なるほどゴールすれば帰れるのか。

「僕のターン!・・・2が出たよ。」

指示は・・・特になし　いいなあ。次は俺か。

「俺のターン!・・・6だ。」

指示は・・・次の自分のターンまで逆立ち・・・そらっ!・・・ああ、長いこと逆立ちなんかやってないからキツイ!

「俺のターンだぜ!!そらあ!・・・1だ!!」

指示は・・・逆で読みにくい・・・えつと爆弾の雨に巻き込まれればもう1マス進むだと。

つて事は進まなくても良いのか。普通は進まないよな。だが・・・

「俺は爆弾に巻き込まれても構わないぜ!魅異!!」

「まかせて」。ガムが降り注いだと思ったら爆弾だったと言う悲劇  
」!

「ドゴゴゴオオオオオン!!!」

烈は自らやってくれと頼んでるし。此処は地球ですよ。

「ハハ・・・ハ。これで・・・もう1マス進めるぞ・・・」

」

その指示は・・・雷に巻き込まれればもう1マス進ませてやろう。  
・・・だつて。

「よし魅異！頼む！」

・・・復活早いな。」

（10分後）

「ズゴオオオン！！」

烈はさつきからあの調子で攻撃受け続けてるが 地球なのに良く生きてられるな。

「よっしゃ・・・これで・・・ゴールの1歩前だ。指令は・・・  
何い！？」

おつ、嫌なのでも出たか・・・ってこりや最悪だな。振り出しに戻れ  
だつてさ。

「そんなあああ！！！！」

つてか長すぎた罰だ。俺はずっと逆立ちのままなんだぞ！！あと振り出しには指令はなしだからな。

【次は私のターン！3ですね。指令は・・・次の人にミネラルと名の付く技を受やがれ！？何故命令口調！？】

「ミネラルレーザー」

「ズバアアア！」

貫通したようだがまあ自動回復するだろ。

（1時間後）

「やっと帰ってこれたあ。」

マジで疲れた。流石は邪の呪いゲームと言われてるだけの事は有る

な。

ちなみにジャルスは俺より少し先に帰ってきた。  
残りは魅異の攻撃でも受けてる頃だろ。

「って料理作って無いじゃん！……しょうがないから俺が作るか。」

「流石は悟だねー」

ジャルスも作れるはずだが。

「我が校の誇れるツツコミ役ですからね。」

料理とは関係ないよな。

その後はまあ普通にのんびり過ごせたから良かったぜ。

ちなみに残りが帰ってきたのは次の日の朝飯食ってる時だった。



### 37話：地球旅行編／差別すごろく！（後書き）

@ 悟視点 @

「37話更新！」

「結局校長は出てきたな。」

「元々出すつもりだったからな！」

「ところで邪の呪いゲームって何だ？」

「フッフ、この小説での重要ストーリーのアイテムに関わるゲームだ。」

「おお凄いな。それより更新ペースはどうだ？」

「もうすぐテストだからテスト勉強により更新ペースは遅れる可能性が……」

「……まあテストならしょうがないな。それでは皆さん次回もお楽しみに！」

「言われた！？」

### 38話：地球旅行編／何とかマンは職業！

@ 悟視点 @

今日は何処に行くか・・・ゆつくりしたいから公園で良いか。

朝はヤラレ役＋魅異が帰ってきたからゆつくり出来なかったからな  
ゝ。

「とりあえず行ってみるか。」

ゝ公園ゝ

おおゝ流石に公園だと変な奴も居ないようだ 修正。公園でも変な人は居るようだ。

デカイ本に乗って坂を滑ってる奴なんか普通は居ないだろ？

「イヤッホオオオウー！」

つてこつち来たー！！

「ジャアアンプー！」

本と一緒に漫画みたいなジャンプした！？あゝ、でも前にはフェンスが・・・

「ガシヤアアン！！」

ぶつかった。・・・帰ってよいかな？

「NOだ！勝手に帰るんじゃない！」

チッ、逃げれなかったか。っつーか心を読むな！

「漫画では心境も文字で出ていて心でも分かるものだ！」

これは漫画じゃねえよ！小説だ！

「つてか喋れ。漫画では心境より喋る部分の方が多く書かれて」

「分った分かった。あと此処は小説だ。」

「小説小説って・・・お前はnovelマンの見方をするのか！？」

「novelマン？・・・EINGリフレッシュマンの知り合いか

？」

ＥＩＮＧリフレッシュマンを知らない方は３１話を見れば見つります。

「確かにその通り。私は」

「comicsマンだろ。」

「何故分った！？」

漫画漫画叫んでるからだ。

「なるほど叫んだから分ったのか。まあいい勝負だ！」

「何で！？」

「宿敵同士が出会ったら勝負するのは常識だろ！」

「宿敵同士でもないしアンタと会うのは初めてだぞ！」

「うるさい！漫画のセオリーに文句をつけるな！」

俺は漫画じゃなくてあんたの思考に文句言いたいんだけどな。

「私に文句を言うだと！？もう許せん！」

ああ、思考読めるんだった。しょうがない・・・おいポケ役！

「此処は何処！？俺は誰！？」

うるさいわ。此処は地球でお前はポケ役の俺だ。

「なに！？俺がこんな主人公らしくない奴だも」

とりあえず目の前に居る奴を倒しとけ。地球だから手加減しながらだ。

「OK！それじゃーチェンジ！」  
チェンジ。

「ってわけで行くぞ！この泥団子野郎！」

「うるさい！一人で会話しやがって。」

「「漫画ジャンプ！ピョんピョん！」」

「そのころ」

「これで３件目」

「あのーそろそろ終わりにしませんか？」

「それじゃあこの位で終わりー」

私はネットカフェのPCに私特製のウィルスに感染させてたところだよー

良い子や悪い子や大人気ない大人はやつたら駄目だよー

「あつ、女子高生が3人のチンピラに絡まれてるよー。スルースルー。」

「いや助けましょうよ！」

「ええー、めんどくさいよー」

「・・・お礼を貰えるかもしれませんよ？」

「よし助けようー」

「こら貴様等やめろ！」

「あつ誰かが助けに行つたみたいですよ？」

「えーっ!？」

「何だお前は？」「俺達に物価売ってんのか？」「物価じゃなくて喧嘩だろ！」

一気にチンピラが喋りだしたねー。一部漫才になつてゐるしねー。さてー、

「貴様等のようなあくをほつとく私じゃない」

「ゴスッ！」

「なに・・・後ろから・・・だと・・・」(気絶)

「何であの人を助けようとしてる人を気絶させてるんですか!？」  
お礼を横取りされないためだよー

「ああーもー・・・それじゃあちゃんと助けてあげてくださいね！」  
大丈夫だよー

「おい、お前は何だグハア！」

「早いぐぎゃああ!!！」

「ぐがああ!!」

「一丁上がり」

「あのく殺してませんよね?」

あと1年と半年で意識を取り戻すくらいの攻撃だよ

「そうですか・・・って駄目でしょ!」

まあまあ、それよりお礼貰わないと。

「あゝ大丈夫だった?」

「あ、うん。私は大丈夫だけど ゲツ!」

「およ?」

「あ、アンタは・・・ いや、魅異がこんな所に居るはずが・・・」  
(ぶつぶつ)

「魅異さん知り合いですか?」

うゝん、知ってるけど思い出せないなあゝ。

「そ、そうですか・・・ (あの人可愛そうに)」

「と、とりあえずアリガト! 私急いでるからこれで!」

「そう? 次会う時までには思い出しておくね」

「忘れてたんかい! っつか思い出さなくていいからね! 絶対!」

あゝ行っちゃったね。次見かけたらお礼もらおうと。あと

「いたたた・・・ハッ、確か私は後ろから不意打ちされて・・・」

「あゝ気絶してたから私が助けたんだよ」

「おおそうか! いやー今日家を追い出されたから仕事をして持ち金を稼いでたところなんだ。そしたら私の娘がチンピラに絡まれてて助けようとしていたんだ。」

「・・・それってもしかして」

「いやゝ家を追い出すなんて酷い輩ですね。 名前は?」

「確か神離」

「水魅ですかー!?」

「いやいや魅異さんでしょ!!」

「そうそうそんな名前。知り合いかね?」

「元・友達なんですが最近犯罪をやり始めてきて困ってるんですよ」

」

「それは大変だね。今度警察に連絡しておこう。」

「気付いてください！黒幕は目の前に居る魅異さんなんですよ！」

「ところで貴方の名前は？」

「私は<sup>クリ</sup>繰<sup>ニンゲ</sup>忍愚マン。本名は<sup>やすい</sup>安井 品物<sup>しなぶつ</sup>だ。」

「安い品物と読めませんか！？」

「安い品物と読めるね」

「そうなんだ！それが原因で変な仕事しかやらせてもらえないし娘は別の名前と苗字で生活するし作者には馬鹿にされるし・・・私にこんな名前を付けた作者の馬鹿やろー！」

「娘の名前は？」

「えっ？娘の本名は<sup>やすい</sup>安井 品価<sup>しなか</sup>だが。私には気付いてくれなかったみたいなんだ。」

ブッ、ネーミングセンス0 いやマイナス250はいくよ。品価だってー！ハハハハハハ！

「いや、同情くらいはしてあげましょうよ。」

「そ、それで偽名は？」

「偽名？ああ、偽名は確か・・・<sup>さきり</sup>狭霧 魅亜<sup>みあ</sup>だったと思う ってアレ？居ない・・・家出中だったと言った方が良かったかな？」

～元・安井家前～

@品価視点@

ってチョット待ったあ！何で私の名前を変えてないのよ！

【あつ、失礼しました！】

@品価改め魅亜視点@

まったくこれだから最近のナレ君は・・・つと話がそれたわね。

私は家出中だったんだけど家賃を延長してたら追い出されちゃたのよね・・・

だから嫌々馬鹿親父の居る家まで来たんだけど・・・入りたくない。でも此処は気分を軽くしてインターホンを押してみせる！

「ピンポン・・・ガチャッ」

「いらっしやいミアン」

「・・・」

何で水魅が居るのおお！？つかミアンって私の事！？変なあだ名付いちやってるよ・・・とりあえずは！

「間違えました！」

「バタン！」

全力でドアを閉めた。

家の形を見る限りは私の家だ。・・・表札は 元から無いわね。

「再トライよ私！頑張れ！」

よし次こそ！全力でドアを開け

「ハ口」

「うわぁ！？」「ガンッ！」

れなかった。後ろから魅異が話しかけてきたから。つか頭うつたから痛い・・・

「ななな、何でアンタが居るの！？私の家は知らないはずでしょ！」

「何でって・・・偶然かな？」

「私に聞くな！」

この予測不明馬鹿めえ！

「それより私の家に水魅が居ただけど・・・やっぱりアンタの仕業！？」

「そうだよ。元々住んでた人は追い出したからね」

追い出したって、アンタ・・・アンタ・・・良い所有るじゃない！

あの馬鹿親父が居なくなれば気分爽快！家も私のもの！

「ナイス魅異！流石は私がついさつき良い奴だと認めただけの事は有るわ！」

「まあね」

「じゃあ私も上がらせてもらうわね。」

「ええっ何で！？」

えっ、いや何でって・・・私の家だし。

「私の家だしって思ったね。」

「何で分かったの！？」

「ミアンは顔に出すぎだからね。あと此処は私たちの家だよ」

・・・はい？ミアンのあだ名は置いとして・・・あんた達の家？

「ええーっと、此処は」

「私が20億円ほどで昨日買い取ったんだよ　まあ奪われたって

言ってたけどちやっかりお金は持ってたし。まあ仕事は変えたみ

たいけどね」

「20億う！？異常者・神離・変人・馬鹿のイカれたアンタが何処

でそんな大金を　まあとりあえず泊めて欲しいんだけど。」

「おお、ヤッパリ私たちと寝たいんだ　流石は超寂しが」

「いちいちうるさいわ！それに私は別室で寝るから！」

「別室なら台所の床下しか無いけど？」

やった　この際しようがないしねうん。しょうがないから同室にしよう

「それじゃあアンタ達と同室で良いわよ。」

「本当は喜んでない？」

「そんな訳有るかあ！」

内心では喜んでるけどね。魅異にばれるとろくな事無いから黙つとかないと。

「あっそうだ。やっぱりミアンの部屋が空いてたから1人で別室使っても良いよ」

えっ！私の部屋使ってないの！？なんかショック・・・



「で、でもあんた達の特星話も聞きたいし」

「寝るまでには話し終わるよ」

「ええーっと、私の話も」

「別に聞きたいなんて思っただけから」

グハツ！じゅ、純粹に傷付くよその発言・・・私の心に慰謝料取れるくらいの深い傷が

「そうそう！私1人だと危ないし」

「自分の家だから大丈夫でしょ」

あつ、そうだった。

「でも泥棒とか強盗とか」

「昔に殺人犯を1撃で仕留めた事有るよね」

「何でそんなことは覚えてるのよ!？」

私の名前は忘れてたくせに！

「まあまあ、それで他に理由は？」

他に納得しそうな理由・・・無いなあ。

「その様子じゃ無いようだね」。ミアンは1人決定」

何でそんなに嬉しそうに言うかな!？」

「あと私達は今日の夜11時に帰るから。」

えっ!？今日帰るの!？」

「そうだね、別に同じ部屋で寝て良いよ」

「いいの!？」

「条件を満たせばね。条件1は 私は超が付くほどの寂しがりやなので一緒に寝させて! と泣いて頼む事だよ 演技力によっては駄目になるけどね」

「超が付くほど嫌なんだけど・・・と、とりあえずやるわよ。」

・・・わ、私は超が付くほどの寂しがりやなので一緒に寝させて」

「ハイ失格」

「何で!？」

「もうちょい感情みたいなのを込めないと私には伝わらないよ」  
「アンタに伝わる事なんか有るのか!？こうなったらヤケクソよ!」

「私は超が付くほどの寂しがりやなので一緒に寝させてー!!」

「OKOK」。抜群の演技力だよミアン。まるで本当にそう思ってるみたい」

いちいちムカつく発言はやめい!

「他人にばれてたら絶対に引越そう・・・」

「じゃあ次ね。隣の家に叫びながら入っていきな」

「いや無理だつて!」

「じゃあ手伝ってあげるね。魅亜は超寂しがりやだよー!!」

!

なんて事を叫びながら走ってるんだ馬鹿あ!!

「ちよつと待ちなさいコラア!!」

10分後

「ほらね。やれば出来るよ」

絶対に引越そう!!そしてこの周辺には近づかないようにしよう! ナイスアイディアだ私!

「もう疲れた・・・」

「じゃあ最後ね。私たちの高校に引越そう」

「ええー、うん良いよ。」

「ミアン? アッサリOKしすぎじゃない? 面白くないんだけど」

どうせアンタが原因で引越すつもりだったんだから問題ないし。つてか面白いな!

「それじゃあミアンは寝るときは私達と同じ部屋ね」

「うん。とりあえず分かった。」

「ちなみに今日の11時に帰るから泊まってかないよ」

「うん。・・・つてそれじゃあ何故アンタに従ってたんだ私!?」

「さあ? とりあえず校長に転校手続き頼んどくね」

ああー、今日の出来事が誰にも見られてませんように! (隣の突っ

込んだ家は留守だった)

「あとドアから覗いてる水魅はどうする？」

「・・・・・・後で何とかするから心配しないで。」

「心配してないから安心して」

また傷付く発言を！

それでそのあと転校手続きしたり、自己紹介したり、中学の時の同級がその中にいたり（水魅・魅異・悟）、特星に行つて3時まで説明を聞いたり、高性能なんとかつてのを食べたり、まあいろいろ大変だった。でもこれからの方が大変な気がする・・・・・・

あ、そうだ。

「ムニャー、何のようミアン　によあああああ！……！」

水魅に攻撃した。これで覗いた事は忘れと思うんだけど。まあ眠いので私はこれで。

### 38話：地球旅行編／何とかマンは職業！（後書き）

@悟視点@

「更新ペースがやばい中38話更新！」

「遅い理由は何だ？」

「テストが近いんだよ！学校もあんなに宿題出しやがって！しかもクラブは朝練やれとか言うし！」

「あゝはい分かったから。」

「あとナレ君！キャラ紹介！」

了解しました！

魅亜

性別：女

本名は安井 品価。フルネームは狭霧 魅亜だったが特星に引越してから魅異に苗字を神離に変えるように言われて変更した。

ツッコミ役で超が付くほど寂しがりやでさらには強がりと言う性格である。

特殊能力や得意武器はそのうち紹介。（早ければ次回）

1部からはミアンと呼ばれている。

髪はウェーブヘアで、黒だったが特星に来たら変色してやや青交じりの緑色になった。

こんな感じですね。

「それでは皆さん次回もお楽しみに！」

「だからそれは作者の俺が言う台詞だ！」

39話：店内では他のお客様の迷惑になりますのでお静かにお願いします！！

@悟視点@

「晴れる晴れるおお！！晴・れ・ろおおおお！！！」

「店内で騒ぐな！！！」

「「バコオ！！」」

「「ぎゃう！！」」

俺達は今（普通の）喫茶店に居るんだが魅異&水魅が晴れる晴れると異常にうるさいから、

俺が魅異に魅亜が水魅に顔面パンチをお見舞いした。見事なハモリだ。

あと魅亜がツツコミ役で良かった！ポケがこれ以上増えるのは精神的にきついからな。

今のメンバーは見ての通り神離達+俺だ。あと魅亜も苗字を神離に変えたらしい。

「イタタ・・普通いきなり人の顔面にパンチなんかする！？」

「アンタの体力は普通以上でしょ！ヤラレ役だし。」

「じゃあ私は？」

「異常者・神離・変人・馬鹿のイカレた偽勇者。ところで何で晴れる晴れる言ってるんだ？」

「私は師匠の命令でやっただけです！」

そう主張する水魅。それに比べ異常者・神離・変人・馬鹿のイカレた偽勇者は

「私と水魅は黒幕から20円とポケットティッシュ1つを罔に取られて それで・・それが原因でやっただけです！私達は悪くない！」

口調を変えて何か言ってるし。第一20円とポケットティッシュ位どうって事無いだろ！

「悟さん・貴方、今20円とポケットティッシュを馬鹿にしましたね？20円とポケットティッシュを笑うものは20円とポケット

ティッシュに泣くと言うでしょう！」

「師匠の言うとおり！」

そんなこと普通は無いと思うぞ魅異と水魅。

「アンタねえ、周りに人が居るんだからもう少し静かに+まともな事を喋りなさいよ。」

「ミアンの言うとおり！」

水魅はどっちの見方だよ！？

「お客様！他のお客様の迷惑になりますので店内ではお静かにお願いします！！！」

あつ、すみません！と心の中で謝る。つてかあんたが一番うるさい！

「「「「「うるさい店員！アンタが一番迷惑だ！！」「」「」「」

ほらみる他の客全員から言葉が返ってきた。

「す、スミマセンでしたあつ！」

流石の店員でも尻尾を巻いて逃げたな。尻尾無いけど。

「うるさい店員だったねー」

「師匠の言うとおり！」

原因お前達だろ。つてかいつまでそれ続けてるんだ水魅？

「でも今日の授業に比べたらだいぶんマシだと思うけどね。」

「ああー、確かにあれは酷かったな。」

魅亜が言ってるのは今日の授業。魅亜が新入生として自己紹介したあと何処かの誰かがお祝いにカラオケをしようとか言い出して校長が自分の立場を利用してOKしたんだ。

でもカラオケマシーンが無くて町の住民への放送用マイクで町への放送OFF・校内放送ONで歌ってたんだが・・・

最後に烈が歌う時に腕が放送用の機械に当たったらしく町への放送がONになってしかも烈がラストだからとマイクの音量をMAXにして歌ったらしいんだ・・・大声で。

もう悲劇だったな。俺達は町への放送スイッチがONになったのと烈がマイクの音量をMAXにしたのに気付かなかったのも原因かもしれないけどなー。

そのとき魅異もノリで一緒に歌ってたせいで迷惑2倍だったし。

それに高校に苦情の電話が殺到して大変だったんだぞ！教師達が。

「いやゝ、あれは楽しかったよねゝ」

「師匠の言うとお　うわつ、このコーヒー苦いよぉ！」

どれだ？・・・見る限りブラックコーヒーみたいだな。

「ブラックコーヒーじゃないのそれ？」

「た、確かblack dark curse revenge  
coffee　って書いてあったよ！」

ブラック　ダーク　カース　リベンジ　コーヒー！？名前からして  
明らかにヤバイだろ！

「それなら私も何回か飲んだけど何とも無かったよゝ」

「さ、流石・・・師匠」

そつえば此処に着いたとき無料ドリンクバーを全員で頼んだが普  
通は喫茶店にドリンクバーなんてあるのか？

「コーヒーを飲めなかった水魅はペナルティーを与える！」

「ひょええええ！勘弁してください！私の家族が家で待ってるんで  
すよぉ！」

「駄目だ。我々の決定に変更の2文字は無い！」

「平仮名で4文字ですよ！！」

「漢字で2文字であろぅが！！！」

「4文字！！！！」

「2文字！！！！」

「4！！！！！！」

「2！！！！！！」

「いちいちウルサイ！！」

「ズゴッ！！」

「ッブッ！！」

魅垂の左ジャブが魅異に、右ストレートが水魅にヒットした。  
ツッコミ上手だなゝ。

「すみマセンでした。私と師匠を許してください。」

すぐ謝る水魅と・・・

「そろそろ帰ろう」

すぐ帰る魅異。同じ苗字でもこんなに差が出るとは。

「師匠が帰るらしいので私もさっさと帰るね。」

前思考撤去。やっぱり2人とも同じような者だな。

「それじゃあ皆で帰らないとね。」

「そうだな。よし帰るか。」

それでドリンクバー代を払って喫茶店を出た。おつ4時だ。

代金を払う時に20円足りなくて借用书を書いた事は秘密だぞ。  
本当に20円とポケットティッシュを笑うものは20円とポケット  
ティッシュに泣く状態になってしまつとは・・・



39話：店内では他のお客様の迷惑になりますのでお静かにお願いします！！

「39話更新」。眠いです！あと最近気付いたんだけど更新が遅いのはテスト以外にもクラブが夏は普通より長い時間が有るからです！あとは自分の気分……。早く秋になれ。それでは皆さん次回もお楽しみに！」

## 40話：現代エリアで暇つぶし！

@悟視点@

今日は学校が休みだから俺・魅異・ジャルス・烈の初期レギュラーメンバーで現代エリアを歩いているところだ。

あー、やっぱり前言撤去。魅異は中学や小学の時に給食を乗せて来るようなワゴンに乗ってるな。しかも勝手に動いてるし・・・どういう仕組みだよ！？

「いやー、今日は痛筋肉だからこのワゴンでしか来れなかったんだよー」

「痛筋肉ってー？」

「筋肉痛の読み方を魅異が勝手に変えたものだったと思うぜー！」  
ジャルスの疑問に烈が答える。　「ってか俺も何のことだ！？って思ったぞ。」

あと痛筋肉が筋肉痛と分かる烈も魅異同様おかしい気がする。

「言い方が紛らわしいから次からW筋肉って意味にしろ。」

「OKー」

OKなんだ！？冗談で言ったんだぞ俺は。

「痛筋肉の意ゝ味はあ、W筋肉ー　W筋肉ー　W筋肉ー　フフウー」

「変な歌だねー」

「魅異のゝ歌はあ、とても変ー　とても変ー　とても変ー　ハハアゝ」

魅異と烈、変な歌を街中で歌うな！ジャルスだけまともだけど。　「ってか変な歌だと思っんなら真似するな烈！」

「痛筋　ああー！！雪ダルマ販売店発見だよー！レッツGOー」　烈  
邪魔だよー」

「ドンッ！」「ぎゃああああー！！」「ドガアン！」

雪ダルマ販売店！？今の季節にそんなのやってるのか！？  
そして烈が魅異に突き飛ばされて4tトラックに突っ込んだ！

（3分後）

「おまたせ」

上機嫌に魅異が帰ってきた。烈は現在も車に轢かれてるが皆スルー。  
「何か買ったのー？」

「もちろんだよー 見よ！これぞ名槍・超激軽レインボー槍・改！」  
・・・口調が変わったのは良いとして それが名槍！？

いや、どう見たって様々な色の超細い紙コップを接着剤でくっつけて先にクラッカーを逆向きにくっつけた子供用の遊び道具にしか見えないうんだが！

それ以前に雪ダルマ販売店に何で槍が売ってるんだ！？

「多分それは偽物だと思うよー」

「俺もそう思うが。」

「ならば我が技を受けてみよ！新技・レインボーショット！」

口調を戻せ！って！

「ズゴオン！ズゴオン！ズゴオン！ズゴオンバリイン！！」

「武器は使い手を選ぶんだよー この武器も私みたいな槍使いなら使いこなせると思うよー」

「流石は魅異だねー。」

「あ、ああ。そうだな。」

でも武器の棒部分の紙コップを投げるなんて槍使いなら絶対しないよな。

しかもあんな音出しながら銀行の防弾ガラスと巨大金庫を貫通するなんて普通じゃ無理だ！

ジャルス・・・こういうときにツツコミを入れてやれよ。

「それじゃあ次行ってみよー！」

「「おー」」

「高校」

「・・・で、何で今日は学校休みなのに此処に来たんだ？」

「私の傷が高校に来ないといけないうって反応してるんだよ」

「お前に傷？そんなの宇宙が消滅してもありえねえだろ。」

「そういえば此処って特星エリアのはずだよな。」

「そのはずだよ」

ジャルスが答える。

「・・・なんで現代エリアの中に有るんだ？」

昨日まで此処は特星エリアだったはずだぞ。

「それは私の会社が現代エリア広げよう計画を進めてるからだよ」

「

「お前が原因かい！」

「あつ、悟君に魅異君にジャルス君じゃないですか。」

「校長！？」

何で今日を休日にした校長が此処に居るなんて・・・ありえねえ。

「校長ー、前に貸した『宝クジを当てよう5月号！』の雑誌は読み終わりましたかー？」

ジャルスそんなの校長に貸してたのか！？

「いやあ、それがまだなんですよ。流石に500Pも有ると中々読み終われないんですよ。でも昨日この雑誌に書いてある方法で200万セル当てましたよ。」

500P！？もはや雑誌じゃなくて本だ！そして200万セル当たったのか！？・・・今度貸して貰おうかな？

「悟、次に行くよ」

「あいよ。」

「高等槍部練習会場」

「「ぎやあああああ！！」」

今は逃げてます！30kgグラムの重りを足に付けた先輩2人と一緒に全っ力で逃げてます！何故かって？

後ろから俺達目掛けて槍を投げってくる隠納さんと魅異が居たら普通は逃げるだろおお!!

簡単に言っと

・魅異と一緒に高等槍部練習会場に行った

・隠納さんが重りを付けた先輩2人を追っかけてた

・魅異が何してるかを聞いて「槍投げの練習」と隠納さんが答える

・魅異が「面白そう」と言っただので俺は身の危険を感じてダッシュで走る

・その直後に魅異の槍（&バナナの皮）が飛んできたので両方を避ける

・隠納さんも再び槍投げを開始

・俺は先輩達と合流して今の状況に

まあこんな状況だ!マジで何で槍投げの練習してるの!?!槍魔術の影響!?

とにかくヘルプミー!!

↓50分後↓

「に、にげ・・・逃げ切った・・・」

マジでキツイ!3000秒も全力疾走で走る事になるとは。

先輩2人は途中でスタミナ切れが原因でスピードが落ちて槍が直撃して気絶してるな。

「凄いわね」悟君。この槍投げから逃げ切るなんて流石は有名ツツ

「コミ役ね。」

「有名？」

「何で俺が有名なんだ？」

「いや、私のツツコミ役って事で有名らしいよ。」

魅異のツツコミ役・・・確かにアイツへのツツコミをしてる奴は俺とウイルくらいだよな。

「いてて」「ふあ」

あつ、先輩達起きた。

「あ、死ぬかと思った。」

「絶対に逃げ切れないって。」

確かに俺でも逃げ切るのは無理だと思う。（実際は逃げ切った）

「でもその悟君は逃げ切ってたよ。」

「そうそう」

「マジで!？」

「あつハイ。確かに逃げ切りました。」

先輩達2人が驚いて聞いてきたから答える。そんなに凄い事か？

「あの槍投げを逃げ切ったのか凄いなー。俺は端豆目はしずめ 馬那無まなぶって名前だまあよろしく。ちなみにふあって言って起きた方。」

「俺の名前は黒布くろふ 核炉かくろでいてて と言って起きた方だ。」

「俺は雷之 悟って言います。」

普通に自己紹介をする。

「よし、自己紹介も終わった事だしもう一回槍投げ練習でもするのはどう？」

「いいね。それじゃあやってみよ」

「マジで却下!」

俺と先輩達のトツコミが見事に決まったのと同時に俺はダッシュで高等槍部練習会場から出て行く。中から核炉さんと馬那無さんの悲鳴が聞こえてた。

あの2人がツツコミ役ではなくやられ役に見えてしまうがまあ良いか。

さて、誰も居なくなつたし家に帰るか。水魅と魅亜が多分居るだらうし。

次の日の朝、烈が車に轢かれている中ジャルスと校長は宝くじの当たりを引いたらしい。

## 40話：現代エリアで暇つぶし！（後書き）

@悟視点@

「ああーどうしょー!?」

「珍しくあわててるなアキステ。いつもなら40話突破あ！的な事を言うのに。」

「40話突破あ！これも読者の皆様がこの小説を見てくださってるからでございます!」

「立ち直り早っ！でもその割には評価と感想が」

「シヤラアアップ!！その先は言っではいけません」

それなら心のなかで言わせて貰うが評価と感想が普通に少ないだろ。

「何か思っただかソコオ!」

「いや別に　ところで何がヤバイんだ?」

「最近虫が多い。」

「吹き飛ばして欲しいか?」

「スミマセン！冗談でございます！実はウィルの登場回数が減ってきてるんだ。」

「ほお・・・何とかしろおお!!!」

「だってウィルの登場回数増やすと魅異が出られなくなるんだ。」  
「ボケ役が居なくなるからやむえず自動的にウィルの登場回数が増えてるんだ。」

それは困る！何とかウィルの登場回数を増やすように

言わないと・・・

「どうにかしろ!」

「いや、結構いいアイデアが有るんだ。悟がOKなら別に大丈夫なんだが。」

「OKOK。大丈夫だ！この際だから新キャラでも新設定でも何でも使え!」

「分かった！42話で公開する。それでは皆さん！次回もお楽しみ



に！」  
「評価・感想を募集してまーす。」

## 41話：負け犬の『REVENGE』

@悟視点@

「キーンコーンカーンコーン」

さくで、昼になったことだし帰るか。

「魅異、水魅と魅亜は何処だ？」

「水魅もミアンも1つ前の休み時間から居ないらしいよ」

「えっ！じゃあさっきの授業中は居なかったのか！？」

「そうだよ。気付かなかったの？」

全然気付かなかった・・・

「あと2人のカバンの中に『この子を返して欲しければ大人の人には知らせず良い子と勇者のみで100セルを持って現代エリアのパーム港の10番倉庫を改造したお城に来ましよう。【悪いおにーさんより】』って書いて有るよ」

「いろいろツツコミたいが1つ言わせて貰う 良い子って誰だ！？」  
「悟」

俺は子ども扱いですか？よし海の藻屑にしてやろう。

「よし魅異、悪いおにーさんとか名乗ってる奴を潰しに行くぞ。」

「分かりました隊長！」

口調が変わった！そして俺が隊長！？・・・悪くは無いな。

く10番倉庫を改造したお城・地下室く

@水魅視点@

「このスパゲッティ美味しいわね。」

「このグラタンも最高！」

やっぱりグラタンは普通が1番だよな。

いろいろな料理にスライムを入れる師匠はおかしいよね。

いま私達は誘拐されて城の地下に居るんだけど誘拐する人にもいい人って居るよね。

此処の人達は師匠に恨みがある人が集まってるらしいけど師匠が狙いだからって事で私達は結構良い待遇を受けてるんだよ。師匠には悪いけど此処の人達頑張れ！

「師匠たちは助けに来るかな？」

「さあ？多分来るんじゃないの？ってアンタ私の分まで食うな！」

「バコッ！」

「いたっ！お礼にグラタンに入れ物をあげるから許して！」

「許すかあっ！まてえい！」

「10番倉庫を改造したお城・メインホール」

@悪いおにーさん視点@

「いいか！奴が来たら不意打ちで一氣に仕留めるぞ！」

おおおお！！

今日こそ今までの恨みを晴らす！

「コンニャクレースだよ！」

「ドゴオオオオオオン！！」

ぎゃあああ！

コ、コ、コンニャクに乗ってきたあ！？

@悟視点@

コンニャクで突撃なんてどう考えたら思いつくんだ　って相手多っ！？

見る限り暴力団や不良みたいだな。年齢様々で2000人は居るな。コンニャクの突撃で300人近くが気絶してるけどな。

「異常者・神離・変人・馬鹿のイカレた大勇者の私参上」

「それよりどうする？ここまで人数が多いと俺は接近戦は無理があるんだが。」

「私が全体攻撃で全員吹き飛ばすから大丈夫だよ」  
ボスも

普通はボスとかは残しとくよな。

「……期待を裏切るような発言だなオイ。」

「私はセオリーよりも実用性にこだわるんだよ。特技・ミネラルスライムウェーブ」

「ズゴゴゴゴゴオオオオン！！！」

ぎゃああああああああああ！！！！

「死ぬかと思った……」

毎回大げさすぎる？実際喰らってみろ一般人なら気絶するぞ！

技名を魅異が言った途端に魅異を中心に大量のスライムが全方向に衝撃波みたいに放たれて……見事に巻き添えでした。城は跡形もなくスライムに潰されてるし。

「いや、これじゃあミアンが無事じゃないかもね」

「いつの間に居たんだ！？ってか助けて来い！」

「OK」。私の伝説の武器の子供用スコップでちよつと探してくるねえ。あつこのスライム炭酸ソーダ味だ。美味しい」

「そんなもの食ってる場合か！」

「それじゃあ探してくるねえ」

スライムの中をスコップで掘り進んでるし……ちよつと味見するか。

「おっ案外美味しいな。ゼリーみたいな噛み心地だ。デザートに今度

入れてみるか。」

そのあと無事に魅亜は救出されて3人で帰った。あと今回の奴等は魅異にやられた暴力団や不良（魅異が言うには負け犬）らしい。

「スライムがあ　周りにスライムがあ・・・誰か助けてえー・・・」

【スライムがトラウマの水魅さんは忘れられているようです。】

#### 41話：負け犬の『REVENGE』（後書き）

@悟視点@

「41話更新っ！今回は短めにしてみました！」

「次回は大丈夫だろうな？」

「次回は一応ウィルと悟の話です。主に追加設定の説明になるかもしれないませんが・・・」

「一応って何だよ！？一応って！」

「お前の出番はいろんな意味で無しだな。」

「はあ！？」

「悟の出番は有るけどお前に出番は無い！」

「いやなんで！？俺は悟ですよ！」

「うるさいツツコミ。それでは皆さん次回もお楽しみに！」

## 42話：待機場所での1日！

@悟視点@

朝からいきなり俺登場ー！久しぶりの俺視点！

言ってる事はおかしくなああいー！

俺は誰でしょう？・・・ハイそこまで！気付いた方も多いと思われる俺視点だ！

ツツコミ？そんなものでは落ち込まないポケ役の俺だぜ！

「さーて、寝ばすけ元勇者を起こしに行くか。」

移動中に俺の思考内でこの世界についてまともに紹介！1回100セル！

此処はまあ特殊な状態のやつらの待機場所だ。

ツツコミの俺視点の時にポケ役の俺がツツコミに思考内で話しかける事が有るだろ？

その時以外がここに居るんだ。元勇者の場合も同じだぞ。

此処はまあ現代エリアみたいな所だ。まあ住人は俺と魅異とウィルとまだ来た事の無いツツコミ役の俺、後は作者やナレ君くらいだな。出番が無い場合は此処で待機が基本だ。

「此処から先が聞きたい場合は5000セルと20000円の追加料をお支払ください。」

・・・5000セルと20000円足りませんがキャラにしときますねー。」

って感じに1人ことを言ってみたが返事が無い・・・空しい！じゃあ続き それで出番はあまりこないから此処で過ごしてる時間

が多い。

ウィルは（多分ツツコミ役の俺も）無理みたいだが俺や魅異は自分の好きな時に俺はツツコミ役と魅異はウィルと交替できるから作者の気まぐれなんか効かないぞ。

ああ、それだけ。追加料金を払った人は詐欺に騙されたも当然！ちなみに元勇者はこの家の隣に住んでる。起こしに行くのも楽勝だ。

「さて入り口まで到着。確か2階の部屋で寝てるはずだから・・・あの部屋だな。」

今日は魔法弾の洪水弾に決定　何がって？見てれば分かる！

「行くのじゃ洪水弾！奴等の家を浸水させてしまふのじゃ！ポンツと発射！」

「ポンツ！ガシャアアン！ザザザアア！」

窓の割れる音からして窓を防弾ガラスに変えたのか。  
おっ流れてきた。運良く2階の窓から流れてくるとは　やるねえ。

「おおーい、大丈夫か？」

「大丈夫じゃ有りません！殺す気ですか！？」

「この星やこの待機場所じゃあ元勇者でも死なないはずだが・・・」

「そういう意味じゃ有りません！あと名前くらい覚えてください！」

「アンタ誰？」



「……ハア。これでアナタに言うのは70回目くらいですけどウィルです。」

「ああ知ってるぞ。」

「そう言うのは分かってました。それじゃあ行きましょう。」

くっ、俺の普段はキレない奴をキレさせようコンボが効かないとは……  
つてか俺の行動パターン読まれてる！？悟ショック！

「ってか何で倒れてるんですか！？」

「悟ショック……全能！回復！俺ふつかあああつ！」

「全能！？」

「それじゃあ例の如く暇つぶしでもするフリをしようぜ！」

「暇つぶしなら良いですけど？」

「じゃあ暇つぶしだ。何をするんだ？折り紙で自動販売機でも作るか？」

「絶対無理です作れません！普通にテレビでも見ているのはどうですか？」

「OKOK」。今日は『変な星でツッコミ劇場2回目！？』の再放送がやってるからな。」

「あの番組はほとんどアドリブなのにテレビ放送は有ったんですか！？」

「確か生中継で放映されてたらしいぞ。俺が出てたらモヤシだらけだったのになあ」

「ところでその再放送の時間は何時何分ですか？」

「確か10時から12時までだ。」

「今は10時50分ですよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

マジですかー？まあそこまでして見たい訳じゃないが一応早く見ておいた方がいいな。

あと悟ショーックから此処まで何も考えずに喋った俺って凄い！

「あの一、悟さん？」

「やっぱり今日は雪だな。」

「何故！？雪って全然さっきまでの思考や会話に関係有りませんよね！？」

行動パターンだけじゃなく思考まで読まれたあ！悟超スーパーウルトラショーック！

「とりあえずネーミングセンスが悪いと思っんですが・・・」

「良いじゃないか！虫食いのリンゴをやるからネーミングセンスは気にするなあ！」

「虫食いリンゴなんかいりません！一種の嫌がらせですか！？」

「それじゃあ賞味期限切れの食パンの耳でどうだ！？このバーカ（ボソッ）」

「いりません！ってかさつきひそかに馬鹿って言いましたよね！？」

「特徴無しとは言っちゃおうかと思えたけど馬鹿とは言っていないよん。」

バーカとは言ったけどさ。

「特徴無し・・・確かに私は魅異さん達の中では1番特徴が少ないかもしれないけど」

「そうそう。それに最近は出番も減ってきてるし最近寝言で スミマセンでしたこの先は言いません。だからその構えてる大剣をまっはしまつて下さい流石に死なないといってもダメージは有るから食らいたくないんです。スミマセンスミマセン・・・」

一体何処から取り出したんだ？・・・まあ俺もよく有ることだが。

「私はあまり武力で解決はしたくないんですが・・・でもまあボケ役の悟さんの場合は仕方ありませんよね。」

どういう意味だよ？ってかいりこやってる間にもう6時くらいになってるんだが。

時間が経つのが早すぎるだろ。500セルで許してやってもいいが。

「それじゃあ此処に500セルおいてくからな。」

「分かった。……って今のは作者みたいなピラニア!？」

「だから関係ないですよね!？普通の作者さんでしたね。」

「それじゃあ家に戻るから。コンセントに餌をやり。」

「コンセントは餌なんか食べません!それじゃあ私も帰りますね。」

そういえばウィルの家は確か……びしょ濡れのはずだがまあいいや。

ほぐら餌だぞー。……やっぱりコンセントは餌を食わないか。

## 42話：待機場所での1日！（後書き）

@ 悟視点 @

「42話更新完了」

「スーパードツシュ回転登場おー！！」

「ドガアッ」

「アウチノーン！！」（飛んでく）

「何とか遅刻できたぜ！　ありや作者が居ないな」

俺が作者をぶっ飛ばしたのは計画犯行では有りませーん。

「絶対ワザとだろおゝ・・・」

おつ戻ってきた。流石はこの小説内ではゴキブリ以上の生命力を持つ作者だけの事は有るな。この害虫め。

「何か今すつげええ失礼な事を考えてるだろ！」

「確かにお前に例えられたゴキブリや害虫には非常に失礼だな。世界中のゴキブリ&害虫の皆さん申し訳ありませんでしたあ！」

「そっち！？そっちには謝って俺には何もなし！？」

確かにそれはどうかと思うなゝ　よし。

「作者・・・」

「何？」（次の言葉に期待している）

「・・・死にやがれこの害虫以下」

「はあ！？えっ　それ！？」（予想外の言葉に混乱）

騙される方が馬鹿なんだって。

「ところで更新が異常に遅れた理由は？害虫と家を荒らしていたからか？」

「んな訳有るかあ！テスト勉強が異常に忙しかったんだ！今日もテスト有るし！」

「今日で最後なんたる害虫。」

「害虫じゃねえ！今日で最後だから今日から今まで通りに更新でき

るぞ。まあ部活が原因で2日に1回とかなるかもしれないが。」

「それだけ分かったらお前もう用なし。帰れ害虫。」

「ボケ役悟ってそんなキャラだっけ？」

「書いてるのはお前だろ。」

「まあな。」

「ききききききき煌く夜空への蹴り上げえ!!」

「ドゴオオン！」

「ギャウチノオオオン!!」（飛んでく）

「それでは皆さん次回もお楽しみに。でも俺に100セルくれたら楽しみにしなくてもいいぞ。嘘だが。」

### 43話：雨のち追いかけてこ！所により大地震が来るでしょう！

@ 悟視点 @

今は昼過ぎで普段なら家に帰る時間だが皆帰ろうとしない。

何でか分かるか？・・・雨が降ってるからなんだが普通の雨じゃないぞ。

雨の種類は酸性雨だ！いくら不死でもダメージって物は有るから帰れねえ！

原因は学校の周りが現代エリアになった事だ。いや、正しくは現代エリアの工業地帯になったからだな。排気ガスが原因でこうなってる訳だ。

まあそういうわけで帰れないので困っているわけだ。

「ねえ、いつになったらこの雨は止むの？」

「師匠が知らない事を私が知ってるはずはありませんよ。ミアン、いつ止むか分かる？」

「私！？私を知るわけ無いでしょ！悟、パス。」

「また俺かよ！？知らねえ。魅異にパス。」

とまあ何で雨が止まないか聞きあってます。20分ぐらい。

いい加減に何か指示を出せ高校め。

「ピンポンパンポン！あゝこちら校長です。今回の雨は普通じゃないようなので高校側の指示に従って帰ってください。」

ナイスタイミング！どんな指示だ？

「全員酸性雨の中を走らず帰りましょう！雨宿りなんて論外です！それでは！ピンポンパンポン！」

あの校長に少しでも期待した俺が馬鹿だったあ！

「その通りだバーカバーカ。」

ってポケ役！？まだ存在してたのか？

「俺はいつでも何処でも存在するぜ！」

いつでも何処でも・・・それはある意味怖いんだが。

「何だと！超嬉しい事を言うなよー。」

怖がられる事が嬉しいのか！？

「ああ。嬉しいね！それじゃーなー」

結局何しに来たんだよ！？ってもう居ないか。



「まだ居るけど？」

うるさい！早く消えろ！

「へいへい」

「それで・・・どうするんだ？」

「私は歩いて帰るのに賛成だよ」

「師匠が賛成なので私も当然賛成です！」

「それじゃあ私も賛成ね。」

三人賛成・・・こりゃ決定だな。

「ミアンも賛成してくれるんだ」結構優しい所も有るんだねえ」

「えっ？ええ当然・・・ってハイイ！？」

「ミアンの意外な性格発見ですね師匠！」

「うんうんそうだね」。

「ちよちよ、ちょっとストオップ！今の発言無し無し！」

「「そんなの駄目に決まってるって」」（逃げる）

「待てええええい！！！」（追いかける）

酸性雨の中追いかけてっこって・・・しょうがない 追いかけるか。

＼ 4 時間後（家のリビング） ＼

「ゴメンなさい！スミマセン！スミマセン！ゴメンなさいいいい！むぎゃああ！！」

いま魅亜がうつ伏せの水魅の上に馬乗りで乗って首を思いつきり引っ張ってる。なんかメキメキ音が鳴ってる。ってか魅異も見えてないで助けるよ！

「高校でのことは忘れる？」

「ご、ゴメンなさい・・・そ、それ・・・以上は・・・死にます・・・忘れるから許して・・・」

「パッ」

「ハア・・・ハア・・・」

軽く涙目だな。確かに息ができなかっただろうけどな。

「ってか魅異は攻撃しなくていいのか？」

「魅異は捕まえる事自体ができないから止めとく事にさせてもらっ  
わ。」

まあ正しい選択だな。捕まえられる奴は少ないだろうし。

「ゴゴゴゴゴゴ」

地震！？

「おお、地震だね。大体震度は7、386755555 位かな？」

「・・・結構震度は大きいですね。」

「アンタ達なんでそんなにのんきな！？そして魅異は何でそんな細かい所まで予測するの！？」

「私を誰だと思ってるのミアン？私は有名な異常者・神離・変人・馬鹿のイカレた大勇者様だよ。」

「そして私は異常者・神離・変人・馬鹿のイカレた大勇者の1番弟子だからだよ。」

正しい答えになってないよな。

「ゴゴゴ・・・」

「収まったな。テレビをつけて震度を見てみる。」

「はいはい。」

「ポチッ・・・と言うことができました。では次です。先ほど6時49分13秒に震度7、386755555の地震が現代エリア全

般に発生しました。 あつ失礼しました。 最近よくかむんですよ！  
特にいきなりの地震とかニュースではかむ率が3倍くらいに上が  
て」

時間と震度は細かつ！魅異の予想当たってたし！つてか後半は地震  
関係ないだろ！

「いやゝ、これはニュース番組とか生放送の特権だよねゝ。」

「ですよねゝ。」

「いやいや！そんな特権は普通無いから！」

「あゝ、話が普通にそれでしたね。 つてか逸らしたのは私ですが・  
・それであの地震は酸性雨が地面にしみこんで何らかの理由で大陸  
のプレートまで届いてプレートを溶かしてそれが原因でプレートが  
ずれて地震が起こったのでしょう。」

大陸のプレートの事が分からない人はパソコンで調べましょう。 多  
分出るから。

それでは引き続き地震続報を プツン」

「「「「あつ」「」「」

テレビの電源が消えた。 つてか家中の電気などが止まった。 これは・  
・

「停電かよ！？今日は見たい番組があつたのに……」

「やったあー 久しぶりのハプニング発生だよー じゃあお休みー。」

」

「私も寝るね。お休みなさい。」

「アンタ等寝るなあー！」

「ZZZZZZ・・・」

「- 60万 水圧圧縮砲！」

「ドゴオオンー！」

「あばがあっ！？」「ZZZZZZ・・・」

当然だが俺の作った魔法弾だぞ。両方に平等にHITして水魅は転げ回ってるが魅異の場合は熟睡してる・・・どんな神経してるんだ！？

「魅異はあきらめた方が良くない？」

「・・・そうだな。」

それは確かに正しい選択だな。つてか宇宙消滅レベルの技で気絶さえしなかったからな。魅異が2個目の弱体化の術を食らう前の話だけだな。

つてか本人が同意した上でじゃないと弱体化の術も効かないってどんなんだよ？本人が同意したら術が効くようになるのか？

「つてか夜飯はどうするんだ？今日の飯当番は魅異だぞ。」

「師匠ー！起きてくださいーい！」

「この際だから何処かに食べに行くのはどう？」

「賛成！」

魅亜のアイデアに即効賛成だ。

「・・・でも誰のお金で行くの？ヤッパリ発案者のミアンが出してくれる？」

「えっ！？・・・ああー、私は最近此处に来たばかりだからお金が足りなくて・・・」

「私は今日の朝に師匠に修行代で取られたばかりだから足りないよ。」

「ジー」

「分かった俺が払うから奢れの念を込めた視線をこっちに向けるな！」

「やったあ！」

ああ最悪……。鍵は魅異が居るし開けっ放しでいいか。

それで2人に奢ったあと家に帰ったら魅異が寝ぼけて家の鍵を閉め  
たらしく4時間くらい家に入れなかった。

43話：雨のち追いかけてこ！所により大地震が来るでしょう！（後書き）

@ 悟視点 @

「さて43話更新完了」

「更新ペースが戻ってきたな。」

「当然！テスト勉強が無くなったからな。」

「ふーん。」

「まあそれだけだ。それでは皆さん次回もお楽しみに！」



#### 44話：モンスターと遊ば 戦おう！

@ 悟視点 @

今日は平和だ。高校は休みだし皆はまだ寝てるし好きな番組がスペシャルだし。

朝からスペシャルの番組って珍しいよな。

「居たぞ追え追えー！ ええー、番組の途中ですが中断してニュースのお知らせをします。」

「何い！？俺の楽しみが！」

「5分ほど前から現代エリアにモンスターが出現した模様です。」

「モンスター？そんなの誰かが何とかするだろ。そんな事で番組中断するな！おつ、この新しく買ったお茶は美味しいな。茶葉が良いかな？あつお茶に入れた氷が完全に溶けた。」

「出現したモンスターの数は1000匹を超えるそうです。」

「ブツ、ゴホゴホッ！せ、千匹い！？」

「あと1000を千と言った貴方！・・・アホですね。まあそんな人は居ないでしょうが もし居たとしたら絶対お茶を飲んでましたね。」

居るよ此処に！悪いかコラ！あとお茶を馬鹿にするな！

「あゝ、それで核兵器で消滅させる作戦が有ったらしいですが建物に被害が有るので中止になったそうです。」

「当然だろ。氷は確か冷凍庫に・・・有った。」

「現代エリアから警察隊を5000人ほど派遣させたようですがつい先ほど全滅したそうです。」

「警察弱っ！千匹強相手に五千で挑んで負けたのかよ！？」

「まあ9割がマネキンでしたけど。」

「残りの1割が悲惨だろ！よくマネキン足りたな！？あっしまった。氷を入れすぎたせいで味が薄くなった。」

「おっ！ついにモンスターを全滅させた人には賞金が出るらしいです！」

「いくらだ！？」

「な・な・なんと100万セルのところを半額の50万セル！これはお買い得！今ならさらに勇者のブロマイドも付いてくるそうです！」

「これはお買い得だな　ってこれは買い物用品じゃなああい！！賞金を下げるのかよ！？しかも魅異のブロマイドなんかいらねえよ！」

「私もちよつと行ってきまーす！……………ゴハア！やられました！」

早いなオイ！数秒じゃねえか！

「ちなみに現代エリアに現れた原因は勇者社がモンスター呼び寄せスプレーを虫除けスプレーと間違えて会社の周りに撒いた事らしいです！ プチッ」

原因がアイツの会社か。しょうがないから倒しに行くか。

（数分後）

「まあそついう訳で頑張るぞ。」

「それは良いけど何で師匠は行かないの？」

「そうよね。アイツの会社が原因ならちゃんと行かせないと。」

「どんだけ頑張っても起きなかったから諦めた。」

「ああなるほど。」

宇宙を消滅させる攻撃を圧縮させたエクサバーストも試してみたけど、後5分寝かせて。とか言ってまた熟睡したからな。また充電

しないといけないじゃないか！

他にも今の俺の技で最強の辛さを誇る超激辛調味料圧縮砲も試してみたが全然平気に寝てたし。11話で絶対喰らいたくないと言ってた割には平気って……

まあ起こせなかったんだよねあ。まあ良いか。

「とりあえず行くぞ。」

「「おおー！」」

（現代エリア（モンスター発生ゾーン1：高校の周辺））

とりあえず手分けして退治する事にしたんだが先客発見！

「波動1君、バグドロップです。」

「ドゴオオオンー！」

「烈界斬！烈星斬！烈……スーパー烈斬りい！！」

「ズバッ！ズザザア！ベシイ！」

校長と烈じゃん。校長は人型の波動にバグドロップさせてるし烈は斬撃なのにベシイって音の技を使ってるし。

「おおーい。」

「あつ、悟君じゃないですか。やっぱり来ましたね。」

「おお悟！お前も賞金目当てか！？」

やっぱりって予測してたのか校長！？あと烈、それはお前だろ。賞金目当てで何が悪い？モンスターの餌にされたいかヤラレ役め。

「遊び気分で倒せるモンスターばかりなので安心してください。」

「そうだぜ！技の実験台だと思えば良いぜ！」

「それは良いんだが・・・瓦礫の山みたいのは何だ？」

高校の周りの建物が壊滅してるが。

「ああ、それは私が波動でそこら辺の工場で積み木崩しをしたただけですよ。酸性雨が発生すると困りますので。」

「まあモンスターにやられたって事で良いだろ！」

・・・良いのか？そりゃまあ酸性雨は迷惑だけどさ。

「また大軍で来ましたよ。波動1から200までは1人1匹のモンスターにくっついて自爆しなさい。」

「ドゴオン！ドゴオン！ドゴオン！」

「俺は烈流の技で行くぜ！烈斬！十烈斬！百烈斬！バージョニアッ  
プ！」

「ズバァ！ズババババァ！ズババババババ」

「俺も行くぞ 再び再びボケ役の俺降臨！イエーイ！」

「何でこのタイミングで出てくる！？」

「当然い・や・が・ら・せ・だ！いくぜ！スロットカモオン！」

『スロット誕生！1回100セルだ！』

「ほい100セル。」

『まいどー。スロット回転！』

「何をする気だ？」

まあ見てれば分かるって。ネタばれはつまらないだろ？

『核・兵・木がそろいました。』

「器が木になってるううう！？」

「ズズズズズズ」(木が生えてくる)

「校長、高くジャアアアンプだ！」(ジャアアアンプしている)

「分かりました。」(ジャアアアンプする)

『平和な木が生え・・・それは爆発します。』

「それは平和な木とは言わねえって！」

「ドゴゴゴオオンー！」

「ぎゃあああああー！」

あゝ、ヤラレ役をワザと忘れてた。

「酷っ！俺は実際に忘れてたが。」

「残りのモンスターは下に2LDK分の畳を敷いてゴロゴロしまし  
ようー！」

ハイー！

「校長はモンスターを手なずけてるし！」

「ゴロゴロゴロゴロ。」

「俺もゴロゴロゴロゴロ……」

「お前もかよ！ってか畳は何処から持ち出したんだあ！？」

く現代エリア（モンスター発生ゾーン2：公園周辺）く

@水魅視点@

「よし！賞金目指して頑張るよー！」

「「おお」」

あれ？この声は・・・

「久しぶりー」

「同じくですねー」

マイペース組のジャルス君と羽雨流さんだあ！

「何で2人は此处に居るの？」

「僕は烈に誘われたんだよー」

「私は校長に誘われて来たんですよー」

ってかこの2人って付き添いで来ただけ！？

「それより2人とも戦わないの！？」

「特技とか完全ランダムだよー。」

「私は元々非戦闘キャラとして書かれたんですよー。」

それじゃあ私がやっちゃうしかないか。



「じゃあ私が行くね。」

「「当然賞金は山分け決定」」

不平等すぎるけど・・・もうどうでもいいや。

「いくよお。霧<sup>ぶ</sup>稲<sup>い</sup>妻<sup>さい</sup>！そして空中でモンスターの方に棒を振ればOK。」

私の持つてるのは携帯用避雷針。これであの1番身長の大きそうなモンスターに当たれ！

あと技の読み仮名が平仮名なのはスルーしてね。

「ズガン！」

「やったあ撃破。」

・・・（ぶつぶつ）

「そのモンスターー！言いたい事が有るならハッキリ教えてよー」

・・・チビ

「チビ？チビ・・・小さい・・・うわあああああ  
ん！！！」

「ドガガガガガガガ！」

「もうチビなんて言えなくしてやるー！師匠流奥義・巨大化7倍！」

「ヒュン！」

これで私の大きさは7倍だよ。ヘッヘン。

「そういう事で覚悟してよお！環境破壊！怪物破壊！」

「ドゴオオオオン！ズゴオオオオン！」

「いや、よくなついてるモンスターも居るねー。」

「そうですねー。この狼とかも お手。」（手を出す）

「グルウ。」（お手成功！）

「大きいもの破壊ー！」

↓現代エリア（モンスター発生ゾーン3：勇者社周辺）↓

@ミアン視点@

ってナレ君まで私をミアンって呼ぶんかい！

私は運が良いんだか悪いんだか敵は1匹しか居ない。1匹なんだけど・・・

「グルルルア！」

何か中ボスみたいな大きめドラゴンなの〜！

でも初戦闘だし頑張らないと。・・・初戦闘でドラゴン相手はキツイけどね。

あつ、私の得意武器は両手につけてるゆうしゃミイのうとおなじかんがえをもつてぶしにつけるMI BRAIN FIST  
スライムグローブ。名前長いから略してMBFグローブだって。  
言いにくいから私は魅異グローブって呼ぶけど・・・紛らわしいかな？

魅異が作ってくれた新武器で超薄く出来てるからつけても装備する前と大して変わらないわ。

しかもAI機能搭載で喋れる・・・だけど

「けどど何〜？まさか耐久性の心配〜？大丈夫だってさつき説明したよね〜。もしかして私の心配〜？流石はミアンだね〜」

・・・私の心を読むなあ！しかもアンタの心配の心情が何処に書いてあるって言うのよ！？

まあこんな感じに余計な機能が付いてるのよね・・・ハア。ちなみに敵はいつの間にか寝ちゃってるのもう少し説明するわ。

まあこの超薄いグローブ2つは耐久性抜群で滅多に壊れないらしいわ。しかも頭の中でどんな攻撃をするかイメージして技名を叫べば勝手に攻撃してくれるの。他にもレーザーや刃物など隠し武器攻撃が多数あり。

「・・・とりあえず敵も寝てる事だしさっさと倒すわよ。」

「OK」

「それじゃあ」

「勇者拳」

「ズガアッ！」

「!？」

「ちょっと 私何も言っていない てか動くの早すぎて息が！」

「あっ・・・まあ良いか」

「良くない！」

「ってかそこのドラゴン喋れ。」

「口調が変わった!？」

「はいはい。」

「そして喋れた！」

「はっ!？ ついついドラゴン界の先生の喋り方に似てたから喋ってしまった！」

「馬鹿でしょアンタ！つてかドラゴン界なんてあるの！？」

「ドラゴン界は今は季節的にナメクジに乗っ取られてるはずだ。」

何かもうドラゴンの印象が壊されてく……………

「とりあえず戦闘を再開しない？」

「（え〜）」

「嫌なの！？そしての口調が戻った！」

「俺もうすぐコンビニでバイトしないといけないんだよなあ。」

「バイト先有るんだ！？」

「あつ、私を作った会社の社長が雇ったんだよ〜」

「魅異ならありえるわね。……つて事は此処は通りかかったただけ？」

「ああ。コンビニへのバイトの申し込みに行く途中なだけだ。途中大量の人に襲われたから巨大扇風機で吹き飛ばしたけど。そういえば今日は何かモンスター達がうさぎ跳び聖火リレーの見学に町に来てたな。」

それじゃあモンスター呼び寄せスプレーは関係ないの！？

「まあそんなところだ。そんじゃあな〜」

「バイバイ。社長の会社のイベントのせいで迷惑かけてゴメンね」

「製作者の会社って 勇者社？ってかイベント！？」

「そうだよ。神離家を騙そうイベントをやるって社長が言ってたよ」

魅異の仕業ね！そういえばあのテレビの番組も魅異のところがやってるのよね。

「賞金は社長がくれると思うよ」

「それじゃあ帰るわよ。」

「おー」

それで家に帰って魅異から私と悟と校長と羽雨流さんとジャルスが10万ずつ貰ったわ。

水魅と烈はヤラレ役だから無しだつて。不平等だけど私の貰える分が増えたから問題無し。

あと高校の周りは壊れた工場の変わりにお店とか出来たらしいわね。

便利  
ね

#### 44話：モンスターと遊ば 戦おう！（後書き）

@ 悟視点 @

「44話更新完了。やっと魅亜の武器は紹介できた。」

「だから今回は遊び 戦闘だったのか。」

「YES。特殊能力は決めてないけど。」

「考えてないのかよ!？」

「まあ考えておくから。それでは皆さん次回もお楽しみに!」



#### 45話：神様と勇者の魔法勝負だあー

@悟視点@

「き、筋肉痛が・・・」

ヤバイ・・・昨日のモンスター退治が原因で筋肉痛になった。

「でもとりあえずは動けるな。」

「膝蹴り」

「ドグオ！」

「ぐぎゃあああー!!」

ぬあゝ！筋肉痛の場所に見事ヒットしたあ！

「な、何しや・・・がる・・・」

「いやゝ、痛筋肉を筋肉痛って言うのはちょっとねゝ。それじゃあ部屋でのんびりしてくるねゝ。」

「痛筋肉なんて単語は無いし方言でも無いし使ってる奴なんか居ねえ！ってか謝れえ！」

コイツに天罰か何かを与えてくれる良い神は居ないのか！？

「一応居る事には居るが。」

ってボケ役！いつ出てきたんだ！？

「さっきに決まってるだろ。ってか特星には結構な数の神が居るぞ。」

ほお。神様って1人じゃないのか。

「まあ作者を除いた神様の中では四天神が最強レベルだな。反則馬鹿どもだし。」

作者は置いといて・・・それじゃあ四天神を呼べないか？

「無理だよバカ。まあ俺の知り合いで良ければ1人くらいなら呼んでやってもいいぞ。」

知り合い居るのか！？ってか強さは？

「ツツコミとよく喋るオバサンとアニメキャラに弱い。それ以外はまあまあだな。」

と、とりあえずOK。早く呼んでくれ。

「まかせろって。俺の昆布電話ですぐ来るはずだ。」

昆布電話！？電話じゃないだろそれ！

「もっしもっし？俺だよ俺。悪いけどスライス1枚送ってくれ。うん。そう。じゃあな。」

何処に電話してるんだあ！！

「神の住んでる所だ。すぐ来ると思うぞ。」

【変な電話で呼ぶなあ！】

「よっ、久しぶり。」

「どうも初めまして。」

神って人型なんだ。

【あっ、ども。で、何か用か？】

〔実は・・・（省略）・・・って事だ。〕

【とりあえずその勇者と戦えばいいのか。じゃあフィールドは別次元に有る場所を使うか。】

「別次元・・・常識外な話だ・・・」

【そりゃ神だからな。じゃっワープ！】

「グチャッ」

効果音悪っ！

「何処でしょうね？ナレ君の私でも分かりません」

何かいろいろツッコミどころが有るんだが！ってか喋れねえ！

【作者の都合か？とりあえず今から敵を呼ぶぞ。おいでおいで。】

そんなんで来るかあ！

「呼んだ〜？」

そして来るなあ！

【俺は神の中の1人だ。今から魔法で勝負しろ。】

「じゃあ君が負けたら私の社員決定だよ〜」

【・・・分かった。じゃあお前が負けたら俺の忠実な・・・モグラになれえ！】

「別に良いよ〜。」

【それじゃあ勝負だ！物理攻撃をを跳ね返す壁力モーン！カウンタ―バリア！】

カモーンで呪文がおかしくないか！？

「まあほつとけ。」

「行くよ〜。エルエルエルビービーエー ケエケエユオビ ジエジエエ オディー マジ ツク クリ L L L B B A ! K K U O B J J A O D ! 魔・法・消・  
去・発・動・だよ〜！」

呪文長いって！途中早口だし！

「流石は俺の嫁だ。」

それは無いと思う・・・

【チツ、地獄からの使者よ此処へ参れ！トライデビル召還！】

へグルルルウウウ

召還か。なかなかっこいいな。

「俺は？」

馬鹿の40乗くらいだ。

「エフエフエフアイケイオーブイオーケイ  
FFFFFFFFKOOVOK！みんな皆がSYATYOU化だあ  
バスワート！わわわわ私のPASS発進！行っけ行っけ車！目指すはGOD  
が召還した挑戦悪魔あゝ」（超早口+テンポ抜群）

【何を呼ぶかは知らんがとにかく行け！トライデビル！】

へグルウア ギャアオオオン「グチャッ」

<10tトラック登場！>

トラックが喋るかああああ！！！！でも見かけは本物だし！

<交通事故発生いいいい！！！！>

「グシヤツ」

【危なくやられるところだった……】

「さらに H U H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A  
ハハハ ハハハハ ハハハハ ジエイジエイジエイジメイヂョーエムエヌ ケケ エルアイ  
H A H A H A H A H A H A ! J J J J J D Y U M N ! K K L i  
アイアイアイアイ キング ダム ジャス ティス  
i i i i 決定!王・国・裁・判・発動だよ」

「

【王国裁判つてなんだ！？】

どっちにせよお前だけ得じゃないか！あと世界中なら世界裁判だから！

犬に質問しても聞いてくれないだろうし手を下げてならほば全員が有罪だと思うことになるだろ！

【ぎゃああ！体が消えていく！一体何者なんだよお前え！】

「私は異常者・神離・変人・馬鹿のイカレた大勇者だよ」

【そういう意味じゃないい・・・】

「ペチャッ」

「おつ、元の部屋に戻った。」

「いやゝ、楽しかったねゝ。」

「つてか別にお前は呪文を言わなくても使えるだろ。」

「まあねゝ。ところで残りの二人はゝ？」

「まだ帰ってないんだろ。よし飯作れ。」

「OKOKゝ。2人が帰ってきた頃には冷めてるようにするねゝ。」

うわ酷つ。

結局コイツをこらしめてくれなかった・・・ああもう今日は疲れたし飯ができるまでソファで寝よう。

そのあと起きたのは2人が帰ってきたときで飯は見事に冷めてた・・・

・誰かコイツを懲らしめてえ〜！



#### 45話：神様と勇者の魔法勝負だぁー（後書き）

@ 悟視点 @

「45話更新〜。早く50話まで行きたい・・・」

「それより今回の呪文みたいなのはなんだ？」

「何となくやってみたくなっただよ！」

「ああそう。」

「あと更新スピードが落ちて・・・ヤバイ」

「とりあえず頑張れ。」

「ついでに短編に変な星で1日逃走生活！？を追加したのでそちらもよろしく！それでは皆さん次回もお楽しみに！」

#### 46話：社長は今日は仕事をするようです

@魅異視点@

「いや、仕事は忙しいね。」

いま私は工作中だから話しかけないでね。・・・あと『』は口癖だけ思考内でも使う事が有るからお忘れなく。当然使わない事も有るけどね。」

ああ、忙しい。社長は大変だよ。

「ガチャッ」

「社長、仕事は終わりましたか。ってか漫画を読んでいるのに仕事なんだなんて考えないで下さい。読者の皆様が本当に仕事してると思い込みますよ。」

「それはいいけど思考を読むのは止めてとは言わないよ。」

「フエイントで騙そうとしても無駄ですし面白くともなんでしょうありませんよ。あえて言うならカス以下に等しいですね。」

さて今頃だけどこの人の自己紹介だよ。この人は

「私は篠頼しほのり 几骨きほね。性別は女でとりあえずこの社長の秘書をやっているわ。」

年は20で凡の字に、をつけたら凡骨になるよ

「社長、人が自己紹介中に勝手な紹介をしないで下さい。ハンターを雇いますよ?」

「気にしてる事を言っちゃってゴメンね。」

「ク・・・とりあえず自己紹介の続きをします。特殊能力は表情などから相手の考えてる事を読み取る事よ。読心術とは違うはずよ。」

ついでに毒舌なところが有るから注意が必要だよ。私は大丈夫だけどね。

「私はあの人は苦手です・・・」

あつウィル居たんだ?

「発言は控えてましたけどね。あとちゃんと仕事したらどうですか?」

「元勇者様の言うとおりです。ぶち殺しますよ?」

「下っ端にやらせておいて。」

「別に構いませんがこれだけ書いてください。」

プリント5枚?まあ良いや。

「分かったから残りの仕事は部下に任せておいてね。」

「分かりました。」

「ガチャッ、ボタン」

「さゝて1枚目は・・・特星本部への税金か。私のサインを書けばいいんだね。」

「税金つて有ったんですね・・・」

「基本的に消費税とかは無いけどね。社長税とか店長税は有るんだよ。」

「へえ。私はそんなことやったこと無いから知りませんでした。」

「普通はそんなものだよ。よし完成」

「結構時間が掛かりましたね。」

「だつて『JJJJJKMZ!MEJDSJJERISAKWX  
エス  
Sをかまずに言えたら魅異って書いた事にしてあげるよ』って書いたんだよ。」

「なんてこと書いてるんですか!?しかも本部に!」

「さ、次のプリントは・・・作者からのアンケートみたいだね。」

「アンケートですか?作者さんはこっちの世界に居るはずですが・・・」

「まあやっていこう。『1:今日の天気は?』日本は雨だね。」

「普通は特星の天気を答えるべきだと思いますが・・・あとそれってアンケートじゃなくて質問ですよ。」

「細かい事は無視するのが哲学だよ。『2：この小説についてどう思う？』 良くも無いし悪くも無いとは言えないし・・・」

「悪いって言ってますよね!？」

「これで最後だよ。『このアンケート少ないと思う？』 結構多いと思うよ。せめて1つに減らして欲しいね」

「少なすぎますし重要な質問は1つでしたよね!？」

「そうだね。それじゃあこの紙を烈の家に大量にコピーして送ってよう」

「嫌がらせですか？」

「趣味だよ」

「悪趣味ですね・・・」

「次は学校への寄付金だね。『今後のこの小説のストーリーに大きく影響しますのでNOを選んでくださいね。校長より。【学校に50セル寄付しますか？YESかNOに をしてください。YES・NO】』NOをして・・・これでよしだよ。」

（寄付しないんですか？）

「こっちの方が面白くなりそうだからね。次は挑戦状だよ。」

（こういうのを普通部下に任せるものだと思いますが・・・）

「えつと」『1度貴方を見た時から恋をしてしまいました。3時頃に高校近くの公園で待ってます』うわ、ベタな事書いてるね。今は・・・2時57分だね。」

「挑戦状じゃないですよね！？それより行くんですか？ベタな内容なのに・・・」

「公園はこの窓から一直線に行ったところだよ。勇者球」

「バコオン・・・ズゴオオオン！！」

あつ、返事かないとね。

「『君の気持ちは分かったよ。だから私の攻撃を君の心臓<sup>ハート</sup>を貫きはしないけど吹き飛ばす勢いで送るよ』これでOK」

「消し飛ばす可能性も有るんじゃないですか？」

「まあね。それで最後は差出人不明？どんなのだろう？『この手紙を読んだ社長は読んでから1日以内にこの手紙と同じ内容の文をびったり50枚他の人に送らないと死にます。』でも私にはそんなのは通じないよ。」

「・・・どうするんですか？」

「水魅の部屋に300枚送って悟に100枚送ってこの手紙の送り

主には『5時間以内に1枚の謝罪の文を書いて送らないとこの調子で手紙を送り続けるよ』って手紙を600万枚送っておけば大丈夫だよ」

「600万枚は多すぎだと思いますが・・・あと水魅さんと悟さんにも送るんですか？」

「嫌がらせ的な意味でね。それじゃあ仕事も終わってたし公園にできたクレーターでも直しに行こう」

「手紙を送った人以外に巻き添えがいませんように。」

「ぎゃああああ！不幸の手紙が100枚も来たあ！」

「こっちは300枚だよ！一体誰の仕業なの！？」

「私は来てないわ。良かったあ。」



46話：社長は今日は仕事をするようです（後書き）

@ 悟視点 @

「46話更新！……って悟ー、どうしたんだ？」

「不幸の手紙が……300枚も」

「ひ、悲惨……まあそのうち良い事あるかもよ？」

「そうだと良いな……ハア。」

「最近更新ペースがピンチ……どうしよう！それでは皆さん次回もお楽しみに！」

#### 47話：変な夢やらセールスマンやら不法侵入やらいろいろ

『私こそが全て！全ては私の物！！それは運命！宿命！なのに反抗する気！！！？？』

『いや、お前の物になるくらいなら普通は反抗するだろ。犬でも鳥でも馬鹿でも。』

『悟さん・・・もう少し此処はかつこいい事を言つべきですよ。』

～家（リビング）～

@悟視点@

ああ～今日は朝に変な夢を見たがとって～も平和だ。魅異が水魅と魅垂の2人と何処かに出かけたから今は俺しか居ない。

この平和な時間を破壊する悪魔が出かけてるんだぞ！これほど嬉しい事は無い！

そして俺はテレビ見ながら魅異に飲むと言われていたジュースを飲んでるところだ。

魅異が帰るまでの間は絶対に誰とも会わないぞ

「ピンポーン」

「すみませーん」

・・・この家の人は出かけてまーす。居留守じゃ有りませんから帰ってください。

音が聞こえるといけないからテレビはイヤホンをつけて見るか。

「ピンポーン キラアーン ピンポーン ピンポーン」

いま何か光るような効果音が聞こえなかったか!?

「マジで早く開けてくださーい! こっちは時間が無いんですよ!」

なら来るなよ! 早く諦めて帰りやがれ!

「ドンドンドン!」

「俺様を誰だと思っている? 貴様が中にいる事はお見通しだ! 早く開けな!」

口調が荒くなった!? 見通さなくて結構だし早いところ諦めてくれ。ってかインターホンがあるんだからノックをするな!・・・よし番組終了。

「ドガッドガッ！」

「ドアごと蹴り飛ばすぞ！！早く開けやがれ！！」

はいはい番組終了したから嫌々だが出てやるよ。

「誰だ？」

「あつ初めまして。私は特星内新商品紹介係をしている者です。セールスマンとは違いますよ。」

100%セールスマンだな。自分から言ってるのと同じだバーカ。

「で、平和に過ごしている人様の家のドアを途中に蹴った馬鹿で非常識で怪しい邪魔者が何の様だ？」

あくまで普通に話してるが・・・場合によっては撃ち殺 撃ち倒すつもりだ。

「詐欺でよく売られてる新商品の販売に来ました。」

「認めてるじゃねえかああ！！しかも詐欺紛いの物を売りに来たのか！！」

「ええ。これさえ買えば貴方は詐欺に騙されたも当然！今なら10万セルの所を-50%オフで15万セル！これはお買い得だよー！」

ああもう早く家の中に戻りたい！そして平和を取り戻したい！・・・オーバーすぎたか？

とりあえず追い返さなければ！

「俺には必要ない！それじゃ！」（超早口&ドアを閉める）

「ガッ」

「まだ他にも商品がありますのでお待ちくださいよ。」

何い！足でドアを閉めるのを防いだと！？だが甘い！ドアを全力で閉めて。

「グキッ」

「ぎゃあああああ！！！」

開ける！

「ドガアッ！ドゴオオン！」

「ぐげふう！！」

当然ながら壁に激突。後は偶然を装えばOKだな。

「ああ悪い。まだ商品が有るって言ったからドアを開けたただけだ。商品も見たいが俺は忙しいから。」

「ボタン」

・・・よっしゃ！詐欺紛いのセールスマンに勝利！俺に商品売るに

は後10年は滝での修行が必要だ。……セールスマンが滝で修行は変か。

「ってか何するべきか……よし寝るか。」

3秒で決定。主人公は時間が大事なんだぞ。

（夢？）

『封印を解いた私に敵う訳が無い！！！』

『封印は解けても魅異自体には2つの弱体化の術が掛かってるぞ。』

『魅異さんなら余裕で解けますけど……でも貴方じゃ無理でしょうね。』

『私を馬鹿にするなあ！！！私こそこの星の支配者だ！！！！』

『馬鹿は馬鹿だろ。ってか神を超えても魅異を超えて無いだろ？』

『そういえば魅異さん自体は何処行っただんでしょうね？』

『奴はもう私の作った迷宮で永遠にさまよってる筈だ！！！！』

『ああそうだった。結局作り損だぞ？もったいない。』

ピンポーン！？

くハイ夢は此処まで！く

「ピンポーン！？ピンポーン！？」

「うるさああい！そして何故疑問系！？」

マジで夢の内容を忘れるだろ！・・・とりあえず居留守を使うか。

「ピンポーン？ピンポーン？ピンピンピンPINPON-N！！」

効果音が悪化していきそうだからやっぱり出る事にするか・・・

「ガチャッ」

「よう悟！」

元気良くそう言ったのは烈だが服装が『巷ではクリスマスの夜の夜に良い子にプレゼントを配りにソリに乗って基本は煙突から不法侵入すると噂になっている今では季節外れのおじいさん』の姿をしている。

近所の人に痛い人だと俺が誤解を受けたらどうするんだ！

おっ、右手に中身入りっぱい袋を持ってる。

「・・・とりあえず今すぐ右手に持つてる袋だけ置いて帰れ。」

「親友が来たのにその対応はおかしくないか！！??」

「梅雨の時期にサンタの格好をして家を訪れる方がおかしいだろ。」

普通なら即行でドアを閉めるか攻撃するかを選択のところを話しかけてやったんだから凄くマシな対応だろ？

「それで何のようだ？」

「プレゼントを持ってきたんだが何か欲しいか？無料は無理だが安値で売るぞ。」

無料じゃないのかよ！お前もセールスマンか！

「今すぐ帰ってくれたら凄おく嬉しいんだが。」

「まあ待て！話だけでも聞いてくと良いぜ！！」

「良くねえ！ってか嫌だ！俺は寝たいから帰れ！」

「ボタン」

「・・・帰るか」

「あゝ、その怪しい男。私は警察だがちよつと取り調べをさせて



もらっ。署まで来なさい。」

「えっ！？俺は全然怪しくないぞ！！」

「全ての面において怪しいな。早くパトカーに乗れ！」

「誤解だああああ！！！」

外でパトカーの音がしたが・・・まあ関係ないな。

「それにしても眠気が完全に取れたな！」

魅異達がもうすぐ帰るだろうからそれまで待つてるか。

「ふああ・・・おはよー。もう朝か？ちょっと寝坊したな。」

朝？既に夕方だ！ってか寝坊レベルじゃないぞ！

「魅異は何処だ？まさか誘拐とか！？」

いやいや常識的に有り得ないから！そんなことが有ったら特星全体が乗っ取れるほど凄いぞ！

「じゃあ世界一長いコンセントを作りに行ってるのか・・・」

それなら有り得るな。それより暇だあ！

「それなら暇つぶしでもしようぜ！チェーンジ！」

「キン！」

「チェンジ完了！天才を超える俺様の降臨だあ！」

「それで俺はこっちですか・・・結局お前は何をするんだ？」

「企業秘密に決まってるだろ。あと待機場所に行った事有るか？」

「待機場所？行った事ないが。」

「それじゃ行ってみる。ホッペをつねれば目が覚めるだろうから・・・俺のコンセントに餌をやっといてくれ。」

「コンセントは餌なんか食わねえよ！・・・どれどれ」

「ギョッ」

「いてえ！・・・」

「さて、無駄にうるさいツッコミも居なくなった事だし魅異の部屋に忍び込むぜえ」

変人？ハハハ何とも言いな。何回も死に掛けたけどな。

「行くぞ民衆よ畏れず死の地へレッツゴー！」

ゝ家（魅異の部屋）ゝ

@ナレ君視点@

ども。此処からは私が実況をしていこうと思います！あと悟は1人で2役やるそうです。

「こちらA部隊、今は敵地の目の前に居ます！」「こちら本部、よし突撃だ！」「

「ズゴオオオオン！！！」

「突入しまし」

「ヒューグサツ！」

突入した途端にギロチンが降ってきたが見事に回避。

「『何があつた！？大丈夫か！？』何とか大丈夫です。」

そして最初に悟が目指すは水道。

「水道まで到着しました！」「そうか、ならば最初はそこに仕掛けておいてくれ。」「

仕掛けるのは盗聴器。絶対に見つかると思いますがねえ。

「仕掛け終わりました！『よし、後は君に任せる！』 ありがとうございませう！」

おつと此処からは1役で行くそうです。

「んっ？ナレ君、そこをちよつと右に行け。」

えっ？あ、ハイ。

「カチツ、キイン！ドッゴオオオオオン！！！！！！！！！」

！！！！！！！！！！」

ええ！？うわああああああ！！！！

「圧縮したエクサバーストを仕掛けるとは。つてかナレ君が消滅したじゃないか。壁の修理代も結構掛かるし……オイ作者。」

「呼んだか？」

「ナレ君が消滅したから呼び出せ。糸電話の電話番号を教えてやるから。」

「糸電話に電話番号は無いから！．．ナレ君呼び出し！」

1回・・・し、死にました。

「そんじゃあ俺は帰るから。グッバーイ」

「カチツ、キイン！ドッゴオオオオオン！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「ぎゃあああああああああ！！！！」

「此処にも盗聴器を仕掛けるか。」

でも魅異さんにはばれると思いますよ。

「えっ！チヨツ、俺は無視ですか！？消滅しかけてるんだぞおお・  
・・・」

「あつ消滅したか。よし後は窓の近くにも仕掛けるか。」

「ピッ、ピー！！ピー！！ピー！！」

「あつ、何か押した。」

またですかあああ！！！！

「貴方達が侵入者ですか？」

「侵入者じゃない！魅異の部屋に盗聴器を仕掛けて会話を盗み聞きする貴族だ！」

最後にありえない嘘を付いたあああ！！つて貴方『達』？

「普通の人には姿が見えないようですが僕はその程度見抜けます。」

凄い！って言いたいけど神離の付く人達含めていろいろな人達は私の事が見えますよ。

「凄え！魅異の部屋の覗きもできるのか！？」

「アンタは何聞いているんだあ！？」

「いや、だから覗きが出来るかどうか」

「んなもん聞くなあ！」

「一応出来ますが・・・次の日には消されるでしょうね。」

「やっぱりな。・・・じゃ、そろそろ帰るわ。」

「いやいやスライムを倒して置いてくださいよ。このスライムが魅異さんに侵入したことを言って私まで殺されたらどうするんですか？」

「作者に蘇らせてもらうからOKだぜー。」

「作者さんは消滅しましたけど・・・」

「次回の後書きで生き返るだろ。虫より執念深いし。」

「そうですか・・・それじゃあ帰りますか。」

「ちょっと待って下さい！」

「何か用？サインはやらないぞ！」

「絶対いりません。スライムが喋ってるのに疑問は感じないんですか？」

あれ？そつえばおか

「全然。何処がどうおかしいんだ！？そして何故俺のサインが要らないんだああ！？」

「貴方のサインなんか要るかあ！そして疑問に思ってください！なぜか聞いてください！」

「じゃ、帰るか。」

ええ！？スルーですか？

「まともに聞いてくれたら魅異さんの写ってるこの写真を持って行って良いですよ。」

魅異さんがピースして写ってる写真ですか。

「まともに質問させていただきます！」

悟さんなら持つてそうですけど・・・持つてないんですか？

「魅異の写真やビデオを手に入れる事はできるんだが必ず次の日に破れてるんだ・・・とりあえずあの写真を持ち帰るぞおお！！」

いや、持ち帰るって言っても此処は家ですけどね。

「とりあえず質問は3つだ。何で喋れる？特殊能力は？あと魅異の事で知ってる事を教えてくれ。」

「喋れる理由は魅異さんに無理矢理言葉を教えられたからです。特

殊能力は硬度変更です。魅異さんの事で知ってる事は・・・確か左肩に何者かが封印されてるらしいですよ。」

「おっファンタジックな予感。その事について詳しく言え。」

「確か特星に着いてからボロボロな所を暇つぶしに封印したらしいですよ。神様を超えるくらいの力を持つてる者らしいです。」

魅異さん以外にも神様を超える存在って居るんですね。

「ラジオ体操が上手な奴とかも神を超えてるよな。」

超えてません。

「前に左肩を見せてもらったら小さな魔方陣みたいなのが書いてありましたよ。」

「左肩見せてもらったのか！？・・・いいなあ。俺も今度見せてもらおうかな？」

無理だと思いますよ・・・つかヨダレを垂れないでください！

「以上質問の答えでした。ハイ写真をどうぞ。」

「よっしゃお持ち帰りだあああ！ー！」

だから此処は家ですって。

「それじゃあ部屋に戻るか。」



私も帰りますね。それではまた出番があったら絶対読んでください  
ね。

結局そのあとボケ役悟とナレ君は魅異に侵入したことがばれて勇者  
拳を喰らったのであった。  
あと私はナレ君2です。

#### 47話：変な夢やらセールスマンやら不法侵入やらいろいろ（後書き）

@ 悟視点 @

「何か作者は消滅したみたいなので遺書　じゃなくて預かった手紙を読んでいこうと思いまーす。』どうも。更新がとても遅くなってる+2週間くらい後にテストがまた有るという状況に陥っています！でも更新は多少遅れようと必ずするので見捨てないで下さーい！』  
って書いてあるぞ。」

本編ではバトル編に突入しそんな雰囲気なのに大丈夫なのか・・・  
「・・・それでは皆さん次回もお楽しみに！」

## 48話：魅異の1番弟子登場！？

@魅異視点@

「師匠ー、背の伸びるグッズは出来ましたか？」

「大体出来たよ。」

今日は会社で水魅の身長アップグッズ（と偽った攻撃用グッズ）を開発中なんだよ。高校の授業中にアイディアを考えてたまに開発してるんだよ。攻撃用グッズをだけどね。

「常識外のアホ馬鹿間抜けの社長。お客様が来てますよ。」

「あつ凡骨。お客って誰？」

「貴方の弟子なのに貴方の数倍賢そうでもそんな人です。」

「師匠の部下で数倍賢そうでもそんな人？ 弟子の中では全員ですよそれ。」

よし。今日の水魅には通常の数倍の攻撃力のグッズを使おうと。

「それで名前は聞いたの？」

「神離 しんじ 羽双 うやふたと言つ名でしたが。」

「「ええー!?!」」

ありゃ、水魅とハモったね。

「とりあえず呼んで来て。」

「了解しました。退屈さに潰されながら待っていてください。あっ水魅さんはくつろいで待っていてくださいね。」

「はい。」

水魅・・・その返事は小学生みたいだよ。・・・姿も小学生みたいけど。」

「それにしても羽双さんが来るなんて予想外ですよ？」

「そうだね。あと悪いけどその機械の中に入っ。」

「えっ？あー分かりました。・・・入りましたよ。」

今日の攻撃グッズはこのカプセル型の機械。中に人を入れて外のボタンを押すと・・・

「ピッ・・・」おおおお

「えっえっ・・・ちょっとコレ熱いんですけど　というか激熱！」

中が超高熱になるという機械だよ。小でも火あぶりの刑くらいの熱さだよ。

さて水魅がほかほかになるまでの間に羽令の事について説明

「どうも魅異さん・・・とりあえずこんにちは。」

「あっ来ちゃったんだ。とりあえずこんにちは。」

「で、せっかく来たお客に対してお茶の1つ位出したらどうですか？」

「せっかく入れた社長室に対して千セルの入場料位は出したら？」

羽令の毒舌も相変わらずだね。あと私の弟子って皆特星に住んでるからね。

その中でも羽冷は1番強いんだよ。今の私と同じくらいかな？

「で、あの機械は何ですか？やけに熱気が漂ってますよ。」

「魅異がちよつとした理由で入ってるんだよ。あと悪いけど電源切ってあげて。」

「ああこれですか。」

「ピッ」

「小になってたので最強にしておきました。」

最強って・・・でも水魅だし大丈夫かな？

「それで何か用？」

「・・・僕が何をやってるか知ってますか？」

「冒険」。ついでに言うとモンスター退治中心でしょう。」

別に高校は絶対入学じゃないから入ってないんだったよね。確か現在は1人旅中だったよね。」

「ご名答。それで最近変な夢を見てそれが現実になる予感がして魅異さんごと敵を倒しに来た。まあこんな感じです。」

「一気に話したね。私の肩に封印してある変な少女の事だね。」

「そうです。居る事が分かったので死んでください。出来れば爆死してください。」

「代わりに水魅を焼き殺していいよ。」

「意味がありません。水魅さんを焼き殺すのは自由ですが。」

「それじゃあしょうがないな。私がバトルするしかないのか・・・」

「それじゃあ今から全力バトルで勝った方に従うことにしよう。」

「嫌です。めんどくさいので・・・」

「わがままだね。それじゃあ羽双が気に入らぬ奴で・・・」

「それじゃあ羽双の趣味であるワサビ早食い対決に決定。」

「・・・勝手に人の趣味を作るな！」

「ズグオン」

「うわぁー!？」

羽双が怒ったぁー!一応痛かったけどねぇ。エクサバーストより威力あるのに音が迫力なさ過ぎだよ。

「とりあえず結構音と威力は弱めましたが・・・魅異さん 前より弱くなりましたか？」

「別に～。ついでにあの少女なら明日呼び出すからそのときに会えばいいよ～。まあ正直倒すのはダメだけどねぇ。」

「そうですか。それではまた来ます。」

「別に来なくていいよ～。どうせ来るなら入場料を必ず持つてくることだよ。」

「はいはい。」

私は明日は迷路に挑戦・・・になるんだけどねぇ。

そつえば水魅が居ないね。まあ良いや。



#### 48話：魅異の1番弟子登場！？（後書き）

更新頑張ってますがこのペースです。  
羽双の紹介は次回にします・・・多分。  
それでは皆さん次回もお楽しみに。

#### 49話：和風好きは常識外だがまともな奴

@羽双視点@

さて、明日に着ていく服でも決めないと・・・

「キキイイイ！！ドガン！」

・・・危ない。車で突っ込んでくるとは危険な人も居るんだなあ。

「ガチャッ」

「コラア！！何処見て歩いてるテメエ！！」

ああ運転手ですか・・・

「車で歩行者用道路に突っ込んできたのはそっちでしょうが。普通に常識 ン？」

後ろに乗ってる女子2人は何処から拉致してきたんですか？」

片方は青髪でもう片方は赤髪的女子を乗せて居るみたいですが・・・  
運転手は人相的は見るからに犯罪者がらみに見える・・・

「コレを見られたからには生かしてはおけないな！此処は閉店した店とかしかないので好きなだけ苦しめてやろうじゃないか！」

「出来るものならどうぞ自由に。」

「ああそうか。なら死ね！！特殊能力発」「退いて下さい。」

「ドグオン！」

「ぐああああ・・・」

さて自己中も吹き飛ばした事だし拉致された？二人は ほって置けば大丈夫かな・・・多分。

・・・そうだ。

「ちよつとそこの銃屋に入ろうとしてる人。」

「？」

「すみませんがその車に乗ってる二人を警察が勇者社に届けてください。」

「別に良いけど何で勇者社！？ってか車に乗ってる片方はウィル！！？？」

知り合いなら大丈夫

「って訳でポケ役の俺登場！えはははは！」

でもないか。いきなりポケ役とか言う＋変な笑いする人がまともな訳がない。

「お前はウィルを拉致した犯人に決定ってことで俺がツッコミ役に代わり罰を与えまゝす！」

めんどくさいなあ。

「帰って良いですか？」

「駄目だ」

「そうですか。じゃ、さよなら。」

「逃がさなあい。邪の呪いゲーム発動！」

「グウン！」

「……異次元？」

「此処は？」

「保育園児でも分かる説明！このゲームはクリアするまで出られないんだ。今回はどっちか降参すれば終了だ。」

「チツ、めんどくさい事をしないで下さい。まあしょうがないですし楽しみましょう。」

「行くぜえ！空気圧圧縮砲！」

相手は銃使いですか。それなら接近戦が一番ですね。

「それ。」

空気何とかを左手の普通の手刀で弾き

「滅殺手刀。」

「ドウゴオオオン!!」

右の手刀で狙い攻撃。一応威力は落としましたが。

「甘いつて!ワサビ圧縮砲辛さ当社比7万倍バージョン!」

「グチャアツ!」

「どうだ?主人公の力を思い知ったか!それクルクル回転」

「ワサビ作りの腕前は認めます。いい味出てますしね。」

「無事だったか。まああの威力の手刀を出せるんじゃないかな!」

「ヒョイ」

「銃剣も使えるんですか。接近戦なら楽かと思っただけですね。」

「

「喋る余裕は無くなるぞ。主人公の特別劇での城滅の斬撃!」

「ガキイン!」

「僕は和風好きですので包丁くらいは扱いますよ。」

「昔に借りてた家の隣に住んでた人が飼ってた犬の鎖斬り!」

「それは斬るべきでは有りませんよ。それ。」

「ガキイン！」

「罪滅斬り。」

「スパアアン！」

とりあえず胴体を切断しました。別にエグイ状態にはなってませんよ。ギャグ系の漫画みたいな状態だけです。まあ包丁が汚れないからこの方が良いでしょうけど。

「おおー。俺の胴体が見事にまっ二つに切れてるねえ。血は出てないけど。」

「で、降参しますか？」

「ハイハイ降参すればいいんだろ。」

「グウン！」

「あと何かくっ付くものある？」

図々しいな……。まあやけにネチヨネチヨした魚で良いですよ  
ね。

「コレでもどうぞ。」

「おおサンキューって気色悪っ！」

「それ以外には洗濯のり位しかありませんよ。」

「そっちの方が面白かったがもう魚でくっ付けたから手遅れだ！」

さて、帰りますか。

「それじゃあ僕は帰りますので。女子2人は任せます。いらなかったら捨てても結構です。」

「とりあえず勇者社に届けとくぜ！よっしゃこれで魅異に会えるぞ！気分は逆回り！」

魅異さんの知り合いだったのか。まあそれは置いて。服とかはまた今度にして今日はどこか宿泊できる旅館を探さないと・・・

#### 49話：和風好きは常識外だがまともな奴（後書き）

@悟視点@

「49話更新」

「ズキューン！」

「アウチノオオン！！いきなり銃で撃つな悟！」

「いや、更新スピードの事を考えてたらつい手が滑ったんだ。」

「テストが原因だったの。でも正直更新スピードが落ちてるから2、3日に1回になるかも。あつナレ君、羽双の紹介を頼む。」

【了解しましたー】

羽双

本名は神離羽双で高2の男子だが高校は気分的に入っておらず旅をするのが趣味で黒髪。

実際高2だが冷静な性格と高めの身長と礼儀正しさでよく大学生と間違えられる。（ちなみに基本は礼儀正しいが嫌いな人物に対しての罵倒や攻撃や態度の冷たさは半端じゃなく敵に回さない方がよい。）

身体能力は現在の魅異（弱体化の術×2）と同じくらいの実力である。

だが異次元へ飛ばすなどの常識外の攻撃は出来ない。（だが衝撃波などは起こせる）



そこら辺を含めれば主人公よりまともである。

好きなものは和風のもので基本武器は包丁や刀だが大抵の場合は素手で戦う。

特殊能力は時間を操る事ができる。

こんな感じです。」

「俺よりまともって書いて有るけど俺ってまともじゃない点とがあるのか!?!」

「銃剣の常識を超す錬金術のコラボレーションは異次元に物体を送るだろ。」

「そうか・・・俺はまともじゃないのか　ハア。」

「そんなに落ち込むなって。あつ次回は50話だ。

イベント企画は考えておりません。それでは皆さん次回もお楽しみに!」

「お楽しみにー……………」

## 50話：乗っ取りに注意しましょう

@魅異視点@

朝だね。そういえば今日は何かの封印を解くんだっけ。

「それじゃ、本番に備えて封印を解いてみようかな。それ。」

別にそれは言わなくて良いんだけど雰囲気作りの為に言ってみたりしちゃったね。

「キーン」

効果音のダサさはあえてスルー。

「……私は出られたの？」

出てきたのは何か目に見える気体が丸くなった感じの奴。

「そうだよー一応出れてるでしょー？」

「貴様は私を封印した憎き者 本体は何処にやった!？」

「一応別の魂みたいなのが宿ってたから放置しといたよ。」

「ハイ!？」

「それで最近気絶したって噂だよ。」

「あれは私の体だぞ！勝手に放置するなあ！つてか死ね！」

「もうちょっと女子は丁寧な言葉で喋らないとだめだよ。」

「ああもう・・・ところで封印されてる間に魂で行ける迷宮を作ったけどやる？何処も壊さずにクリアしたら商品が貰えるんだけど。」

「商品貰えるのなら当然やるに決まってる」

「　　、　　」

あつ悟から電話だ。

「もしもし？ただいま取り込んでるから後にして。」

「こっちを優先だ。昨日ウィルと誰かが拉致されてるのを誰かが助けたらしいんだが。」

「えっウィルが？それってもしかしてずっと寝てる？」

「ボケ役の話では見つけたときから寝てるらしい。今もお前の会社の診察室で寝てるぞ。」

「診察室なら・・・物理無視送り」

「・・・で？」

「ウィルの意思はそっちに送ったよ。」

「いや、どういう意味だか全然理解できないんだが？」

「簡単に言つと悟の所に居るのがウィルの本体で私の変身で出ていたウィルは意思とかだけって事だよ。そして意思を本体に送ったから完全なウィルは復活するってことだよ。」

「何か良く分かんが起こせば良いんだな？」

「そうだよ。それじゃあね。」

「ピッ」

「さて、とりあえず迷宮はやるよ。」

「本当！？それじゃあ・・・邪の呪いゲーム発動！！」

「グウン！」

そういえば最近流行ってるけど本当は禁断のゲームなんだよコレ。

「・・・ハハハ！完全に馬鹿だ！魂でプレイってことはその間に私がこの体に乗っ取れるって事も知らずに行ったよ！これでこの星は私の物だ！！」

「アハハハハ！！まずは手始めにあの馬鹿の会社でも占領だ！！」

（悟視点）

「ウィル―！朝だから起きろ！」

「ZZZZZZZZ・・・」

一応寝てるだけみたいだし魅異は本当に意思を送ったのか。

「・・・あつ、とっても柔らかそうなスライムだ」

「ええっ！？絶対GETしないと！一体何処ですか！？」

早ええ・・・起き上がるとき残像が見えたぞ。

「ああ悪い見間違いだった。」

「そうですか・・・あれ此処は？ってかそこで寝てるのは魔王！？」

「ああ・・・・・・そうなの！？」

ウィルと同じ位の年だぞ！？

「初代魔王に認定されたのが彼女なんですが・・・特星を乗っ取るうとする魂が取り付いたので倒しに行ったんですよ。」

何か凄くシリアス的な状態に突入してしまったんだが。作者め表に出て謝れ！

「いや無理だ。」

って本当に出てくるなコラー！

「あつ作者さん。何時から居たんですか？」

「作者だから何時でも登場可能だけど。簡単に言っご都合主義」

本当にご都合過ぎるよまったく。

「さて、2回発言すれば十分だろ。あとイベントの時以外本編に来るなあ！」

「えー」

「えー じゃねえよ！立場つてものを考えるボケ！」

「はいはい俺は帰りますよー。」

・・・行つたか。もう大迷惑な奴だマジで。

「それじゃあ話を戻してくれ。また話中に来ると困るし。」

「あつハイ。それで相打ちになつて私と彼女は別方向に吹っ飛んだんです。飛んでる時に彼女と悪人の魂が離れるところを見たので私は特殊能力を使って空中から探したんですが見つからなくて自分の本体に戻ろうと思ったたら無くなつてたんです。」

・・・滅茶苦茶アホじゃないかそれ！？つてか話の趣旨が元魔王からウィルにずれてるし！

「結局その悪人魂つてのはどんな奴なんだ？例えば弱点とか。」

「えつと確か 馬鹿にされるのが嫌いで性別は女だけど女らしさが少ないのが弱点です。」

それって弱点なのか？・・・とりあえず弱点って事にしよう。

「ビー！！ビー！！ビー！！侵入者有り！戦闘レベルは秘密です！全員自分ことだけを考えて生きましよう！」

此処はセオリー通りに悪人の魂か！？

ついでに戦闘レベルは放送しろよ！あと生きましようって誤字じゃないよな！？

「ドガガアアン！！」

ハハハハ！！こんな会社なんか私が全て破壊してやる！！

「あつ寝てる奴と同じ姿の奴だ。赤髪だし。」

「多分悪人の魂でしょうね。」

ふんっ？そこに有るのは私の本体じゃないか！寄こせえ！！

「キーン！」

これは剣で弾く音＋ボケ役と交替した音だぞ。我ながらナイスタイミング。

「ってか何の前触れも無くチェンジするなコラァ！」

まあこれには理由があるから見ておけって。

「なんだお前は？」

「俺は役者だ！そして監督でもある！」

「あつボケ役の悟さんですね。」

「あーそう。で、私に何のよう？とは言っても対等に話せるのは今の内だけど。」

「ちよつとこの台本を読み。そうじゃないと作者にキャラ設定を滅茶苦茶にしてもらう。」

「どんな脅しだよ！？ってか常識ハズレもいい加減にしやがれコラー！」

「作者？キャラ設定？私はそんな事信じてないから断るわよ。」

「やっぱり無理か。一応普通の奴だから作者を信じてないな。」

「ってことは俺は普通じゃないのか！？シ、ショックだ・・・」

「そつえば魅異の体に移ってるだろお前。」

「気付かれたか。でも確かにその通り。」

「えっ？それなら私の体は・・・」



「本体だぞ。」

「えええ！？そうなんですか！？」

「うん。」

「とにかく封印を解いた私に敵う訳が無い！！！」

「封印は解けても魅異自体には2つの弱体化の術が掛かってるぞ」

「魅異さんなら余裕で解けますけど・・・でも貴方じゃ無理でしょうね。」

「私を馬鹿にするなあ！！私こそこの星の支配者だ！！！」

「でも馬鹿は馬鹿だろ。ってか神を超えても魅異を超えて無いだろ？」

「そういえば魅異さん自体は何処行っただけでしょうね？」

「奴はもう私の作った迷宮で永遠にさまよってる筈だ！！！」

「えっそうなんですか？」

「ああそうだ。結局作り損だぞ？もったいない。」

「本当は知らなかったが・・・まあ良いか。」

「とにかくウィルはそっちの赤髪を何処かに避難させるか何処かに捨ててきてくれ。」

「それじでは避難させてきますので気をつけて下さいね。」

「却下。」

だつて気をつけたら面白くないだろ。

「あつ、待て！」

「お前こそ待てえい！邪の呪いゲーム発動！」

「グウン！」

「邪の呪いゲームを使えるのか！？お前は何者だ！」

「お・れ・は・魅異の追っかけだ！お前は魅異の体に取り付いて変身してる事がダメだ！俺もまだ取り付いた事ないのに羨ましいぞコラー！」

「……ただの馬鹿？」

「その通りだな。」

おお立ち直ったか。まあお前はスルーさせてもらっけどな。

「何でえええ！？」

「まあゲームを挑まれたからには相手してやろつ。マイン！」

「何も起こらないじゃないかバーカ！バーカ！覚悟し」

「カチッ、カチッ！カチチカッチ！」

「ズコココオン！ズコココオン！ズコココオオン！！！」

「ぎゃー！」

「いきなり罨に掛かるなあああ！」

「馬鹿はお前だ！マイクロレーザー！」

「ビーン！」

「ぐあー！」

「死ね死ね死ねえええ！魔王拳！」

「ズゴガアアアン！！！」

「パクリだ！・・・あつ、ぐぎゃー！」

「（明らかにワザとだろ！）」

「ああーあ、気付かれたか。」

「俺には偽者の攻撃なんか通じるぞ。」

見たかこのつまらないフェイント！実際結構痛かったし。

「打撃がダメなら デス・フォッグ！」

「シュー！」

「その霧は毒性でこの星でも感覚麻痺位はする威力は有るわ。」

「なんの！前にツツコミ役の二万セルで買った高性能空気清浄機  
って中古品で壊れてる！」

「勝手に人の金で空気清浄機なんか買うなあ！しかも壊れてる中古  
品なんか買いやがって！」

「ハハハハ！これなら私の勝ちは決定するわね！」

「この際百セルの安物で良いか！スイッチON！」

「グオオーーーー！！！」

「百セルなのに威力やけに高え！！！」

「クソッ！私こそが全て！全ては私の物！！それは運命！宿命！な  
のに反抗する気！！！？？雑魚は私に従え！！！」

「あれ？この言葉と似たような事を聞いたような・・・」

「チャンス！そうか？いや、お前の物になるくらいなら普通は反抗  
するだろ。犬でも鳥でも馬鹿でも ってか誰でも・・・あと電話  
して」

「ピッピッピッピッピッ」

「もしもし無事ですか悟さん!？」

「もしもしウィルか？俺は無事だぞ。それより相手が『私こそが全て！全ては私の物！！それは運命！宿命！なのに反抗する気！！！！』とか言ってたから『いや、お前の物になるくらいなら普通は反抗するだろ。犬でも鳥でも馬鹿でも。』と言いついたんだが。」

「あっ思い出した！前に見た夢の内容じゃないか！」

「そうなんですか。悟さん・・・もう少し此処はかつこいい事を言うべきですよ。」

「そうだよな。そんじゃあなー。」

「えっ？それだけですk ツーッ。」

「いやいや！何のようで電話したんだよ!？」

「電話代の無駄ですよそれ。」

「別にいいじゃん・・・んっ？」

此処に居るのは俺と相手だけだよな？誰だ!？まさか裏ボスとか？

「いや良く見る。昨日ウィルと敵の本体を助けた奴だよ。」

「誰だお前は!？」

「僕は羽双と言います。あと死んでください。」

「何かいきなり死んでくださいって言った！礼儀正しそうなのに！」

「つてか敵は敵で震えてるし。確実に怒ってるな。」

「な、なぜ私が貴様程度の頼みで死ないとダメなん d ヽ

「それじゃあ死ぬ。これなら頼みじゃないから十分ですよね？」

「……くたばれえええ！！ダークシャープミサイル！」

「嫌です。それ。」

「ズゴオオオン！ズゴオオオン！ズゴオオオン！」

「おお 凄い。爪楊枝つまようじを投げて防いだぞ。」

「まだまだ！ダークシャー ヽ

「バシン！！」

「ぐぎゃ…… ヽ

「う、団扇で叩き倒した……やるう！」

「今の音って団扇で叩いた音なのか！？つてかその攻撃に目を輝かせるな！」

いや、だって凄くやりたいし。

「グウン」

おつ、元の世界に戻ったな。

「じゃ、さよなら。」

「ベッシイイン！！！」

叩き飛ばした！ってか団扇は何で壊れないんだ？

「さて、じゃあ僕は帰りますね。」

「ちよつと待った！何で邪の呪いゲームのフィールドに入ってこれたんだ？」

「魅異さんに飛ばしてもらいました。迷宮を迷わずにクリアしたら僕のところへ魂だけが飛んできたんです。」

「でも何で此処が分かったんだ？」

確か魅異は新スーパー勇者探知機改造版DX自分だけ有効バージョン1・18を使えるぞ。

「・・・それってどんな道具だよ？」

道具じゃない、技だ。

「あつそ・・・」

「それじゃあまた会えたら会いましょう。」

「おお。じゃあな。」

さて、勇者社に居る元魔王でも見に行くか。

勇者社

到着。もう夜だし  
弁当売ってないかな？

「あつ悟。」

「魅異いいい！無事だったかあ！」

「ミネラルレーザー」

「ズバババァッ！！」

「ぎゃああああ！」

「だ、大丈夫か？」

ああ大丈夫だ。胴体に風穴が開いただけだ。

大丈夫じゃねえええええ！！！！普通は即死レベルじゃねえか！！！！

「魅異、何かくっつく物でも頂戴。あと体の一部になりそうな物も。」



」

「それならこのジャルスのボンドと烈のグチャDで良い？」

「いやいやいやいや！ボンドは良いとして（本当は良くないが）グチャDってなんだよ！？」

「魅異が言っならそれでOKだ！」

「じゃあこれとこれね。」

「うあ・・・なんだこりゃ？」

おいッツコミ役。

「何だ？」

お前が俺なら多分今頃倒れてるぞ。

「いや待てやコラア！一体何を渡されたんだよ！？」

あーうん。何か正直捨てたいような物だ。何か動いて 跳ねてる

「捨てるよ！マジでそんなの体に植えつけるな！！俺にまで被害が来る！！」

残念ながら手遅れだぞ。ボンドで無理矢理固めたから大丈夫！

「ぬあぬい！？（何！？と言った）」

「ところであの元魔王はどうなった？」

「それが記憶喪失で名前とか思い出せないんだって」

「ウィルに聞いたら早いんじゃないか？」

「ウィルは元魔王とは仲は良かったけど名前は覚えてないらしいよ」。

まああの勇者なら知り合いの名前を1年くらいで忘れるだろうな。

「そういえば水魅知らない？勇者社に来てた筈なんだけど居ないんだ」。

「家か？それなら俺が見てくるぜ！」

「居なかったらそのまま家に居て良いよ」

「オツケー。」

「そして家」

「ただいま………何やってるんだ？」

何かネガティブなマイナスオーラを出してる奴が居るんだが。せめてマイナスオーラよりマイナスイオンにしてくれ。

「・・・あちゃー、魅亜の事忘れてた。」

「ハア 今日1日誰とも会わなかった・・・」

「・・・・・・ほっと」。

「うおい!?!」

水魅は居ないし・・・腹減ったなあ。まっ飯食って寝よ。

50話：乗っ取りに注意しましょう（後書き）

@ 悟視点ギヤアア!!@

「なんだ今のナレ君の叫び!?!」

「ズキューン!ズキューン!」

「アウチノオオオン!!グハア!」

「よし到着う!流石は俺!」

「な、何するん」

「ズバババツ!」

「ギヤウチノオオオオオン!!」

「ツツコミ役に懲らしめるように頼まれたからちよつと撃たせてもらったぞ。」

「何故!?!」

「更新日が遅いだって。」

「最近サボり気味だからなあ・・・1週間に1〜2回位するようにするか。」

「そうやって減らしていくとその内更新しなくなる可能性があるだろう。」

「大丈夫だ!多分!それでは皆さん次回もお楽しみに!」

51話：50話超えちゃったし表彰式でもやりましょう／夏休み突入！

@ 悟視点 @

今日は生徒全員が体育館に集まっているぞ。何でって？校長が気分で何かやると聞いて来てみたら表彰式でした。

でもちよつと前に主人公賞を貰ったぜ！滅茶苦茶実感が有る賞だ！

「次は魅異君ですよ。」

「はいはい」

おつ魅異も呼ばれた。この学校では必ず1人1つは賞をもらえるんだが2つ目以降は学校が作った物じゃなくマジでもらえる賞だ。俺は6枚貰ったぞ。

「おい魅異は何枚賞を貰ったんだ？」

「私は去年の記録を上回って78枚だったよ。」

「マジですか・・・」

1人1枚もらえる奴を除いても77枚じゃねえか！凄すぎる。

「次はウィル君。」

「あつ、ハイ。」

ウィルは何か考えてたみたいだな。昨日の事か？あと先に言っとくけど今はウィルと魅異は別々だからな。昨日ウィルの本体が見つかったしな。

確か転校生は新入賞が必ず着いてくるから2枚以上は確実だな。

「悟、ナレ君があそこに居るよ。」

「嘘おん！？」

って叫んじゃったよ！皆俺達の方に集中して　ないよ！スルーされた！

でもマジでナレ君居たし！職員の席に座ってるんじゃない！

「それじゃあ悟君も疲れてきたみたいですし終わりにしましょう。」

いやいやその気遣いは嬉しいけど烈とか賞を貰ってない生徒がこっちを睨んでるんですけど！ヘルプミー！

「あと今日から夏休みですので後は自由行動をしていてくださいね。」

「

「悟！俺の賞を返せえ！！」

「いや奪ってないから！ってかどうせ普通の賞は貰えないだろ！」

「うるさいボケエ！！待てえええ！！！！」

「俺はボケは無いしお前の方がうるさいし待てと言われて待つかあ  
！」

隙を見て不意打ちしてやるぜ！

「いやー、仲が良いねえ。」

「あつジャルス居たんだ〜。」

「まあねー」

つてか俺達の追いかけ合いは無視かよ！？おっ隙有り！

「電池放電弾！」  
でんちほうでんだん

「バチチチッ！！」

「ぎゃああああ！！痺れる！！」

この電池の電気を放電する時間は3分！この間に逃げ って！

「待て悟ううう！！！」

「しつこい！つてか放電電気喰らいながら寄るな！」

逃げないと俺まで痺れる事になるぞ！

（2分後）

追いつかれるう！ドンだけ体力あるんだ馬鹿烈め！

「って行き止まり！？なんの！」

ジャンプ！そして壁を蹴って逆方向に 無理だああ！！

「ドコオン！ドサツ、バチチチッ！！」

「ぎゃあああああ！！！」

……巻き添え受けたし。状況を言うとき壁を蹴って逆方向に飛ばうとしたがキックを失敗してジャンプ中に烈が壁に激突してその上に俺が落ちて一緒に放電を受けた。

「戻るか？」

「当然！！！」

立ち直り早っ！！流石はヤラレ役。

くとりあえず家へ

「さて、今から夏休み計画を立てようと思ったんだが もう皆出てくるのか！？」

「そうだよ。私は知り合いの家にちょっとね。」

「私も一応そこ行くんだけど。」

「すみません悟さん。私も行く事になってしまっで。」



そんなもって水魅は行方不明ですか・・・まあ勇者社の人達が探してるから大丈夫か。

「そうか。それじゃあ俺は家で留守番でもするかな。」

これは思ってもいないチャンス！久しぶりにのんびり出来る！

「もうすぐ駅の時間だからもう行くね」

「おお。いつてらっしやい。」

出来れば戻ってこなくていいぞ。

「さーで、久しぶりにのんびり休むか」

「チャーチャーチャチャチャチャチャ」

・・・このタイミングでの電話って良い事がないんだよね。ってか着メロ変えたか俺？

ってアキステからだ・・・出たくないが・・・仕返しされるのも嫌だし出るか。

「ピッ」

「もしもし、アキステか？」

「当然！前回50話突破したから烈とジャルスとかと記念会が有るんだが来ないか？」

マジですか！？どうせ暇だし行つてやるか。

「O K O K。何時頃に行けば良い？」

「6時から開始で解散は朝の5時だ。」

朝までやるのか！？　だがそれでこそ面白そうな予感だ！

「分かった！場所は？」

「現代エリアのアキステカンパニーの3階だ。」

「よし覚えた。じゃあな。」

「ピッ」

さて、50話突破記念パーティーか。俺がパァーっと盛り上げてやるぜ！

51話：50話超えちゃったし表彰式でもやりましょう／夏休み突入！（後書き

@ 悟視点 @

「さてさて、今回はパーティに突入します。」

「更新ペースは上がってきたか？」

「不定期だから微妙なところだ。」

「ところでヒロインが居ないが何処行っただ？」

「ヒロイン？ 魅異のk」

「撃ち殺すぞ？」

「スミマセン調子に乗りすぎました。実は女子キャラ多いな～と思  
ったから居なくしてみただけだ。」

「そうか。別に他に何も無ければ良いんだ。」

「それでは次回もお楽しみに！」

## 52話：50話突破パーティ編／遅刻すると損するぞ！

@悟視点@

よし到着！パーティ開始20分前だし余裕余裕。

「入るぞー」

「ガチャッ。」

【おっ、良く来たな。】

【こんにちは。】

「あつ悟ー」

何か作者のカッコが「」から【】に変わってるし！

ちなみに返事をしたのは最初が作者で次がナレ君でその後はジャルスだ。

「ってかアキステ そのカッコはどうしたんだ」

【ああ、この服は夏に動きやすいように選んだんだ。模様も少なくて】

「格好じゃなくてカッコだボケエ！お前の服なんかマジでどうでも良いわ！」

【ああカッコな。俺とお前って口調が似てるから見分けをつける為と目立つために変えたんだ。】

前者は良いとして後者の理由が納得できない！作者なのに目立つなよ！

「ところで烈は？」

【烈はまだ来てませんよ。】

「あと15分だけど間に合うかなー？」

「さあ？つかヤケに人少なえー、俺含め4〜5人だよ。本当にパティなのかこれ？」

【それが他を誘ったら全員NOって言うから大会場をキャンセルして普通の家を借りたんだ。食事のランクも高級品からピザに替えて・・・・・】

「あつ・・そうなのか。」

確かに5人位で大会場はなあ・・・普通の家で高級品も微妙だしまあ良いか。

「それより烈が遅いねー」

【待つてる間に大富豪でもしようぜ。】

【でも大富豪は場所によって微妙にルールが違ふ所がありますから作者の知ってるルールでやるのは読者にどうかと思えますよ。】

「神経衰弱で良いんじゃないー？」

「賛成だ。なぜなら俺は運と記憶力には自信が有るからな！」

【よし！それじゃあ1は烈を罵倒できるってのはどうだ！？】

【「「賛成」」】

フルボッコも有りにして欲しいなあ〜

【ちなみに特殊能力も有りで良いな？】

「ああ分かった有りで良い・・・い？・・・って待てい！全然良くないわ！」

明らかに反則技を使う気だろ！

【チツ、馬鹿ほど勘が良い】【「ズキューン！」】【ぎゃあ！】

「それで何か無いのか？」

「見る限りは特に何もなさそうだよ〜」

【確か冷凍庫にピザが凍らして有りましたよ。】

「ナイスだナレ君！俺を冷凍庫まで案内してくれ！」

【いえ、そこに有りますが・・・】

「へ？」

俺の質問に対してナレ君が指差したのはタンス……

「ああどう見てもこれは冷蔵庫だな。これでいろいろ冷やすんだな。んな訳有るかぁ！」

「無理矢理なノリツツコミだねー。」

コラそこへのツツコミは禁止だ。

【とりあえず……このピザだ。】

本当にタンスにピザが！しかもちゃんと凍ってる！

【そうだ！ピザの大食いバトルをしましょう！】

おっナレ君の割にはナイスアイディア！

【別に余りのピザはいくつでも取り出せるから良いぞ。】

くピザ食いバトルナレ君の番

【じゃあ僕から行きますね！いっただきます！】

「バキーン」

【はふああー！】

何かナレ君が口から血を出しでぶっ倒れた！

「どうしたのー？」

【こ・・・この・・・ピザが硬くて歯が・・・】

「どれどれ 1部を除いたら抜けてるし！」

ちなみに1部は抜けてるのじゃなく折れてるし痛そ。

【まあ次の話あたりで直ってるだろうから気にするな。】

【はい・・・】

返事はしてるがかなり落ち込んでるみたいだな。

くピザ食いバトルジャルスの番

【同じような事が起こらないように普通のピザを用意したぞ。ナレ君は参加不可だからジャルスの番だ。あとナレ君は血が止まるまで喋るなよ。】

「じゃあ行くよー」

なんか普通に食べてるな。・・・（省略）・・・1枚完食したな。

「これで僕は終わりだよー」

【早っ！そして少なっ！】

「これで満腹なのか？」

「腹八分」



【「いや満腹になるまで全力で食べよ！」】

くピザ食いバトル作者の番く

【作者権限で100枚食べた事に】

「いやいや却下だから！」

【チツ、しょうがないから俺の実力でも見てろ！】

・・・・・・・・・・・・・・・・待つてる間が暇だな。

省略を使うのも良いが適当に世間話でもするか。

「誰とだ？」

お前以外となら誰でも良いぞ。

「まあまあそう言っなって。元勇者が本体に戻ったから待機場所に誰も居なくて暇なんだ。」

そりゃ暇そうに。で、何を話すんだ？

「じゃあこの星であれ？って思う事が有るなら俺が何でか答えてやるう。」

偉そうに・・・それじゃあ何でセルが円って聞こえないんだ？

「それは・・・この国の金の単位がそれだからだ！あと高性能ほんやく飴のプログラムのちよっとした問題だな。」

どんな問題なんだ？

「知るか。ところで次は俺が1つ聞いていいか？」

【もうギブだ・・・】

もう食い終わったみたいだから無理だ。おっ4枚食ったか。

「ガーン！マジでシヨオオオオツク！」

「次は俺だな！」

まず1枚目！余裕だ！

次は2枚目！楽勝！

3枚目！よし！

4枚目！まだまだ！

5枚目、ちょっと満腹になってきたな。

6枚目、あと1枚は頑張つてやる・・・

7枚目・・・ギブ。

【6枚と半分か・・・負けた。】

「【おおー】」

「よっしゃあ！俺の勝利！あと・・・水か何か無いか？」

めっちゃ辛いんだぞコレ！ブラックペッパーの味が口一杯に広がってるんだぞ！

【ゴマなら有るけど？】

「いらねえよ！」

「ピンポン」

【あれ？誰か着たな。俺は残ったピザを処分してるから悟が出てくれ。】

「こんな時間に誰かなー？」

【さあ？此処は呼ばれた人しか来れない筈なんですけど・・・】  
とりあえず出てみないと分からないな。

「ガチャッ」

「こんな時間に誰ですか？ あ、烈。」

「あ、ってなんだよ！？忘れてたのかオイ！？」

「当然！ピザ食いバトルで白熱してたし。」

「ピザ！？よっしゃそれなら俺に任せろ！！」

「あ、でも」

「ボオオオン！！」

「・・・ピザの処分が終わったようだな。」

「何いいい！！！！ピザ食いバトルするって聞いて朝から何も食っていないんだぞおお・・・」

「バタツ」

「気絶したあ！？原因がショックか空腹かどっちか分からないが気絶した！！」

「でも・・・自業自得だろ？遅刻したんだし。」

「あー、とりあえず中まで運ぶか。」

52話：50話突破パーティー編／遅刻すると損するぞ！（後書き）

「後書きは・・・省略します。それでは皆さん次回もお楽しみに  
！」

### 53話：50話突破パーティ編／食後の運動はバトル！

@悟視点@

【さて、じゃあピザ食いバトルも終わった事だし】

「いやいや！俺何も食ってないんだけど！！」

【食後の運動に戦闘でもしてもらいます。】

戦闘 一体誰とだ？

「だから俺は何も食ってないって！！」

「戦闘の相手って誰ー？この中のメンバーで戦うのー？」

相変わらずナイスなタイミングの質問だジャルス。

【それも考えたけど他の相手を用意したんだ。ナレ君説明頼む。】

「その前に俺が何も食って」

【それじゃあ説明します。まずは今からくじ引きでメンバーを3つに分けます。そしてそれぞれ別の場所にワープして戦う・・・それだけです。】

【ちなみに相手は特星の神様の上・中・下・の三つの中からランダムで選ばれるぞ。】

神様ねえ・・・正直あまり驚かないなあ。前に見たことあるし。

「なあ・・・俺の飯」

「メンバーの足りない分はどうするのー？」

足りない？ええと俺・烈・ジャルス・作者・ナレ君・確かに足りないな・・・

【ちゃんとゲストを呼んであるから大丈夫だ。来るまでにくじ引きでもやつとくぞ。】

くじ引きシーンは省略

メンバーは俺と烈・作者とゲスト・ナレ君とジャルスの三つになった。

ってか作者がゲストと組むって卑怯な気がするぞ！ゲストが強い場合だけど・・・

【あとはゲストが来るのを待つだけですな。】

「それまでの間に飯を」

「邪魔します。」

ナイスタイミングで来た！！って…

「ゲストって羽双！？」

「はい。」

滅茶苦茶強いじゃんか！！魅異にまともにダメージ与えた奴だぞ！！

「誰ー？」

「初めまして。僕は羽双と言います。」

「よろしくー。」

【それじゃあ早速ワープするか。】

「あつ、その前に。」

【何？】

「寿司を奢る約束を破った場合は…覚悟してくださいね？」

こ、怖っ！覚悟してくださいね？ところが特に！声のトーンが低かったし！

【ああ・・・ちゃんと奢るから睨まないでくれ それじゃワープ！】



（異次元1（悟・烈））

「到着．．．って起きろ！」

「アボベエエエー！」

寝てたから顔面キックをお見舞いしたら変な悲鳴を上げやがった．．．  
騒がしい。

「あつ悟！！此処は何処だ！？」

「サバンナの所だ。」

今言ったように何かやけにサバンナ的でゾウサイズのライオンみたいなのが遠くを走ってる。

「ってか腹減ったな．．．悟！あのライオンでも狩ってきてくれ！  
！」

「嫌だ食われる！それ以前に潰される！」

それにしても神様は何処に居るんだ？見る限りそれっぽいのは居ないが．．．．

「とりあえずそこの家に行こうぜ！！」

「家？そんなのなんか 有ったよ．．．」

サバンナには似合わない立方体で黄色のシンプルな家が後ろに建っ

てたよ・・・

あつ看板まで 『この先ギルオーラ様の城』 って書いてあるな。矢印つきで。

「・・・これの何処が城なんだよ！？どう見ても家か小屋だろおおー！！！」

「そこはツツコンでやるな悟！良くある事だろ！？」

「良くある訳ないだろ！しかも黄色い家ってどんなセンスだよ！？」

「良いセンスだ！！」

「死ねえ！」

跳び蹴り顔面狙い！

「ベコオ！」

「ぐぼばっ！！」

おお、我ながら結構良い当たりじゃないか。

「さて、さっさとギルオーラとか言う奴を倒しに行くぞ。」

「あ...ああ.....」

「さて、家の前まで来たわけだが どうやって入る？」

まっ、烈に聞いたところで口クな答えは返らないだろ。

「見る限りこの家は一部屋しかなくドアの鍵は開いてるからドアを蹴り開けて勝負しろとカッコ良く言うのはどうだ！！??？」

予想外に良いアイデアだな・・・

「よしそれに決定だ。じゃあ二人で行くぞ1、2の3！」

「ドカツ！」

「おい俺達と勝負し」

「キャ!？」

「ボタン」

「・・・どういうことだよ!？」

「いや知らねえ!!!!」

うるさっ!・・・それでさっきの状況を説明すると 突撃したまで  
はいいんだが中に居たのは女の子でしかも入浴中でした。それで驚  
いて俺がドアを閉めたって訳だ。

「それでどうするんだ？」

「よし！！もう一回突撃しよ」

「ベコオオツ！」

「ぐぎゃああ！！！」

跳び蹴り2回目。まあそう言つと分かつてたけど。

「とりあえず看板まで戻るぞ。」

「やっぱり『この先ギルオーラの城』って書いてあるな。矢印はあの家の方向を向いてるし。あの子がギルオーラ？」

「とりあえずもう一回家に行ってみようぜ！！！」

「まあお前が突撃したから入浴を終わっただろうし別に良いぞ。」

「お前がつて悟も突撃しただろ！！！」

「お前の作戦だろ。って訳で謝るのはお前な。」

「ひ、卑怯者！！！」

何か同じ場所を往復すると疲れるな・・・いや距離はそんなに無い

けどさ。

「コンコン ガチャ」

「はい？」

やつぱさっきの女の子だ！見かけは水魅と同じくらいの年齢だ。まあ簡単に言う小学生くらいだな。

瞳は緑で髪は金髪 いやレモン色だな。見かけは明るそうな雰囲気。

「えっと いきなりで悪いんだけど神様？」

「はい！私は神様の中でも上級ランクなんですよ。あつお茶でも飲んでいきますか？」

「いや、俺達はバトルに」

「飲んでいきます！！」

何勝手に返事してるんだコラア！俺は早く帰りたいんだぞ！・・・  
心の中で叫んでも聞こえないけど。

「あとクッキーも食べますか？」

「あ、でも来る前にピザ」

「マジで食べたいです！此処に来るまで何も食べてないんです！！」  
そつえば烈は何も食ってなかったな。でも遅刻する方が悪いだろ。

「じゃあその席で待っててくださいね。」

「はい！！！」

マジでうるさっ！

「ところで名前は何て言うんだ？」

「悟うううう！！！！」

何か烈が普通に聞いちゃったよこの人！的な表情をしてるが無視。

「私ですか？私はアリユミーです。アリユミー・レイカレンと言います。」

「「ありや？」」

「それじゃあお茶を入れてきますね。」

ギルオーラじゃなかったな。ギルオーラだったらそれはそれで驚くが。

「それにしても見事にワンルームだな。」

一つの広い部屋にキッチンや玄関やベットや洗濯機やテーブルやその他多数がそろってる。

「お茶が無かったので紅茶を入れましたあ。クッキーはもう少し待っててくださいね。」

「どもー。」

「ありがとう！！親切にされるのは久々だ！！」

久々なのは当然だな。所詮はお前だし。

「いやぁ良い子だなあの子は！！」

「後で戦うつて事を忘れるなよ？」

「ええっ戦うのかよ！？俺にアリユミーを攻撃するなんて無理だあ！！」

それが敵の作戦かもしれないって事は言わないでおくか。言っても反論するだろうしな。

「クッキー出来ましたよ。ハイどうぞ。」

ほゝ、結構上手に出来てるな。ってか神様でも料理つてするんだな。

「じゃあ俺も貰うかな。」

「させるか！全部俺が貰う！！」

つて！一気食いするな！粉が落ちてるぞ！

「ま、まいっはは　ゴホッ！クッキーは死守試食したぜ！！」

「そこまでしてまで全部食う神経が分からねえな。」

「うるさいアホ！！俺の神経は天才的なんだ！！」

天才的？ああ天才的に馬鹿だって事だな。

「さて、バトルしてもらいたいんだが。」

「いいですよ。私の技で私のものにしてあげます」

「アリユミーのものになっちゃいます！！！！」

烈がすでに敵に回りそうだから殴っていいか？つか殴るか。

「バコッ！」

「いつてえ！！冗談だ冗談！！だから無言で不意打ちで殴るな！！！！」

「それなら試しにアリユミーを攻撃して来い。」

「オツケー！行くぞ！！今回の武器は妖刀・呪恨じゅこん魔炎刀まえんとうだ！おりやあぁあつ！！！！」

おおお！凄い気合だ！コレはいつもの烈と違うんじゃないか！？

「あのープレゼントがあるんですけど」

「えっマジで！？」

そこで止まるなよ！やっぱいつもの烈だああああ！！



「コレでもどうぞ!」

「ズコオッ!」

「ぐおはっ!？」

特星辞典を投げつけられたぞ・・・有る意味レアな本だなあれ。

「ってかいきなりやられてどうするんだよ!？」

「俺はもう ダメだ。」

「お前は元々駄目人間だったような気がするが・・・」

「ひ、酷え」

いやー、だって真実だしなあ。

「それそれそれえ!」

って特星辞典を三つも投げてきた!!

「危なっ!ホーミングミサイル弾!」

「ズコオオン!」

1つは相殺!残り二つはどうする!？ あっそうだ

「烈ガード!」

「俺!？」

動けないんだからこの位はしてもらわないとな。

「ガスッ!ゴスッ!」

「ほぐああああ!」

最初からこうすればホーミングミサイル弾を一つも使わずにすんだのに 損したあ!

「喰らえ!三流刃弾!」

「行きますよ!宇宙からの流星弾!」

「ズバババン!」

「きゃあ!？」

「よっしゃあ!流星弾とやらを貫通してダメージを与えたぜ!」

俺の実力も神様上級ランク位まで上がったかあ。フッフ、コレが主人公の実力だ。

「いやあ流石です。私でも敵わないなんて普通の人じゃありませんね?」

いやいや!俺は普通の主人公だから!

「でも私はまだ上級クラスとしての実力を出してませんよ？」

「えええ！まだバトル続くのかよ！？」

「いえ、今日は私の負けですので帰って良いですよ。」

帰っていいの！？よっしゃ！やっと帰れるぜ！

「それじゃあワープさせますね。」

「おお頼む。」

「後、そのうち家にお邪魔させていただきますね。」

家に来るのか？まあ別にいいけどその時に魅異が居るかもしれないぞ？

そしてもし居た時に来たら疲れが普段の十倍くらい多くなる筈だ。

「まっ、その時はクッキーの作り方と紅茶の売ってる場所を書いてある紙もくれ。」

「分かりましたあ。それワープ」

「キーン」

（異次元2（ジャルス・ナレ君））

@ナレ君視点@

「到着ー」

【とりあえず付きましたね。】

場所は どうやら山のようですね。しかも岩だけの。

「眺めが良いね此処ー」

【あつ、おにぎり有るけど食べますか？】

「良いねー、景色を眺めながら食べようー。」

まあ敵の神様が見当たらない事ですしのんびりするのも良いでしょう。

「さてー、弁当も食べたし神様でも探そうかー？」

【そうですね。でも何処に居るんですかね？】

「それは俺のことかな？」

ありゃ、相手から来てくれましたね。

【貴方が神様ですか？】

「いかにも！俺は中級クラスの有名な神（自称）である錆嵐愚様ださびらんぐ

「！」

【では早速バトルをしたいんですが。】

「良いだろ！掛かって来い！」

「じゃあ、ランダム特技！」

「ズゴオオオオオン！！」

流石は神様、ジャルスの攻撃を見事に避けたね。

「いやまてやコラ！いきなりその威力は反則だ！」

よし、私は後ろからこっそり攻撃しましょう。ちょうど近代的なビームサーベルがあるので。

「だってランダムだからしょうがないよー。」

「クッ！」

「いまだっ！」

「バチチチッ！」

「甘いんだアホが！」

ああっ防がれた！って振り回さないで下さい！

「そらそらあ！さっきの不意打ちのやる気はどうしたあ！？」

【もうありません！ってかなんで二ームサーベルなんか持ってるんですか！？】

「バチイン！」

「神様だからだ！お前こそもってる理由を言え！」

「バチチッ！」

【ナレ君のあだ名を持つてるからですよ！】

「バチイン！」

崖際で形勢は五分五分 何か逆転の出来事でもあれば良いんですが。とか思っていれば何か起こるはずです。今までのパターンなら。

「ランダム特技……ナレ君自爆だつて！。」

【「えっ？」】

「バゴオオオオオン！！！」

【「うわああああ！！！」】

このままじゃあこの神様と一緒に崖下に！！こうなったら

【「ちょっと背中をお借りしますね。」】

「は？」

「ピヨーン！・・・スタツ」

愉快的ジャンプ音で神様を踏み台に無事着地！

「お帰りー。」

【あ、危なかった。】

「だろうねー。」

とりあえずこれで帰れる・・・よかった。

「ところでどうやって帰るのー？」

【ちゃんと帰還ボタンを持ってますよ。神様を倒さないと使えない仕組みですが】

「ポチッ」

【倒した今なら使えるんですよ。】

「やっと帰れるねー。」

【そうですね。】

「キーン」

↳ 異次元3（アキステ・羽双）

@羽双視点@

ここは 森？

「どうやら到着したようですね。」

【そうだな。あつ羽双、頼みが有るんだけど。】  
めんどくさいなあ。

「嫌です。」

【頼みの内容言う前に嫌って言うか！？】

「はい。」

【・・・お願いですからちよつとで良いので】

邪魔な

「分かりましたから退いて下さい。邪魔です。」

【えっ聞いてくれるの！？】

少しならいいか

「少しだけですよ。」



【実は】

「嫌です。」

【早っ！？三文字しか喋ってないぞ！】

図々しいなあ。

「三文字じゃあ足りませんか？」

【足りないよ！せめて二十文字は喋らせてくれよ！】

「じゃあ二十文字でいいですよ。」

面倒なので勝手に喋っててください。

【神様と手加減して戦って欲しい。】

「嫌です。」

さっさと終わらしたいので。

【お願い！早く終わると読者がとっっても美味しい饅頭を上げるから！】

饅頭ですか？

「……………チッ、しょうがないので戦ってあげますよ。だからちゃんと饅頭一万個用意してください。あと相手が来たら黙っててくださいね。」

【ああ分かった。一万個？】

「とりあえず相手を探しましょう。」

「その必要はない。僕は此処に居ますので。」

あっちから来たんですか。楽で助かりますよ。

【お】

「黙っててください。で、名前は？」

「僕はバルサイディング・カタオーバーラルド。下のランクだけど神様だ！」

下のランク 雑魚か。

「雑魚ですか。」

「雑魚って言うなあ！僕はこれから努力してもっと強くなるんだ！」

熱心な事は良い事ですが

「まあ無駄な努力ですね。」

「何だと！？」

聞き返しても一度しか言いませんよ。

「えっと バクチク・カバーでしたっけ？貴方程度じゃ無駄な努力で終わるだけです。」

「バルサイディング・カタオーバーラルドだ！覚えろ！」

面倒だし略そう。バルカタ？・・・バカでいいか。

嫌です。あと面倒なので略してバカで良いですね？」

「言い分けないだろお！」

うるさいなあ

「僕は正直貴方の名前になんか興味は無いんです。とにかく消えてください。」

「消えてたまるか！」

わがままの多い雑魚だなあ

「それなら神様を辞めてください。」

「なっ！？そんなことする訳」

「貴方に神様をやる資格なんてありません。辞めたら皆が喜びますよ。」

「そ、そ、そんな・・・」

「もう邪魔なのでその土に埋まっててください。」

そしたら帰れるんで。

「神様なんか辞めてやるううう!!!」

「別にそれは勝手ですけど僕のせいにならないで下さいよ。」

さて、これで終了。

「終わったので帰らせてください。あつ、もう喋っていいですよ。」

【そう?じゃあこの帰宅ボタンを押してっと。】

「ポチッ」

【これでよし。アイツ神様辞めるかな?】

「辞めるんじゃないですか?僕には関係ありませんけど。」

【関係あると思う】

「キーン」

くパーティー?会場であるリビングく

@悟視点@

「キーン」

おっ、アキステと羽双も帰ってきたな。

「ようお帰り。」

【ただいまー。 あれ？烈とジャルスは？】

【二人は眠いから帰りましたよ。】

【ええ！？これからがメインなのに！】

「…………じゃ、僕も帰ります。」

【待てえ！これ以上メンバーが減ると後書きメンバーだけになるから行かないでくれ！】

必死に止めてるが 無理だと思う。

「そんなの僕には関係ありません。さよなら。」

ほらな。普通に却下されただろ。

【せ、せめてパーティについて一言だけ何かコメントを！】

「ちゃんと饅頭を送ってください。」

「ガチャッ、ボタン」

ハハハハ！饅頭を送ってくださいだって！

【・・・どうするんですか？誰かゲストを呼ばないと。】

【今すぐ電話して来てもらうか。】

「呼ぶなら一人で良いぞ。多いとうるさいし。」

【分かった。少し待っていてくれ。】

あつ戻ってきた。

「どうだった？」

【次回に来说うってた。って訳で次のイベントは次回だ。】

【今回は何をやるんですか？】

「確かにそれは気になるな。疲れることなら俺も帰るぞ。」

【次はちよつとした言を聞いているだけだ。】

おっそれなら楽しそうだ。あと次回のゲストを楽しみにしてるぜ！

## 54話：50話突破パーティ編／いろいろベスト3

@悟視点@

【さて、そろそろゲストが来る頃だから注意しとけよ。】

「え？あ、ああ。」

注意って 誰が来るんだよ？

【あのー、そろそろゲストの答えを教えて欲しいんですけど。】

【来たら分かるって。 悟はだけど。】

「いやマジで誰」

「バリイイイン！！」

窓が割れた！？つかガラスが降り注いで痛いし！誰かヘルプミー！  
ってナレ君気絶してるぞ！

「誘惑を得意とする神様、此处に降臨です！」

あ、アミユリー……………か？

【な。悟の知り合いだろ？】

「確かにそうだが…………瞳の色が違うぞ。」

俺が戦ったアミユリーは瞳が緑だったが今居る奴は瞳が赤だ。

【アミユリーは瞳の色によって特徴が違うんだぞ。】

「ええ！？そうなのか！？」

「はいです！確かに私は瞳の色によって特徴が違うです」

【特徴が違うどころか多重人格だ。一人一人別の考えとかを持っているからな。でも全員同一人物と言う不思議なタイプだ。】

全員同一人物 俺とボケ役みたいなものか。

「天才の俺を呼んだか？」

呼んでねえよ。

【瞳が髪の色に近くなるほど本性に近づいて馬鹿になるんだ。瞳の種類は髪の色に近い方から言うとしモン色・黄色・金色・赤色・緑色の順番だ。】

「って事はこのアリユミーは四番目に馬鹿なアリユミーか。」

「馬鹿って言うなです！私は馬鹿じゃないです！」

【ちなみに赤色は尾語にですを付けるのが特徴だな。】

無理矢理つけてるように聞こえる事もあるな。



【さて、今からやることはいろいろな事のベスト3を発表する！】

「例えば何です？」

【例えば主人公に向いてるキャラベスト3とかだ。】

そんなのダメに決まってるだろ！！

【まあそれを聞いてる＋たまに何か言うだけでいい。それじゃあ行くぞ。まずは最初の方は出番が多かったのに最近出番が少ないキャラベスト3！】

「一人は大体予想できるんだが。」

「私は分らないです」

分らないのに嬉しそうに言うのはおかしいだろ。　ちょっと馬鹿だな。

【1位はクレーで最近全く出番が無いから。2位は校長でちょこちょこ出るが基本的に出番が少ない。3位は俺！作者だから自重して出番を減らしたらこうなった。】

「クレーはまあ予想通りだったな。」

「私の出番を作者さんより増やすですー！」

【何で！？・・・えつと次は強さランキングベスト3！】

「二人ほど心当たりが有るんだが・・・」

「私は予想もつかないです！。」

【1位は魅異で理由は常に遊び程度にバトルをしてるから。2位は羽双で今の魅異位の実力があるから。3位は俺で作者の特権を使うから。】

「また3位はお前かよ！」

「作者の特権なんて卑怯ですう！」

【次は面倒くさがりやベスト3！】

「これは絶対作者が入るな。」

「私の知らない人が多いです。でも魅異さんは知ってるのです」

魅異の事知ってるのかよ！？

【1位は羽双でほとんどの事を面倒と思ってるから。2位は俺で更新を面倒と思う事がちよっぴりあるから。3位は魅異で面倒な事は適当に人に任せる事があるから。】

「作者の理由は駄目だろ！更新を面倒だと思っな！」

「ちよっぴりでも思ったら駄目です。」

【はいはい。次は悲惨な奴ベスト3だ。】

「やっと面白そうなのが来たな。」

「大変な人の紹介です！。」

【1位は水魅と烈が同着。で2番は1番が同着だから無くて3番は……悟で良いや。】

「さっき考えたよな！？迷った結果俺かよ！普通に俺は悲惨だぞ！」

「悟は大変そうです。」

【ああー、何か飽きてきた。】

お前がそれじゃあ駄目だろ！

【この際タイトルはフェイントって事で別の事したら駄目かな？】

「タイトルって何です？」

「気にするなアリユミー。で、駄目に決まってるだろこの馬鹿が！」

【馬鹿って言うな！お前なんか針飲んでろ！】

「何で俺が針飲まないといけないんだよ！？」

「ふああゝです。眠いです。」

やっぱり無理矢理言ってるように聞こえる。

【よし！じゃあ眠気覚ましにバトルでも】

「題名無視していいから他の事にしてくれ。」

【そう？じゃあ終了にするか。】

このタイミングで！？

「まあ賛成だな。」

「賛成ですー。」

【じゃあ帰った帰った。ナレ君さっきから気絶したままだから復活させないと。】

「じゃあなー。」

「さよならです。」

く家く

「これで平和的にオチも無ければハッピーエンドだ！」

「わーい、ハッピーエンドです」

そうそう、ハッピーエンドオハウアッ！？

「何で居るんだアリユミー！？」

「着いて来たからです。」

そーいう意味じゃなくて…

「家に帰らなくていいのか？　つか帰れるのか？」

「実際は帰れるけど帰れないから泊まってくつて事で良いです。」

「良かないよ！　部屋が足りないし。」

とは言っても今は一人だが。

「そういう訳で家まで戻ってくれ　って！」

「ZZZZZZ…。」

「もう寝てるう！　拒否権無しかよチクショー！」

ああもう知るか！　俺はずっと寝て現実逃避をしてやる！

## 54話：50話突破パーティ編／いろいろベスト3（後書き）

@悟視点@

「55話更新。もうすぐユニークアクセスが5000超えそうだ。」

「そっついうのは超えてから言えよ。」

「OK。あつナレ君、アミユリーの紹介を頼む。」

【了解しました。

アミユリー

本名はアミユリー・レイカレーンで年齢不明。見かけは小学生に見える。

髪はレモン色で瞳はそのときによって違う。そしていろんな意味で多重人格である。（瞳の色は緑・赤・金・黄・レモン・の5種類。）

瞳の色が髪の色に近いほど本当の性格に近くなりどんどん馬鹿になる。瞳の色によって口調や見かけが微妙に違う。

基本は明るい性格で尾語によく『が付く。お菓子を作るのは一流。

特殊能力は瞳の色によって変わる。

ちなみにギルオーラとはアリユミ家の近所に住んでいるスライムの名前である。

「こんなところですね。」

「ギルオーラってスライムの名前だったのか!？」

「設定上そうなるな。」

「ってかこの小説スライムとかよく出るけど何でだ？」

「この星の特産物だからだ。」

「そーなの!？」

「Y E - S。それじゃあ次回もお楽しみに!」

## 55話：家では暴れないようにしよう！

@ 悟視点 @

「ふあゝ、よく寝た。」

久々によく眠れたな。まあ昨日あれだけ大変だったからな。

「平和な朝なんか久しぶり」

「ドゴオオオオンー！」

「やっぱり俺には平和な朝なんて無いのか？」

って言うてる場合じゃない！今日は俺とアリユミしか居ないからさっきの爆発音はアリユミが何かやったんだろ。

「おいアリユミ、いったいどうした？」

「ふええゝです」

リビングの真ん中には真っ黒になった謎の物体 に見えるアリユミ！。一体何があったんだ？

「マジでどうした？」

「夜中に蚊が私を襲うんです。それで退治しようとしたら失敗したんです」



どんな方法で退治しようとしたんだよ

「とりあえず着替えて来い。魅異の服なら勝手に使っていていいぞ。魅異の部屋に居る見張りのスライムは 黒い袋にでも詰めとけば大丈夫だから。」

「分かりましたです。魅異さんの部屋は何处です？」

「3階の魅異の部屋って書いてあるところだ。」

「それじゃあ行ってくるです。」

はいはい。さて俺は朝飯でも作るか。何にするかな？

「ピンポン」

あれ？誰だこんな朝早くに。

「ガチャ」

「誰ですかこんな朝早くに。」

「僕です。」

「あつ羽双。とりあえず中に入る？」

「はい。元々そのつもりでしたので。」

「ところで魅異さんは居ますか？」

「えっ、居ないけど。」

「そうですか」

魅異に用でもあつたのか？とりあえず朝飯を羽双の分も作るか。

「あつ、僕が作ります。お邪魔してる事ですし。」

「えっそう？じゃあ任せるぞ。」

やっぱり礼儀正しいな。同じ高2とは思えないな。

「スパパッ」

「出来ましたよ。」

「早っ！ってかそのマグロの刺身って今斬つたのか！？」

「そうですけど何か？」

何処にマグロなんてあつたんだ！？ってかスパパッだけで見事に斬れてるし！

「マグロって何処にあつたんだ？」

「此処ですけど。」

そう言つて羽双が取り出したのは大きめのビン。中には卵みたいな

ものがあるんだが。

「魚の卵？」

「はい。」

一言の返事をしてマグロの刺身を皿に盛り付けていく羽双。動作が速え。

「どうやっ」

「質問は受け付けません。」

最後まで言わせてくれ！そして気になるから教えてくれ！

「後はご飯ですね。」

「ああ！炊飯器のスイッチ入れ忘れた！」

俺とした事がこんなミスをするとは

「スイッチは これですね。」

「でも炊き終わるまで数十分位」

「炊き終わりました。」

最後まで言わせて！ってかもう炊き終わったの！？そんな訳 あっ炊けてる。

「羽双、マジでどう」

「質問は受け付けません。」

頼むから最後まで言わせてくれ！即答とかマジで少しショックだから！

「あつ、料理を運ぶの手伝おうか？」

「結構です。」

確かに軽々と持ってるし必要なさそうだな。でも ちよつとは考えてくれ！

「退屈ですー」

「誰ですか？」

あつ、アリユミの事忘れてた。アミユリーはリビングのソファでダラ〜と寝転んでる。

「あの子はアミユリーと言って何故かこの家に来た子だ。」

「よろしくです あつ 名前は何です？」

「羽双と言います。」

年下と喋る時も敬語かよ！？何処まで礼儀正しいんだ？

「貴方が魅異さんが言ってた1番弟子です？」

「一応そうです。」

「それなら私と勝負してくださいでs」

「嫌です。」

アミユリー、羽双に勝負を挑んでも断られるだろうし確実に負けるぞ。

「どうしても駄目ならこっちからいくで」

「ヒュッ、ドコッ！」

「はらほりゃひれです」

何の音？ってアミユリーが目を回してる！

「羽双さっき何投げたんだ？」

「凍ったドライアイスですけど何か？」

「いえ 何でもですハイ。」

何か言ったら投げられるかもしれないから納得しておく。

「とても軽く投げたので大丈夫ですよ。」

「そ、そう。」

アミューリーは鼻に当てられたらしく鼻の部分が少し赤くなってる。ちなみに凍ったドライアイスは完全に砕け散っている。威力高え。

「ピンポン」

「おっ、誰か来た。ちょっと見てくる。」

「勝手にどうぞ。」

勝手について此处は俺の家なんですけど　まあいいか。

「ガチャ」

「何か用ですか？」

俺の家を訪ねて来たのは知ってる人　じゃなくて知らない女の人。年は20前後かな？

「どうも。勇者社の社長秘書をやっている篠頼　几骨と言います。」

几骨？社長秘書って事は魅異関係の事で用事か？でも社長秘書なら魅異が居ない事も知ってるよな……

「別に社長の事で来た訳じゃありませんよ。水魅さんが見つかったので引き取ってもらいに来ただけです。」

水魅居たのかよ!？

「馬鹿社長が自分の部屋の変な機械に入れてそのままにしてあったみたいですよ。」

やっぱり馬鹿魅異が原因かああ！！

「それで水魅は何処ですか？」

「これですよ。」

そういつて几骨さんが取り出したのはヒラヒラとした紙みたいなの。

………これですか。潰れてるのか？

「潰れてるのではなく乾燥してそのようになったみたいですよ。社長の機械も中に入れたものの水分などを蒸発させる機械のようでしたので。」

「へえ。なるほどな。」

あれ、何か変だな。俺は潰れてるなんて聞いたか？ 聞いてないよな。

思考を読まれてる！？

「あつ、気付いたようですね。」

「マジで思考を呼んでたの！？ってか先に言ってくれ！」

「別に言う義務はありませんので。それではもう行きますね。あと私は46話で登場しましたので詳細はそっちを見てくださいね。」

読者への伝言かよ!?

「羽双、水魅がこんな状態で帰ってきたんだがどうすればいいと思う?。」

「放って置けば良いですよ。」

良いのかよ!? つか刺身が残り十枚位しかないし!

「悟さんが遅いので二人で先に食べてたです でもほとんどは羽双が食べてたです。」

「とりあえず俺も食うぞ!。」

マジでこの刺身美味い! って残りがどんどん減っていく!

「食べ終わりですー」

「で、水魅はどうする?。」

このまま放って置く訳にも行かないし。

「この際なので斬りましょうか?。」

「それは駄目だろ!。」



羽双ならこの星を斬る事も出来そうだから駄目！

「チツ、なら熱湯にでも沈めるのはどうですか？」

「確かに水分が蒸発してその状態になつてるので有効だと思うです。」

「じゃあそうするか。どの位の間沈めておけば良いんだ？」

「数十万度ならお湯をかけるだけで元に戻りますよ。」

何っ！そっちの方が手っ取り早いじゃないか！

「それなら水圧五十万度圧縮弾！」

その名の通り五十万度のお湯で作つてある魔法弾だ。

「ドバシヤアアン！！」

「熱！！」

おお復活した。

「あれ？此処は何処かな？」

「此処は悟さんの家です」

「よかつたあゝ。師匠に変な機械に閉じ込められて焼け死ぬかと思つたんだよ。ところで誰？」

マジでこ愁傷様。あと気付くの遅いな。

「その子はアミューリーって言う子で魅異の事を知ってるらしいぞ。」

「師匠の事を？じゃあ私の事も知ってる！？」

「知りませんです。」

「ガーン」

おっショックでも受けたみたいだ。ってか効果音は何処から鳴ってるんだ？

「ところで師匠は あっ！羽双！」

「何です？」

羽双に気付いたようだ。さっきから喋らないと思ってたらお茶を飲んでたよ・・・

「丁度良いから私とバトルしてどっちが師匠の一番弟子か決め」

「嫌です。」

水魅、羽双の実力を知っているのなら挑むのを止めるのが身のためだぞ。

「ええー、じゃあ師匠の一番弟子は私で良いの？」

「そういう事で良いですよ。」

アツサリ譲ったああ！！いや暴れられるよりはマシだけどさ！

「この際なので羽双さんが下級の神を倒した時みたいにしてこの人も適当に倒したらどうです？」

アミュリー、それじゃあ家が持たない可能性があるんだが

「しょうがない 地穴<sup>じあな</sup>レベルー」

技名を言つと同時に包丁を地面に刺す羽双。

「ドウガアアアン！！！！」

刺した途端地面が一気に崩れていく！つてか落ちる！！

「ぎゃああああああ！！！！」

「痛つてゝ、死ぬかと思つた・・・」

此処は何処だ？周りが全体崖みたいになつてゐる。水魅とアミュリーは気絶 いや寝てゐるな。

「家の屋根が有るつて事は」

滅茶苦茶大きい穴の中！？んっ、太陽が真上にあるつて事は昼か！

「あつ、手紙が有る。なになに『疲れたので帰ります』って書いてあるな。」

「……………せめて俺を引き上げてから帰れよ!!!」

「チクシヨー!人の家で暴れてくんじゃねえええええ!」

55話：家では暴れないようにしよう！（後書き）

@ 悟視点 @

「55話更新！見事に悟の家は壊れたな。」

「つてか直るのかアレ」

「次の話になれば直るぞ。」

「マジで!?!」

「マジで。まあギャグ小説だし大丈夫。それでは皆さん次回もお楽しみに！」

## 56話：北の大陸に出かけましょう！

@ 悟視点 @

「旅行？」

「そうです。水魅さん以外で。」

水魅は行けないんだ。

「まあ面白そうだから行ってくて事にしといてくれ。」

「分かりました。」

「集合場所は何処にする？」

「貴方の高校を3kmほど北に行った場所の港の近くの公園で。一時から一時十分までで。」

「分かった。じゃあな。」

「ピッ」

何か知らんけど旅行に行く事になったぞ。羽双から水魅以外で旅行に行こうと誘われたんだ。

……小声で来れない場合は覚悟してくださいね？と言われたけどな 怖かった。

別に脅されなくても行くに決まってるけどさ。

それにしても何で港じゃなく港の近くの公園なんだ？そのまま港に集合すれば早いと思うんだけどな。ちなみに行く場所は船じゃないと行けない場所だ。

「とりあえず行くメンバーを決めないと。」

「港の近くの公園」

さて、もうすぐ一時十分だ。メンバーは俺、アミユリー、烈、羽双、ジャルスなんだが 烈がまだ来てない。遅れたら大変だって言ったのに……

ちなみにアミユリーと羽双はジャルスに自己紹介中だ。

「おおーい！！遅れて悪」

「遅刻ですよ。」

「ズバゴオオツ！！」

「ぎゃあああああ！！」

あっちゃ、やっぱり烈が羽双に裁かれたよ。烈は縦の手刀を腹に喰らいV型に地面に埋まった。砂煙も出て面白い光景だが痛そうだ。

「あの人強いねー」

「流石は一番弟子ですー。」

あの光景を見てのんびりとした会話が出来るジャルスとアミューリーもある意味凄い。

「それでは船を奪いに行きますよ。」

「ああ！……って奪うのかよ！？」

「だから勇者社の港に来たんだねー。とりあえず賛成ー。」

「面白そうだから賛成です」

「お、俺も賛成だー！」

皆は賛成してるし……この際しょうがないか。

「それでは行きますよ。」

く勇者社の所有港く

「ビー……ビー……ビー……！」

「なんだ！？」



「侵入者だ！総員、船を守れ！」

『はいつ！！』

「いやー、流石に警報位は有るみたいだな。」

「面倒ですね・・・」

「ズキュキュキューン！ズゴオオオオオオ！！」

「必殺スーパーアタック！！」

「ネーミングセンスなさ過ぎですー」

「同文だよー。」

「バキコオン！ベコオツ！ボオオン！」

おっ、船が見えてきた！船は五つあるな。

「乗るのは右から二番目ですよ。」

右から2番目：小さっ！船は船でも大き目のクルーザーくらいの大  
きさ&木製だぞ！

「盗むのに何でどれか決まってるんだ！？」

「さっき決めました。」

さつきかよ！？とにかく右から二番目だな！そりゃ！

「ぴよーーーーーん！スタッ」

情けない効果音とともに全員着地！つてエンジン無えじゃん！！

「この船って風で動く奴だよな 空気圧広波砲！」  
くうきあついはほう

「ゴオオオオオオオ！」

「成功！そんじゃ、見送りありがとさん！」

「ま、待て！」

断るに決まってるんだろ。ちなみに空気圧広波砲は家でエアコンをつけてるときに思いついた技で辺りの空気を集め常に一定の速度で出し続ける技だ。

団扇で扇ぐのが面倒な時に使おうと思ってたんだが まさか船の帆に当てて動かすなんて方法で使うとは我ながら予想外だ。

「ってか他の皆は？」

「全員部屋に行きましたよ。」

この船小さいけど確かに真ん中に部屋があるな。五人なら寝れそう  
な大きさだ。

「それより何でこの船にしたんだ？他にも大きな船とかあっただろ。」

「勘です。」

勘か。……ふざけるなコラア！

「おい」

「何ですか？文句があるようなら深海に沈めて水圧で潰しますよ？」

「何でもございません！！」

マジで沈められる！いきなり先が不安になってきたぞ

「それで大陸まではどれくらいだ？1時間位？」

「馬鹿ですか？」

「えっ！？そこまで馬鹿じゃないけど」

「ハア……この星の広さを知ってます？」

「……知らないけど地球と同じくらい？」

「面倒なので時間を言います。数日です。」

数日か。予想より掛かるなうん。……数日ううう！！？

## 56話：北の大陸に出かけましょう！（後書き）

@ナレ君視点@

「56話更新完了！今回は悟の代わりにナレ君が来てくれてまーす！」

【どうも！】

「さて、ナレ君が来たのも分かった事だし今日は此処らへんで終わるか。」

【えっ！？私の登場の意味は！？】

「特になし。それでは皆さん次回もお楽しみに！」

【ええっと お楽しみに！】

## 57話：迷惑！弱小！セイクリッド海賊団！

@悟視点@

「船で陸まで行くだけで数日掛かるのかよ!？」

「はい。」

チキショーそんなに掛かるとは思わなかった。夏休みがほとんど潰れるじゃないか。

「じゃ、僕は部屋で休んでますので。」

「えっ、俺は？」

「見張りです。」

「……何でえ!？」

「ちょっと待て!何で俺なんだ!？」

「部屋に入るのが一番遅かったからです。」

「でも戦力的に」

「敵を見つけたらバスターカ何かで吹き飛ばしてください。ちなみに敵を部屋に侵入させたり僕が手伝う事になったりしたら悟さんを海底に沈めて水圧で潰し殺すのでお忘れなく……」

こ、怖い！！何か言い返そうかと思ったけど部屋に行っちゃったし・  
・っつか言い返したら殺されてたかも

「っつか海で見張りの必要って有るのかぁ？」

海で危険な事って言えば・・・・・天候とか？

授業で特星のモンスターについて習った事あるけど基本はそこまで  
強くは無いだよな。

「海 海 海賊？」

そっいえば此処やその他の場所で神聖海賊団が何とかってテレビで  
やってたな。神聖な海賊団なんて居るのか？

たしか被害にあった船は百以上で船乗員は気絶してたり眠ってたり  
して見つかったらしい。

目撃者の話では海賊団は小さな船で五人のメンバーだって。でも全  
員眠ってたのによく目撃者が居たな。

「とりあえず真面目に見張りをしとかないな。下手したら後で殺  
されるから」

（海上（悟達の船から少し離れたところ））

「んっ？あの船は小さくて見張りも一人のようですね。次はあの

船にしましょうか。」

く海上（悟達の乗ってる船）く

「うん・・・特に怪しい事は無し あつ、小船が一隻発見。」

でもどうする？小船が一隻だけでこんな沖まで居るのはおかしいな  
でも普通に迷っただけなら別に海賊とかじゃないし。

あゝ、でもバスターカで吹き飛ばすように言われたしな。しょうがない

「とりあえず発射。」

「ドオン・・・・・・・・バコオオオオン！！」

見事に命中だ。小船に乗ってる人は大丈夫か？

「ヒュウウウ・・・・・・・・バキーン！」

「あつ、落ちてきた。」

見事に頭だけ床に突っ込んである意味凄い技だと思っるのは俺だけか？

「って大丈夫ですかー？」

とりあえず引き抜いてやるか。

「し、死ぬかと思いましたよ・・・」

大丈夫か？引っこ抜いて出てきた男は微妙に長髪で紺色の髪をしていて貴族みたいな服を着てる奴だ。身長は羽双と同じくらいで大学生くらい？

「まったく何でこんな事になったんだか。」

「貴方がバスター力砲で私の船を破壊したからですよ！」

まあそうなんだけどさ。一応モンスターとか出る海を小船で居たら普通に怪しいだろ。

「そういえばアンタ名前は？」

「シュキーン」

「フッフ 良くぞ聞いてくれました！私はある貴族の息子でありセイクリッド海賊団の船長でもあるベータ・サイドショットです！」

「ジャジャジャーン」

「・・・・・・」

効果音と共に決めポーズみたいなのを決めるベータサイド。いやベータショットだったっけ？



あまりの馬鹿さに思わず沈黙してしまった。

「あまりのシヨックに声が出ないようですねえ。まあ貴族と海賊をやつてたら当然ですね。」

激しく勘違いだよバカヤロー。マジで海に投げ捨てたい気分だ。

「ってかセイクリッド海賊団は5人と聞いた事あるけど仲間は何？」

「うう 実は前に近所の保育園児と全力で戦ってボロ負けしてしまつて 前回の港町で部下全員が夜逃げしてしまつたんですよ……」

馬鹿な上に弱いよコイツ！そりゃあ部下だつてやつてられないだらうな。

「だ・け・ど・ですね！私はその後さつき破壊された小船で一人悲しく海に出て釣りから新技の開発まで地味に特訓を繰り返し生まれ変わったのです……！」

途中に悲しくとか地味にとか本音が混じつてゐるぞー。

「此処で私の昨日のジャンプ特訓の成果をお見せしましょう！」

「ああもう勝手にしてくれ」

「必殺・ジャンピングキックウツ……！」

壁にジャンプしてさらに壁を蹴つてこっちにキックをする攻撃か！

「バキッ！」

「・・・アホだな。」

避けてもいないのに普通に攻撃外して船の床に突っ込んだぞ。

反則的な弱さとアホさだ。あだ名でも考えてやるか　ベータとか雑魚ベータとか。

「クッ、この私のキックを避けるなんて流石だと言っておきましょう・・・」

「いや俺は別に避けてないし。ってか弱いから雑魚ベータって改名しろ。」

「駄目です！そんなの私は認めませんよ！」

まあ認めようが認めなかつが改名に変更は無いけどな。

「まあ今日はこの位で勘弁してあげますので私に感謝する事ですね。アッハッハッハッ！」

自滅したのによくそんな事が言えるな・・・しかも奇妙な高笑い付きで。

「メキッ・・・メキキッ！」

「「えっ？」」

何か雑魚ベーの蹴ったところから船全体に亀裂が このパターンはまさか！

「メキキキキッ！バッキイイイイン！！」

「やつぱ船が壊れたあああ！」

「ぎゃあああ！私にこんな展開は似合いませんよおお！」

「いやお前にはピッタリだああ」

「ドッボオオオン！」

せ、台詞を最後まで言えなかった……

ってそれより羽双達も船に乗ってたんだっ！ヤバイ殺される

「あつ、悟さん。」

「へ？」

羽双にジャルスにアミユリーが居た けど何故か雑魚ベーの乗ってた船に乗ってるな。あの船は壊したはずなのに何で直ってるんだ？

「ブハア！溺れるかと思いましたよ。んっ、それは私の船じゃありませんか！綺麗に直ってますねえ……じゃなくて 貴方達その船を返さない！その船は私のビューティフルでゴージャスでワンドフルでセイクリッドな船なので」

「ボロ船が」

「ガガン！」

流石の雑魚ベーでも羽双の一言で一気に落ち込んだな。

「ハハッ、私のハートを傷つけるなんてやりますねえ。良いでしょう！貴方も私の第二の宿敵として認めて」

「さて行きましょう。」

「分かったよー」

「オッケーです。」

三人は小船で行くのか　ってちょっと待て。

「俺はどうするんだ！？」

「船を壊したので泳いできてください。」

そんな無茶な！

「ちょ」

「ビュゴオオオオオ！」

「早っ！」

何であんなに早いのか！？一瞬で見えなくなっただぞ！！

「見事に無視されましたねえ。」

「元はお前のせいだろ！」

「人のせいにするのは良く有りませ」

ム力つくから吹き飛ばしてやるか。

「水圧圧縮砲！」

「ドゴオオオン！」

「ホゲフツ！？」

上空に雑魚ベーを打ち上げて

「空気圧竜巻砲！」

「ゴオオオオオオ！」

おおー、見事に飛んでくなあ。気分が非常によくなる光景だな。

「流石は私の第一の宿敵ですね！しかし今度は私が勝つに決まっていますよ！アーツハツハツハツハツハツ！！」

前言ってか前思考撤去だ。非常に気分が悪くなる光景&笑い声だ。

ってか勘違いも程々にしろよコラー。誰がお前なんかの宿敵じゃボケが。

「さてと、泳いで北の大陸まで行かないと　　ってか夏の海なのにな  
よつと寒っ！北の海だからだろうなきつと。」

「よっしゃ！！そうと決まれば早速行くぜ！！」

「ああ烈も居たんだっけ。　　ってか何で水の上に立ってるんだお前。」

「俺の特殊能力は忘れただろうけど水上歩行だぞ！」

確かに忘れてたな。　　ってか過去に使った事有るのかよ？

「　　ってか海とかなら便利だなその技。」

「波を飛ばないと駄目だけどな！」

それは威張って言う事じゃないぞ。

「とりあえず陸まで泳ぐぞ。」

「オオオッ！！」

返事は良いがマジでうるさい！

## 57話：迷惑！弱小！セイクリッド海賊団！（後書き）

@ 悟視点 @

「57話更新！悟は相変わらず留守でございます。」

【あの船長は面白かったですね。】

「何かあのタイプのキャラって使いやすいし登場回数を増やしていきたいな。少なくとも北の大陸編では多めに出す予定だ。」

【おお。】

「あと三人以上の会話は書きにくいな 二人での会話なら簡単なんだが多数の会話を書くのは苦手だ。」

【そうなんですか？】

「うん。だから多数での会話が減るかも。さてそれじゃあ皆さん次回もお楽しみに！」

【お楽しみに！】

## 58話：主人公のヒートアップ！？

@悟視点@

「な・・な、何とか到着 出来たな・・・・」

「と、当然だぜ・・・！」

いい返事？だな。ちよつとマジで死にそう！・・俺達はそのあと泳ぎ続けて あつ烈は歩き続けてだな。それで何とか陸まで到着する事が出来た。ちなみに今は朝の7時くらい？

「それより悟！何で船で数日掛かる海を泳いできたのに1日で着けるんだ！？」

「お前は泳いでないだろ・・あとそこはツツコミ禁止だと思うぞ？」

着いちゃった訳だしブツブツ言わない！ 気になるけどさ。

「それでどうする？見事に道が二つに分かれてるけど。」

目の前にはU字型で左と右に分かれている車道が一つある。右は上り坂で左は特に坂のない普通の道だ。おっ左は大きな町みたいなお所につながってるな。

「そんな事もあるつかと地図を持ってきたぜ！！」

と言って烈が取り出した地図は確かに特星の此処の場所の地図だと



思う。だが

「ふやけてるじゃねえか！」

「バゴオッ！」

「げふうっ！」

思いっきりハンマーで殴る。だって何かでオレンジ色の液体でふやけて読めないし！

「泳いできたからふやけて当然だろ！！！」

「水上歩行してきたのにふやける方がおかしいわ！」

「波で数回転んだんだからしょうがないだろ！！！」

波で転んでオレンジ色にふやけるわけないだろ

「まあ転んだんだろうがないよな。」

「当然だぜ！！！」

「そうそう。そういえばこの地図には何をこぼしたんだっけ？」

「オレンジジュースだぜ！！！」

「バッコオオオオン！！！」

大体予想通りだがやっぱりオレンジジュースか。

「さて、単純馬鹿も吹き飛ばした事だし町にでも行くかな。」

「ぎゃあああああ!!」

烈め、もう復活したのか　って！

「悟ううう！助ける！マジで食われる！」

烈が走ってきたがその後ろにはゾンビの大群　何でえ！？

「あの町はゾンビだらけだあ！上行け上!!」

「わ、分かった！」

何で毎日こんなに運が悪いんだよ！

「はあ、はあ、何とか逃げ切った。」

ってか途中烈とはぐれたし。まあヤラレ役の根性で生き残るか。

「ハッハッハ！だいぶ疲れているようですねぇ。」

げっ、この奇妙な笑い声とこの喋り方は

「雑魚ベー！」

ってか此処とは逆方向に飛ばしたはずなのになんで此処に居るんだ？

「ベータです！！まったく、誤解を招くようなあだ名は辞めて欲しいですねえ。」

誤解を招くじゃなくて真実に導く だろ？

「で、雑魚ベーが俺に何か用でもあるのか？」

「だ・か・ら！雑魚ベーじゃなくてベータだと言ってるでしょう！今日は昨日の決着がついてないので宿敵<sup>ライバル</sup>として決着を付けに来たんですよっ！」

そんな事だろうと思った。 って！

「決着ってお前の負けで決まっただろ！？」

「シャラアーツプウ！とにかく此处で決着をつけさせてもらいますよぉ！」

拒否権無しかよ！？まあ雑魚ベー相手だから即効で終わるだろうな。

「新必殺・ジアーヤンピーングドリルキックウツ！！」

無駄に読みにくいし無駄に長い名前だなオイ！

今回は木にジャンプして木を蹴ってこっちに回転キックをする攻撃か！

でも………回転以外は前回とあんまり変わらねえ。

「ズガガガガガガッ！！」

「・・・・・・・・本当にアホだな。」

前回と同じく避けるまでもなく攻撃が外れる。そして回転により地面にその名の通りドリルのように穴を掘ったんだ。しかも結構深くまでキックが続いたようで

「今日は此処から出られないのでこのくらいで勘弁してあげましょう！命拾いましたねえ。私に非常に盛大に感謝することですね。アッハッハッハッハッ！」

と、まあ出られないらしい。まあこのまま放って置いても迷惑なので

「プレゼントでもどうぞっ！」

そういつて一つの弾を撃つ。

「えっ？なっ何ですかこれはああ・・・・・・・・」

ちなみに今撃ったのはセメント弾で撃った場所に一定の量の固まる前のセメントを出し続ける魔法弾だ。

さてと、結局のところ何処だ此処は？雑魚ベーが原因で二倍分からなくなった…………

「悟はつけえくん。我ながら惚れ惚れするような感だねえ？」

発見されても何処に行けば良いか分からない って！

「アミユリー！しかも瞳オレンジバージョン！」

喋り方では分からないが確かにアミユリーだった。ってかギャップが大きくて別人に思える。

「悟が遅いから私が羽双にパシリさせられてたんだよ？」

何故疑問系？あつ喋り方の特徴か。これまた無理矢理な特徴だな。

「あつ、悪かった。ところで何処へ行けばいいか分かるか？」

「私が道を知ってるから着いて来れば良いと思うよ？」

とつてゝも心配なんだが……。疑問系だからつてのも有るが主に心配なのは瞳の色が黄色に近づく馬鹿になる事だ。

「あつちゃゝ、こりゃあ道に迷っちゃったかな？」

「早いつてのこのアホ！」

「悟つてアホなの？」

俺じゃねえええええええ！！

「何かオレンジの瞳のアミユリーは多少苦手だ」

「見惚れるところが多すぎて？」

「違うわ！どうやったらその結論になるんだ！？」

「フフフフツ！その答えには私が答えましょう！」

ざ、雑魚ベー！あのセメントを脱出したのか！？

「誰？」

「良くぞ聞いてくれましたっ！私は」

前と同じ紹介をするつもりかよ？邪魔してやろう。

「そいつは全ての仕事がクビになったフリーターの雑魚ベーだ。」

「ガガアン！！」

あっ固まった。

「今のうちに逃げるぞ！」

「えっ？ああー離してえ！？」

アミユリーを右腕に抱えて逃げる！ってか暴れるな落とすぞ！

多分この光景を見た人は小学生の誘拐と勘違いするかもしれないが誘拐じゃない！！フリーターの変人から逃げてるだけだ！

「・・・あれ、私は今まで何を？ってさっきの可愛い子と宿敵が居なくなってるでは有りませんか！？しかし逃がしませんよぉー！」

此処まで来れば 大丈夫じゃねえええ！！猛スピードで追いかけてきた！？

「フハハハハ！私から逃げようなど宿敵ながら甘い人ですねえ。さあ早くその子を私に下さい！」

「渡したらどうする気なんだか……」

「渡されたらどうする気なの？」

アミユリー、あいつには計画の文字が無いからどうするか聞いても答えないと思うぞ。

「まずは家族のフリでもしながらデートを満喫したいですねえ。」

あつ、多少は考えてるのか。ってか小学生位とデートって頭は大丈夫か！？でもその点でいくと烈も同じか。

「???…結局悟と雑魚ベーのどっちが見方なの？」

今の話を聞いてて分からないのかよ！？こりゃあ瞳が髪の色に近づくほど馬鹿になるの効果の差はかなりありそうだな……とりあえず俺が見方だと言わないとな。

「見方は俺だ！」「見方は私です！」

って、俺が言うと同時に言うんじゃないやねえ雑魚ベー！ってかお前は敵だろ！

「えー？どつちかハッキリしてよ？」

「私は彼の宿敵ではありますが貴方の敵では有りません。なぜなら私は可愛い子が好きだから！貴方は十分すぎるほど可愛すぎるのでっとうわあああいい好きですよお！！」

大声でそんな事を叫べる雑魚ベーを少し見直したぞ

あー、いろんな意味で恥知らずなその性格を少し分けて欲しいかも。

「よし決めたぜ！」

俺は急ブレーキをかけて止まる。ちなみにさっきまで走ってたんだが 全然疲れてない。海で泳いで体力でもついたのかな？

「その子をくれる決断でもしたのですか？」

「いや、そんなんじゃない。だが俺は一つ決めた。」

他人と自分との関係を把握できる思考！自分の恥ずかしい事を何のためらいも無く言う勇氣！そして相手に言いたい事をはっきり言う根性！まさに完璧じゃないか！

「今から俺はお前を正真正銘、真の宿敵であると認めてやろう！！」  
ライバル

俺は雑魚ベーに人差し指を向けそう言う。

「・・・あーっはっはっはっは！！」

「どうした？」



何か気に入らない事でもあったのか？

「今頃何を言い出すかと思えば！私たちは出会った頃から宿敵ライバルでしょうが！」

「・・・クツクツクツ！そうだったな！」

思わず変な笑いが出るが 自然な事に思えてきた。

「じゃあ宿敵おなじライバル同士だし決着をつけようじゃないか！！」

「ハッハッハッ！良いでしょう！私と貴方のどっちが上か気になりますねえ！！」

@アミューリー視点@

「私はどうなるのかな？それ以前にどっちの見方をすれば良いんだろう？」

「俺的にはツッコミ役を応援してやって欲しいな。」

「わわあっ！？誰なの！？」

「俺？俺は魅異との将来の婚約者！（のつもり） ボケ役・悟だあああ！！」

「魅異さんの知り合いかあ？あと頭に響くから叫ばないで？」

「まあまあ気にするな。で、ツツコミ役の俺の様子が変だと思わないか？」

「ツツコミ役の悟？まあいつもとは違うつて感じかなあ？」

「俺は基本はボケの役でツツコミ役は基本はツツコミの役だろ？でも俺が誰かにツツコミをするようにツツコミ役もボケる事があってそれが今みたいな状態だが、今回の場合は悟が雑魚ベーの話で心動かされる　まあヒートアップしてボケの状態が強くなってるのが今回の場合だ。

この状態になった時は言いたい事は言いくったりなど実際のボケ役の俺よりも馬鹿な状態になるんだ。だから性格などはツツコミの俺で行動や思考がツツコミ役の俺のボケ状態と言うオリジナルな奴となるんだ。

もちろん逆のパターンもあって俺がツツコミ状態になる事もあるんだがその場合は俺はヒートアップする事が無く、思考行動が俺のままでのツツコミになるから今の状態を作るのは絶対に無理だと言う訳だ。ついでにこのヒートアップを元に戻すには方法があつてツツコミ役のヒートアップは超強力なツツコミ攻撃で、俺がもしもだがヒートアップした場合は超強力なボケ攻撃でヒートアップは元に戻る。何でかって言うところこれは感情的になるものだから超強力な本来の役割攻撃を叩き込めばショックで元に戻るって方法だ。まあ実際にこの方法で治せる奴なんかほとんど居なくよっぱどの強さを持つてる奴じゃないと駄目だな。まあ超強力なボケ攻撃の出来る奴と超強力なツツコミ攻撃の出来る奴を例をあげるなら　って聞いているか？」

「ZZZZZZZ・・・？」

「立ったまま寝るなあ！！起きろおお！！！」

「ひゃっ！！？叫ばないでって言ったのに？」

「人の話中に寝るのはどうかと思うが？しかも立ったまままで。」

「話長いよ？あとさっきの起こす時のツッコミもヒートアップ？」

「人の話効いてるのか聞いてないのかハッキリして欲しいな！そして俺の場合はヒートアップじゃない！」

「そつえば何で私に話することが出来るの？あと何で私に話したの」

「何故話することが出来るかは最近新しく覚えた技がこれだからだ。ちなみにこの技は使用範囲が狭いから注意。何故話したかは実はお前に話すように見せかけて読者の皆さんに話してたんだ。とは言っても別に読まなくても問題NONOだけどワザと長く説明したらしい。」

「読者？読まなくて良い？？MOMO？？？」

「NONOだ！じゃ、暇つぶしになつたし帰るか。」

何か意味不明な人だったかな？あつ、悟のバトルを見忘れてた？

@悟視点@

「さ…流石、<sup>ライバル</sup>宿敵だけの事は 有るぜ！」

「あ、貴方も中々…やりますねえ！」

流石は宿敵<sup>ライバル</sup>！立ち直りの早さは俺の知ってる中で五本の指に入るぜ！

「今から何でも有りのルールなんてのはどうでしょうか？」

「何でも有り？おもしろいしやってやろっじゃないか！」

自分から話を持ちかけるといふ事は何か策があるのか。だがそんなもの通じないぜ！

「いきますよぉ！」

正面から来るか！この勝負もらったあ！

「返り討ちにしてや」「あっ！背後に神離さんが居ますねえ。」

ハイイ！？まさか魅異！いや羽双が遅いから裁きに來たのか！？あれ居ない

「隙有りですよぉ！！超必殺・ジアーヤンピーング片足ドリルキックウツ！！！！」

「バゴゴゴゴゴゴッ！！」

「アゴオツ！」

宿敵<sup>ライバル</sup>を名乗るには相應しいキックだ！！片足のドリルキックはマジで効く！！

と考えた瞬間顔から土の中にめり込む。もちろん回転しながら。

宿敵ライバルの攻撃で土を食うことになるとは 予想外！

「クルクルクル、シュタツ」

見えないけど多分後ろに回転して着地したんだろう。土が不味っ！

「この勝負、私の勝ちですねえ」

「甘あい！！」

ガバツと顔を土から出す。グキッて音がした気がするんだけど まあ無視！

「流石ですねえ。しかし私は言葉で隙を作ったりはしませんよ？」

「それは試してみなけりや分かりはしないだろ！正面突破で行くぜ！」

そっいつて突進する！もちろん言葉で隙を作る方法だ！

「宣言するとは流石は宿敵ライバルだけの事がありますねえ！」

構える雑魚べー。俺の使う言葉は

「後ろに小学生くらいの可愛い子が沢山居るぞ！」

「えっ！？可愛い子は何処ですかぁ！？」

光速？で後ろに振り返ってキョロキョロと探す雑魚べー。

「弾速キック！！」

「ズコオオオオッ！」

「ぶはあっ！？」

俺の蹴りを受けて木に突っ込む雑魚べー。ちなみにこのキックは弾速ほど早くは無い。

「この勝負の勝者は」

「まだ決まってませんよお。」

木から頭を抜いてそう言う雑魚べー。流石は宿敵だ！あの蹴りを受けたのに普通に無事なんて！しかも頭にクワガタを五匹も乗せて復活とは 凄い！！

「それなら次の技で」

「最後にしましょうか。」

俺も雑魚べーも最後は蹴り技で決めるつもりだ。俺が使う技はノーダメージだったが過去に魅異を飛ばしたあの蹴りだ。まあ魅異がワザと飛んでいった可能性もあるが。

「これで最」

「騒ぎすぎですよ。」

「ベゴオオオオッ！！！」

一瞬で意識が遠く　ってか意識が消えた。ついでにいろいろツツコミたくなった。

く山奥の村「木亭村」く

「それでその後に私と羽双さんと悟と雑魚ベーを此处まで運んだのですー。」

「嘘だと言ってくれえええ！」

アミユリー瞳レッドバージョンの言葉に対し全力で嘘だと言ってくれと頼む俺。

さっきまでの話が本当な訳が無い！俺が雑魚ベーを宿敵と認める事も無い！

「最後のところは僕も見たので真実です。」

羽双の容赦ない一言。最後って事は俺と雑魚ベーがキックで決着をつけようとして羽双の超強力な一撃を受けたことか。確かに頭がヤ

バイ位痛い。

ってかさっきまでの話の通りに行動した記憶がある。でもこの記憶は無かったことにして欲しい。宇宙人に植え付けられた記憶って事でも良いから……

「ちなみに明日になったらゾンビの居る町を抜けてこの大陸一の町に行きますので食べられる準備でもして置いてください。」

あの町か　ところでゾンビ関係で何か忘れてるような？

「結局このオチかよおおおおお！！ってかゾンビ達来たあああああ  
あ！！！」



## 58話：主人公のヒートアップ！？（後書き）

@ナレ君視点@

「58話更新完了。今週も更新できて良かった。」

【でも出来る限り多く更新してくださいよ。】

「OKOK。」

【それにしても今回は】

「ドドドドドドー」

「なんだこの効果音は？」

【ぞ、ゾンビの軍団がこっちに来てます！】

「はい！？」

【先頭に烈が居ます！】

「何で此処に来れるんだ！？と、とにかく逃げろ！」

【あっはい！】

「おっと！それでは皆さん次回もお楽しみに！！」

## 59話：ゾンビを超えて謎生物へ

@ 悟視点 @

何か不幸がつきまくりの旅行もエスカレートしてきて次はゾンビの町に行く事になった。

常に嫌な予感がしているんだよね。まあなんとかなるかな？

「じゃ、行きますよ。」

「ところで雑魚ベーはどうするです？」

そういえば雑魚ベーも俺と一緒にこの村に運ばれたんだっけ？

「その川に捨てていてください。」

「はいです」

羽双の言うとおり川に流すアミユリー。雑魚ベーが起きてたら可愛い子発見ですよ！とか異って飛び掛ってくるかもしれない。ってか絶対そうなる！

「・・・んっ？何か全身が冷たい朝ですねえ。おおっ！昨日の可愛い子じゃありませんか！」

流されながら起きた！でも今日は川の流れが早いから大丈夫

「逃がしませんよお！！」

でもなさそうだな・・・早く逃げた方がいいと思う！

「おはよー。」

「ああおはよう。ってか寝坊だジャルス。」

さつきから居ないかと思っただけまだ寝てたのかよ？

「全員そろったので本当に行きますよ。」

「えー、僕寝起きだよー？」

「何を言っても無駄だと思うぞ。」

村から続いている道を歩いてきたら最初の分かれ道に着いた。烈がゾンビさえつれてこなければ普通に村についてたのに・・・その烈を飛ばした俺は悪くないよな？

「ここからメンバーを分けましょう。戦闘班と偵察班で。」

戦闘班と偵察班か。どっちかというと偵察班の方が戦闘回数が少なくて安全そうだが偵察部隊の場合は余計なものを見つけて戦闘班より苦労する場合があるな。

だがそんなのが現実でもありえるのか？いやこの小説ならありえるだろうな。

でもサブタイトルを見る限りは戦闘班がゾンビと謎の生物の両方と戦うような感じのサブタイトルだからそこを考えるとやっぱり偵察

班の方が安全か？

「悟さん早くしてください。」

「えっ？ああ、それじゃあ偵察班で。」

安全そうだしどっちかということっちな。

「じゃあ僕と羽双さんが戦闘班だねー。」

「そうですね。」

「私は悟と偵察班です。」

「頑張るか！」

そういつて別々のルートで行く。本当は作者が多人数の会話が苦手なだけなんだけどな。

「そんな事を思っていると後で復習されるぞ？」

おっボケ役。久々の登場か！

「ああ。（前回も一応登場したよん。）でも疲れたから帰る。蛙飼える。」

蛙を飼える・・・駄洒落かなんかか？おゝい 帰ったか。

「到着したですー」

「ああ。で、此処は？」

「この町で有名な生物研究所だった所です。ちなみにこの町のゾンビも此処の研究が原因で大量発生したものです。」

何でそんな事を知ってるんだ？・・・ああそういえばアミユリーは神様だったな。

「ところで神様って普通の人とかも居るが元々全員特星に住んでるのか？」

「私は元々住んでましたが地球の人がやってる場合もあります。確かに成績が超優秀な人は誘いの手紙が送られたはずです。身体能力的に魅異さんも呼ばれてたですー。」

へえー、成績テストが常に0点でも神様になれるのか。ってか手紙が来なかった俺は予選落ちに近いのか？

「バキイインー！！」

で、何だ！？天井が崩れたぞ！

「ようやく・・・ようやく見つけましたよお！」

ハアしつこい。例えるなら納豆を食った後味くらい・・・・・・・・もう誰だか分かるだろ？

「何か用でもあるのか？宿：雑魚べー。」

危ねえ！間違えて爆弾発言をするところだった！

「もちろんその可あつ愛あいいい子供をもらいに来ました。そして宿敵である貴方との決着をつけに来たのですよ！」

「ってか最初の登場から毎回出る気か？一回位は登場を控えろ。」

「フッフッフ、可愛い子の居るところには私が有り。その子をもらうまでは私の登場は永遠に続くのです！！」

マジで消えてもらいたい。そして恥を知れ、恥を。

「私の喋る隙がないですー。」

「ぐふぁ！その最後にですをつける喋り方気に入りましたよお！昨日より千万倍いいです！」

喋り方もお前の鑑定範囲に入ってるのか？まあ瞳がオレンジよりは確かに赤の方が性格は良い様な気がするが……………

「とりあえずアミユリー、このロリコン野郎を潰すぞ。」

「了解です。」

「フッフ、良いでしょう！私の真の実力を差し上げましょう！」

今までも本気で戦ってたんじゃないのか？あー、でも特殊能力とか発動してないよな。もしかして影の実力者！？

「いきますよお！今日の朝に川で鍛えて覚えた新必殺技をお見せしましょう！！新必殺・カラフル ボール クリエイトですよお！」

「キイイン！」

「眩しっ！！」

急に眩しい光を放つ雑魚ベー。目を開けたら目の前に青くて柔らかそうなボールが目の前で

「パアアアーン！」

割れたな。ボールはゴム製何かで中からスーパーボールが出てきて俺の額にヒットした。

「地味な小細工を ってか川で泳いで覚えた技がこれかよ！」

「動けないです・・・ベツタリです。」

アミユリーは粘着弾か何かだったらしく床にくっ付いてる。

「これで正々堂々と決着をつけますねえ。」

「あの粘着弾を取るの大変そうだな・・・」

雑魚ベーの言葉は完全無視して粘着弾を取る方法を考える。

「そんな事は私を倒してから考えれば良いでしょうが・・・」

「まあ後でいいか。」

「いきますよお！新 痛っ必殺技・天から下りし罪滅ぼし！」

そついうと回転ジャンプして反則的に高く飛ぶ雑魚ベー。一瞬天井で頭をぶつけたな。

そして真上まで来てそのまま手刀の構えで急降下してきた。この説明をしている時点で俺は余裕だ。

「ちょっと横に避ければこの程度何とか」

「ぎつやあああああ！！！！」

この聞き覚えのある声は昨日から行方不明の烈の声って悲鳴をあげてるって事は

「おおお！！悟だあああ！やっと見つけたぜ！！」

「ってこっち来るなああ！！」

「ドカアッ！」

ゾンビに追われてた烈にはねられて上に飛ぶ俺。

「バコオオン！」

そこに雑魚ベーの手刀がHITして下に落ちるそして

「バキ ドカ ベコ グチャッ」



ゾンビの群れの中に落ちて踏まれまくったしかも三分間くらいずっと！

ちなみにアミユリーはゾンビの走ってくるところより横でくっ付いてたから無傷。

「何で・・・俺がこんな目に・・・・・・・・」

最悪だ・・・最悪。最近は嬉しいことが何も無い・・・不幸続きだ。

「ぎゃあああ！！行き止まり」

「バコオオオン！」

・・・アレに比べたらマシか。烈がゾンビから逃げ回ってがついに行き止まりまで追い込まれてそこにあった機械に突っ込んだ。

<ビー！ビー！緊急ダメージ発生！襲撃行動ト判定シマス！>

何だ？烈が突っ込んで機械が故障したか？

<マア、ソウイウ事デ研究用ノ合成生物ヲ開放シマス！シカモ特別サービスデ二匹モ開放シマス。感謝シヤガレコノヤロー。>

感謝できるかコノヤロー！特別サービスってなんだよ！？二匹もいらねえよ！ってかももう少し機械的な丁寧語で喋れ！

「とりあえず此处は例の如く二チームに分かれるぞ！」

「賛成だぜ！！でもその前にゾンビを何とか」

「今回はしょうがないので私も手伝って上げましょう。」

「それより粘着弾が取れないです。」

今回は雑魚ベーも手伝ってくれるようだ。正直余計なお世話なんだけどな。

「じゃあまずアミユリーと組むのは」

「はいっ！！」

……この二人とアミユリーの組み合わせは危険だな。

「…俺だ。烈と雑魚ベーが組め。」

「「ええ」」

似たもの同士って事で何の問題も無いだろ。

<ツテ力無視スルナコラア！！合成生物達モカプセル開イテルンダカラ早く行ケ！>

へ了解しました。（今まで閉じ込めといてムカつく機械だな・・・）

〜

へグルルルウ。〜

カプセルから出てきたのは基本がドラゴンの騎士見たいな感じだが羽が悪魔っぽくって足にはローラースケートをつけている。手は巨

人の手位でかくて大剣を持つてる。

まあ…あのモンスターからしたら普通の剣サイズなんだろうけど。

二匹目は合生成物の名がそのままといえるような奴で全体的に腐ってる まあ全体がゾンビみたいな奴だ。分かりにくいが多分巨大な鳥とドラゴンとスライムとゾンビと蛇を混ぜたんだと思う。

へグルアアア！」

「ゴオオオオオオ！」

「ぎゃああ！！焼け死ぬ！黒焦げになる！」

ゾンビに囲まれて逃げれない烈はそのまま合成ゾンビ（仮名）の炎で黒焦げになる。ちなみにこの炎で烈の周りに居たゾンビは全て燃え尽きた。

「そんじゃあそっちの合成ゾンビ（仮名）は任せた！」

「私に掛かればこの程度どうって事はありませんよ。アーッハッハッハッ！」

たいした自信だな。俺はとりあえずアミューリーを連れて ってくっ付いてる！ゴムみたいなので固まってるのか 無理矢理引っ張って えええ…

「バチン！」

何とかゴムは切れたが顔面に当たった！！もう今日は全然ついてな

い！！とにかく脱出！

「逃がしはしない。」

逃げるんじゃないかってお前をおびき寄せるだけだよバーカ！

「さてこの辺でいいかな。」

「ゴムが少し重いのです・・・しょうがないのです。」

上の服を脱いでシャツだけになるアミユリー。今は別にいいけど烈と雑魚ベーが来たら多分溶けるんじゃないのかあいつ等？

「ハア、正直こんな弱そうな奴等の相手は嫌だがしょうがないか。」

「弱そうで強い奴等の相手なら話は別じゃないのか？」

「悟、今回は私一人で戦いたいです！。」

「んっ？」

お願いと言った感じで頼んでくるアミユリー。合成ドラ人（仮名）も首を傾げてる。

「別に良いけど・・・理由を求む！」

「まだ悟は私の特殊能力を知らないと思うので知っておいた方がいいと思うです！。」

まあ口での説明より見た方が分かりやすいしな。問題NOだな。

「おー、別に良いけど気をつけて言って来いよ？・・・特に交通事故や銀行強盗や大剣を持ったローラードラ人や振込み詐欺に注意しろよー！」

「ボケ役！お前勝手に入れ替わるな！」

良いじゃないか別に。バトル終了の時にはちゃんと戻るって。

「ヒートアップがまだ直ってないです？」

「そいつがボケ役だということに気付いてくれ！」

「いえーい」（超小声）

「お前は返事するなあー！」

「誰がオッサンだ。とにかくその小娘が相手が良いのだな？」

「小娘って言うなです。とりあえず覚悟してくださいですー。」

「炎集斬！」  
えんしゅうざん

「水波刃です。」  
みずはは

「ガキイイーン！」

炎の剣技をアミュリーが水をまとったナイフでガードした。かなり無理が有る気がする・・・

「スチールナイフ・カッターですー。」

アミユリーがそういうとアミユリーの周りにナイフが十本現れて回転しながら合成ドラ人（仮名）に飛んでいく。

「暴風集波！」

だがドラ人（仮名）の技で超強い風が吹く。目に砂が入って痛い！  
sonでアミユリーのナイフが跳ね返るがそれを飛んで避ける。ナイフはそのままこっちに飛んで

「って余裕で実況してる場合じゃねえ！回避だよーん！」

とりあえず地面に伏せて回避するべし。アミユリーは隙無く次の攻撃態勢に入る。

「スチールナイフ・」

「フン、何度使おうが同じだ！」

跳ね返りませんように跳ね返りませんように 別に良いけど！

「どっちだよ！ってか良くねえ！」

「ストレートです！」

次はナイフが回転せずにそのまま飛んでく。風の抵抗を受けにくい  
突く攻撃で行く気か。

「カンカンカンカンカン！」

ハハハ！全部鎧に防がれましたよー。勝てないんなら俺が代わりましょうかー？

「マジでちよっと思考を含め黙ってるボケ役。」

「フハハ！この鎧をスチール程度のナイフで貫けると思ったか？」

「羽双なら割り箸で貫けるです。」

確かに。

「羽双ならまあ貫けるだろうな・・・」

「スチールナイフ・ストレート・スライドです！」

今度は地面ギリギリにナイフが飛んでいく。もちろん何本も。

「この程度など飛んで ハッ！」

ローラースケートでその場ジャンプなんか結構難しいぞ。特に重い鎧を着てなんかかなり無理が有るだろ。でも俺は出来るぜ！

「それは是非今度見せてもらいたいな。」

「バキバキキン！！」

ローラースケートを破壊したって事は相手のスピードが落ちるという事でした！

「特殊能力発動です。チェンジです！」

「キーン！」

おおっ！遂に神の特殊能力が発動されたあ！その能力は何か！次回、神様の特殊能力！をお楽しみに！

「今回の内にあの敵を倒すだろうから次回予告の必要は無いぞ。つてか嘘情報を流すな。」

「チェンジ完了です。」

「お〜」

中から出てきたのは悪魔の衣装をしたアミューリーだ。悪魔の触角と尻尾と翼が生えてるな。そうだな、今度雑魚ベーとか言う奴に見せてやろう。

「それは止めておけ。」

「ダークキャノンですー。」

「ボン、ツドガアアアン！！」

黒い気体？の大弾を両手で作って撃つ技みたいだな。大きさは小学生の運動会の大玉位。爆発範囲は百メートルくらいで威力は弱だな。

「な、何〜」

「次はシャドウナイフです。」



「グサツ、バキキイイン！」

真つ黒なナイフを相手の影の胴体部分に投げ刺したら相手の胴体部分にもナイフが刺さってた。影に刺さってるナイフより微妙に色が薄いな。これぞ演芸！これぞマジック！

「ラストはアサルトナイフ・アタック・リングですー。」

「ズバアアア！ズバアアア！ズバアアア！ズバアアア！ズサズサズサズサズサー！」

ああこれは痛そうだな。まず両手に持ったナイフで縦横右斜め左斜めに斬ったあと敵の周りに巨大なリングのように見えるほどナイフを出して一気に敵に放つ技だな。

俺の見る限りではあのナイフは全て殺傷力抜群だな。

「とりあえずあの魔物を倒したですー」

「お見事お見事。ってか十分強すぎだつて。」

「えへへーです。」

「それより早く元の姿に戻さないと馬鹿二人が来るぞ！」

それを待つてるんだが？

「はあ！？何でだよ！？下手したら襲われかねんぞ！」

ん？その時は当然

「助ける・・・事ができるのか？馬鹿共から？」

あゝ、いや、助けるんじゃないって見て楽し

「今すぐ飛び降り自殺で死になさい。このスーパー馬鹿ボケ役が」

でも馬鹿二人がナイフで斬られる気もするな。数時間くらい。

「た、確かにありえる気がする　とにかく安全な格好をさせる！悪魔<sup>ビル</sup>みたいな人外衣装はダメダメ！」

つまらないなー。まあしょうがないな。

「アミユリー、ツッコミ役の悟がその姿は敵と間違えられて襲われる可能性があるからNOだって。」

「敵に間違えられてか。良い言い訳を考えたなボケ役。」

「今はボケ役の悟ですー？」

「イッエース。」

「この姿はダメです？」

「此処でダメと言えよ。」

「ダメだって。俺は別に正直な話どっちでも良いんだけどツッコミ役は心配性だからさ。」

「心配性は悪い事か？お前は逆に心配しろ。」

自分の事だけな。ところで人外ダメ？

「激しくダメ。」

はいはい。心配性ですこと。

「まあそういう事で人外の姿はダメだから」

安全な衣装じゃないと

「当然そうじゃないとダメ！」

「だから安全な警官の姿をしてろって言うてたぞ。」

「言つてねえええええ！！！」

「ちようど警官の衣装は持ってるですよー」

「何で持つてるんだあああああ!？」

確か烈が新品の実物を小学生サイズを改造したのをアミュリーに送ってたぞ。

「あの馬鹿か！！」

ちなみに作ったのは俺だ。

「お前かこのドアホオ!!!」

パーティの後に即行で作ってくれて家まで乗り込んできてうるさいから作っただ。

他の衣装を含め数十着位は作ったな。基本的に俺も魅異に着せようと作ったことが何回も有ったから数時間で作れたぞ。

「数時間で数十着ってどんだけ早いんだよ　じゃなくて手伝うなよ  
!-!」

「どうです?どうです?似合いますかです?」

「普通に似合うと思うぞ。」

普通にまあまあ似合う　まあ馬鹿一人が見たら徐々に消滅してくだろうけどな。

「俺は徐々に溶けてくと思う。」

「いやー、白熱した戦いでし」

「おっ!どうしたん」

あつ戻ってきたな。二人とも見事にアミューリーを見て固まる。さあ消滅するぞ。

「だから溶けるんだって。」

「二人ともお帰りですー。」

「シューウウウウウ」

ああー、残念ながら蒸発だったな。

「蒸発か 微妙だな。今回は引き分けか。」

「蒸発しちゃったです。」

「次回になったら復活するだろ。とりあえず羽双たちを探すか。」

「おっ居た。おーい羽双！」

「ああ悟だー。」

「遅いですよまったく。」

「……弁当食い終わってる！羽双は空の弁当箱の近くで本を読んでいる！」

「ええええええー！！」

「ゾンビなんか一匹も居なかったから弁当を食べてたんだよー。」

「ちなみに全部食べました。」

「とことん外道！」

「ズバゴオオオオン！！！」

「ポケ役、羽双に悪口は控える。」

み、魅異並にパワーがある・・・マジ死ぬ。

「私もお弁当持つてるので食べるですー。」

「勝手にどうぞ。どうせ本を読むつもりでしたので。」

「読むつもりと言うか読んでたしな。」

「悟も少しお弁当分けて欲しいです？」

「おもいつきり分けて欲しい！」

箸でおかずをつかんではいと持ってくる。アーンと口を開けてそれを食べる。

お弁当でアーンは最初は魅異にやって欲しかったああ！！！！

「おかず貰えるんだから感謝の気持ち位無いのか・・・」

うう・・・だつてさ 最初は

「大丈夫。次があるだろうから。（まっ、一生無いだろうけどな。）」

でも結構美味しいな。少なくともツツコミ役よりは料理が上手だと思う。

「まあそれはおいといて馬鹿二人にお弁当の事ばれない様にしないと。ハア 大変だ。」

上手くスルーされた！

## 60話：ホテルでも休憩する暇はありません

@ 悟視点 @

前回の町からは何の問題も無く次の町についてホテルまで着いたんだが

このホテルではバトル自由という迷惑なルールが有るらしくそこら辺の人から何故か挑まれてるんだ……何で？

ちなみに羽双に挑んだ奴は首吊り状態で廊下の天井に吊るされてた。自殺に見えるんで止めてくれ。

部屋は羽双が面倒だと言って前回と同じチーム……だから羽双とジヤルスが相部屋で俺とアミューリーが相部屋だと勝手に決めていた。

また馬鹿二人が来るに決まっている どうしよ。

「部屋に着いたです。」

あれもう着いたか。考え事をしているとあっという間に着くな。よく見たらいつの間にかパ層等も居ないし。

「とりあえず鍵は閉めとくか。」

到着した部屋は見事に綺麗な部屋だ。バトル自由のホテルの部屋とは思えないな。此処の清掃員はかなりの腕前だなうん。

「窓や壁の修復ボタンが有るです。帰るときは必ず押してください



って書いてあるです。」

清掃員を褒めた矢先にそういう事を言わないでくれ……でも修復ボタンか。家に有ったら便利だな。魅異が壁を壊した時とかに使えそうだがスイッチも破壊されそうな気がする。

「それにしても良い景色だな此処。」

窓から外の景色が一望できる。言い忘れてたが此処はこのビルの五十階だ。このビル自体は五十階建てで三十階から上は全てホテルだ。だから五十階に泊まれる事はあまり無い。

なのに此処に泊まれたのも羽双のおかげだ。羽双が一番良い部屋を用意しないと潰しますよ？と自分の二倍くらいの大男の店員に言っただ。その店員はぶちキレて羽双に襲い掛かったんだ…それで三秒後に土下座して鍵を渡してくれた。

そういえば襲ってきた奴らも同じ服着てたな。まあ結果的に全員首吊り状態な訳だが。

「あつ烈と雑魚ベーです。」

「えっ？」

窓の方を指さしてアミューリーがそういうので見てみると 馬鹿共が窓に張り付いてた。

馬鹿が窓に張り付いてる。ってか覗いてる光景はムカつくので

「ズキューン！ズキューン！」

「ぎゃあああああー!!」

撃ち落してやった。どうでも良いけど窓を割って撃ったのに窓の割れる音がしない。

「アミユリー窓の修復ボタンを押してくれ。」

「はいですー。」

アミユリーがボタンを押すと俺が撃った窓が落ちていって別の窓が出てきた。

落ちた窓は先に落ちていった馬鹿共にHITすることだろう。

「とりあえず馬鹿共は落とし」

「みゃゝ、みいゝ、みゅゝ、みえゝ、みよゝ。」

「…………アミユリーが笑顔で意味不明発言をしました。瞳を見れば黄色 いやレモン色の瞳で髪の色と同じだった。

「にゃゝ、にいゝ、にゅゝ、にえゝ、によゝ。」

レモン色が一番本当のアミユリーに近くそして一番馬鹿らしい。ってか今の行動自体が俺には既に意味不明だ。

「アミユリー?」

恐る恐る（あまり怖くは無いが）呼んでみる。言葉が通じますよう

に

「やっぱり重要だってば！」

「へ？」

笑顔でそういうアミユリーに一文字の疑問系の文字で答える。必要  
って何が？

「何が？」

「さっき言っただけだってば。」

言っていないよ！何が必要なんだかはつきり言って欲しい。考える俺  
を見てアミユリーはもう一度言うために息を少し吸い込んだ。

「みゃゝ みいゝ みゅゝ みえゝ みよゝ にゃゝ にいゝ に  
ゆゝ にえゝ によゝ」

最初より楽しそうに言うアミユリー。あと 言っただのに言っ  
てないなんて思っただけだった。と思考内で謝っておく。でもそれが必  
要なものか？

「ええっと、それがどう必要なんだ？」

「現代人はこの言葉をあまり使わないでいるからもって使う必要が  
あるんだってば！」

いや無理に使う必要があるのか？とツツコミたいんだが元氣良く説  
明してるアミユリーを見てると無理な気がしてきた 楽しそうだと

ころ邪魔するのもダメだし。

「ところでその窓に止まってるのはセミだっけ？」

「セミ？」

いやいやこんな高い所にセミなんか居ないだろ。と思って窓を見たら居た！セミ らしき生き物の着ぐるみを着て窓にくっ付いてる馬鹿が二人。これを見つけた時点で俺の行動は決まった。

「ズキューン！ズキューン！ズキューン！ズキューン！」

当然撃ち落してやったぜ。今度は一人につき二発の銃弾サービスだ。当然二人にHITして落ちていった。

窓ガラスがまた割れたな。今回も割れる音が無かったけどちゃんと割れてるぞ。

「アミユリー窓の修復ボタンを押してくれ。」

「分かったんだってば。」

あつ、いま気付いたが尾語にだってばが付くのが口癖らしい。でも付けてない時も有るよな？

「ふえ？どれを押せば良いか分からないんだってば。」

むうゝとか言いながら聞いてくる。スイッチが分かってどれを押すか分からないのか？

「窓って書いてある奴を押せばいいんだ。」

「窓ってこれだっけ？」

あつ、だってばを付けてなかった。いやそれよりも平仮名で書いてあるのに読めないのか！？

内心ちょっと驚きつつアミユリーが指さしてるスイッチを見ると平仮名で天上と書いてあった。

思考内で二回驚いたあとアミユリーに一つ聞いてみる。

「……平仮名が読めないのか？」

「読めないんだってば！みやみいみゆみえみよハハハハ」

笑いながら答えるアミユリー。その笑い方についてはツツコミどころが多すぎるので放置しておいて 思考内で三回目の驚きを実感したあと勉強の言葉が浮かんでくる。

「よしアミユリー、今から平仮名の勉強をするぞ。」

「ええー、アタシは勉強が苦手なんだってば！」

アミユリーの勉強は困るという言葉が聞こえてくるが決定事項だから拒否権は無い。

窓の修復ボタンを押したあと俺は五枚の四角いカードを用意してあい・う・え・おの文字を書いていく。あとどうでもいいけど修復ボタンと言う名前の割には窓とかを直してるんじゃないかって新品に入れ

替えてるだけだよな。まっ、本当にどうでもいいけど。

「いいか？これは『あ』でこれが『い』でこれが『う』でこれが『え』でこれが『お』だ。」

「むう」

ジーっと文字を見て覚えてようと頑張るアミユリー。

「じゃあこれは？」

俺が差し出したのは『い』のカード。覚えやすさは高いと思うぞ。

「それは『そ』だつてば！」

ビシィと指をつき付けて言うアミユリー。いやいやいやいやいや！全然違う！ 何処をどうやってたら『そ』の答えが出るのか問いたい。

「たいした自信だが完全に大ハズレだ。」

「ふえゝ？」

何で？と言いたげな顔で首を傾げてくる。間違えたからに決まってるんだけど間違える理由が全く持って分からん。

「……次の問題行くぞ。」

「きゅゝ かなり疲れたからちよつと待って欲しいんだつてば。」

一問で疲れたのかよ！？ヤバイ これじゃあ俺の体力の方が持たな

いな。あつ。

「カチャ、ドゴオオオオオン!!」

忍者の姿で窓に張り付いてた馬鹿共を見つけたから撃ち落した。つてか懲りずに何回も来るから撃ち落されるんだろつが。諦めれば良いのに。

まあ来るなっと思ってもどうせ来るだろうな。それより勉強勉強

「何こつそり逃げようとしてるんだコラ。」

「きゆう」

ドアからこつそり逃げようとしてるアミユリーをズルズルと引っ張ってくる。あと二秒遅かったら多分逃げられてたな。

とにかく!今日中に絶対にアミユリーが文字を読めるようにするぞお!!

五時間後　そのやる気は完全に疲労と諦めに染まっていた。



## 61話：異常な師匠と異常な弟子

@羽双視点@

「朝ですか。」

時間は 四時。多少早起きしたので適当に散歩でもするかな

ちなみに僕は絶対敬語じゃありませんよ。…誰に話してるのかは分かりませんが。

「さて、行くか。」

あと朝から嫌な気配が 面倒なので気にしませんが。

散歩のついでに宿泊者リストを見に行きますか。正直面倒ですが一応。

「やはりですか。」

宿泊者リストを見てたんですが 予感は的中してました。

「どうせまだ寝てるでしょうし、見つかる前にこのホテルを出れば問題ない か？」

「寝てるって誰が？」

チツ、起きてましたか。永眠してれば嬉しいんですが とりあえず聞かれた事だし答えでも返してあげますか。

「さあ 僕の知り合いですけど 馬鹿で異常で必要性無しで師匠で生きる価値も無しで邪魔でこの上ない苦しみ味わいながら死んだほうが良い様な 悪いところしかない人です。」

全て事実ですし本心です。

「それは言いすぎじゃない？」

それでも全然言い足りませんが。

「消えてください 貴方はその人に似てるので。」

「奇遇だね 私の弟子に似た人」

「滅びてください。あと人違いですよ。僕は忙しいので部屋に戻ります。」

相手するのが面倒なので。

「え、ちょ」

「黙ってください魅異さん。」

…癖で名前を呼んでしまった。元々気付かれてたでしょうけど。

「やっぱり羽双」

「死んでください。そして人違いです。」

所詮は馬鹿ですしこれで納得するでしょう。 多分。

「そんな事言わずに再会を楽し」

「貴方に会えて楽しめる事はありません。あと貴方から変なオラが出ていて気分悪いんで近寄らないで下さい。鳥肌と吐き気がします。」

これだけ言えば少しは堪えるでしょう。

「でもそれは羽双の場合だし一般人の場合はそんな事は」

「僕は慣れてるから大丈夫ですが一般人の場合だったら重体ですね。死亡率百パーセントは軽く超えますね。貴方なんか邪魔にしかされてないんで死んでください。生きないで下さい。」

「最後のは意味は全部同じだと思うよ。あと実は私を馬鹿にするのを少し楽しんでるんじゃないの？」

「少し楽しんでますけど何か？」

別に何を楽しむかなんて僕の勝手ですので。

「いや別に。そういえば羽双は何でこんな所に居るの？」

「旅行です。」

魅異さんが居る事の方が変ですが。

「私は三人で旅行をする予定だったんだけどね、他の二人と旅行先の意見が合わなくて別々で旅行することになったんだよ。」

「そうですか。」

どうでも良いかしそろそろ戻ろう

「ちょっと待った」

「ハア まだ何かあるんですか馬鹿魅異さん？」

ちなみにこの人はバカ、ボケ、マヌケの三拍子で出来ているので何と呼ぼうと問題はありません。

「何故僕が？」

「いや、此処のホテルはバトル自由らしいんだけどほとんどの宿泊者が首を吊っててね。」

「…そうですか。で？」

…そんなの僕の知った事じゃ有りませんが。

「そこでラジオ体操レベルで羽双とバトルしようと考えたわけ」

…ハア、面倒ですが断つても無駄か。

「面倒で馬鹿らしいですが特別にやってあげましょう。」

「やったあゝ。」

特技以上の技 使う方が良いか？ 魅異さんに合わせて戦うか・・・

「一番弟子の実力を見せてもらおうよ。勇者拳っ！」

高速の速さでの拳攻撃 凄まじい拳圧で遠距離攻撃としても使える技 ですか。

多分、近距離攻撃としては空気抵抗を無視してますが遠距離攻撃としては空気抵抗を多少は受けるようですね。

「それ。」

別に防御技を使っても良かったのですが 初めて見る技なのでとりあえず手の平で受けとめました。

「まだまだ、勇者砲だよ。」

次は光と波動をメインとした光速遠距離攻撃ですね。

「それ。」

今度は水筒に入っていた水を撒く。 光を水で屈折させる事でこの攻撃を回避できるという訳です。 光メインで動いてますので波動も僕には当たりません。

鏡で跳ね返すのは波動の勢いで鏡が割れる可能性があるので無理ですが・・・

「ハア、風波かざなみ」

これは団扇で風を起こして攻撃する技です。 全力でやれば宇宙全体に空気を送る事が出来ます。 ちなみにこれは僕のオリジナル技ですよ。

「新技・勇者扇風機の風が当たる気分」。

特に何かするわけでもなく風に当たってるだけ……気分の問題ですか

「神離流しんりゅう技 地穴レベル三だよ」。

「おっと。」

ホテルの下の地面が無くなった 無事着地できましたが。

「神離流の技ですか」

「そうそう。私の主に使う流派は勇者流・神離流・魅異流だよ」。

全部魅異さんのオリジナル流ですね 僕も流技位は使いますか。

「風飛ふうひレベル二」

この技は風を下から上へ吹かせる技です。この技でホテルを空中に浮かせて

「早く。」

僕の時間を操る技で高速で地面に落とします。…当然効果はホテル全体ですが。

「まだまだ甘いよ。神離流技 風飛レベル一だよ」

……地面に当たる直前で風飛を使って衝撃を和らげましたか。

「羽双、神離流の技を使う時は最初に神離流技とか付け」

「嫌です。」

面倒なので。

「まあどっちでも良いんだけどね。神離流特技 天罰<sup>てんばつ</sup>レベル一だよ」

天罰は雷を落とす技ですが特技になっただけ有ってレベル一でも威力は極端に高いですし何発もの雷が降り注ぎます。

…あの雷は普通の土や岩を盾にしても貫通するはずです。…物理学無視ですね。しかし対処は簡単です。

「それ。」

光の時と同様に水筒の水を自分の上に撒く。…そしたら雷はそっちに誘導されて僕には雷は当たりません。

「次は神離流特技 森林木<sup>しんりんぼく</sup>レベル二だよ。」

……森林木は使用者を中心にして木を生えさせる技　その生えた木の葉や根が相手に攻撃をするはずです。他にも痺れ粉を撒いたりとか

「特技　熱炎<sup>ねつえん</sup>レベル二。」

熱炎は酸素を発生させ続けそこへ炎を発生させる技です。酸素が常にあるので技の使用中は半永久的に燃え続けます…

これで木などを燃やし尽くします。

「おお。神離流技　水流<sup>すいりゅう</sup>レベル二だよ。」

水流はその名の通り水を流す技です。水流で火は消えましたが木なども流されましたね。

それどころか…ホテルまで流されましたね。

今は空中にいます。魅異さんですが。下に降りると濡れるので

「爆針<sup>はくしん</sup>レベル一。」

「それじゃあ勇者風味<sup>ゆうじやふうみ</sup>だよ。」

爆針は大爆発を起こす針を何本も飛ばす技です。

勇者風味は強風を起こす技のようですね。味は無いようです…

普通なら爆針が跳ね返って僕に当たるでしょうが…その前に爪楊枝



で爆破させます。

「それなら次は〜」

「PIPIPIPIPIPI!!」

…時間ですか。

「今日は此処までです。」

水は全て何処かへ流れたようですね

「そう〜?じゃあホテルに戻ろうか?」

「で、そのホテルは何処に?」

「さあ?」

目の前には何もありませんが。単に滅びた町の後のようなものが一  
つ

建物は一切無いようですが

@悟視点@

.....

「あのさあ、俺達ってホテルに泊まってたよな？」

「そうだってば。」

「じゃあさ、今日の前にあるのは何？」

「どう見たって悟の家だってば！」

アミユリーの言った通り目の前には俺の家の崩壊状態。烈や雑魚  
ベーやホテルの瓦礫だと思われる物が突っ込んだようだ。

「何でこんな事になってるんだ？」

「分からないんだってば。」

だよなあ。…何でこんな事になるんだか…

冷たい風がヒュウウ〜と吹く。もう嫌だ…マジで。

## 61話：異常な師匠と異常な弟子（後書き）

@羽双視点@

「61話更…」

「で、何処ですか此処？」

「えっ、後書」

「僕に何の用ですか？」

「えと、羽双には神離流の技についての説明を」

「帰ります。」

「ええ！？ちよつと待って！！説明だけで良いから帰るまえにして  
つて！！」

「嫌です。」

「お願いします！！寿司を奢」

「嫌です。」

「ちよつと待て！マジで少し」

「嫌です。」

「じゃ、じゃあ」

「嫌です。」

「まだ言って」

「黙ってください。」

「いやいや！説明してくれるだけで良いから！」

「チッ 神離流の技は魅異さんが皆に教えてた技です。説明終わ  
ります。」

「ダメ！！もう少し詳しく言え！！」

「……………」

「！！スミマセ」

「グサアッ」（包丁で突き刺す）

「グハア！」

「ハア で、神離流の技はレベルが有ります。レベルに上限はありませんがレベルが高ければそれだけ威力も高いです。」

神離流は大勢の人に教えてましたが使えたのは確か僕を含め数人のはずです。…もう帰って良いですね？では。」

「…じ、次回・・・を……お楽し みに……がはっ」

## 62話：タイムワープ！過去へ行こう！

@ 悟視点 @

いやゝ、最近思っん事があるんだがこの小説って常に新キャラが現れたり何処かに出かけたりとか忙しいよな。最近日常の生活をやってない。

まあそついう事で今日こそは普通に一日を過ごす事にした。

「今日は全員で過去の特星に行くよゝ」

普通の一日は魅異の言葉によって見事に粉碎された。うん その時間わずか五秒。

現在の存在人物を確認すると俺、魅異、羽双、アミユリー、あと何故か雑魚ベーが居る。

水魅は昨日の事が原因で何処かに流されて行方不明。ウィルと魅亜は旅行中だ。

「おやおや過去に旅行ですか？私も行ってみたいですねえ。」

「行きたいんだってばー。」

遊び半分で逃げ回ってるアミューリーと全力でアミューリーを追いかける雑魚ベーが言う。アミューリー、雑魚ベーに捕まって危険に陥った時は大声で助けを叫べ。警察を呼ぶから。

「……………」

羽双は無言で本を読んでいる。気が乗らないのか面倒なだけなのか本に夢中なだけなのか。

「悟は？拒否権は無いけど行きたい？」

「んっ、俺か？」

拒否権無しなら聞くなよ！ってか拒否権与えろ！

でも普通に旅行なら断るところだが特星の過去か 行けるかどうかは知らないが気になるな。

過去に行くとか言ってるのに驚かない俺達って微妙に異常なのかも知れない。

「まあ 行けるなら行ってみたいな。」

「決定。じゃあ羽双、後はよろしくね。」

人任せかよ！？ってか羽双が俺達を過去に送れるの！？お前等グルだったのか！

「チッ、やっぱり僕ですか…面倒ですが魅異さんに馬鹿頼みをし

つくくされる方がよっぽど面倒なので不本意ですが送ってあげますよ。」

非常に嫌そうだな。ってか羽双の特殊能力か？もしそうなら初めて見る事になるな。

「それ。」

「キーン」

「…着きましたよ。」

ええっ！？それ。の一言で過去にワープできるのか！？

「一定以上のダメージを受けるか帰りたいと思えば帰れます 他にも此処のものは壊したりしても未来に影響は出ません。 持って帰りたいものがあつたらこのバッグに入れてください。 此処で死んでも元の時代では無事で帰れますので。」

皆にバッグを一つずつ差し出す羽双。

「じゃあ皆自由行動ね。 ついでに三時間後にはこの星ごと宇宙全体を消し飛ばすよ。」

未来に影響で無いからってそれは止めておけ！！

「此処は何時の時代ですかねえ？」

「多分今年の元旦だつてば！」

おもいつきり最近じゃないか！でも何か買つていけるから良いか。

「僕は寄る所がありますので。」

「私も行きたい所があるからお先に〜。」

「よくし適当にいろいろ回るんだつてば！」

「私もアミューサーさんに着いて行きますよお！それでは行きましよう！」

おお〜、行つてらっしゃい。…うるさいのも居なくなつた事だし俺も適当に回るか。

もちろん正月だし餅を撒いてる所に拾いに行くぜ！

「いやあ〜、結構取つた取つた。やっぱり吸い込み式の銃は便利だぜ！」

俺は餅撒きで吸い込み銃を使って撒く前の餅をばれない様に沢山貰つておいた。

えっ、卑怯？いやいや特殊能力を使って相手を気絶させようとしてる奴とかに比べたらマシ。



「でも一箱は多すぎたか？よし、この際だし持って帰ったら羽双に分けてやるか！多分和風好きだし貰うだろ！」

…ハッ！辺りから殺気が！皆が戦って取ってる間に楽しんで取ったから当然か…こっそり逃走！

「どうやら誰にも気付かれ無かったみたいだな。」

…いや？背後に気配がする。誰かに付けられてるな。

試しに軽く小走りで進んでみる…着いて来るな。

やっぱり餅を取り過ぎたせいか！でも渡すわけにも行かないし。

此处は後ろをいきなり振り返ってどんな奴か確認。怖そうな奴なら撃ち飛ばす。優しい奴なら適当に謝る。これでよし！

「全然ダメだろ！」

うるさいボケ役。ボケ役がツツコミを入れるな。

「誰だ！」

そういつて振り返る。後ろに居たのは 女の子。

小学生位の身長で黄土色の髪で黒くて多少鋭い目つきの子だ。

冷静そうというかやる気がなさそうというか そんな感じ。

いきなり振り返ったからか本当に一瞬驚いたような表情をしたように見えた。

「私か？私はウソウだ。お前は？」

「俺？俺は悟だ。」

「悟か。単純 あ、いや一応良い名前だな。」

単純って行ったよな…しかも一応良い名前ってフォローになってないぞ。

それにしても口悪っ…こいつの家族の奴を見つけたら注意してやるぞお！

「それで一体俺に何の様だ？」

「…さっきの餅撒きの時の事だ。」

やっぱりかあああ！俺の餅狙いか！

「アレは一応ルール上問題じゃない！だから餅はやらないぞ！」

「別に餅を吸い込んで取ったから文句を言いに来たわけじゃあない。」

えっ、そうなの？ でも結局気付いてるんだなコイツ。

「お前 私の馬鹿兄を知ってるだろ？何処に居る？」

「いや、俺の知り合いに妹居る奴なんか居ないし。」

「嘘付け 早く言わないと呪い殺す。」

怖い！本気で呪い殺されかねない雰囲気が出てる！！

「ちょっと待て！兄の名前を言わないと分からないぞ！」

「馬鹿兄は馬鹿兄だ。名前は言いたくない。」

言ってくれ！そして殺意が目に見えるほど出てる！只者じゃないだろお前！

「ってかまずお前の苗字と名前の漢字位教えろ！そして知り合い位言え！」

「苗字は神離。漢字は『う』が雨で『そう』が双と読む。知り合いは魅異って人が師匠。」

神離雨双しんりうそうの兄らしき人物。魅異関係で思いつきり心当たりがある！可能性が高いのは羽双！

「羽双の事が！？」

「確かにそうだが黙れバカヤロウ。いや黙るのは無理か？」

確かに目つきとかが鋭くて殺意とかが似てるな。髪の色は全然違うが。

冷静でやる気無しに見えるのもそのせいか。

「で、馬鹿兄は何処だ？早く連れていけ。」

確かこの時に羽双は旅をしてるはず。

「残念ながら此処には居ないんだ。六月の二十日過ぎに帰ってくるはずだが。」

「そうか。」

そうか。って礼の一言くらいはくれても良いと思うんだが。

「とりあえずありがと えっと、誰だっけ。」

名前くらい覚えてくれ！

「まあ 良いか。馬鹿兄とはいつ会える？」

「羽双にいつ会えるか？分からないな。」

「その位分かれバカヤロウ。その位何とかしろコノヤロウ。」

んな無茶な！此処は未来には影響しない過去の世界だしどうにも出  
来ないぞ！

「それなら俺が何とかしてやろうじゃないか！！」

出来るのか！？

「いや無理。」

無理かよコノヤロー！

「本当は何とかできるぞ。俺の使える超脇役技でな！」

嫌な響きだが まあこの際それで良い。でもその前に説明を求む。

「この技は何ですか？ この技は見た事を過去の人物に伝える事の出来る技だ！ しかも未来に影響するというお得効果付き！ 他にもオリジナルに言葉を付け足す事も可能！ まあこれは便利ですね！」

テレビショッピングかよ？ しかも一人二役。

「技に対してツツコミを入れないとは。この技の効果は夢として現れるから気にされない事もあるぞ。」

まあそれだけ出来れば十分だ。よしまずは帰るぞ！

「急で悪いんだがそろそろ帰らないといけないんだ。」

「帰るのか？なら早く帰れ。」

じゃあ早く帰らせてもらうか。ええっと 帰りたいなあ。

「キーン」

お、帰ってこれた。他の皆はまだ居ないみたいだな。

「よし、あとは俺に任せろ！住所とかも付け足しておいた方が良  
いよな。」

いや付け足さないと場所が分からないだろ。

「他にもいろいろ付け足しておくか。いつ頃の雨双に送る？」

今日の朝の夢位に送つとけば良いんじゃないか？

「オツケー。送っ」

「ピンポーン」

このタイミングは 雨双がもう来たみたいだな。

「昼頃に送ればよかったんじゃないのか？」

「ピンポーンピンポーン」

「はいはい今出ますよ。」

「バキイッ！」

ドアが急に開いて俺にヒットしました！軽くぶっ飛んだぞ！

「あ 一応ゴメン。」

「ホント最低限の謝罪だな」

別に一応を付ける必要はないのに何故付ける？

「お菓子発見　よし食べよう。」

それ俺の分！でも開けるのは止めないぞ。あれは開けたら中身が飛び出すお菓子でビックリ箱の使い捨て版お菓子付きみたいなものだ。

「うああ！？」

雨双は見事に引っかけたて驚いたな。ちなみに勇者社の試作品だが中身が飛び散るといふ欠点があつて販売するかどうかが中々決まらないらしい。

「お、脅かすな！」

お菓子の袋に怒っても意味は無いぞ。

「こんなもの居るか。」

「バシィ！」

ゲホア！こっちに袋や飛び散った中身を投げるな！

「キィン」

「到着だつてば！」

「いやぁ楽しかったですねえ。」

アミュリーと雑魚ベーが帰ってきた。つて雑魚ベーは来なくて良い！

「んっ？その可愛い子は誰ですかあ！？」

「私は雨双だ。一応よろしく。」

「アタシはアミユリーだつてば。よろしくだつてば！」

「そ・し・てえ！私は天才・有能・最高である」

「この人は雑魚ベーって言っただつてば。」

「ガガアーン！」

あっ雑魚ベーが効果音と共に落ち込んだ。

「さっきの効果音は 何処で鳴った？」

雨双、それは誰もが分からないと思うぞ。

「キーン」

「ふう あっ、雨双さん。」

「たっだいまあゝ おっ雨双、久しぶりだね。」

魅異と羽双が同時帰宅。 ってか羽双、妹にさん付けはどうかと思うぞ。

「魅異さんお久しぶりです。馬鹿兄はどこを歩いてたんだ？」

扱いの差がかなりあるな



「って雨双が敬語を使っただあ!？」

「バキィッ!」

雨双の右ストレートが俺の顔面を捕らえた　そのまま俺は地面にドサアと倒れる。

「お前はもう黙ってる、私だって敬語くらいは使う。」

普段は使わないだろ! 実際魅異には敬語を使ってたが羽双には使ってなかったし!

「ところで馬鹿兄、この家の権利者は誰だ？」

「一応悟さんです。」

「何だお前か。これから私は此処に住むぞ。宿代がほとんど無いからな。」

んな無茶な! 大体この家は現在だけでも定員オーバーなのに!

あとで魅異に増築を頼もう。そして無理なら即追い返そう。

でも無理であつてくれえええ！！！！

## 62話：タイムワープ！過去へ行こう！（後書き）

@ 悟視点 @

「62話更新」。最近終わりが適当になってる気がする。」

「それより家の住人が増えてるんだが。」

「家を改築すると説明が必要になるから大変だが改築しない訳にも  
いかないし どうするべきか。」

「お前の都合なんか知るか。」

「まあ何とかなるか。それでは次回もお楽しみにっ！」

### 63話：女子小学生は大変です

@雨双視点@

「追いかけて来るなバカヤロウ!!」

「残念ですがその頼みは聞けませんねえ。」

「それより疲れたから下ろして欲しいですー。」

いま雑魚ベーとかいう奴に追いかけられている。私が此処に来てから今日までの間にも何回かあったが今日は雑魚ベーと私と瞳の赤いアミユリーしか居ない。

それで追いかけられているわけだ。アミユリーは自分から逃げようとしなから私が両手で持っている！ 何故私か？

あとどうでも良いが人間ピンチの時ほど思考は冷静なものだと私は思う。

「ああ！もう少しで届いたのに 惜しいですねえ。」

「いや、もうお前私たちを追いかけて来るな！」

「無理ですねえ。さあ覚悟おおおお!!!」

飛び込んできた？回避不能ならしょうがない！

「ええい！喰らえコノヤロウ！」

「ドカアッ！」

回避法が無いのでアミューリーを腹狙いで投げてみた　見事なヒットだ私。

「フッフ、貴方の攻撃はパーフェクトな攻撃でした。それ以上に私はパーフェクトですけどねえ。」

「何で無事なんだ？」

「アミューリーさんが自ら私に飛んできたのでギュギュギュっと抱きしめてキャッチしただけですよ。」

ギュギュギュ　三回も抱きしめられたのか？アミューリー可哀想に。  
…投げたのは私だが。

「さあ貴方も私の胸に飛び込んでください！」

「嫌だ。」

誰が飛び込むか。そろそろアミューリーを離してやれ。

「では、私に飛び込むのと私が飛び込むのとどっちが好みですか？」

「どっちも嫌だ。」

いい加減鬱陶しいから居なくなって良いよ。

「アッハハハハハハハッ！では私の華麗で物静かで複雑でダイナミックなトークで味方に引き入れてあげましょうっ！」

矛盾点が非常に多いのだが。とりあえず聞いてやろうじゃないか。

「大好きですよぉ！」

「シャキーン！キラキラキラキラ」

「黙れ。」

華麗でなければ物静かでもなくダイナミックでもない単純な言葉だ。

「ほお？華麗で物静かで複雑でダイナミックで豪華なこのトークを聞いて」

「どれ一つ当てはまってないし余計なのが一つ増えてる。それ以前にトークじゃないし。やっぱお前は馬鹿だな。」

「ガッガガアアアアン！！！」

あっ 固まった。うゝん 復活するまでに気絶させておいた方が安全かな？

「この際しょうがない。イメージアイス・ソード！」

私の特殊能力は氷を司る事。イメージアイスは自分の想像した形の氷を形成する技 もちろん硬度はかなりの硬さだよ。

そして氷の剣を沢山作り一気に飛ばす。

「スチールナイフ・カッターです！」

ナイフを次々出して氷の剣を相殺するアミューリー 何のつもり？

「弱い者虐めをする人は私が許さないです。」

弱い者いじめとは違うんだが 説明しても無駄だろうな！。微妙に投げられた事を起こってるようにも見える。

「とりあえずそこをどかないならお前も気絶しろ。私がさせてやる。」

「返り討ちですー！」

「氷砂。  
ひょうしゃ。」

氷砂は名の通り砂のような氷を相手に飛ばす技で相手の視界を奪うし案外痛い技だ。

「わう！？痛いっです〜」

「うるさい。特技・アイススイート。」

アイススイートは巨大冷凍光線みたいなのを放つ技だ。結構綺麗で私のお気に入りだぞ。

前方に放ったのに温度が下がって後ろの壁まで凍ってる。 やりすぎたか？

「とっても綺麗な技です。」

無事　！？しかも無傷。アミユリーのいるところだけアイススライトでも凍ってない？

「お前どんな方法を使った？」

「特殊能力です。」

「何の？」

「とりあえず磁力ですー。」

磁力か。ナイフを出せる事が特殊能力かと思っただが　違うみたい。

「今度はあたしの番です。」

「させるかコノヤロウ。氷壁。」

「磁力球ですー！」

氷壁は氷の壁、とりあえずそのまんまだ。

磁力については詳しくない。　が何も起こらない？

ハッターか何かだったりとか？少し壁の横から様子を見よう。

「あれ？」

体が動かない。壁にくっ付いてるわけじゃないのに何で？



感覚的には壁の向こうに引き寄せられてる様な気がする

「どうしたんですー？動かないのです？」

目の前まで来た　何かとてつもなく嫌な予感が

「それです」

ズガアという音が自分の顔の一ミリ　いやそれより近いところで鳴る。顔は動かせないが目だけで横を見るとナイフの柄の部分が見えた。見事に刺さっている。

もちろん私は何故か（多分磁力球とか言う技のせいだろう。）で動けず大の字状態で壁に張り付いてる。

「一気にそれですー」

一気に十本位のナイフを飛ばすようだ。全てギリギリ一ミリ以内のところに深く刺さる。

そして氷壁はバキイインという音をたてて後ろの壁に私ごと吹き飛んだ。

「あわっ！」

痛い。思いつきり壁に背中をぶつけた。

「飽きたので放置です」

「ええっ!？」

せめて磁力から開放しろバカヤロウ。あと今頃だがこの技は人の体内にある微妙な電力で電磁誘動という方法を利用したのであろう。

だから磁力球は磁石で私は磁石にくっつく物体つてところだ。

サブタイトルの女子小学生って私の事だな。アミユリーはどうみても普通に大変そうじゃないし。

あと氷が溶けて背中が濡れてるんだが。服なんかびしょ濡れだ。

その後はショックから立ち直った雑魚ベーが貼り付け状態の私を見て蒸発したり帰ってきた魅異さんに写真取られてビデオ撮影までされたりと放置されたままだった。

### 63話：女子小学生は大変です（後書き）

@ナレ君視点@

「63話更新！溜まっていた宿題をそろそろやらないと」

「自業自得だと思いますが」

「うるさい！あと三日で五つの宿題をやれってほうが無茶だろ！全部手付かずだし！」

「だから自業自得だと」

「しかも読書感想文と自由研究がまだやってないんだぞおおお！」

「！」

「あのー、聞いてます？」

「ああ聞いているぞ。」

「そうですか？とりあえず後書きのほうを進めないと。」

「後書きって何かやることあったっけ？」

「雨双さんの紹介がまだやってませんが。」

「まあ、そのうちするだろ。」

「ええええ！？それで良いんですか！？」

「時間がヤバイし。あつ報告することがあった。」

「何ですか？」

「実は携帯とPCを合わせたPVのアクセス数が今月だけで五千人を超えました！これも日頃からこの小説を読んでくださる皆様のおかげです。まことにありがとうございます！非常に感謝します！これからこの小説をご愛読下されば幸いです！」

「累計PVアクセスはどの位ですか？」

「まだ二万は超えてないが一万九千だ。でも携帯PVは一万を超えてた。」

「そうですか良かったですね。」

「ああ！それでは皆さん次回もお楽しみに！！！」

「お楽しみに！」

## 64話：迷惑行動もほどほどに

@悟視点@

「のうわああああ!!」

今日の特星の此処らへん一帯の天気は大晴れ!!のはずなんだが

「何で俺の家のところだけ日が当たらないんだチクショー!!」

曇ってる訳じゃなさそうなんだが日が当たらない!すなわちこれは洗濯物を干してもなかなか乾かないという事!!俺が当番の日に限って何で?

「よし。ちょうど悟の家以外には被害が無い場所だね。」

「良くねえ!やっぱりお前の仕業か!」

「まあ、太陽の光を遮る原因をよく探してみよう」

楽しそうに何を でも曇ってないから多分宇宙に原因があるだろうな。

原因 原因 おおつ、それらしきものを発見。小さく浮いてて此処からの距離はまあまあだ。

星かなんだな。……………ってオイ待て。

「あの星一つがお前の仕業か!?」

「そうだよ。私の能力を使えば出来るかと思って試してみたら大  
きさから場所までなんと見事計算通りに出来たんだよ。」

んな無茶な！ 何かコイツが本当に人間かどうか疑わしくなっ  
てきた。

「とりあえず俺の家に日が当たらないんだが。特に洗濯物が乾き  
にくいから困る。」

「それじゃあ私の別荘に来てみる？」

「行けるのか！！??」

「此処から三十秒位かな？」

早いし！宇宙の別の星まで此処から三十秒なんてお前じゃないと無  
理だ！

「ほらその扉から行けるんだよ。」

いつの間に作った！？さっきまで日が当たらないのが気になって気  
付かなかった！

「とりあえず行ってみよう」

「お、おお。」

うおー。出た場所は別世界のように自然的なところだ。白い小鳥とかが飛んでるがこれはさらって来たのか？

俺の出てきた扉（小さな小屋の扉の横についてる）を中心に半径五十メートルくらいに芝生が広がっていてその周りには森がある。小屋の隣にはベンチもあるな。

芝生の道は森の中につながっているみたいだな。

「驚いた〜？此処まで作るのに案外時間掛かるんだよ。ちなみに大きさはとっても小さくて特星の私たちの町の二分の一位の大きさなんだよ。」

確かに向こうが丸みが掛かってるのが分かる。海を見たときに微妙に分かる事があるよな。

「奥の方にもまだあるのか？」

「当然〜。どうせだから案内してあげるよ〜」

ちなみにこの出入り口の芝生周辺は『エンターエリア』らしい。一応メモしとくか。

「此処が別荘だよ。」

あれ？別荘と言ったのに結構小さな家だな。小屋 ほどではないが小さな一階建ての家と言った感じだが洋風で立派な家だ。庭は予想通りだが芝生で丸くて白いテーブルがある。しかもパラソル付き

の夏の日差しに強いタイプだ。

そして席には ええっと、どこかで見た事あるような人が座ってた。誰だっけ？

「前も紹介しましたが勇者社の社長秘書をやっている篠頼 几骨です。一度お会いしただけでは覚えられませんか？」

「あっ思い出した！確か読心術を使ったり読者へメッセージを残したりする五十五話と四十六話（四十六話のほうでは会ってないが）に登場した人か！」

「やけに説明的ですね。確かにその通りですが読心術では有りませんよ。」

「ところで几骨は何か用？名酒でも飲みに来た？」

「いえ、社長が星を作ったと小耳に挟んだので下見に参りました。」

小耳に挟まれるような場所に話したのかよ魅異

「それでどうだと思っ？」

「環境面については問題は無いと思われます。それではそろそろ帰りますので。」

あっ、帰ったか。

「魅異、此处周辺の名前は？」



「此処の別荘周辺は『別荘邸』<sup>べっしやうてい</sup>って言うんだよ。」

どうでも良いような名前だがとりあえずメモしとくか。

「ところで名前って意味があって決めてるのか？」

「適當。だけど正式名称として扱ってるから覚えといて損は無いよ。」

適當かよ！メモして損したぞコラ。でもまあ、待ち合わせとかに使う時には重要かも。

「で、次の場所は何処だ？」

「残念ながらこれだけだよ。」

少なさ！施設がお前の別荘と出入り口だけかよ！？

「うーん、予想より結構案内場所が少ないですねえ。」

「確かにそうだよな。……………何でお前が居るんだああ！！！」

普通に椅子に座ってコーヒーを飲んでる雑魚ベーを蹴り落とす。

「フッフッフ、可愛い子の近くに私が居るように宿敵<sup>ライバル</sup>の近くにも私は居るのですよ。」

で、今回は俺の場所に居ると。

「さて、それでは決着をつけましょうかあ！」

「望むところだ！今回は絶対俺が勝つ！」

魅異はいつの間にか別荘の屋根の上で見物してるが 変に邪魔されるよりはマシだな。

「必殺・数日前に封印されし禁断の技ジャンピング縦回転キィイイック！！」

空中からタイヤのように飛んでくる技か！って、キックじゃないだろそれ！！

「あの程度銃で撃ち落せるが 此処は素手で行くブゴハアッ！」

台詞を喋りきる前に技を喰らった それで舌を噛んだ……………

「フフフフ、私が今まで本気でいたとお思いですか？」

「ああ当然！」

「ハッハッハ！甘いですねえ！甘すぎますよおお！！」

いやいやいやいや、絶対に本気で来てただろ。

「毎日のトレーニングと特訓と訓練で鍛えに鍛えた新必殺技を食らわせてあげましょう！新必殺・スーパ― ハイパー ウルトラ デラックス メガ グレート ワンダフル ベリーグッド パワーアップ スペシャル ナイス 天才 最強 敵無し カッコ良い 凄すぎ 超強力 これを見たものはとても驚く この技を喰らえばとても痛い お手軽でとっても便利 モテモテ間違いなし 弱い君も

特訓で覚えれば使わずには居られない 科学者でも解読不可能 これを使わず何を使う 技名も短くて使いやすさ抜群 のんびり・だんらり・ぐっちゃり と さっきの言葉は作者の名言 いまならお得 スーパー ハイパー ウルトラ デラックス メガ グレイト……」

「無限ループじゃねえかつ!!」

聞いている間に溜まったストレスを全力で蹴りにして返す。

「あぶべほあ!?!」

此処で言いたい事を思わせてもらうと『最初』から『ナイス』まではネーミングセンス悪いし『天才』から『超強力』まではオーバーすぎだし『これを見たものはとても驚く』から『これを使わず何を使う』まではどうでも良い事だし『技名も短くて使いやすさ抜群』は技名は長くて使いにくいし『のんびり・だんらり・ぐっちゃり』と『さっきの言葉は作者の名言』までは作者が何か仕組んで言うことになったように見えるし『今ならお得』は全然得する事はないし最終的には無限ループだしいい加減にしろこの変態ロリコン馬鹿ボケ偽貴族が!!!!

「ハア…、ハア い、言いたい事は全て思考内で言い切ったぞ……」

「それは貴方の思考内も大変でしょうねえ。私は急に用事を思い出したので帰らせていただきますよ。」

そう言っただけで俺が蹴った後ろ腰の部分を押さえて大急ぎで何処かに向かう雑魚べー。…用事って事は今回も引き分けになるのか?

「ご苦労様〜。」

おっ、魅異が屋根の上から降りてきた。

「私は今日はこの別荘に泊まってくよ〜。だからもう帰っていいよ〜。」

「そうか？じゃあ俺はもう帰るか。やる事無いしのんびりするぞ！」

そのあと家に着いた俺は日が当たらない中乾かない洗濯物を干していた。

…やる事有ったの忘れてた。

## 64話：迷惑行動もほどほどに（後書き）

@ 悟視点 @

「64話更新完了」。あと今までの合計アクセス数が二万を越えました！」

「こんな小説でも二万を超えるんだな。」

「こんな小説って言うなコラ！」

「第一、夏休みはもう終わってるはずだろ！何で学校編が始まらないんだ！？」

「あの学校は校長が好きなときに好きなようにしてるから夏休みの期間も校長の気分次第で時には冬まで続く事もあるぞ。」

「もう夏休みじゃないぞそれ…」

「まあな。それでは皆さん次回もお楽しみに！」

## 65話：資格を取ろう！

@悟視点@

「アミユリー、神様の中で上の方のランクや下の方のランクはどうやって決めてるんだ？」

何となく思いついた質問を瞳レツドのアミユリーに聞いてみる。俺の予想では能力値の高さか実績の順番かのどっちかだと思う。

「確か神様検定でもらえる資格で決まるはずですよー。」

「神様検定？」

神様の中でも検定とかあるのか。以外だな。

「神様検定は勉強能力と戦闘能力と思考能力の三つをテストして一級とかの資格がもらえるです。準一級以下は全員下級神様になります。」

厳しいなオイ！

「ってか準一級以下が下級なら一級が中級だろ。上級はどうやって決めるんだ？」

「特級を取れば上級になれるですよー。」

特級！？一級より上が有るのかよ！

「特級の資格なら私も持つてますよお！」

そういつてアミューリーに飛び掛って登場したのは雑魚ベー　お前が  
取れる資格なんてあるのか？

「お前が資格なんて持つてるのか？あとアミューリーを抱きながら転  
がりまわるな！」

「後者の頼みは断るとして私は少女鑑定の資格の特級や少女好きの  
資格の特級などですねえ。ちなみに少女鑑定の資格を持つていると  
外を歩いている中学生未満に見える子供の写真を勝手に取って良い  
ですし少女好きの資格を持つてると親しい相手であり尚且つ相手に  
迷惑が掛からないなら抱いたまま転がり回わって良いんですよ。  
特級は便利ですねえ。」

かなり嘘っぱいし一個目はプライバシーの侵害だと思っぞ！

「とにかく資格を持つてると必ずメリットが付くです。特に特級は  
メリットが大きいです。」

「なるほどな。検定の日とかは決まってるのか？」

「決まってるのもありますが決まってるない資格の方が多いです。雑  
魚ベー、そろそろ目が回ってきたです。」

「つかいつの間にか高速回転になってる！これは確かに目が回るな。」

「おっと、私とした事が　すみませんねえ。」

「雑魚ベーは一応相手に迷惑が掛からないようにしないとダメです」

「。そうじゃないと少女好きの資格を失ってガアーンな状態になるです。」

「おおっと、それは困りますねえ。では抱いてるだけにしましょうか。」

抱いてるだけで既に迷惑だったの。

「資格習得所は毎日二十四時間営業なので便利です。」

「そうなのか？それじゃあ今から行ってみるしかないな！！雑魚ベー、アミューリー、道案内をしてくれ！」

（資格習得所）

それで家から自転車で走ってきて到着したところは例の資格習得所！ちなみに何故か雑魚ベーとアミューリーも付いてきている。あつ、道案内を頼んだのは俺か。

「それにしてもかなりの大きさだな。」

「此処は資格関係の施設が全てそろってるのです。だから全部合わせたらかなりの大きさなんです。」

「なるほどな。」

アミューリーはこの施設について説明してくれる。それに対して雑魚ベーは



「ああ！とおくっても萌える美少女の子達が沢山！いやあ、やっぱり此処は安らぎの場ですねえ。」

ってな感じで少女鑑定特級の権利を利用して写真を取りまくってる。マジで資格の乱用を禁止したい気分だ……

「ってか何で小学生達があんなに居るんだ？しかも何人かコスプレしてる子も居るし。」

「此処の近くに小学校があるので皆で来てるらしいです。ちなみにコスプレの資格もあってそれを持ってるいくつかの衣装などが安値で売ってもらえるです。多分親に資格を取って安値にしたら衣装を買ってもらえるという約束をしている小学生達だと思うです。あと資格を取るための料金は基本は無料です。」

小学校がこの近くに？　って後ろにあった！親が居ないって事は子供たちだけで来てるんだな。子供がいつの間にか資格を取ってきて衣装を買えと言われる親の姿が目に見えるように浮かぶ。

「よし、それじゃあ行ってみるか。アミユリー、悪いが雑魚ベーは引きずってきてくれ。」

「ラジャーです！」

まず中に入ったらホールに出た。結構人が多いな。

「こっちですー。」

「案外ホールにも人が居るが此処では何をしてるんだ？」

「疲れた人達が休憩してるです。何回でも挑戦できるけど資格を取るための評価が厳しいのです。」

なるほど　一筋縄じゃあ無理だって事か。

そこから少し歩いたら広長い廊下に出てその廊下は何本かの分かれ道になっていた。看板とかも沢山ある。

「じゃあ私達は別の場所を見てくるです。」

「女の子おゝ」

おつ雑魚ベーが今頃復活した。とりあえずアミューリーに頑張れと言つて別行動をする。

「何から行くかな？おつ、射的の資格発見。」

射的命中資格つて書いてある。まずは趣味から行くのが普通だよな。

「いらっしやいませ。今日は何級を受けに？」

「もちろん特級だあ！」

「分かりました。そのドアを出た所に射的場がありますのでそこらへどうぞ。」

おつ結構流行ってるのか射的場には挑戦者が数十人居るな。でも特級の挑戦者は数人か。

ちなみにさっきの受付に銃を貸してもらった。これは赤外線銃でこれで撃つて的に当てれば成功のデータがこの銃に送られて特級の資格をもらえるらしい。

「特級用の的は って小さっ!？」

看板に五百メートル先にあるビー玉と書いてある。狙う以前に普通は見えないだろ。

いや!それよりもビー玉からこの銃に成功データが送られてくるのか!?

「まっ、こんな事もあるうかと双眼鏡を持ってきて良かった。」

本当は雑魚ビーの監視用に持ってきたんだが別行動だから意味なかったな。

とりあえず双眼鏡を覗いてみる。微妙にビー玉みたいなのが有る様な無い様な

「大体の場所は分かったし、試しに撃ってみるか。」

当然半分くらいは勘で撃つんだが一応距離とかも計算したから大丈夫か?

とにかく双眼鏡で確認しながら銃で狙って撃つ!

結果は合格！よっしゃあ成功だぜ！

「後はこれを受付に渡せばいいんだな。」

「確かに成功のようですね。では第二審査に移ります。」

「第二審査！？」

そんなの聞いてないって！

「第二審査は射的命中資格の管理代表から話し合いで貰って下さいね。制限時間は三分です。失敗したらまた的当てからやり直しますのでご注意ください。」

制限時間短いし話し合いでかよ！？んな無茶な

それで結局銃の資格は取れなかったし他の資格も特級で挑戦したが全て話し合いで失格になった。いやマジで無理だああああ！！！！しかも戻り道が分からないし！！

「あつ お前、何で地面で転がり回っているんだ？」

「おお雨双か！ってか何で此処に居る？」

「それは私の台詞だ。何で資格を取る所で転がり回っている？」

資格が取れなかったからに決まってるだろおお！！

「ってか雑魚ベーとアミユリーには会わなかったのか？」

「別に会わなかったけど。」

会ってないのか　チクショー、これじゃあ帰り道が分からん。

「私はもう帰るけどお前はどっする？もし着いて来るなら私が近道を知ってるからそっちを案内してやる。」

「それじゃあ着いて行くぞ。」

ナイスタイミングだ！これで帰れるぜ！

そのあと家で雨双が先に帰ってた雑魚ベ一に抱きつかれて三十分くらい転がり回っていた。

資格の乱用の取締りとかした方が良い気がする。

## 65話：資格を取ろう！（後書き）

@悟視点@

「65話更新完了！結局悟は資格を取れなかったな。」

「難関度が高いんだって！」

「まあそれはしょうがないって。あっナレ君、雨双の紹介を頼む。ついでに忘れてた雑魚ベーの説明も。」

【了解しました。

雨双

本名は神離 雨双で羽双の妹である。

女子小学生で黄土色の髪で黒色の瞳で口調が微妙に悪い。

ちなみに雑魚ベーのターゲットの内の一人。

特殊能力は氷を操る事が出来る。

冷静な性格に見えるが本当はよく喋る。

雑魚ベー

本名はベータ・サイドショットらしいが悟くらいしか知らないからもう雑魚ベータと呼ぶしかない。

見かけは大学生くらいで微妙に長髪そして群青色。貴族らしいが実際は唯の馬鹿である。瞳の色は普通に黒。

悟を第一のライバル、羽双を第二のライバルとしている。だが基本的には悟に勝負を挑む事が多い。

ちなみに実は結構強いが毎回勝負時に体調不良になって決着がつかないでいる。保育園児に負けたのも筋肉痛で逃げたかららしい。

ロリコンで小学生が大好きらしくアミユリーと雨双は雑魚ベータのタートルゲットになつてゐる。

特殊能力は」

「「「「「必殺・ジャンピング ミラー キックウウウッ!!」」」」」

「「「」

【ぎゃあああああ!!】

「雑魚ベータ! って何で六人も居るんだ!？」

「そりゃあ鏡のように六人に分身して攻撃する技ですからねえ。」

「まあ何で此処に居るかは知らないが紹介も終わったしまあ良いか。それでは皆さん次回もお楽しみに!」

「「「「「お楽しみに!」」」」」 　　「ってまた増えてるぞ!!」」



## 6 話：極大イベントな体育祭！（前編）

@ 悟視点 @

「さて皆、今日は待ちに待った体育祭の日だよ。」

体育祭？もうそんな時期になったのか。あと俺しか居ないのに皆って言うて呼ぶのは変だと思うぞ。他の皆は朝早くから何処かに行きたし。

「でもプリントには参加者自由って書いてあったぞ。別に無理して参加する必要はないだろ？」

「フッフッフン 悟は優勝商品を知らないみたいだね。」

確かに優勝商品は企業秘密だと書いてあったから俺は知らないな。

「だが何が商品になろうと俺は参加しないぞ！百パーセント良い事は起こらないからな！」

「主催者は作者だよ？」

「それなら尚更だ！アキステが開催するもので今まで平凡に終わった事があるか？いや無い。絶対に良い事が起こらないに決まってる！」

「普通に終わったらつまらないからだよ。」

それは確かにつまらないな。やっぱり途中で問題が起こった方が面

白いに決まってるだろ。」

「それに作者が拒否権与えるわけが無いしね。優勝商品が主人公の役と好きな物を一個つてのが証拠だよ。」

やっぱりそうきたか作者め！ あれ？よく考えてみれば体育祭ってチームでやる事じゃないのか？

「魅異、体育祭の内容は何だ？」

「特星全体から参加したい人を集めて一対一で戦わせるらしいよ。ついでにバトルフィールドは作者がさまざまな別次元の場所に送るから一度に同時バトルをして時間短縮もするらしいね。」

「特星全体から！？普通にレジエントofバトルより凄い戦いだろそれ！」

「でも参加したい人だけだよ。まあ商品の事は噂で皆知っていると思っけどね。」

ほとんどの人が参加すると思う

「とりあえずまだ受付をしてるし行ってみよ。」

「お、おー。」

それで受付を終わらせた俺達は謎の入り口（異空間へのゲート？）

から異常に大きなコロシウムに到着した。

「ってか俺達の学校って何か特別な事が多い気がするな。マジで何でだ？」

「ある意味特星の中心だからだよ。不老不死ベールは学校から特星中を囲んでるからね。」

そういえばそうだな。前に簡単に盗まれた事もあったし…

「おつ、あの俺達の待機室はあの部屋か？」

「そうだよ。」

校長が俺の家に住むチームに特別室を用意してくれてそれがコロシウムの入り口近くにあるこの部屋だ。ついでに俺達とその相手のみはコロシウムの使用を許可してくれたぞ。

「皆、到着したよ。」

と言って魅異がドアを開けるが中には誰も居ない。

「あれ？部屋を間違えたかな？」

「ズガアアアン！」

「もうバトル中か！？」

「それなら応援に行かないとね。」

「おっ、やってるね。」

コロシアムの真ん中で誰かが戦っていてそこから離れた場所の椅子に皆座ってバトルを見ていた。気付かれないように俺達も椅子に座る。

「羽双、あの戦ってる二人のどっちが勝つと思う？」

「多分、剣を使っている方だと思いますよ。」

急に話し掛けられたのに冷静な羽双。剣を使っている方か。

…あれ？あの髪の色はもしかして。

「魅異、剣を使ってる方ってウィルか？」

「そうだよ。」

帰ってきてたのか！？相手は何処かの軍隊の兵士みたいな奴だ。

「エナジー・ブレイクッ！」

「ズババアアン！」

おおっ、ウィルの攻撃で敵は壁まで吹き飛んだぞ。

ウィルの勝ちが決まると同時に皆が喋りだす。

「あつ悟さん。」

「よつ。結構長い旅行だったみたいだな。」

「ハイ。この体育祭が無かったらもう少し時間が掛かってましたけどね。あと結構家に居る人って増えたんですねー。」

確かに夏休み中に結構な人数に増えたよな。あつ、今も夏休み中か。

「そういえば次の試合は悟さんの番ですよ。」

「ええっ！？マジで！」

さっき来たばかりなのにもう出番かよ！

「それじゃあ行って来る！」

「気をつけてくださいね。」

よっしゃ行くぞお！

さてと、とりあえず真ん中まで来たんだが相手は何処だ？

「お前の相手は俺だ！」

「ハア」

思わずため息が出る。俺の初戦の相手は最初だけ登場回数が多かった使い捨てキャラである魔王クレー。

「使い捨てキャラが何してるんだ？」

「誰が使い捨てキャラだ！確かに久々の登場だが。」

お前の特徴の無さと技名の考えにくさは俺でも真似できないけどな。

「まあ良いか。らいこんすいあつあつしゅくぱう雷混水圧圧縮砲！」

この技は水圧圧縮砲に電気を混ぜて相手に撃つ技だ。水圧圧縮砲の威力と電気の威力を合わせた威力を誇る。

「奥義・ジュエルウォール！」

宝石の壁！？ってか魔法かよそれ！

「この壁は宝石で出来てるからその程度の攻撃じゃあ壊せないぞ！」

そういつて全方向に宝石の壁を出すクレー。

こういう行動をすると大した勝負にならずに終わるのはこの小説のパターンだぞ？

「そらっ！」

そういつて俺は上からあるものを上から投げ込む。

「カンッ！」

「痛いっ！！上からかよ！」

上にも宝石の壁を出すクレー。この勝負、俺の勝ちだな。

数分後宝石の壁が消えて中から顔色の悪そうなクレーが出てきて倒れた。

「俺の勝ちだ。」

クレーを倒した方法？中に空気吸い取り機の小型版を投げ込んだんだ。

それで上を宝石の壁で防いで酸欠になってクレーは自滅したって訳。

「次の試合は私と誰だろうね？」

次は魅異みたいだな。相手は誰が来ても勝てないと思うけどな。

## 66話：極大イベントな体育祭！（前編）（後書き）

@ 悟視点 @

「66話更新完了。」

「もはや体育祭じゃないぞ今回のイベント。」

「まあな。ところでお前のイラストを描いたぞ。」

「えっ！マジで！？」

「ただし結構下手な絵だし俺の考えてる悟とはずいぶん違う絵になったからな。」

「おいおいおい」

「それでも見たいと言う方は小説家になろう〜秘密基地〜の新・イラストコーナーを探してみたら有ると思います。が正直自信が無いので見るのは自己責任で！でもフルカラーです。」

「時々追加するときは今回みたいに後書きで報告すると思います。」

「それでは皆さん次回もお楽しみに！」



## 67話：極大イベントな体育祭！（中編）

@魅異視点@

「さてさて相手は誰かな？強い方が面白いけどね」

「その相手は俺だ！」

おおつ、RT・DX+だ。今日は脇役しか来てないんだね。

「今回は一応全力勝負だ！結界も張ったし。」

「ええ、じゃあ今の状態の疲れない全力で良いや。」

「上等！」

さて、どんな作戦で行こうかな？私的には適当に本気で良いんだけどね。まあ一般で言う手抜きだけどね。

「勇者連拳ゆうしやれんけん」。

勇者連拳は勇者拳を両手を使って連続で放つ技だよ。威力は勇者拳の八か九割位かな？

「回転乱舞！」

あの技は確か回転して避ける技だった筈。でも隙無く行くよ。

「勇者凍剤納木ゆうしやとうざいなんぼくだよ」

これは私の作った木を相手に投げる技だけど特別製の木だから相手を凍らせることがあるんだよ。本当は名前重視技だけどね。

「グラフィックシールド！」

今度は遠距離防止技で防がれる。流石だね。

「よしっ！幻羽射だっ！」

そういつて飛ばしてきたのは羽の矢みたいなもの。この程度の技じや甘いよ。

「勇者遊壊だよ」

私がRT・DX+の方に指を向ける。そして羽の矢が前触れもなく破壊されていく。

でもRT・DX+は横に飛んで避けたけどね。

「此処からが本番だ！奥義・呪天撃！！」

何処からもなく剣を取り出して禍々しい雰囲気の高力な斬撃を繰り出してきたね。

「それなら勇者薄紙だよ」

これはそこら辺で売ってるコピー用紙に水性マジックで『私の馬鹿の強さは最高級の食べ物より感動的』って書いた防具品だよ。この紙ならあの攻撃でも簡単に防げるはずだよ。

「ビリッ！」

「あ、防ぐ前に破れ」

「ズガアアアン！！！」

ああ、予想通りの展開になっちゃった　とりあえず無念かな？

@ 悟視点 @

いや　確かにRT・DX+の技は凄いけどさあ。

「絶対にアホだろアイツ。」

「まあ確かにそうですね　魅異さんが負けるなんて予想外です！」

ウィルは驚いてる様子まあ俺も驚いたんだけどさ。

「魅異　あいつとバトルになったら敵討ちをしてやるからなっ！」

「私も魅異さんの敵討ちをしますっ！だから無事でいて下さい」

「ハア、馬鹿達が」

って羽双！良い場面なのに邪魔するな！

「何だ何だ！お前も一番弟子なら敵討ち位はやる義務があるぞ！！！」

「そうです！死んだ魅異さんに呪い殺されますよ！この際ですし三人で不意打ちしてでもあの憎き敵を仕留めましょう！！」

「それ以前に」

「それ以前もそれ以降もあるかあ！確かに馬鹿でボケで間抜けでアホで異常で人外で迷惑掛けてばかりで両利きで人の不幸を楽しむ奴で単純で変態的で悪趣味でダメの見本で不純物を寄せ集めただけの戦闘位しか使い道のない虐め役でも良い所は一パーセント位は多分あるはずなんだああ！！」

「そうです！！いくら悪いところしか思いつかない魅異さんとはいえ特星全体で魅異さんの事を詳しく調べれば一つ位はきつと見つかるはずですよ！！」

「分かりましたから離れてください　暑苦しいので。あと両利きは良い事に分類されると思いますよ。」

「とりあえず敵討ちの為にいろいろ考えるぞ！多分今回の魅異の敗因は馬鹿だからだ！だから馬鹿な魅異が思いつかない戦法で行くぞ！！」

「はい！！頑張つて馬鹿な魅異さんの代わりにアイツを倒しましょう！！」

「とりあえずその為には敵の様子をしてみるぞ！！」

「マジで勝てた！？いやあ何か呆気ないな！」

RT・DX+は何か喜んでるし！

「でも正直今回は魅異なんか楽勝で倒すつもりで来たから当然か！ハッハッハ！」

「じゃあ楽勝で倒してみたら？一回で良いから。」

え

「「ええええええ！？」」」

俺とウィルとRT・DX+が驚きの声を上げる。何で生きてるんだ！？

「別に死んだフリしてただけだよ。ちなみに今は第二形態なんだよ。」

第二形態なんか有るのかよ！？その割には第一形態の時と変わってないし！

「第何形態まで有るかは多すぎて調べてないけど一形態上がれば全能力がかなり上がるよ。ついでにこっさり変わってるときもあるからね。」

「いやいやいやいや！！今の能力でも危険なのにさらに上がったら反則だろ！！」

「まあまあ、その程度の事はお気にせず　世界の常識を超える女なんだからこの位は常識範囲だよ？この強さを字で表すところだよ！」

そういつて取り出したものはさつき防御に使って破れた紙。最初と最後に破れて『馬鹿の強さは最高』の文字になってる。絶対その紙ってワザと破っただろ！

@魅異視点@

おつ、私視点にやつと変更したね。

それじゃあ勇者流の最強技を使っていくから読者の皆さん注目してよ。

その前に特別講座を始めるから五万円　と言いたいところだけど今回も無料ね。

最強クラスの技と言えば威力が最強クラスならそれだと思う人も居る気がするけど外れだよ。本当に最強と言えるなら『威力が高い』・『速さが早い』・『命中率が高い』の最低三種類位はあったほうが良いと思うよ？

私の勇者流の最強の技はそれに加えて『名前が短い』・『攻撃範囲を指定できる』・『威力調節の範囲が広い』・『遠距離版と近距離版がある』・『連続して使える』・『反動が少ない』が付け加えられるよ　特に最後の反動は重要で使った後になんか疲れる技とかあるけど一回使って相手が無事ならその後が大変で下手したら死亡

者も出るかもしれないからね。

えっ？一部矛盾してる部分がある気がする？気のせいだと思うよ。

それじゃあ皆もリスクの少ない技を使っていこうね。特別講座終わり！

「おーい！さっきから俺をずっと無視するな！忘れられたみたいじゃないか！」

「あつ忘れてたよ。ゴメンね。」

「お前なあ！マジで覚悟しろ！奥義・Rレーザー！！」

ではでは、勇者流最強技いくよ。

「異技・勇者<sup>ゆうしや</sup>レッガーだよー！」

とりあえず威力と範囲は小さくしたから何処かにボロボロになって何処かに吹き飛ぶ程度で何とかなったかな？

「とりあえず勝利だよ。」

「勇者流の最強技は初めてみたな それより異技ってなんだよ？」

「いや、神技か異技か魅技か離技の内から選んだからねえ。」

全部私の名前から考えたんだけどね。

「次は雑魚ベーの番だよ。」

「そうですか？それでは行ってきますのでアミューリーさんと雨双さんは少々待っていてくださいねえ」

「待ってるですー。」

「私は嫌だ。」

私達以外のバトルはもう終わったみたいだね。だから相手は一般人で勝ち残った人って事になるよ。

@雑魚ベー視点@

フッフッフッフ、初めての私視点ですかねえ？

私の対戦相手ってのはどんな人なのか楽しみですな。まあどんな相手でも倒して私が主人公になって可愛い女の子に囲まれて ムッフッフ 良い事ばかりじゃありませんかあ！このタイミングで優勝せずに何時優勝するのですかあ！？

「あゝ、対戦者の人ですか？」

「あつ、そうですよ おお！」

可愛い！見かけがストライクゾーンですよお！！



「それではいかせてもらいます三角蹴り!!」  
さんかくけ

おやあ、蹴り勝負で私に挑むとは困った方ですねえ。では私の華麗なる蹴りを見てもらって勝負後に抱きついてきてもらいましょう

「必殺！可愛い子へのジャンピング回転スローキック!!」

このキックはなんと回転速度と落下速度が半分になっているので私のキックの良さが見放題の超お得なキックですよっ！

「跳串蹴り!!」  
ちよかんけ

「ぐっはあっ！」

見るどころか顔面に跳び蹴りのつま先バージョンを食らっちゃいましたねえ

「こう見えても格闘歴は十三年ですので甘く見ないで下さいね。」

「大丈夫です！貴方のけりなら何発でも受けられ あれ？」

おかしいですねえ。何かが矛盾してるような気がしますよ。

ああっ！分かりましたよあっ!!

「じゃあ遠慮なく行きますよ！連砕拳!!」  
れんさいけん

「残念ですねえ。数年早く戦っていれば絶対に貴方の勝ちだったでしょうねえ。でも ストライクゾーンから外れている事が判明した

今なら私の勝ちです。必殺・ジャンピングストームキイイックウツ！」

この技は嵐を起こすキックで基本的には飛んでくるものでダメージを与える技です。

敵にダメージを与えられて時々良い物が手に入る　まさに一石二鳥ですねえ！

「何ですかこの技は！？つてかトラックとか降って」

あつ、相手の方は潰されました。他にも空き缶とか液体窒素の入ったタンクとかも降ってますねえ。ではフィナーレといきましょうっ！！

「全て爆破ボタンですよおっ！」

「ピッ、ドゴオオオオオン！！」

@悟視点@

見事に自分も吹き飛んでたな雑魚べー。

その後、俺と魅異と羽双と雑魚べーの三人が凄まじい勢いで準決勝

まで突き進んでいった。

つてか次の俺の相手は雑魚ベーだから良いとして決勝戦が勝ち目無いだろ！

でも撒けたら主人公を止めないといけないのか　こうなりや駄目元でいってやる！！

ただし次回にだ！！

## 67話：極大イベントな体育祭！（中編）（後書き）

「更新遅れてすみません！理由と言う名の言い訳は次回の後書きでします！それでは皆さん次回もお楽しみにっ！！」

## 68話：極大イベントな体育祭！（後編）

@悟視点@

さて、次の対戦者は雑魚ベーク。アイツって毎回ジャンピングキック系の技しか使わないが得意武器とか無いのか？

「フッフッフッフ　宿敵ライバルの貴方とは決勝で戦いたかったんですが準決勝で戦う事になるとは予想外ですねえ。」

「魅異か羽双のどっちと戦う事になっても勝ち目が無いと思うが」  
「それにしても今が準決勝とは早いですねえ。」

俺が前回に途中の試合を省略したからな。

「さて覚悟してくださいよおっ！必殺・ジャンピング　フリー　キック　パート五ですよっ！！」

アイツに銃系の攻撃は正直当てにくいがハンマー系の武器じゃあ攻撃と防御の速度が遅れる。素手だと攻撃スピードは良いが防御面が弱くなるしな！。

「ハッハッハ！あまりの大技に動けませんか！」

もう少し連続攻撃が出来てリーチの有る武器がいいな。

「ハッハッハ　ぐほあっ！」

よし、あれにするか。

「よっしゃ覚悟 って何やってるんだ？」

何故か雑魚ベーが床に挟まってるし。

「フツ、その場を動かずに私の攻撃を回避するなんて流石は私の宿敵ライバルだけの事がありますねえ！」

「いやいやいやいや！見てなかったけど絶対お前の自滅だろそれ！」

「実力を隠そうとしても無駄ですよおっ！私には全てお見通しですからねえ。」

全然見通してなあああいつ！！

「まっ、今回は私も武器有りでいかせてもらいますけどねえ。」

あれ？お前って武器使えるのか。

「右手に持つのはきんとう琴刀で左手に持つのはせいとう逝刀と言いましてねえ、特星で作られた刀なんですよ。」

「どうでも良いが形状を見る限りは中国刀に近くないか？」

先端近くが幅広いし長さもちょうど同じくらいに見える。言っとくがこれでも昔だが魅異に武器についていろいろ強制的に教わったから多少の見分け位はできるぞ。

あと貴族は細い剣を使うイメージがあるんだが雑魚ベーは見事に俺のイメージを無視した貴族だ。ってか本当に貴族かどうかも怪しいもありませんしねえ。」

「確かにこの二つの武器は中国刀をメインに作られてますよ。両方とも魅異さんに特注で作ってもらったので私だけが使える超必殺技もありますしねえ。」

魅異め余計な事を！まあ俺も武器二つでいくから良いか。

「じゃあ俺も武器二つでいくぜっ！」

「それは銃剣と ハエ叩きですか？」

「俺は銃剣を左で扱えないからしょうがないだろ！」

ってか両手に剣を持って扱える方が珍しいぞ！

「とりあえずいきますかねえ。必殺・夕暮れの歌祭りですよっ！」

それって技名！？って何かビームみたいなのが沢山きた！

「ええっと、叩き落としっ！」

俺はそのビームをハエ叩きでかき消していく。このハエ叩きやつぱり凄ええええ！！

「必殺・超強風雨危険注意報です！」

だから何だよその名前！今度は前から衝撃波 と上からビームの雨嵐だな。

「まずは魔法弾作成！そしてそおおおりやあつ！」

作った魔法弾を空中に向かってハ工叩きで空中に打つ。さっき作った魔法弾はミニブラックホールが詰まってるからこれで空中のビームは何とかなる。

「あとは衝撃波だが 横に走って回避！」

そこまで速い技じゃなかったしこれで十分。

「虫叩きっ！」

ハ工叩きで雑魚ベーの顔面を全力で叩く。

「ぐふああっ！ きよ、今日は調子が悪いので私の負けにしておきましょう。それじゃあ私はちょっと顔を洗ってきますねえ。」

つて逃げたあああ！！！！ 俺の勝ちって事で良いよな。

@羽双視点@

とりあえず次は僕の番か 面倒ですし適当でいいか。

「いやゝ、ついに羽双と戦う事になっちゃったねゝ。」

「早く終わらせたいのでいきますよ。それ。」



爪楊枝を投げるけど避けられる。まあ予想通りですが。

「今回は私の持つてる中で最強の武器でいくよ。」

別に最強でも構いませんけど。

「全ての所で異常で馬鹿な私しか扱えない槍がこの神離槍だよ！」

竹槍ですか。

「ああ、ハイハイ分かりましたよ。僕の降参で良いですよまったく。」

武器を持った魅異さんの相手は非常に面倒ですし降参の方が楽ですので。

@悟視点@

納得いかねえええええ！いや、だって俺の予想シナリオでは両方が全力でバトルしてそれで次の試合は面倒だからパスって事になる予定だったんだぞ！読者の皆だって納得いかないよな！

ってか魅異の事だから俺との試合で竹槍を使ってくるはず！

「良い作戦があるんだがどうだ？」

おおボケ役！魅異に通じるような作戦があるのか！？それなら教え

てくれ！

「俺とお前で力を合わせる！！」

ポケ役、遂にキャラ設定が壊れたか？

「違うーう！合体だよ合体！ポケとツツコミが合体した真の悟を見せてやれ！」

ポケ役と合体か うわっ嫌だな！性格とかにポケが混じるのは！つてかそれで魅異に勝てるのか？

「魅異は常に本気を出さない奴だから第一形態位なら倒せると思う。」

ついでにもう一つ聞くが合体すると何が変わるんだ？

「性格と得意武器と特殊能力と その他いろいろだ。」

ますます嫌になってきたがしょうがないな。

「よしじゃあ試合開始とともに合体するから。」

分かった。

「さて、遂に魅異が相手か。」

「今回は大袈裟な手加減かしらないよ。」

もう竹槍持つてるし　ってか今まではどんだけ手加減してたんだ？  
それにしても合体後に無事に戻れるのか？

「じゃあいくよ。ミネラルレーザーだよ。」

「今だ合体。」

「合体は成功だな　って回避！」

「あれ？」

おお、ミネラルレーザーを避けられて驚いてるようだ。

「さてさてどうしたのかな？まさかの攻撃ミスをするとはお前らしいくないな！」

「悟が避けたただけだよ。」

「そのとおり！」

先に俺の特長とか言っておこう！俺は基本的に戦闘はしないで言葉で相手を倒す派だ！まあいざと言うときは戦闘もするが。

そしてその特徴はまず時々喋る前に同じ言葉を連続して言う事！例をあげると

「ささささ砂糖投げだぜハッハッハッ！」

「おっと。」

避けられたがこんな感じだ！最後の笑いは何かって？愉快さを出すための秘訣だぜ！

ちなみに俺は回避力と体力は結構多いほうだ。

次の特徴は武器だが得意武器は日用品やそこら辺にあるものだ！

特殊能力は何かいろいろ使える！普通はこの世界じゃあ一つしか使えないはずなんだがポケ役の時に魅異のところで特訓しているいろいろ使えるようになった　気がする。

他にもいきなり意味不明なこと言ったり効果音を時々口で言ったりとかあるぞ！他にも有るけど偶にしか使わない特徴も有る！

「よっよっよっしゃあ！言い切った！」

「何を？」

「シャッキン！シャッキン！シャシャキッキイイン！それこそ俺の紹介！つか魅異もそのノートパソコンで読んでるだろ？お見通しなんだぜ！」

「おお。」

大して驚かないのは良い事だ！度胸も強さもフルマックス！！

「み・み・み・み・魅異、今回の俺は普段と……どっか違ってるぜ！」

「見て分かるよ。」

「普通の反応ってありえねえ！普通はありえねえ！こっこっこっこっコノヤロー！！」

「どの野郎なの？」

「お前だお前！普通に分かるのは常識内！分からんお前は常識外！」

「まあね」

「ぜ、ぜ、全然褒めてねえええ！！」

二人での会話だと楽だ！と、作者は執筆中に思ってるだろ！お見通しだぜ！

バトルはどうした！？と、読者の皆さんの中の一部は思ってるだろ！一部あっそういえばと、ついさっき誰か思っただろ！あくまで予想だけだな！

俺は戦闘をせずに相手を倒す方法が得意な 簡単に言うと平和主義者だ！作者みたいな偽善者とは全然違うぜ！

「まあそれは置いて、さっさと決着つけようか？」

「甘い！甘すぎるぞ魅」

「神離流技 風飛レベル一だよ。」

「のああああ！？」

目が回ったあと天井に頭をぶつけてそのまま落下して非常に大ダメージだ！

「ミネラルレーザーだよ。」

のあつ！ 転がつて直撃は避けたが 掠った！ いやマジで痛いな！！

「そこまでですよ！」

雑魚ベーが止めに入った。

「あれ？試合中の妨害は禁止だったと思うよ？」

「宿敵を最初に倒すのはこの私です。そこら辺で降参してはいかがでしょうか？」

「でも私にメリツトが無いしね。」

「それでは……が……に出てくるので……して良いと言つのはどうでしょう？ 私が全責任を取りますので。」

「良い考えだね。それじゃあ私は降参つて事で。」

結局第一段階も倒せなかったがまあ良いか！

「貴方は私に倒されるべきですよっ！まだ決着もついてませんし、決着をつける日まで誰にも倒されないようにしておいて下さいねえ。いつか私が本気でいく日が来るでしょうから！アゝッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！」

決着はもつついてるに決まってるだろ！いつ掛かって来ようが結果は分かりきってるけどな！

「おお悟くん、貴方が優勝者ですね。」

おっ、校長だ。

「校長の言つとおり俺が優勝だ！俺が一番だ！ささささ最高だ！！」

「では優勝商品で欲しいものは何ですか？」

「欲しいもの？俺は優勝という勝利さえあればそれ以上に欲しいものは 出番だ！！」

「では、作者さんに贈呈してもらってください。私は疲れたので寝るために帰ります。それでは。」

さらば校長！いつかまた会おうじゃないか！夏休みを延長し続ける事を誇りに思うんだぞ！

「ああ、やっぱり悟が優勝か チツ。」

やっぱり俺の優勝が気に入らないのか作者！

「俺が欲しいものは出番だ！出番をよこせ！！」

「ほぼ毎回登場してるだろ！これ以上増やす事は出来ないから！」

「そそそそそれじゃあ百万セルで！」

「ほら持つてけ！」

現金で持つてたし！

「よし！それじゃあ帰るか！」

「ちょおおおつと待ったあ！」

作者が全力で引き止める。参加賞でもくれるのか！？

「今回の体育祭を特星全体から人が来る仕組みにしただろ？それには正式な理由があったんだ。ちなみに今言ってることは体育祭参加者全員に聞こえるようになってるぞー。」

正式な理由？全員から参加料を取るためか！？

「実は此処の町の名前が決まっちゃったんだぜ！」

決まっちゃったんだぜ！って事は 今まで決まっていなかったのかよ！？

「案外重要な事だけどこの小説の連載開始の頃からずっと忘れてたからそろそろ決めといった方が良いかなと思って覚えやすそうなのを考えたんだぞ！」

つてか裏話を特星の人々にするなよ！





## 68話：極大イベントな体育祭！（後編）（後書き）

@悟視点@

「68話更新。それでは前回の更新の遅れた理由を言います！簡単に言うと体育祭とテスト勉強と期末テストのせいで遅れました！」

「謝罪はとりあえず置いといて 合体後の俺がボケ役ともツツコミ役とも性格が違いすぎるぞ！！」

「おお、ツツコミ役の悟か。まあちよつと位いいだろ？」

「よかねえ！次回で元に戻せ！」

「次回の話の設定はもう決まってるから無理。」

「何でこんな時に限って決まってるんだ！？」

「次回は馬鹿な奴がメインだ！それでは皆さん次回もお楽しみにっ！」

## 69話：馬鹿は悪い事ではありません！

@悟視点@

体育祭での疲れがようやく取れてきた！さて、そろそろ元に戻るか！

「おし！元に戻れたぜ！」

「なんだ元に戻れたじゃないか　ってボケ役がメイン！？」

おっ本当だ。今回はお前に出番は無いつ！

「何いいいつ！！」

って訳で今から発言するなよ。

「そんなああ」

「おっ魅異じゃないか！」

「おお、丁度良いところに来たね。」

「丁度良いつて事は何かやってるのか？」

「実は新しくフル教を作ってメンバー集めをしてるんだよ」

「フル教？」

「フル教は馬鹿達を集めて馬鹿の重要性について語り合う宗教ってところかな。日本語で馬鹿教だよ。」

おおっ！流石は魅異だ！馬鹿は確かに重要だと思ってたところだし俺も入るか！

「でもフルの意味は馬鹿じゃなくて『ばか者』か『愚か者』って意味だぞ。」

フッフツ、甘い！甘すぎるぞツツコミ役！意味は違っても本人の言いたい事が分ければそれでいいんだ！それに本物の馬鹿ならその程度の事は気にしない！なぜなら馬鹿だから気にする必要も無いっ！！

「いやいやいや、単なる馬鹿だろそれは。」

だあかあ！馬鹿で良いんだよ！馬鹿だから許されるって事だ！そして一切の異議は認められない！

「んな無茶苦茶な」

「とりあえず魅異！俺はフル教に入るぜ！」

「オツケーだよ。これで三人目」

「俺以外に誰が入ってるんだ？」

「私とアミューだよ。」

「それならもう二人呼べるな。まずは 雑魚ベー！！」

「とおう！」

なんかの掛け声とともに空中から回転しながら登場した（降ってきた）のはさつき俺が呼んだ雑魚ベー。

「宿敵と可愛<sup>ライバル</sup>い子の居るところに現れるこの私！その名も雑魚ベー！此処に参上ですよおおっ！！」

「既に雑魚ベーの名前を認めてるなアイツ」

フル教に入るには相応しい名前だから問題は無いだろ。

「雑魚ベー、フル教に入らないか？」

「フル教？馬鹿教って意味ですねえ。フッフッフ、私が入るのに相応しそうな名前ですねえ。」

「雑魚ベーも意味間違ってるし！」

馬鹿はそんなことは気にしなくて良い！

「馬鹿って俺が！？」

俺が入った時点でお前も強制的に参加する事になるからな。

「それじゃあメンバー表に書き加えておくね。」

「ついでに雨双さんも誘ってみるので付け加えといて下さいねえ。」

「分かったよ。」

雑魚ベーは雨双を誘いにいったし俺も誰か誘ってくるか。

「その前に雨双って馬鹿に分類されるのか？」

さあ？

その後に俺は烈を誘って魅異から前に作った星に来るように言われてとりあえずやってきた。

いやー、流石に凄いと思うぞうん。星一つ作るなんて普通は無理だからな。

「確か西が魅異の別荘で東に新しくなんか作ったとか言ってたな。」

「でも西に行っても東に行っても別荘だったぞ。俺が前に来た時は。」

ああそれは多分まだ別荘と此処しなくて星を一周したんだろ。新しく東に何かを建てたから別荘を更に西に行けばその何かに行けるって訳だ。もちろん此処から東に行った方が速かったりするんだけどなー。

「さて到着だ！」

到着したところは家でも神殿でも建物でもなく敷物が敷いてある場所だ。だが敷物の端はしっかり地面に固定されてるから飛んでくとは無いな。

敷物の広さは大きめの部屋一つ分くらいで俺以外皆揃ってた。

「やっと来たね。それじゃあ今からいろいろと意見を出し合うよ。まずは私からね。」

とりあえず俺も座って聞く。地面が芝生だから座り心地は悪くないな。

「まずは馬鹿の存在についてだけど馬鹿は人には必ず必要だと思うんだよね。」

うんうんと一部頷く。

「特に天才やエリートとかでも根が馬鹿な人は必ず世界的な発明をするはずなんだよ。何故なら馬鹿と言うのは悪い事に聞こえるけど普通の人よりアイデアとかは多いからなんだよね。馬鹿じゃない人は失敗するとか決め付ける事も有るけど馬鹿なら失敗の計算とかが分からないから決め付ける事も無くそれが成功に繋がる事だ。って必ず有るはずだからね。」

良い演説だ！確かに現在の自分達の知ってる事が正しいと思い込んでるやつもいるけど数十年後になったらその意見が普通じゃなくなってる可能性も有るからな。

「結論的に私が言いたい事は『馬鹿は世界遺産よりも価値がある』って事だよ。」

「さっきまでの演説が世界遺産とどう関係あるんだああ!？」

馬鹿はそんなの気にする必要は無い!

「そうかあ？」

「私の意見はこんなところかな。次の意見を言う人居る？」

「それじゃあ俺の番だ!!」

「じゃあ次は烈ね。」

ああ! 魅異の次は俺が意見を言おうと思ったのに出遅れた!

「俺は馬鹿の思考は生活する上で非常に大切だと思う!! 理由はただ一つでエンジョイ心があるからだ!! 最近は生活が辛い者とかもいるかと思う単純でハイテンションな馬鹿とかは辛いなんかすぐ忘れて次々とやりたい事をやりまくる筈だ!! 何故かと言えばそれは馬鹿だからだ!!」

「単純でハイテンションって烈の事だよな。烈程うるさくは無いがボケ役もだろ？」

当然! 俺は馬鹿だぜ!

「だから世の中の全員は馬鹿になるべきだ!! したら社会が楽に成り立っていく筈だ!!」

烈も良い事を言うじゃないか! 流石は俺が誘っただけの事はある!



「世の中の人全員が烈みたいになったら社会が成り立ってるのが崩壊すると思うが。」

だからそういう風に決め付けるのが駄目なんだ！一回試してみないと分からないだろ！

「試したくもないから！」

「結果的に俺が言いたい事は『馬鹿は世界を変える』って事だ！！」

正しくその通りだ！！

「まあ悪い風に世界を変えることは有るかもな。」

「良い意見だったね。次は誰？」

「フッフ、それでは次は私の意見を言いましょう！！」

でた！馬鹿の中でも上位の馬鹿だ！

「雑魚ベーか。雑魚ベーの場合は変態交じりの馬鹿でもあるよな。」

「私は馬鹿とは真のチャレンジャーの事を表す言葉だと思いますねえ！だって普通の人がいらないような普通じゃない行動を起こすにはそれなりの覚悟と勇気が必要なんですよおっ！だから馬鹿な人は勇敢であり普通の人より多くの体験をしてるのですっ！！」

た、確かにそうだ！いままで気付かなかったがこれは重要な事だ！！

「馬鹿な人は大抵勇敢と言うより無謀な行動をする事が多いと思うけどな。」

「結果的なことを言いましょう！『馬鹿の意味は良い意味』だと言う事ですよおっ！！」

確かにさっきの雑魚ベーの説明から考えれば馬鹿ってのは良い意味だ！

「理論的にも良い演説だったね。次は誰かな？」

「次はアタシの番だつてば！」

次はアミユリーの瞳イエローバージョンか。

「イエローは平仮名が読めない程馬鹿なのにちゃんとした演説が出来るのか？」

「アタシは馬鹿は最高に良い事だと思うんだつてば！しかも馬鹿であれば馬鹿であるほど最高で将来的に凄い人になると思うんだつてばー！馬鹿は異常になるために必ず通らないといけない道だと思うんだつてばー！」

正しくその通りだ！馬鹿は最高で異常になるために通らないといけないな！

「でも理論的な説明が無いぞ。」

「アタシが結果的に言いたい事は『細かい事は馬鹿は無視して良い』  
と思うんだってば！」

「馬鹿を分かりやすく説明した良い演説だったね。次は誰がいく  
？」

「次は私が言う。」

おつ、強制参加させられた雨双か。

「やっぱり強制参加かよ!？」

「言いたい事は唯一つ。『お前達本当に馬鹿』だ。」

「まともな意見がでたあああ!!」

「それだけ言えば十分。」

「雨双から皆に良い褒め言葉が送られたね。」

「(ええええええ!!あくまで馬鹿を褒め言葉扱い!!??)」

魅異の言う通り!馬鹿は立派な褒め言葉だ!

「って訳で最後は俺が言うぜ!俺もシンプルに一言にするか。『馬  
鹿になった事を誇りに思うのが大事』だ!!」

おおおお!と雨双を除いて皆が声を上げる。我ながら良い事を言  
ったぜ!

「それじゃあ全員言いたい事は言ったね。これを機会にどんどん馬鹿になっていってね。それじゃあ解散。」

「結局今回は大した出番が無かった。でもその事をオチ代わりに使うなこの馬鹿アキステがああああ！！！！」

## 69話：馬鹿は悪い事ではありません！（後書き）

@悟視点@

「69話&イラスト更新！今回のイラストに出来具合はまあまあだ。」

「魅異のいらすとか 右手に持つてる看板は？」

「馬鹿の重要さを訴える看板だ！」

「あー、そう。」

「神離槍がちょっと長すぎたのが反省点だ。あと普通は線画の下書きを实际書いてケータイか何かで撮ってPCに送ってから色を塗ったりするらしい。」

「お前の場合は直接PCで書いてるんだっけ。何でだ？」

「どっちか片方でやる方が良いと思ったからだ！あとはケータイ持つてからPCに送れないんだ。」

「ああなるほど。」

「あと絵を描いてるときに思い出したが魅異は両利きだ。」

「ええ！？珍しいな！！」

「まあな。それでは皆さん次回もお楽しみに！」

## 70話：元勇者の特徴増加計画！

@ウィル視点@

ううゝん、やっぱり聞くべきなのかな　でも事実だったらショックですし　でもやっぱり真実は知っておかないと！

あつ、私視点ですか？いえ少し疑問に思うことがあったので考えてたんですよ。

それでその疑問が本当かどうか魅異さんに確かめてもらおうと思つてすぐに部屋に来るように頼んだのですが疑問が本当ならショックなので聞くべきか考えてました。

それにしても遅いなあ　部屋にすぐ来るように頼んでから二時間も経つてるのにまだ来ないんですよ。

「いやゝ、おまたせ。」

「あつ、魅異さん。」

やっと来てくれました。結局あの後から一時間経過して合計三時間の遅刻ですよ。

「三時間も遅れるなんて何かあったんですか？」

「実は五時間スペシャルのテレビ番組ずっと見てたんだよ。」

そういえば私が部屋に来て欲しいと頼んだときも見てましたね。

「あれ？でも私が頼んだ時は次回予告でしたよね？」

「そうだよ。その後にはウィルの部屋に頼みを聞きに行こうかと思っただけどウィルの頼みだし後で良いって結論になってマンガの立ち読みに行ってたんだよ。」

「いやいやいやいや！全然良くありませんって！魅異さんが立ち読みしてる間はずっと待ってたんですよ私！」

「途中で飽きて帰ろうかと思ったけどまだ二時間位しか経ってなかったから嫌々ずっと読んでたんだよ。」

「要らない努力ですって！私に対する嫌がらせか何かですかそれ！？」

「まあね」

まあね　じゃありませんよまったく。

「ところで用って何？」

「ええっと　一つ聞きたい事がありました。」

事実じゃありませんように

「私の出番って減ってませんか？」

「……………」

あれ？まさかの無言ですか？

「…まあ、遠まわしに言うけど無いに等しい位にまで減ってるね。」

「やけにストレートですね!？」

全然遠回しになってないですし！でもやっぱり私の出番は減ってたんですね　しかも無いに等しい位に。

「理由として考えられるのは作者がウィルのキャラに飽きてるからだね。」

「でもどうしてでしょうか？私みたいなキャラは結構居ると思いますが。」

「ハッキリは言えないけど特徴無いんだろうね。」

「やけにハッキリですね!？」

でも特徴ですか。私の特徴といえば　ええっと　ありませんね

「どうすれば良いんでしょうか？このままじゃあ私はこの小説から消えるかもしれません」

「一応もう一人のヒロインって設定だからそれは無いと思うけどね。どうにかするなら特徴を作れば良いと思うよ?。」





「あの、他のにしませんか？」

「駄目だよ。この登場は定年退職したウィルにしか出来ないんだから。」

「だから定年退職じゃありませんって」

「次は決め言葉だよ。敵を倒した時とかに『貴方の馬鹿はこの上なし』って言えば良いよ。」

「その言葉を言わないと駄目ですか？」

「そうだよ。あとは強力な技だね。」

正直、特徴的な技は使えませんが

「とりあえず初歩的な勇者流技の勇者突ゆうじやつを覚えればOKだよ。」

「あの、初めて聞く技なんですけど。」

「後で見せるからそのとき覚えてね。とりあえずこんなところかな？」

「それでどうするんですか？」

「こっつするんだよ。」

「キーン」

「あれ 此処は？きゃあああ！？」

目の前が何も無いと思ったら崖の上じゃないですか！

「まずは登場シーンの特訓だよ。」

「特訓って 此処を飛び降りるんですか！？」

「当然」。ちゃんと二千メートルあるから大丈夫だよ。」

大丈夫の意味が登場時と同じ高さだからの方になってるんですけどこの高さから落ちての大丈夫は無いのでしょうか？

「登場シーン（テイク<sup>ワシ</sup>）」

「それじゃあレッツゴ」。

「え？きゃあああああああ！！！！」

魅異さんに背中を押されて落ちる。魅異さんも隣で楽しそうに飛んでいます

「あと言い忘れたけど此処は地球だからまともにやらないと怪我するよ？」

「ええええええええええ！！」

怪我どころか死にますよ！！誰か助けてくださあああいつ！！！！

「でも怪我したら回復技使うから大丈夫だよ。」

「そついう問題じゃありませんよおお！！」

「もうすぐ着地場所に着くから登場の台詞を言つて良いよ。」

「無理ですつてえええ！！」

「ドガアアアアッ！！」

「ありゃ失敗だね。大丈夫？」

「ま、まだ…モンスターとの戦いのほうが楽です」

「おお、流石は元勇者だけあつて無事だね。」

「大怪我ですよ…今日は此处までにしま」

「魅異流技 修式しゅうしきだよ。」

「あつ、直りました。さっきの技つて魔法か何かですか？」

「魅異流の技はその程度のものじゃなくて理論的に解明できない私専用の技だよ。さてウィルも復活した事だし登場シーンのテイク二をするよ。」

「急に痛みが出てきました！それでは帰りま」

「とりあえず上に戻るよ。」

「またワープですか？」

「当然。」

「登場シーン（テイク二）」

「それじゃあ行ってらっしゃい。」

「いやだから押さないで下さいってええええ!!」

心の準備の時間くらい与えてくださいよ！でも失敗してもやり直しですし絶対クリアしますよ！

「もうすぐ着地場所だからそろそろ登場の台詞を言って良いよ。」

「分かりました。あれ。」

登場シーンの台詞って何でしたっけ？

「ドガアアアアッ!」

（途中省略）

「登場シーン（テイク三）」

登場時の台詞も教えてもらいましたしこれで成功させて見せます！

「それっ！」

今回は自分から飛び降りる事にしました。

「もうすぐ地面だよ。」

「そろそろですね。定年退職者のウィル、此処に登場！」

そして回転しながら逆立ち状態で着地！

「ドガアアアッ！！」

「おお、成功だね。」

「す、すみませんけど腕の骨が大変な事になってると思うので直してもらえますか？」

「はいはい。魅異流技 修式だよ。」

「ありがとうございます！それじゃあ特徴が一つ増えた事ですし帰りましょう！」

「駄目に決まってるよ。次は決め言葉と必殺技の特徴を同時に増やすよ。」

「って事はバトルをするんですね？」

「ご名答。そしてそのバトルの相手はこの人だよ！」

「初めまして！私は高等槍術部リーダーの隠納って言うの。よろしくね」

「あつ、私はウィルって言います。よろしく願いします！」

「隠納さんの特殊能力は槍魔術って言う槍があるときだけ使えるんだよ。まあ槍魔術が無くても槍の腕前は特星全体で必ずベスト五以内に入る位上手だし槍術検定で特級を取ったんだよ。」

「そんなに褒めなくて良いってー。」

とにかく結構凄い人みたいですね。

「ついでに過去に警察署を三軒同時に一人で乗っ取ったりとかしたんだよ。」

「へっへへん」

滅茶苦茶凄いですよねそれって！？

「それじゃあバトル開始の前に勇者突を見せるね。」

そういつて剣を前（大きな目の岩がある）に向ける魅異さん。

「勇者突だよ。」

そういつと同時に岩の奥の方に一瞬で移動する魅異さん。それと同時に岩が真つ二つになる。瞬間移動並の速さで動く事自体出来ないんですけど。

「勇者突の突は突進の突だから突き技じゃなくても良いよ。別に突き技でも良いんだけどね。あの速さが出せないんなら出せる範囲のスピードで良いからね。」

それなら何とかできそうですね。

「それじゃあいくわよー！槍魔術 わた飴ロープで縛りつけ！」

「あれっ、本当にわた飴で出来てますね。うん美味しいです。」

甘くて美味しかったのでわた飴ロープは完食してしまいました。

「引つかかったわね！」

「はっ！まさかわた飴に何か仕込んであったんですか！？」

「その通り！そのわた飴は通常のものよりカロリーを百パーセント上げてあるの！」

「えええ！なんて畏を」

元の体に戻ってから体重を気にして甘いものを控えてたのに水の泡です

「まだまだいくわよー。槍魔術」

「させません！勇者突！」

私は細剣をすぐ取り出し出来る限り速いスピードで隠納さんの右胸



と右肩の間辺りに突きを繰り出す。

「貴方の馬鹿はこの上なしですよ。」

「はいオッケーだよ。良く出来たね。」

「ありがとうございます！」

「あと隠納さん大丈夫？」

「あつ！」

そつえば地球で攻撃したら普通に怪我するんでしたよね！

「大丈夫ですか隠納さん！？」

「甘い！」

「へ？」

怪我をしてるにもかかわらず急にガバツと起き上がる隠納さん 甘  
いつて何がですか？

「わざわざ倒した敵の心配なんかしてたら駄目！例え相手がカッコ  
いい人や私のように綺麗な人でもそれは鉄則よ！」

「ええっと……あの、分かりましたので傷の治療をした方が良  
いと」

「この程度の傷なんか治療の必要さえないわよ。ほら見てみてー。」

って服を脱がないで下さい！！あっ、でも本当に傷の跡さえありませんね。

「隠納さんは生命力が怪物並にあるからね。大抵の重傷以内の傷ならすぐ回復するんだよ。」

「そこまでオーバーに褒められるとお姉さんも困っちゃうな」

「全然困ってるように見えませんが…」

「そんなことを気にしてるようじゃこの瞑宰京ではやっていけないよ！」

「隠納さん、此处は地球だから正しくは特星の瞑宰京ではやっていけないよ！だよ。」

「あっちゃあ、私とした事が初步的なミスをしちゃったね。」

「とりあえず特星に戻るよ。」

「キーン」

「到着。」

「いやー、無事着いてよかったわ。」

「そつえば隠納さんは何時から地球に居たんですか？」

「んゝ、確か急に送られたからその場の雰囲気に合わせて行動した  
だけってところかな？」

その場の雰囲気だけでバトルに突入したんですか！？

「話の途中悪いけど皆がこっちに注目してないゝ？」

「そういえばそんな気がするかなー。何でだろうね？」

「さあ？ って隠納さん！貴方が服着てないからですよ！！」

「ああなるほどね。でもブラをしてるから大丈夫大丈夫！」

「そういう問題じゃありませんよ！とにかく服を着てくださいって  
！！」

「しょうがないなあ。」

本当にそのままの姿で帰るつもりだったのでしょうか？

「それじゃあ私は高校に部活にいくから。それじゃあまたねー。」

「またねゝ。」

「今日は本当にありがとうございました。」

学校に向かう隠納さんに私はお礼を言う。

「それじゃあ私達は帰ろう。」

「はい。」

今日教えてもらった特徴 使うべきかなあ？止めといった方が良い気がするんですけど。

「あっそっだ〜！隠納さんが服を着てなかったとき皆注目してたからウィルもブラだけで戦えば目立つんじゃない〜？」

「絶対嫌です！！」

## 70話：元勇者の特徴増加計画！（後書き）

@ 悟視点 @

「70話更新完了！70話まで書くと結構書いたって実感が沸いてくるな。」

「その実感が沸いてくる時の話になんて俺が出ないんだよおお！」

「さあ？俺の気分が悟を出す気にならなかったただけだ。」

「理不尽な理由だなオイ。」

「ところで新小説でも書きたい気分なんだが」

「だがって事は問題でもあるのか？」

「いや、変な星でツッコミ生活より人気が出る気がしないしこっちの更新に影響が出る可能性が高いんだよな。」

「それじゃあ駄目だ！影響でないなら良いが出るなら駄目だ！」

「そうだよな。まあ余裕があつたら書いてみるかな？」

「お前に余裕ができる事は無いと思うぞ。」

「まあな！それでは皆さん次回もお楽しみに！」

## 71話：馬鹿達は犯罪組織を馬鹿にするようです

@悟視点@

さてさて！今回はボケ役で有名な俺視点でいくぜ！

えっ？何でか知りたいか？知りたいのか？何故なら今回は魅異のフル教の初任務だからだ！

フル教の活動を簡単に言うと馬鹿の良さを教えつつ『町の治安を守る』『何かの手伝いをする』などの活動を行っているのだ！しかも間違えて『燃えるゴミを何処かの家で燃す』とか『町を吹き飛ばす』とか『こつそり魅異の行動チェック』とかして良いんだ。何故なら馬鹿だから！！

最後の犯人はお前だろって思ったそこの奴！　どうか魅異には言わないで下さいマジで。

いやまあ、今までのパターンからして気付かれるのは確実だがちょっとは成功するという夢を持って失敗する方が良いと思わないか？少なくとも俺はそうは思わねえ。

思わないのかよ！って思ったりツッコんだ人はツッコミが上手に出て来る人だ。当然保障はしないがな。

さて、本題に戻らせてもらおう！

今回は特星の犯罪組織をぶっ潰そうというチーム別での行動だ。

チームは二チームで俺と烈の旧キャラチームとアミューリーと雨双と雑魚ベーの新キャラチームだ！

あと魅異はリーダーである事と反則的な技が多く一秒で全ての組織を壊滅させる可能性が高いのでフル教集場所での待機となる。非常に残念だあああ！！！！

ちなみに壊滅させた組織には原則として馬鹿の粉を撒く必要がある。効果は控えめになっていて気絶した奴にこの粉を掛けると馬鹿になるという魅異特製の新アイテムだ！

活動範囲は瞑宰京のみで犯罪組織の場所は全てケータイのマップで確認できる。このマップは一般人と犯罪者の区別がつく優れたものだ！魅異が居なかったら犯罪組織表示機能は使えなかったけどな。

それで現在は烈と一つ目の犯罪組織に向かってるところだ。

「ってか普通は警察の仕事じゃないのか！？」

「馬鹿ならそんなことは気にするな！それが俺達だからだ！」

「おおっ！！流石はボケ役の悟！」

でも読者の皆さんには説明をしておこう。

単刀直入に言うと特製の警察は弱いからだ！特殊能力の違いによって実力差が出てくるから特殊能力が強力な奴は一人で組織をやつて場合があるぞ！でも一人なら組織とは言わないと思う。

「よし到着。」

到着した所は豪華な高級マンション。ここに住んでる奴は全員犯罪組織メンバーって表示されてるぞ。

「このマンションには一般人は居ないみたいだな。」

「それならフル教に入って覚えた新必殺技を使おうぜ!!」

烈の言ったように俺達は皆には秘密で馬鹿流技と言う魅異流技みたいな雰囲気の特訓をしたんだ。まあ中にはショボイのもあるけど案外使える技とかもあるぞ。

「いくぜえ!!馬鹿流技 建物の窓割り!!」

「馬鹿流技 ジャンピング前転!」

烈はそこら辺にある石を窓に投げつけて俺はジャンプして前転で壁に突撃する。

「くつはあつ!!」

いつてえ、烈の投げた石はガラスに当たるが防弾ガラスだったように跳ね返ってそのまま投げた本人に直撃して俺は壁で思いっきり頭を打った。

「くつ、この衝撃は結界でも張ってあったのか!？」

「流石は超犯罪組織だぜ!!」

とりあえず次はもつと強力な技でいくとするか。



「馬鹿流技 自爆!!」

「ッドゴオオオン!!」

「よし!!」

周りの数件の家を巻き込んで何とかマンションを破壊できた。被害は数件だったし全然オツケーだな！

「中に居た奴は全員気絶してるし馬鹿の粉を撒いて次の場所に行くか。」

「おおっ!!」

@雑魚ベー視点@

フフフフ、今の私の状態は正しく両手に花！いやぁフル教に入って正解でしたねえ

「オイ、顔がにやけてるぞ。」

「でも雑魚ベーはにやけてる時の方が多い気がするんだってば。」

おっと私とした事がいつものカッコいい顔を乱してしまいましたねえ。

「それです。まずは何処から行きたいですか？貴方達が自由に選んでも良いですよっ！」

「じゃあまずは一番近い所から行くのはどうだ？」

「賛成だつてばー！」

「確かに一番近い所の方が時間短縮になりますからねえ！」

つて訳で組織のビルに到着しましたよ！途中何人かの暴力団に襲われましたが今頃全員氷像として見世物になってるはずですよ。

ちなみにアミューリーは途中から寝てしまったので私が抱きかかえます。もう最高ですよおおっ！！

「雨双さんも私が抱きかかえてあげましょうか？」

「結構だ。」

冷たいですねえ。

「で、どうする？」

確か此処は悪徳商法と不正な輸入と禁止物を勝手に作ったり組織になった場所でしたっけ？

入り口の頑丈さと室内のトラップに警察はやられて諦めたはずですからねえ。

ちなみに能力の高い人は警察より犯罪者になる確率が多いみたいですよ。

「犯罪メンバーのボスは十八階に居るはずですからそこまで氷の階段を作ってくださいねえ。」

「分かった。」

このレーダーで相手の位置確認も楽でいいですよ。相手の場所さえ分かれば正面突破の必要も有りませんからねえ。

「できたぞ。」

「それでは行きましょう！」

「十八階の部屋」

「いや、自営業になってからだいぶ予算が出てきたわね。でも退屈よ！何で異常者やテロリストや警察に襲撃されないのかな？そのためにゲームっぽいダンジョンにビルを改造したり悪徳行事を始めたのに意味無いじゃないの！……正直前にやってたチームでの活動の方が面白かったなあ。」

「ピキピキッ」

「あれ窓が凍ってる？」

「バリイイイン！！」

「キヤ!？」

「ドオオオンと登場ですよおおっ!!」

「いや、この場合はバリーイイインと登場だ。」

「おはようだってば。」（今起きた）

フッフッフ、凍った窓ガラスの破片を背景にカッコ良く登場で  
きましたねえ。

「あれ？貴方は銘笠納さんめいりゆなではありませんか。何故こんな所に居る  
のですか？まあ此処の社長でもやってるんでしょうけどねえ。」

「知り合いか？」

おっと雨双さんとアミユリーさんには説明してませんでしたねえ。

「初めまして！私は前に雑魚太とチームで海賊団とかやってたの！」

「雑魚太？」

「私の旧名ですよっ！」

「あれ？今は別名になったの？」

「だから私の名前は」

「とりあえず改めてよろしくね雑魚ベー！」

聞いてはくれないようですねえ。こうなったら

「貴方を倒して無理矢理教えるまでですよっ！」

「先に言つとくけど悪徳行事が悪い事つてのはもう知ってるわよ！」

確か銘笠納さんの特殊能力は『水を操れる』でしたねえ。

「いきますよおっ！必殺・ハイジャンピングキイック！」

「水圧圧縮砲！」

いつもより高くジャンプして蹴りをする私に対して水で出来た大砲の弾みたいなの水を撃ってくる銘笠納さん。

「ぐはあっ！」

が、顔面にヒットさせるとはやりますねえ。

「「うそくかいてんおあつす高速回転大渦！」

「のわあっ！」

ちよっ、この速さの回転は目が回りますって！

「とどめよ！「やぐりたぬい逆流滝！」

気分が悪いのに今度は上空移動ですかあっ！？

「ぐぎゃあっ！」

天井で頭を打って

「ぐはっ！」

落ちて大ダメージ まだ気分が悪いんですし。

「アーツハツハツハ！まあ私が本気を出せば貴方なんか楽勝なんです。今日はこの位で勘弁してあげましょう！」

「いやそれアンタが言えること！？」

「もう言った後ですよっ！って事で後はお任せしま あれ？アミユリーさんと雨双さんは？」

「あの二人ならもう帰ったわよ。」

「えええええ！？」

この保護者的存在である私を置いてくなんて二人ともそんなに親離れしたいんですかねえ？

「何を考えてるか分からないけどさっさと決着つけない？私に勝てたら何処に言ったか教えてあげるけど。」

「さあ覚悟してくださいよおっ！」

「切り替え早っ！？」

「とりあえずいくわよ」

「ヒュッ、グサァッ！」

「ぎゃっ!？」

台詞を言いきる前に逝刀を投げつける。別に刺さったわけではないのにグサアの音はおかしいと思いますけどねえ。

「ちよっ」

「ヒュッ、グサァッ！」

「グハッ！」

琴刀も投げつける。琴刀は見事に額にヒットして銘笠納さんは倒れて目を回してますよ。

「結局アミューさんと雨双さんは何処なんですかねえ？」

「えっと、確かこのビルの入り口の近くのデザートショップで休むとってたわ。」

「デザートショップですねえ!？」

急いでいかないと二人とも食べ終わるかもしれませんねえ。

「それじゃあ私はもう行きますので。出来ればまた会いましょう!」

「あっ行っちゃった。結局何の用だったのかな？」

@ 悟視点 @

ふう、現在フル教集合場所で結果発表中は訳だが

「さて、これはどういう事かな雑魚ベーク？」

結果は俺達の班は八件に対して雑魚ベーク班は〇件らしい。実際は一件襲撃して社長を倒したらしいが馬鹿の粉を撒き忘れたので〇件って訳だ。

まあ俺達が勝つのは分かってたが此処まで差が開くとは予想外だったな。

それでまあ 雑魚ベーク達は魅異に説教をされている。しかも森の木に逆さ吊りで両手首には二十キロの重り付きだ。多分あの三人は明日になったら腕が上がらないだろうな。

ってか魅異は説教とかを言うのは苦手じゃなかったっけ？説教のふりして単に逆さ吊りを見て楽しんでるだけだ絶対。

「それにしても勝者に寿司がついてくるなんて予想外だな！！」

「ああ確かに。」

烈の言ったように俺達には寿司が出されたので説教シーンを眺めながらのんびりと食べている。



ツッコミ役も出て来なかったし今回はグッドエンドだぜ！！

「あっそうだ、寿司代は二人の財布から取っておいたから。」  
「やっぱバッドエンドだった。ツッコミ役の金だからまあ良いか。」

71話：馬鹿達は犯罪組織を馬鹿にするようです（後書き）

@ 悟視点 @

「何で出番無いんだコラア！！」

「うおっと、いきなり現れてなにを言い出すんだ悟。」

「最近俺の出番が減ってる事だ！主人公は普通に俺だろ俺！」

「俺俺詐欺？」

「違う！ボケ役の出番が多すぎるんだ！」

「ああ、言つとくけどボケ役も一応は悟だから主人公だぞ？」

「何い！？」

「さて、今回はイラストを描いたぞ。」

「俺のか！？」

「今回は雑魚ベーのイラストだ。そのPCで見てみる。いつもより良い出来だろ。」

「確かに雑魚ベーらしさが出ているな。やけにムカつくポーズだ。」

「ちゃんと長髪だし瞳も黒いぞ。」

「でも この服装はなんだ？」

「いや何となく雑魚ベーなら派手っぽい服を着るかなーと思ってこんな感じにしたんだ。」

「確かにまともな服を着るはずがないな。雑魚ベーだし。」

「そうそう雑魚ベーだからな。」

「ちょおおっと待ったあ！！」

「「ゲツ」」

「このカッコ良く、天才的で、パーフェクトな私の話題で盛り上がるのは許しましょう。しつかああし！悪口などで盛り上がるのは少ししか許しませんよおっ！！」

「「 それでは皆さん次回もお楽しみに！」」

## 72話：いろいろ大変な雨双

@雨双視点@

痛たた 魅異さんに吊るされていたから筋肉痛になった。

結局魅異さんが帰った後私は氷でアミユリーはナイフでロープを切って抜け出した。

「体中が痛筋肉なんだってばー。」

「それを言うなら筋肉痛だと思う。」

「魅異がこれは痛筋肉って言ってたんだってば。」

絶対間違っていると私は思うぞ！

「そこのお二人さんっ！どうせなら私も助けてくださいよおっ！」

ちなみに今騒いでる馬鹿はそのまま吊るしてある。いや、だって助けたら追いかけて来るのは確実だし。

「そこの貴方達！」

この声は私の知らない奴の声だな。第三者でも居るのか？

「こっちよこっち！何で声の聞こえる逆方向を向いてるのよー！」

「相手にすると厄介な事になるから此処は知らんフリをするぞアミ

ユリー。」

「分かったんだってば！」

「聞こえてるつての！私はある人物の場所を知りたいだけの一般人よ！」

この魅異さんの作った星に居る時点で一般人じゃないと思うが。

「それで一般人の人が何のようだったけー？」

「変な口調ね 勇者の魅異って有名だから知ってるでしょ？そういう場所 いや、そいつの弟子の中でも魅異の強さに一番近い弟子の場所を知ってたら言いなさい。特徴は爪楊枝を投げたり団扇で叩いたりする奴なんだけど。」

命令口調かコノヤロウ。魅異さんに一番実力が近いって事は馬鹿兄か。この女は馬鹿兄に恨みがあるようだし私の正体は黙って

「羽双は何処に居るか分からないけど羽双の妹の雨双ならこの人だつてば。」

つて、余計な事を！

「何お前が妹か？ならばお前を乗っ取ってあの男を倒しそして魅異を倒して私が特星を支配する！完璧な作戦だ！」

「そんなこと私が許さないぞ。それ以前に魅異さんに適う訳はないか。」

「黙れ！黒闘剣装備！」

「ハア、イメージアイス・ソード！」

「よし勝負ってノワア！？」

アイツは私の技名を聞いて剣と剣で勝負すると思ったらしいがこれは氷の剣を飛ばす技だ。

「それより私はいつ逆さ吊りから解放されるんですか？頭に血が上って眩暈がしますよおっ！」

「知るか。」

「このっ！喰らえ！」

アイツが剣でこっちに向かってくる。単純すぎる攻撃だな。

「氷波。」

地面に手を当て氷の大波をアイツに放つ。

「なんの私にこの程度の攻撃が通じるか！」

そういつてアイツはジャンプで氷の波の上を渡ってくる。

その間に私はイメージアイス・ニードルを上空に放っておく。

「とどめよー！」

「氷壁。」

アイツの突き技を氷の壁で防ぐ。

「この程度の氷くらい一撃で割れるわ!」

そういつて力を溜め始めるアイツ。わざわざ薄い氷の壁を作ったことに気付かないとは。

「壊れるおおおおぐへあつ!」

アイツは氷を割る直前に変な悲鳴と共に倒れる。アイツの頭にはアイツが波に乗ってた時に上空に放ったイメージアイス・ニードルが直撃していた。

「お前も弱すぎるが下には下が居るぞ。例えばその逆さ吊りの奴とか。」

「うるさい!私は今でも特星全てのモンスターを従えた伝説の記録が」

「あるのか!」

「これから出来る。」

「オイ。」

一つ言わせてもらつとコイツはただのアホだ。こんな奴が特星を乗っ取れるのならそこら辺の奴でも乗っ取れる。

「こうなったら私の本当の姿を見せてやろう。」

「詳しい容姿について書かれてない訳だから本当の姿であれ仮の姿であれ読者には分からないぞ。」

読者がどうか言ってる時点で私はおかしいな。

「うるさいわね！第二形態って事よ！」

「第何形態まである？」

「えっ？多分二形態までだけ。」

魅異さんには及ばないな。私の記憶が正しければ魅異さんは数えきれないほど第何形態とかあった筈だ。

「ハッハッハッ！私が第二形態になるまでの間そこで待っている！」

「待つか！特技・アイススイート！」

「ちょっと！変身が終わるまで待つのは常識」

相手が変身するのを待つほど馬鹿じゃないぞ私は。アイツは私の放ったアイススイートで凍ったと思う。

「倒せたのか？」

「氷を溶かして中を見たらどうだってば。」

「私はあの氷を溶かす技を使えないし無事だったら第二形態とかい

う名のアホを相手にしないといけないだろ。」

「それより私を助けるアイデアはないのですか!？」

「それは問題外だ。凍らされないだけマシだと思え。」

この際だから完全に凍らして出てこれないようにしよう。溶ければ出てくるが。

「特技・アイスサークル。」

この技は私を中心に私の周囲の半径五十メートル位を凍らす技だ。広範囲攻撃だが見方に被害が及ぶ場合があるから注意が必要だ。

「危なく凍るところだったんだってば。」

「ああすまなかった。」

ちなみに吊るされてた馬鹿は凍ったようだ。うるさいのが凍っていると気分が良いな。

「いやゝ、皆して楽しそうだね。」

「あつ、魅異だつてば。」

こ、このタイミングで来たって事は 多分そこら辺を凍らした事を理由にまた罰を与えられる! さてどうやって切り抜ける?

「それにしても見事に凍ってるねゝ。ほら此处から半径五十メートル以内なんかスケートが出来るよゝ?」



「魅異さんこれには理由が。特星を乗っ取るとか言う変な女が現れたので一戦交えたらこのような事になったんです。ほらそこにあれ？」

おかしい 確か凍らして放置してあったはずだが無い。

「そういえば此処に来る途中氷の塊が邪魔だったから宇宙空間に蹴り飛ばしたよ。」

何故それで氷が割れないのかは置いて 魅異さんはワザとアイツを凍らせた氷を蹴飛ばしたな。

「って訳で勝手に私の星の一部を凍らせた罪として罰を与えるよ。今回は真実の罰と偽りの罰のどっちかを決めさせてあげるよ。」

真実の罰に偽りの罰？ どっちも良い事には繋がらないはず。さてどっちを選ぶ私！

「じゃあヒントだよ。隠し事がないなら真実の罰を選んで何も起こらないよ。」

何も起こらない？ 私は隠し事はないつもりだが 魅異さんの事だから誰かに知られたら私が不都合になる事でも誰かに言うつもりだろう。

その中でも真実の罰は実際の私の事に実際関連する事を誰かに言う可能性が高い。

逆に偽りの罰は私に関係の無いもの まあ私が実際にない事を有る

と嘘について誰かに言う可能性が高い。

嘘である事を誰かに言う偽りを選べば嘘だと言えば良いのだが詐欺師より口上手な魅異さんが言う限りは本当の事だと思われる。

それなら真実の罰を選べば良い。偽りの罰に比べて言う内容には限度が出てくるはずだし一番良い場合は罰免除になるかもしれない。

魅異さんの事だからそれは無いか。

「真実の罰で。」

「オッケーだよ。ちなみに分かってたと思うけど真実の罰は実際のことを言う罰で偽りの罰は嘘を言う罰だったんだよ。」

「それじゃあ雨双の真実が聞けるんだってばー。」

「それは是非聞きたいですねえ！」

そこの二人はいちいち興味を示すな！

「それでは雨双のたいした事の無い真実一つ目。『雨双は実は冷静な性格ではない』だよ。」

「あれ、そうだったんだっけー？」

「私も冷静じゃない性格の場面は見た事ありませんねえ。」

「二人の言うとおりだ。」

最初の真実がありえない真実だとは予想外だ。

「皆もそう思うだろうけど雨双の場合あせった時だけ本性を出すんだよ。」

本性 人聞きの悪い。

「六十三話の最初で雨双が雑魚ベーに追いかけてアミユリーを抱えて逃げ回ってるシーンがあるよね。それが証拠だよ。」

「確かに大声を上げて逃げ回ってましたねえ。」

「人間ピンチの時ほど思考は冷静なものだと私は思う。とか思っているのに実際は雑魚ベーに追いかけて来るとか叫んでるんだよ。これを冷静な性格といえるかな？」

クツ、いきなりこのレベルの真実で来るのは予想外だ。それ以前にその時の事は焦っててあまり覚えてないし っって自覚してどうする！

魅異さんのせいで混乱しそうだが私は冷静だ。今も冷静だ。本当だ。

「ちなみに最近は自分視点の時に読者に心境がばれないように気をつけたりなど日頃から慎重にんだけど努力をしていたんだよ。」

「何でその事を！？ いやそれより魅異さん証拠はあるんですか！？ 確かこの事は私視点の時には書かれてなかった筈です！」

「証拠その一はさっき言った言葉の何故その事を！？ っってところだよ。その二はさっき言った言葉の確かこの事はってところだよ。証拠三はさっきの発言全部を叫んでいたところかな。全部自分で言ってる時点で冷静さは無いって事だよ。冷静になるように深

呼吸すれば？」

確かにそうしないとボロが出る　　ってもう出た後だが。とりあえず深呼吸をして

「証拠その四は冷静になるように深呼吸すれば？」って聞いて深呼吸をした事だよ。今は衛星じゃないって意味だね。」

は、はめられた！冷静になれ私。冷静に。冷静に。冷静に。

「じゃあ次の秘密だよ。雨双は『案外ちよつとした事で驚く』だよ。」

否定したい。だが否定したら証拠であるシーンの場所を言われるだろう。此処は素直に認めてさっさと終わらせるのが一番良い判断だ。

「雨双が驚くところは見た事無いんだってば。」

「これも証拠シーンってありますよねえ！？」

あつ余計な事を！　それより人の驚くシーンを見たいか普通？

「証拠シーンは六十二話で雨双が悟の分のお菓子を開けようとしたところだよ。」

この時は魅異さんはまだ戻ってなかったはずでは？

「さて、そろそろメインである雨双の謝罪だよ。」

「雑魚ベー、謝罪って何か分からないんだってば。」

「謝って罪を許してもらおうとする事ですよっ！」

「それじゃあね、」今まで隠していましたが実は私は性格は冷静なフリをしてるだけのちよつとの事で驚く普通の女の子らしい小学生です。』って感じに読者の前の皆に謝罪してね。」

「何故私がそんな事を」

あと女の子らしいはいらないと思うが。

「言わないと雨双は実はピンクや黄色い服がお気に入りな事も教えちゃうよ。」

今しつかりと言ってたし。それよりさっきの発言を聞いた途端に雑魚ベーがどんな服を着せようかとかブツブツ言い始めたんだが。

「さっき答えを言ったから」今まで隠していましたが実は私は性格は冷静なフリをしてるだけのちよつとした事で驚くピンクや黄色い服が気に入ってる普通の女の子らしい小学生の雨双です。』に変更ね。」

「何故」

「言わないと雨双の真実をもう一つ言うよ。例えば」

「今まで隠していましたが実は私は性格は冷静なフリをしてるだけのちよつとした事で驚くピンクや黄色い服が気に入ってる普通の女の子らしい小学生の雨双です。」（早口）

い、今は もうかなりのショックが 言ったのは私だが。

「それじゃあ私は帰るね。」

「ところで二人とも！今からいろいろな衣装に着替えてみたくなりませんかあっ！？」

そう言つて縄をやつと抜け出す雑魚べー。

「アタシは構わないんだつてばー。」

「絶対お断りだ。」

「雨双さんのお気に入りのお可愛い色もありますよおっ！」

「それを言つなこのバカヤロウ！」

結局この後でアミユリーを抱えて逃げ回った。

## 72話：いろいろ大変な雨双（後書き）

@ 悟視点 @

「72話&イラスト更新！」

「結局俺は出番無しか！」

「まあまあ、だから魅異との対戦シーンのイラストを昨日描いてやつただろ。しかもマンガの表紙風に。」

「手抜きじゃないか！」

「だから今回は本気で描いたんだ。制作時間は役十時間。」

「本気って事は俺も描いてあるか!？」

「お前が描いてあるなら今回の話にお前も出してたから。」

「つてことはアミユリーと雨双と雑魚ベーか!？」

「雑魚ベーは今回は描いてないけどな。とりあえず見てみるか?」

「どれどれ?おっ、お前にしてはなかなか上手な方じゃないか。」

「これが俺の本気だ!」

「俺の出てるイラストとの差が酷過ぎると思うが。」

「ハハハ まあ多少はな。」

「微妙に一部ドッド絵になってるぞ。あと手を描くのが苦手だからかして上手く二人とも手が描いてないな。」

「まあ気にするな。それでは皆さん次回もお楽しみに!」

### 73話：そろそろ皆の住むところを決めよう

@悟視点@

「さて、今回皆に集まってもらった理由は 分からん。」

現在家のリビングに俺・魅異・羽双・雨双・水魅・アミユリー・雑魚ベー・ウィルのメンバーが集まっている。何故なら魅異に集められたからだ。

「魅異、そろそろこれだけのメンバーを集めた理由を言え。」

「実はそろそろ一つの家に大勢で住むのは止めた方が良くと思うんだよね。」

周りがざわつくが重要な意見以外はこの小説上には表示はされない。いや作者が大勢の言葉を書くのとどれが誰の発言だか分からなくなるからだけださ。

「だからみんなの住む場所を決めようというわけだよ。」

「例えばどんな風にだ？」

「まずはこの家に住むのは主人公である悟だよ。これは確定事項であり取り消しは不可能だからね。」

まあ元は魅異が建てた家だけだな。

「次に私だけど私は別荘邸に住む事にしたから問題なしだよ。」



よっしゃあ！！魅異との共同生活とついにお別れだぜ！！

あつ、別荘邸つてのは六十四話で魅異が作った星に有る別荘の事だ。ちなみに名前の割にはファンタジックで小さな一軒家だったりする。少なくとも邸をつけるには相応しくない。

「後のメンバーと一緒に過ごしたい人と組んでね。一人で良い場合は今すぐ私の所に言いに来て。」

「僕は一人で良いですよ。」

迷わず来たのは羽双だった。つてか妹居るんなら少しは迷うべきじゃないか！？

「羽双は、この最高級の材木を使った和風の家つてのはどう？」

「広さもまあまあですし此処で問題はありませんよ。此処からあまり遠くありませんし。」

つてか家を無料提供してるのかよ！？ 魅異の財力は特星一番じゃないのか？

「私たちも決まったぞ。」

「決まったんだってばー。」

「いやあ、このメンバーで良かったですよねえ。」

次は雨双とアミユリーと雑魚ベーの三人が来た。このメンバーで

大丈夫が異常なほど心配なんだが！

「アミユリー、危なくなったら雨双に助けてもらうかもしくは正当防衛の権利を使って串刺しにでもしてやって良いぞ。」

と注意しておく。でも雑魚ベーは蒸発して大丈夫だったし串刺し程度じゃ駄目か？

「三人用ね。そのマンションの一番上についてる家でどう？うちのマンションで誰も住んでなくっている改造してあるんだよ。」

「面白そうですね。それではそこにさせてもらいますよおっ！」

そのマンション？って近所じゃないか！

どうせなら俺がマンションについてる家に行きたかった！

「こちらに決まりましたよ。」

「私達は寮に行く事になったよ。」

「それはまたどうして？」

「昨日まで一部屋空いてたらしいんですけど今日誰かが引っ越すらしく二部屋空いてるらしいのでこれを機会に寮生活も良いかと思ひまして。」

「私達は寮生活をまだやってないからやっておこうと言う結論になったってわけだよ。」

そこまで考えてるとは流石はウィルだ！

「それなら別に止めないよ。まあ頑張つてね。」

さて全員居なくなったな。一人を除けばだが

「それでお前はまだ戻らないのか？」

「悟、この家で一人暮らしはちよつと広すぎない？」

「ああ。確かに余分な部屋が余ってるな。ってか気味悪いから顔を近づけるな。お前ならその場から言っても意味深く聞こえるから。」

「それは話が早いね。」

やっぱり空き部屋に誰か来るのか

「で、この家への移住希望者はどんな奴だ？」

「ウィルが寮から引越す人が居るって言ってたよね。その人だよ。」

寮からの引越しねえ。それじゃあうちの学校の生徒じゃないか！

「その人って何年だ？」

「二年だよ。」

同学年か！とりあえず年上じゃなくて良かった。

「ピンポン」

「来たみたいだね。呼んでくるから待っててよ。」

「ああ。」

よく考えたら俺ってクラスメートの名前はあまり覚えてないんだよな。

「おっ邪魔しまあーす！」

入ってきたのはやけにテンションが高く元気の良い女の子だった。髪の色と瞳の色は黄緑だ。

「おおっ！キミがこの家の持ち主の悟君だね！？」

「あつ、ああ。とりあえずそういう事になってる。」

俺の名前を知ってる事については気にしない。魅異が教えた可能性もあるし体育祭でも一応優勝したし。

「ところで私の事知ってる？」

「悪いけど知らないな。」

「あちゃー、やっぱり知らなかったかあ！私は軽谷 若如かろやにょって言う名前でキミとは小学校の頃からずっと同じ学校だったよ。」

小学校から同じだったのに覚えてなくて申し訳ないと思う。ってか魅異のキャラが昔から目立ちすぎなのが原因で他が全然分らないんだよな。

「若如は私の弟子のうちの一人だけど特別な理由があつて神離の苗字を使わず本当の苗字を使つてるんだよ。」

「魅異の弟子だったのか。それである理由って？」

「いやあ、私の親が特星本部に勤めてる人でやけにプライドが高いで神離の苗字の使用はお断りって訳！まいっちゃうよね！」

そついつてアハハハと苦笑いする若如。

一応親の許可はいるのか。俺は魅異が強制的に弟子全員に神離とつけてるのかと思ってたぞ。

「そつといえば夏休みは今日までつて聞いたニヨン？」

「ニヨン？」

「あゝ、若如は時々語尾がおかしくなったりするんだよ。」

どつという仕組みでおかしくなるのかマジで気になるんだが。

「それでどう？聞いてない？」

「私は聞いてないね。その話は何処で聞いたの？」

「回覧板が昨日に回つてきてそれで知つたのさっ！」

夏休みも今日までか。もう十月だし秋休みに分類されるような気もするが。

そういえば学校で思い出したがアミユリーや雨双達は小学校に行かなくて良いのか？

よし、聞きに行つて来るか。

「ちょっと悪いけど出かけてきて良いか？」

「全然オツケー！留守番は任せてよ！」

「行つてらっしゃい。」

確かあいつ等はマンションの屋上にある家だったな。

「フッフッフ、良く来ましたねえ！」

で、屋上の家で出迎えてくれたのは残念ながら雑魚ベーだった。

更に不運な事にアミユリーと雨双は何処かへ出かけてるらしい。雑魚ベーがそれに着いて行つてないのも珍しい。

その着いて行つてない本人は俺との決着を望んでいるようで

「さあ！長く続いた戦いを此処で終わらせようではありませんか！」

と叫んでいる。だが今回の奴は何かいつもと違い自信にあふれてる気がする！

ってかそんなに長く続いた戦いな訳でもないのだが。

「別に良いけどお前も多少は学習しろよ……………」

「フハハハハ！甘いですよおっ！今回私は魅異さんの使うような変身能力を身に付けてきたのですよおっ！」

嘘付け。お前にそんな素質と実力があるはずがない。

でも見てみたい！

「ほお、お前が本当に変身能力をつけたって言うのなら見せてみな！」

「良いでしょう！驚きの変身能力を見せてあげましょう！変身ですよおっ！！」

そう言った瞬間雑魚ベーが光り出す。こいつマジで変身能力を覚えたのか！？

「変身完了！！」

だが実際には変身前のままだった。

「どこがどう変身前と違うんだ？」

「変身前との違いですか？ カッコ良さが十倍になったところ

ですかねえ。」

「アホかあつ！」

「バコツ！！」

「ほげがつ！」

そういつて俺の全力右ストレートを雑魚ベーの顔面に決めてやる。全力だがそこまで威力はない右ストレートだ。しかし見事に雑魚ベーはぶっ倒れた。

「こうなつたら私の第二形態をお見せしましょう！」

「あるのかよ！？」

顔を殴つたのに何故か腕やら頭やらに包帯を巻きながらそう言う雑魚ベーの思わぬ発言に少し驚く。ってか怪我してないのに必要ねえ。

「第二形態発動！」

そういつて雑魚ベーはその場から姿を消した！凄っ！

「雑魚ベーの奴何処に行ったんだ！？」

「アーッハッハッハッハッ！！此処ですよっ！！」

その言葉と共に雑魚ベーは天井を破壊して登場した。二階から床を壊したの方が分かりやすいだろうか。



いやそんな事は決して重要じゃない！重要なのは今の雑魚ペーの格好だ！

何故だか知らんが上半身に電化製品を買った時に箱に入ってるプチプチ潰すやつを巻いて登場したのだ！今の時期には似合わないから服着ろ服を！！

いや、そもそもこんな物が似合う時期が有ってたまるか。

「あまり装備の凄さに驚いてるようですねえ！」

「ああ、別の意味でな。」

「この装備は上半身を打撃から守る働きがあるのですよおっ！これでさっきの様にはいかないはずですよおっ！」

「さっき顔を殴られたんじゃないかったか？」

言っとくが顔の部分は守られていない。

「さあ！覚悟してくださいねえ！」

「何処が行け！」

「ズキューン！ズキューン！ズキュズキュズキューン！ドガアアアーン！！」

何か疲れてきたので手早く終わらせる為に拳銃で数発撃ってからバスター力で吹き飛ばした。

「のうわあああああ  
」

「キラアーン」

雑魚ベーはアニメでよく見るような感じで何処かに飛んでいった。  
効果音もベタだ。

「ただいまですー。」

「ただいま。」

おっ、良すぎるタイミングでアミユリーと雨双が帰ってきた。

ちなみにアミユリーは瞳赤バージョンな。確か俺の家に居たときは  
黄色だったが。

「あっ、悟です！」

「何だお前か。」

俺で悪いですか雨双さん？

「天井を壊したのはお前か？」

「あっ、確かに壊れてるです。」

あっ、そういえば雑魚ベーがプチプチを装備して登場したときと俺  
がバスター力で吹き飛ばした時に天井に穴が開いたんだった。

「えっ？あ、それは雑魚ベーが壊したんだ。」

とは言っても片方は俺が開けた穴だが 原因は雑魚ベーだし俺の分の罪を被ってもらおう。

「やっぱりか それで何か私達に用か？」

「ああそうそう、聞きたい事があったんだ。」

「聞きたい事って何です？」

「二人は小学校とか行かなくて良いのか？」

俺の記憶が正しければアミユリーは異次元に居たから学校に行けるようには見えなかったし雨双も旅とかをしてたから学校に行ってる様には見えない。

「私は神様をやってるから別に行かなくても良かったです！。

「私は まあ確かに行ってないな。」

「オイ。」

アミユリーはまあ神様だし良いとして雨双は特に理由もなく行っていないのかよ？

「何だその哀れ者を見るような冷ややかな視線は？」

「いやー、雨双がフル教に入れられたのが今頃になって納得でき  
て」

「うるさい黙れコノヤロウ。」

そう言うと同時に自分の手を凍らせて殴ってくる雨双。かなり痛いから！

アミユリー！楽しそうに見てないで助ける！

「でも明日からは大丈夫ですー。」

おっ、願いが通じたのかどうかは知らないがアミユリーのその一言で氷パンチの悲劇は去った。

「その通り。私達は明日から小学校に通う事にしたからな。」

雨双が多少自慢げに言うが義務教育により小学校に通うのは普通だ。だが口に出したら氷パンチがくるのは分かりきっているのであえて言わない。

「さっきまでその事を頼みに行ってたです。」

だから二人とも居なかったのか。

「でも雑魚ベーはなんで行かなかったんだ？」

「アイツを連れて行ったらどうなるか分からないのか？」

雑魚ベーを連れて行ったら まず校長室辺りに申し込みに行くだろ。別に問題ないと思うが。それで帰りに小学生が何人が歩いていてあなるほど。

「小学生に訴えられる可能性があるからか！」

「そうですー。」

「まあ、夏休み中だから人は職員しか居なかったがな。」

そういえば前に校長が『私はこの町の全ての学校の校長をやっているですよ。』って言ってたな。小学校がまだ夏休みなのもそのせいか。

「ところで買い物に行くんじゃないかったです？」

「あつ、そうだった。」

「何を買いに行くんだ？食い物だったら俺の分も頼む。後で金は払うから。」

「食料品の買い物じゃない。そして自分で行け。」

あれ？違うのか。

「今から買いに行くのはふむぐう！」

「何でもないからとつとと帰れ。」

アミユリーが何か言いかけたが雨双がとつさに口を塞ぎどっかに連れて行く。

こ、この光景は

「誘拐か!？」

「そんなわけ有るか。」

あつさり俺の予想は否定された。即答しなくても良いだろ

「とにかく早く帰れ。」

「はいはい。」

何の買い物か気になるが後をつけたら雑魚ベーと同じような奴だと思われるし大人しく帰るか。

この数時間後に上半身の服を着ずにプチプチを巻いて焦げた変質者が瞑宰京の公園で発見されたというニュースが流れた。

### 73話：そろそろ皆の住むところを決めよう（後書き）

@ 悟視点 @

「73話更新！やつと皆の住む場所が決まったぜ！」

「そして次回から高校での話がやつと復活か！？」

「しかもそれに加えてアミューリーと雨双の小学校での話もあるぞ！」

「それは俺の話が減るから何とも言えないな。」

「まあその辺は気にするな。それでは皆さん次回もお楽しみにっ！」

## 74話：いろいろ無茶苦茶小学校

@雨双視点@

んっ？また私視点か？たまにはアミューリー視点でも良いと思うが。

私とアミューリーは学校で五年のA組になった。えっ？私達の年齢はいくつか？残念ながら覚えていない。単に身長平均が私たちの平均と近かったからだ。

学校は予想よりも大変だぞ。まずは始業式でずっと座りっぱなしだったしその後教室で自己紹介後に質問の雨嵐でなかなか席に座らせてもらえなかったし。

アミューリーはこれは最初だけだと言っていたがな。

あと魅異さんの弟子だと言った途端に全体から自分の班に入ってくれとの勧誘が急殺到して現在何処に行くか考え中だ。

アミューリーも神様をやっていると云った途端に勧誘が急殺到している様子。

「それで何処に行く？」

「男子だけの班は嫌です。」

その言葉を聞いて一部の班からグサアという精神的ダメージの音が聞こえた。だが気付かないフリをしておく。



私は別にどっちでも良いのだが。

新しく班を作る方法もある。実際二人以上いれば班を作っても良いらしい。

本当に滅茶苦茶なルールだな。

「氷と磁力だね。」

「んっ？」

氷と磁力って事は私たちの特殊能力の事だ。確か自己紹介の時に言い忘れてたから誰も知らないはずだ。

何処の班が見破ったんだ？ 周りの奴が邪魔で分からないな。

「それなら誘ってくるべきだよね！そしたらアタシの班は頂点確定！」

「いや！私の班だから！」

他の奴と違って漫才してるな。あと周りの奴は私の制服を引っ張るな。新しく昨日買ったばかりだぞそれ。

女子が二人だし問題は無いな。

「アミユリー、あの班に行くぞ。」

「分かったです。」

周りの奴達を氷で滑らせて漫才班に行く。何故この班を選んだ理由は私たちの特殊能力を見破ったからだ。

「お前達、この班に入っているのか？」

「あつ！全然オツケーだよ！私達も勧誘に行こうかと思ってたから！」

「此処はアタシの最強の班なんだよ！」

「だから私の班だって！」

結局どっちの班なんだ？まあ本当にどうでも良いが。

「それではこの後は自由時間にします。あと次の授業から新しい担任の先生が来るので迷惑をかけないようにして下さいね。」

私たちの紹介だけで授業終了か。

「それじゃあ私達の自己紹介をするわね。私は四季間しきま 由希ゆき。特殊能力は他人の身体能力が分かる見破り能力よ。よろしく！」

「アタシは縁異べりい 恵音美えねみ。基本は元気でかなり天才で非常に強くてとっても可愛いのが特徴だよ！特殊能力はいろいろな物を消し去る消滅能力。よろしくね！」

私達の能力の事を言ってたのは由希か。恵音美は雑魚ペーみたいな馬鹿ナルシストか？

「それじゃあ新メンバーも結成したしアタシは恒例のゲームをする

事を提案するよっ！」

「うん良いよ！恵音美にしてはマシなアイデアだねっ。」

ゲームをするのか？分かりやすいのが良いが。

「よし！邪の呪いゲーム開始だよっ！」

「グウン！」

此処は 別空間か？

「この邪の呪いゲームは本当はどちらかが勝つまで戦い続ける悪夢のゲームだったらしいけどそのルールを応用してどちらかが勝つまで遊び続けるゲームに改良したんだよ！」

由希がそう説明する。良く改造出来たな そういえばこのルールを応用したゲームが特星中で流行つてると聞いた事がある。

「それじゃあアタシがルール説明をするよ！このゲームは遠距離攻撃で相手を気絶させたら勝ちで相手の半径五メートル以内には遠距離攻撃しか通らないバリアが張ってあるんだよ。チーム戦でそっち対こっちでやるんだよ。」

アミユリーとペアか。遠距離が中心なら十分に勝機は有る。

ステージ構造は天井はジャンプしたら手が届く位の低い高さだが広さは体育館並みに広い。

「「よいスタート！！」」

「先手必勝だイメージアイス・ソード！」

氷の剣を横三列で投げつける。避けれるはずはないだろう。

「恵音美！食べちゃって良いよっ！」

「いったきまぁーす！」

た、食べたぁ！？ 私の経験上このパターンは初めてだ。

本当に恵音美が馬鹿だということは分かった。

「基本は元気でかなり天才で非常に強くてとっても可愛い私には通じないよぉっ！」

天才はないな。

「磁力球です。」

見えないが二人に磁力球を投げて付けるアミューリー。前に私と戦った時は私の氷の壁につけたのだから人にも付けれるのか。

「あれ？何も起こらないよ。」

「スチールナイフ・ストレートです！」

でたアミューリーのお得意ナイフ投げ。ストレートは回転させずに刃の先を敵に向けて直線的に投げつける技だろう。

「この程度横に避けれる事くらいアタシには簡単さ！」

「磁力を忘れたら駄目だよ！」

由希が恵音美に注意するが聞いていない様子。磁力球が付いてるって事は鉄やスチールを引き付けるって事だ。

「えっ！変化した！って助けてええええええ！！！」

恵音美が今頃危険な事に気付き逃げるが磁力で付いてくる。しかも磁力の速さは半端じゃなくリニアモーター並の速さだ。これから逃げ切れるわけない。

「まだまだです！」

アミューリーは追加攻撃でナイフを数十本追加で投げてるし。微妙にアミューリーが鬼か悪魔か人でなしだと私は思う。純粹に楽しんで笑ってるし。

「さて、私は鑑定屋の相手でもするか。」

「誰が鑑定屋だコラー！」

私の言葉を由希が否定するが鑑定屋しか思いつかないから諦める。

「私は能力を見破る事しか出来ないから武器で何とかするしかないかあ。」

「イメージアイス・ストリング！」

糸並に細い氷を由希に飛ばす。ストリングは細すぎたか？

「火炎放射器！」

何でそんなものを持つてるかは知らないが由希は火炎放射器で氷を溶かしていく。

「イメージアイス・ハンマー」

「その程度回避できるよっ！」

氷で出来たハンマーを回避する由希。だが油断は命取りだ。

「リターン！」

「ええ！？げふう！」

技名は最後まで聞け。まあ気絶したから放って置く。

「アミユリー、そっちは倒せたか？」

「それがまだです。」

恵音実はスチール製のナイフ数百本から異常な速さで逃げ回っていた。

「多分リニアモーターより速いです。」

「多分じゃなくて確実に私は思うぞ。前からナイフを投げたらどうだ？」

「前方向からの同時攻撃も試したけど隙間から逃げられましたー。」  
どれだけ凄いんだ？追いつめられた馬鹿はとんでもない底力を発揮するな。

フル教に入ってる私も追いつめられたらとてつもない底力を発揮できるのか！？

いや別に発揮してみたいわけじゃないぞ、うん。ちよつと出来たら良いなって程度だ。底力があつた方が便利で良いっていうか、そんな事よりも恵音美をなんとかするか！

アイツは単純に馬鹿な奴だから扱いは楽だ。

「氷壁。」

恵音美とナイフ全部を氷の壁で囲む。これでこれ以上逃げれず私達の勝ちだ。

「うわわああ！」

そのまま壁に突撃してナイフの餌食つてのが私の予想だったんだがリニアモーター並の速さで走ってる恵音美の突撃に壁が耐えられなかったらしく壁を破壊して走り続けている。

「だが甘い。アイスウェーブ！」

恵音美の走って正面から氷の波を放つ。氷の波自体は破られたが氷の波により凍った地面で

「ッルンッ」

普通転ぶ時には聞こえないが案外良く使われている効果音で見事に転んだ。その後はナイフの刺さる音と共に気絶した。まあ刺さってはいないのだが。

よし何とか帰ってこれた。

「おお、やっと帰ってきましたねえ。」

おい、何で雑魚ベーがいる？

「何でお前が居るんだ？しかも職員用の教科書とかを持って。」

「雨双さん 制服姿も可愛いですねえ！」

「ハッ？って抱きついて回るなああ！」

「うう 気分悪い。」

三十分間抱きつき回転を喰らったら流石にキツイぞ。その後アミューリーや由希や恵音美にもやってたが

「私は面白かったですー。」



「アタシも！」

「私も楽しかったよ！」

お前達は恐らく雑魚ベーへの耐久性を持っているんだ。持つてないのは私だけか？

「雨双さん、気分が悪いのなら私が治るまで看病してあげましょうかあつ！？」

「絶対に悪化するから断る。」

とりあえず気分が治るまでの間に雑魚ベーが皆に自己紹介をしている。最悪な事にこの学校の教師をするらしい。しかもこのクラスの担任だ。

私達がこの学校に入ると知って職員の希望届けを校長に昨日提出したらしい。

あの校長は確か悟達の高校の校長もしていると言っていて悟達からは自由に好き勝手する校長だと体育祭の時に聞いた。

いや本当に自由好き勝手だ。何故なら雑魚ベーに毎日の授業内容を決めて良いと言ったらしい。しかも終了時間も自由というありえない位何でも有りの設定だ。

「それじゃあ今日の授業は此処までにしますよあつ！」

この学校は学校としてやって行けるのが心配だ。

## 74話：いろいろ無茶苦茶小学校（後書き）

@ 悟視点 @

「75話&イラスト更新！雑魚ベーは長髪だからイラスト描くと女みたいに見える事があるから大変だ。」

「それなら俺のイラストを描けばいいだろ？」

「お前の場合は顔の表情とか非常に描きにくいからNGだ。」

「描きにくいか！？」

「ああ。ところで今回の話は小学校での話だったわけだが分かりにくい！」

「いや何が？」

「由希と恵音美の喋り方だ！基本的に両方とも口調とかないから喋り方が似てて心境でどっちが何と言ったとかを伝えないと駄目なんだ。」

「ああ、だからこの小説に出てくるキャラは大抵喋り方とか口調が違うのか。」

「ああ。由希と恵音美の喋り方の違いは自分のことを私というかアタシというかの違いだ。」

「一応違いはあるんだな。」

「まあな。さて、それでは皆さん次回もお楽しみにっ！」

## 75話：馬鹿に効く薬はあるのか？

@悟視点@

ああ、退屈だ退屈。現在屋上でのんびりと過ごし中。

授業は相変わらず午前中終了なんだが学校は二十四時間ずっと開いてるから夜まで帰らない奴も結構多い。流石に泊まる奴は居ないが。

「おつ！退屈そうだねえ！私が面白い話でも教えてあげようか？」

そう言ってきたのは相変わらず元気そうな若如だ。

「面白い話？」

「そうっ！我らが師匠の魅異の話だミュン！」

ミュン？ ああ口調が時々変わるんだっとな。

俺的には口調の変わる原理の方が気になるんだが！

「魅異が現在弱体化の術が二つ掛かってる事は知ってるかい？」

「ああ。」

それでも人間の基準能力からは凄い勢いで脱線してるがな。

「じゃあその術を二つとも解いたとして魅異は本気を出せると思う？」

「出せるんじゃないか？」

まあ、魅異の事だし本気は出せるが出さないって事は有るだろうが。

「それがそうじゃない事が私の独自の理論と研究によって考え出されたのさっ！」

「あつ、そうなのか？」

それは知らなかった。ってかよく魅異の研究とか出来たなオイ！？

「魅異の能力のいくつかは噂の武器に封印されてて何かの方法で封印を解いたら魅異が本気を出せるようになるって仕組みだよっ！」

凄くファンタジックな話になってるが俺は正直どうでも良い。ってか深入りすると巻き込まれる可能性が高くなる。

ってか何で伝説とか幻とかじゃなくて噂の武器なんだよ！？

最近俺の口癖が『ってか』になってきた気がするのは気のせいかな？

「噂の武器は見掛けこそは弱そうだけど実際は魅異の力が封印されてる訳だから使い手によつてはとんでもない強さを誇るらしいのさっ！そこで君に相談なんだけど噂の武器の事で知ってる事があったら教えて欲しいんだっ。」

弱そうでとんでもない強さの武器……あつ、思い出した！

体育祭の時に使ってた神離槍ってそうじゃないのか？竹槍だがとん

でもない強さだし！

「いやゝ、結構細かいところまで調べたねゝ。」

「うおうっ！いつの間に居たんだ魅異！？ってか何飲んでんだ？」

「さっきから居たけどゝ。ちなみに今飲んでるのは野菜ジュースだよゝ。健康不足の解消にはやっぱこれが一番ゝ！あつ二人の分もあるよゝ。」

野菜ジュースって何種類もあるから一番なんか普通は分からないと思うんだが…とりあえず野菜ジュースは貰う。

ストローがないし！丁度ポケットに爪楊枝があつたからそれで穴を開ける。

「おつ、これは勇者社の新製品かい？」

「大量の野菜を圧縮したジュースだから少し飲んだら吐き気がする位まで満腹になるから製品じゃないよゝ。私は何ともなかったけどねゝ。」

危なく飲むところだった！ってかそんな物を普通に渡すなよ！

「バコオオオオン！！」

「ってなんだ！？」

急に真ん中の床が壊れたぞ！

「アーツハツハツハツハ！今日は教師の仕事が終わったので来てあげましたよおっ！！」

壊れた床から現れたのは言うまでもなく雑魚ベー。何で高校に居るんだよ？

「さあ我が宿敵ライバルよ！今日こそ決着をつけようではありませんか！」

「とりあえず帰れ。」

魅異は若如に雑魚ベーの紹介をしている。

「ってかさっきお前が登場したせいで何人かの生徒が落ちてったぞ！

「今回の私を甘く見ると痛い目に合いますよおっ！何故なら今回の私は小学校で教師の仕事が終わった後に保育園の可あつ愛いいいい女の子を抱いてジャンピングキックの練習をしていましたからねえ

」

お前はお前でよくやってられるな…ってか周りの生徒がお前を不審な目で見てるぞ。お前が宿敵って言うから俺も巻き添えを喰らってるが。

「さあさあさあさあ！どんどん力が溜まってきましたよおおっ！！」

確かに背景にオーラみたいなのが見える。だが雑魚ベーが相手だから全然強そうに見えない。ってかオーラの有る一般人のほうが強そうに見えると思う！

「フッフッフ、私のあまりの優雅さ故に動けないようですねえ。  
んんっ？それは野菜ジュースじゃありませんか。丁度喉が渴いたこ  
とですし頂きましょう！」

俺から野菜ジュースを取り上げて自分のポケットからストローを出  
して野菜ジュースを飲み干す雑魚べー。何でストローをポケットに  
持ってるんだよ？

「ふう。やっぱり運動の前には水分補給が重要ですねえ！」

あれ？満腹にならないのか？

「それではいきますよおっ！必殺・元祖ジャンピングキイック！  
！」

でた船を壊す威力のジャンピングキックか！

「おおーい！生徒が何人か下に落ちていったが何かあったのか！？」  
つと、丁度良いタイミングで烈が来た！

「ちよつとこい！」

「えっ！何か用かよ！？ってゴフアッ！！」

烈を盾にしてジャンピングキックを防ぎ学校崩壊を何とか免れたぜ！

「だ、大丈夫ですか烈さん！？よくも…よくも私の同士を！」

「いや確かに盾にしたのは俺だが蹴ったのはお前だろ。」

まあ今回はしょうがないって事で。

「ざ…雑魚ベー、世界中の…可愛い女の子達を…悟の魔の手から…守ってく…れ…」

「烈さああああん!!」

小学生以下の女子をコイツ達の魔の手から守る集団を作るのを世界は急ぐべきだと思う。

「烈さんを盾にするとは我が宿敵ライバルとはいえ流石ですねえ。ですが烈さんの仇は此処で討ちますよおっ!!」

ム力つくからエクサスターガンで撃ち消したいが残念ながら充電切れだ。

「さあ本気でいかせてもらいますよおっ!カム!」

そういうと同時に雑魚ベーは何処からか取り出した琴刀と逝刀で早歩き位の速さの白い球体を放った。煙の固まりか?

「なんだこれ?つて熱ううっ!!」

ちよつと触ってみたが滅茶苦茶熱い!下手したら火傷程度じゃ済まないだろこれ!

「カムカムカムカムカムカムカムカムカム!」

いくつか出してくるが屋上の広さなら避けるなんて余裕だぜ!



「この程度を俺が避けられない筈がないぞ！」

「しつかああしつ！！一定の動きでカムを飛ばす技もあるのですよ  
おっ！必殺・可愛<sup>かわい</sup>い子<sup>こ</sup>は私<sup>わたし</sup>の為<sup>ため</sup>にですよおっ！」

でた雑魚ベーの中国刀装備時に使う変な名前の技！大量の白い球体をいろんな方向に飛ばしてくる。この技は横回転しながら飛んでくるみたいだ。

対処法が分からないので隙間を見つけて避けつつダメージを蓄積させる効果の銃で撃ちつづける。

「必殺・超強風雨危険警報<sup>ちやうきやうふううきけんけいはう</sup>ですよおっ！」

巨大な衝撃波を起こし上からのレーザーの嵐を呼び出す雑魚ベー。  
つてかヤバイ！逃げ場ないし魔法弾を作る暇も…そうだ！

「こういう時の為の烈ショット！」

死んだフリをしている烈を空気圧圧縮砲で衝撃波の方に吹き飛ばす。  
そしたら衝撃波は烈の飛んできた勢いでかき消され烈は衝撃波に当たった勢いで上方に吹き飛ぶ！そしてレーザーの嵐を全部受けた！  
そして烈は学校内に吹き飛んでいった。

…おい、生きてるかー？

「まあいつもの事だし別に良いか。」

「烈さあああぁん！！」

「さて、次はお前の番」

「おおつと、もうこんな時間ではありませんか！ 私は今から重要な用事があるので決着はまた今度に延長ですよっ！ 命拾いましたねえ！ それではまた会いましょうおっ！ アーッハッハッハッハ！！」

そういつてバク転で屋上から無駄に華麗に飛び降りる雑魚べー。絶  
対に逃げる為の言い訳だろ！

あ、でもアホだ。

「ぎゃあああああああああああ！」

十階の高さから飛び降りた結果叫びながら落ちる事に。多分地面に突っ込むな。

「つてか魅異と若如が居ないし！途中で飽きて帰つたな！」

まあ怒ってても仕方ないし俺もさっさと帰るか。

「ピキッ  
メキバキッ！」

何の音？

「バキバキ！メキバキッ！」

……そういえば超強風雨危険警報を烈で防いだ時に烈は学校内に凄いい勢いで突っ込んでいったよな まさか！

「ガラガラガラガラ！ドガシャアアン！！ズゴゴゴゴゴ！！」

やっぱり崩壊したあ！マジで落ちる！誰かヘルプミィィィ！！

どうするんだよこれ 今の俺の表情は恐らくアニメで言えば白黒になって固まつてるシーンと重なるだろう。

「本当にどうするんだよコレ？」

目の前には震災で崩れたビルの後みたいになってる学校。悪いのは俺じゃなくて雑魚ベーだよな？まあ確かに烈で防いだのは俺だけどさ。

「次回になれば直ってるよな？よし帰ろう。」

此処の学校崩壊回数は何回だ？これで二十一回目か二十二回目だった気がする。

それじゃあ帰るか。

ちなみにその日の夜に崩壊した学校の瓦礫の中から赤い髪の毛のうるさい馬鹿が出てきたとの目撃情報があったらしい。確実に烈だな。

75話：馬鹿に効く薬はあるのか？（後書き）

今回は時間の問題で省略します！

それでは皆さん次回もお楽しみに！

## 76話：新ゲームで遊びましょう！

@ 悟視点 @

「悟と若く、今暇だったらゲームしない？」

昼少し過ぎの暇なところに魅異が家にあがりこんできた。

そもそも別荘に引越すとか言って普通にこの家で寝泊りしてる奴が来ない訳がないか。

「私は暇で死にそうなところだったのさ！ところでどんなゲームなのそれ？」

「まあゲームというより場所を移動してのバトルに近いかな？でもちゃんと初期レベルや初期能力が有るからゲームというべきだね。ちなみにオンラインゲームでついさっき販売したところだよ。」

「ついさっき販売したオンラインゲームなのに他のプレイヤーは居るのかよ！？」

「ちなみに予約はかなりの数だったよ。特星での売れ行きはもちろんだけど普段武器とかを扱えない地球での売れ行きもかなり凄かったね。」

この言い方からして地球に見に行ってたな。

「このオンラインゲームは邪の呪いゲームの空間移動を利用してる

んだよ。だけどセーブをしたらちゃんと元の世界に戻る仕組みだよ。」

邪の呪いゲームが特星で大ブームと聞いたことが有るが地球でもブームになるかもな。

「あれ、でもこのゲームはパソコンゲームって書いてあるよ！」

んっ？確かに若如の言うようにこのゲームはパソコン専用ですって書いてあるな。機種はどれでも大丈夫みたいだが。

「邪の呪いゲームの仕組みをCDに取り込んだんだよ。他にもケイタイで出来るタイプもあるけどね。」

行方不明者が出そうで怖いな。

「まあやってみれば分かるよ。じゃあ準備するね。」

そういつてノートパソコンを三台何処から取り出す魅異。もうCDは入ってる様子。

「まずは名前と職業と最初に装備する武器と防具を選んでね。名前は本名を使っても良いしあだ名やハンドルネームを使っても良いよ。職業はオリジナルで作っても普通に有るのも良いけどね。武器と防具は最初のだから全て平等な効果を持ってるよ。」

えっと…名前は悟で職業は銃使いで良し。武器と防具は…多っ！！銃も拳銃タイプやライフルタイプやマシンガンタイプなどいろいろ有るぞ！

防具は…変にファンタジー的なものより普段着てる感じのやつにするか。…これっていつもと変わらないような気がするぞ！

「それじゃあゲームスタート」。

「グウン！」

「よし！到ちや…」

「おりゃあああー！」

「うおっ！？」

後ろから他のプレイヤーに剣で斬りかかられるが回避する！腕をかすって少し傷が出来たじゃないか！

「いきなり何するんだお前！」

振り向くと共に拳銃で撃つておく。相手プレイヤーに見事にヒットして相手プレイヤーは消滅した。

「大丈夫だった？」

「ありやりや、怪我してるよ。」

柱の影に居た魅異と若如が出てくる。ってか登場と共に不意打ちされたんだぞ？見てないで助けるよ！

此処は何処かの神殿みたいだな。



「このゲーム内ではマナーやエチケットはないから問題じゃないよ」。説明書にも書いてあったけどパーティを組んで相手をフルボッコして道具を奪うなり登場したところを不意打ちするなり荒らし行為をするなりなんでもオツケーなんだよ」。

「荒らし行為オツケーでも掲示板やチャットの場所って有るのかな此処？」

「ないから代わりに本人が直接言う仕組みだよ。まあそんな事したら周りの人達から狙われるだろうけどね。ちなみにライフがなくなったら元の世界に戻されるよ。初期ライフは地球で実際に受けて命に別状が有る程度のダメージで無しになるよ」。

なるほどな。おっと此処で俺達のデータを紹介しておこう。

まずは俺のデータ。銃使いで武器は拳銃系の銃。特技は特にない…

銃使いって特技なしの職業だが弾によって効果が変わるらしい。

まあ目を狙って撃つ目潰し弾などオリジナル技で何とかしよう。

次は魅異のデータ。職業は勇者かと思ったが神離族の馬鹿師匠と入力してみたんだな。

特技はミネラルレーザーを今のところ使えるってちょっと待てコラ。

「何で実際にあるお前の技が使えるんだよ!？」

「これは職業名を入れたらゲームがその入力した職業名に合うような技を覚えるようになってるんだよ。ちなみに神離族の馬鹿師匠は私専用の職だけだね…」

「あああつて入れたらどうなるの？」

「断末魔攻撃とか荒らしアタックとかじゃないの？」

オイオイ…まあ魅異流技が使えるみたいだ。ちなみに使う武器は当然槍の様子。

次は若如のデータだ。職業は錬金術師って何じゃこりゃ？

「若如、もうちょいメジャーで戦闘で役に立ちそうなのを選んで欲しかったんだが…」

「みやはは……もう手遅れ！だから気にしたら負けだよ」

何に負けなのかは知らんがまあ過ぎたことなので気にしないでおう。

武器は薬物の火薬や硫酸などで特技は錬金術。うんそのままだな。

「それじゃあまずは何処に行く？」

道とかまったく分からないんだが。

「初期アイテムとしてマップは一人1つずつ持ってるはずだよ。」

あつた。どれどれ…町は遠いみたいだな。

「町は他のプレイヤーによって独占されてるかもしれないね。」

ほんの数十分前に発売されたゲームなのにそこまで進んでる奴も居るのか。

「まあレベルも低いし他のプレイヤーでも倒そうか。」

「モンスターを倒せば良いんじゃないかな？」

確かにプレイヤーで考えて行動してる奴とか強敵だからな。

「モンスターより自分よりレベルの高いキャラの方がレベルが上がりやすく得だよ。」

「負ける可能性が高くなるんじゃないのか？」

「戦闘力においてそこらの一般人が私たちに適うと思う？相手の攻撃に当たらず相手に攻撃を当てれば良いよ。」

まあ特星での戦闘で慣れてるし避けながらの攻撃は強い相手に対して一番有効だ。

つてか魅異のライフがこのゲームの限界近く（無料大数は超えてるんじゃないか？）になってるんだが…まあ魅異の実際の強さを読み取れるだけ凄いな。

いや、第一形態の能力でこれなら二形態以降のライフはどれだけ多

いんだ？

「それじゃあ別々行動にして後で合流するのは？」

「おっ良いねそれ！私は賛成！」

「まあ良いか。集合場所は？」

「ラスボスのステージだよ。ちなみにこのゲームは常に新キャラや新ボスや新ステージが追加されていくからラスボスが変わる事が有るけどその時は新しい方のステージで会おうね。」

という訳で俺たちは別々の方向に進むことになった。

途中いろんなプレイヤーやモンスターを倒しながら進んで到着したのは小さな町だった。このゲームはプレイヤーが町を作って商売をするのも楽しみの一つらしい。

まあ商売をしてる奴らも結構な実力者な訳で…良い人のフリをして急に襲われたりした。まあ商売用のバスター力を奪って退場させてやったら襲ってこなくなっただが。

下手したら人間不信になるなこのゲーム。

その後コンピュータキャラからラスボスは何処かの海の真ん中に浮いてるらしい。オイオイ…

とりあえずそのラスボスが良く見える山が有るらしいので行ってみ

る事にするか。

「ハア、オンラインなのに自分以外のプレイヤーが敵とは…普通は協力して倒したりだと思っけどなあ。」

「大変そうですが…まだまだですね。」

おつ、魅異の社長秘書である几骨さんだ。確か読心術が使えるんだっけ。

「前にも言いましたがこれは読心術ではありません。この程度も覚えられない頭なんですか？」

いいえ読心術のイメージが強く、ところで何で几骨さんが此処に？

「勇者社での実験モニターとバグなどが無いかの確認の為です。発売前からテストプレーなどの時からやってたのでレベルは高いですよ。」

それはある意味得な役割ですね。でもテストプレーとか大変だったでしょう？

「まあそうね。貴方もこの程度で大変だと言つてるとそのうち日常で社長にやられる事になりますよ。」

アハハハハ…まあその時はその時で何とかしますよ。

「まあ良いですけど　そういえば時々マンションの服屋に来る貴方の知り合いが上半身裸でこの山の頂上に居ましたよ。あと小学生も数人。」

服屋？

「貴方の家の近くにあるマンションです。その最上階に服屋があるんですが時々その裸の人と小学生二人が買い物に来ますよ。同じマンションの屋上に住んでたはずですよ。」

雑魚ベーク！あいつもこのゲームを持ってたか。恐らくアミュリーと雨双も一緒だな。

「それでは私はバグ探しをしないといけないので　あと私が思考を読めるからって思考だけでの会話は控えてください。特殊能力なので結構疲れますから。」

「あつ、スミマセン。ところでこのゲーム内で怪我ってするんですよね？」

「はい。此処は特星の設定ではありませんので怪我をしますが現実とは関係ないので安心してください。」

几骨さんは質問に答えたら山を降りていった。俺はとりあえず雑魚ベークも見つけるか。

「結構登ったが頂上まで後どれだけなんだよ？」

「フハハハハ！大変そうですね！」

頂上じゃないのに雑魚ベ―登場。いや別に出てこなくても良いんだが。

「さあさあさあ！今日こそこのゲームの世界で決着をつけようではありませんか！！」

「今までの勝負の合計は全部俺の勝ちだろ。」

「いきますよおっ！」

聞いてないし あと自然すぎて気付かなかったが几骨さんが言ってたように上半身裸だな。

うんコイツの変態度もエスカレートしてきたな。

「超必殺・ジャンピング レインボオオオウ キイイックウツ！！」

雑魚ベ―が八人に分身して同時にジャンピングキックで攻撃してくる。

待て待て！虹は七色だろ！？何で八人での攻撃なんだ！？

「ってか色分け位しゴハアツ！！」

台詞は最後まで喋らせるおおっ！！これは一種の不意打ちに分類されるぞおお！！

「お次はあ　「「「「必殺・ジャンピング　ミラー　キイイッ  
クウッ！！！！」」」」」

今度は六人での分身攻撃かよ！しかもキツイ直撃！！

「ハッハッハッハアッ！！私の実力を思い知りましたかあっ！  
？」

不意打ちとはいえ今回はゲームの中だし負けるかもしれない！くそ、  
どうすれば

「とどめですよっ！！ジャンピング　」

「いい加減にしろ。アイシクル！」

「ぎゃあああああ！！！！」

氷の数本の小さな氷柱によって串刺しになる雑魚べー。助かった！

「まったく何をしてるんだか。」

「あつ、悟ですー。」

現れたのは氷柱を飛ばした本人である雨双とアミュリーだった。つ  
てか雑魚べーは串刺し状態なのに現実世界に戻らないとは　実際の  
ライフはどれだけあるんだ？

「雨双、さっきはマジで助かった。」

「そうか？雑魚べー程度に本気で危険だったとはお前らしいな。」



感謝の言葉を送ってるのにその態度はないだろオイ。

「あれ？その後ろの二人は？」

「どうも！私はアミューリーと雨双のクラスメートの四季間　由希です！」

「同じくアタシは縁異　恵音美って言うって基本は元気でかなり天才で非常に強くてとっても可愛いのが特徴だよ！」

「おお！よろしくな！」

前に雑魚ベーから聞いた事がある。確か由希が他人の身体能力が分かる能力で恵音美はいろいろな物を消し去る能力だっけ。

「そういえば此処って特殊能力は使えなかったよな？」

「さっきの私の技はゲームの特技で使っただけだ。さっき此処を通って行った魅異さんの社長秘書は管理者みたいなものだから使えるらしいが。」

確かに几骨さんはちゃんと相手の思考を読み取ってたからな。

「これだけ居れば十分だ。ラスボスのステージへ向かうぞ。」

「えっ？特別なアイテムとかは？」

「ああそれなら必要ありませんよ！」

「アタシは紙飛行機さえあれば何処へでも飛んでいけるよ！」

恵音美が馬鹿な発言をしていたがそれは置いて このメンバーで勝てるか非常に心配だ。

確かに途中大量の敵プレイヤーを倒してきたがラスボスは速すぎる。まだ誰も行ってない筈だ。

「途中で魅異さんを見つければ良いだろ。」

「おっ、それもそうだな。」

そういえばラスボスのステージで二人と待ち合わせしてたな。

「それなら行くか。 のわぁっ!？」

雨双が驚いた声で叫ぶ。 原因は雑魚ベーが急に女子四人に抱きついたからだ。 地球なら即逮捕だなコイツ。

「何をやってるんだ？」

とりあえず聞いておく。 此処で抱きついていると答えたらこの雑魚ベーは偽者だ。

「普通の体力回復法ですよおっ！ 四人同時の抱き心地は最高ですね  
え」

今の雑魚ベーをみたら誰もが貴族なんて思わないだろう。 誰がどう見てもただの変態にしか見えない！

「それじゃあ体力回復しながら山を降りましょう!」

「はっ? ちよっ きゃああああ!」

「面白いですー!」

「確かにこれは楽しいね!」

「この状態ならアタシは最強だね!」

雑魚ベーはそのまま四人を抱いたまま山を転がり降りていった。

四人とも雑魚ベーが抱いているので背中などは痛くないらしく全員（約一名を除き）楽しそうだった。最近の小学生は凄いな ってか雨双がまともな悲鳴を上げてる事が非常に珍しい。

さて、山を転がって降りていったのは別に良いがその後が大変だ。勢いのついたあの五人は山を抜けても転がり続けて街中に突入! 何と数十倍上のレベルのプレーヤー達を次々と轢き倒しながら町を次々と破壊していく!

町の中を転がりぬけてしばらくした後、五人一緒に高さ五メートル位の崖から大きな海に季節外れのダイブした。夏なら普通の水泳で冬なら寒中水泳だが秋の場合は言い訳できないぞ。

ってか誰にどうして言い訳をするんだ? 意味分からね。

「ところで大丈夫かー？」

.....返答は無し　か。

「少しの間だったがこのゲームの世界でお前達と冒険できて俺は楽しかったぜ。」

「勝手に殺すな。」

「うお！何で後ろに居るんだお前等！？」

後ろにはびしょ濡れの五人の姿。一応海には落ちたんだな。

「海に落ちた直後に海岸側に流されたです。」

「そこから私達は此处まで歩いてきたんだよ！」

「そうそう！　結局何でアタシ達は此处に居るの？」

アミユリーと由希が分かりやすく説明してくれる。恵音美はまったく分かっていない様子だが。

「いやあ、とにかく皆無事で良かったですねえ！これは私の愛の力のおかげですよっ！アーッハッハッハッハッ！！」

「　雑魚ベー、ちょっとこっちに来い。」

反省するどころか自分のおかげで助かったと大笑いする雑魚ベーを近くの森林の中に連れて行く。多分雑魚ベーのライフはこれなくなるな。

「あれ、あの二人は何をしに行つたのかな？」

「虫取り！」

由希の質問に恵音美が自信満々で答えるが　んな訳あるか。あの二人なら虫殺しレベルを軽く超えるはずだ。

えっ、ツツコミを入れるところが違う？悪いワザとだ。

恐らく雑魚ベーに自動販売機くらいの氷の塊でも落とされるだろう。

「ッドゴオオオオオオオオオオン！！！！！！」

「何事ー！？」

由希と恵音美が同時に驚く。声には出していないが俺も驚いたぞ！何故かつて？

森林が高層ビル位の大きさの氷の塊によつて潰されたからだ。

…雨双の事だから今ゲーム内で自分が使える最強技を使つたんだろう。転がってくる途中に高レベルの敵を倒してかなりレベルアップしてるからな。

「まったく。」

おっ、戻ってきた。雑魚ベーは…流石にライフが無くなったか？

「ってか雨双、さっきの技を此処からラスボスに使えば良いんじゃないや

ないのか？ほら真ん中にラスボスが浮いてるし。」

俺も最初は気付かなかったが此処はラスボスステージの様子。目を凝らせば海の真ん中に誰かが浮いてるのが見える。

「そんな事をして良いのか？」

「大丈夫だつて。このゲーム内ではええっと…何かは要らないって魅異が言ってたし。」

「マナーやエチケットだよ。」

ハイ見事に狙ったタイミングで登場してきたな魅異。後ろに若如も居る。

「あれ？知らない小学生も居るね！よおっし、ラスボス突入前に自己紹介頼むよっ！」

若如の提案により自己紹介をする事に。

（自己紹介中）

自己紹介は終了！どうやら若如は雨双と知り合いみたいだったから関係を聞いてみると二人共自分の弟子だと言っていた。そういえば若如って魅異の弟子だったっけ。

俺はもう両方の知り合いだから自己紹介はせず聞いていただけだぞ。

ちなみに魅異達は俺が山に行ってる間にウィルや羽双と会ったらしい。いやいや連れて来いよ。

「ついでに私はチート並の実力だから全員がやられた時のみ戦うね」。

こういう時だけチートって事を認めるなコラ。

まっ、魅異が居なくても大丈夫なところを見せてやろうじゃないか！

「それじゃあ雨双、あの真ん中に居る奴に不意打ちで仕留めてくれ。」

「分かった。ビッグアイスレクタングル！」

英単語をそのまんま組み合わせただけの名前だな…ちなみにレクタングルは長方形って意味だ。

高層ビル並の大きさの氷の塊が海の真ん中に居る奴に落下するぜ！

「バリイイイイン！！」

「…マジですか。」

一言溜息混じりに呟く俺。海の真ん中に居る奴があの氷を粉々にしたからだ。

うわゝ、綺麗だな。粉々になった氷が結晶のようだなー。

「ハハ…ハハハハハ…ハハハハハハハって勝てるか！！」

冷静に考える俺！相手は所詮はプレイヤーが倒せるように設定されたラスボス！話しかけなければバトルイベントは発生しないはず！

「あつ、こつちに来たよっ！」

若如の言葉にボソボソ話してた全員が海の方に振り向く。確かにこつちに向かってきてるな。人みたいな形で…って！

「魅異！…のぬいぐるみ人形か？」

「あのラスボスは勇者社で売られてる私の等身大ぬいぐるみをサンブルに作られているんだよ。ゲームだから技名は喋れるようにしてあるよ。」

そんな物売ってるのかよ…ってか買う奴いるのか？

「強さはどのくらいです？」

「私の第一形態の強さを大体移してあるよ。」

アミユリーの質問に嫌な答えをアツサリ返す魅異。でも第一形態ならRT・DX+でも倒せたから俺達でも倒せ…

【勇者拳だよ。】

「ズゴオッ！」

あれ？恵音美と由希と雨双が消えた？



「わわゝ、凄い威力だねっ！」

「あー、若如？恵音美と由希と雨双は？」

「さっきの技でライフが無くなって消滅したよ…」

マジですかああ！！

「はいコレ飲んでっ！」

「えっ？ああ。」

若如から渡された飲み物を飲み干す。水みたいに味は無いが。

「これでどうするんだ？」

「さっきのは一定時間だけ不老不死むてきになれる薬なのさっ！」

おおっ！これでぬいぐるみの魅異の攻撃なんか怖くないぜ！

【次は勇者砲だよ。】

見えない速さの攻撃が俺に当たったみたいだが何の変化も無い。恐らく何処かに跳ね返ったのだろう。

「本当は私なら無敵効果くらい無視できるけどね。」（ボソッ）

【ありゃゝ、無敵状態だったか。】

ぬいぐるみの口が開かずに聞こえるって事は音声システムもこのゲ

ームについてなのか。

「あつ、無敵効果がきれたよっ!」

【それならチャンスだね。勇者拳。】

「ズゴオオオオンッ!!!」

「…あれ? 此処は家か?」

「ありやりや、私もぬいぐるみにやられたんだ。まあ魅異の力が大  
体コピーされてるんじゃないのさっ! アッハッハッハッハ  
!」

何処までポジティブ思考なんだ若如…おっとさつさと視点交替をし  
ないとな。

@魅異視点@

「ゲームのステージの表面を完全消滅させるとはね。」

【あれ、次は私の本物が相手なの? 普通に本物には勝てないっ  
て。】

「そう思っただったら自動消滅して欲しいんだけど。」

【残念ながらお断りだよ。万が一私が勝つて事があるかもしれないからね。】

「普通に無いと思うけどまあ良いや。面倒だけど直接相手をするよ。」

あつ、私視点だね。私のぬいぐるみがステージの表面を消滅させちゃったんだよ。

それが原因でライフが残ってるキャラも居ないし…あれ？私達以外にもう一人ライフの残ってるキャラが居るみたいだけどまあ良いや。

今の私は第二形態だから一形態のぬいぐるみに負けるはずがないよ。

「魅異流技 物理学無視法だよ。」

【物理学無視法？】

正確には物理学以外も無視できるんだけどね。まあ要するに全ての攻撃が私に当たらなくなるんだよ。

【まあ良いや。勇者拳だよ。】

勇者拳を使ってくるけど私をすり抜ける。これは他にも熱や音や光なども一定にしか感じないようになるからね。

この技の欠点は磁力や重力は普通に受けるところとこの技を使ってる間はこっちも攻撃できない事と記憶や感情への攻撃とかは無視で

きない事かな。元々私には記憶や感情の攻撃は通じないから問題ないよ。まあ重力や磁力も異常なほど強力じゃないと基本的には私に攻撃技として通じないけどね。

ちなみにこの技の強力技はこの問題も完全に解決してるけど強すぎるから流石に使わない様にしてるよ。

あと私が何でこんなに強いかわけど…まあ正式な理由は特になしって事で。

だから修行して強くなったとか遺伝子によって強くなったとかじゃなくて普通に最初からって事だよ。本当は何か有る可能性も否定できないけどね。

でも理由無しの方が常識外って感じがしない？私は異常者・神離・変人・馬鹿のイカれた大勇者って呼ばれるには相応しいよね。

【やっぱり当たらないね。】

「あゝ、まだやってたんだ？」

説明に夢中で忘れてた。

「ミネラルレーザーだよ。」

物理学無視法の効果をなくしてミネラルレーザーで完全消滅させる。

私は本気じゃなかったけど相手も多分本気じゃなかったね。性格もコピーしてるなら負けても良いから本気は出さない主義のはずだからね。

「今すぐゲームのステージを直すのも良いけど数日間位全部のこのゲームをエラーが発生するようにして数日後にまた遊べるようになる方が勇者社の皆の仕事（主にお問い合わせの電話だけどね〜）が増えて面白いからそうしよう。一人残ってるけど放って置こう。」

数日後にゲームを再開した人達が上半身裸で倒れてた人をモンスターだと間違えて襲ったら急に起きて女子小学生を探し始めたから皆怖がって逃げるって事件が有ったらしいよ。

## 76話：新ゲームで遊びましょう！（後書き）

@ 悟視点 @

「76話&イラスト更新。今回描いたのは羽双様だ。」

「何で様をつけてるかは知らんが一つ思う事がある。」

「何だ？」

「全然絵が上手にならないな。」

「…あー、うん まあ。」

「それ以前に小説のネタがないんじゃないか？」

「…あー、うん まあ。」

「……………」

「場の空気が一気に下がったな テンションあげる。」

「んっ？ああ分かったぜ！」

「今回は魅異の技を少し紹介するつもりで書いたんだ。」

「ああ物理学無視法だっけ？明らかにチート技だろあれ！」

「フッフッフ、まだ弱点があるだけマシだ！その技の強力版は弱点無しの反則技だぞ！まあ魅異は使うつもりはないらしいが。」

「ってか理由無しで生まれつきあの實力って うらやましい！」

「強さの秘密は一応有るかもしれないぞ！」

「やっぱり？」

「ああ。多分な！それでは皆さん次回もお楽しみにっ！」

## 77話：強盗（より雑魚ベー）を何とかしよう！

@雨双視点@

今日の授業もまともに授業といえるものはなく雑魚ベーの好き放題状態になっているな。

「おい雑魚ベー、いい加減に勉強の方を進めたらどうだ？」

「駄目ですよおっ！勉強は成長と共にしていくもの、言うならば成長の証という事です！」

しつかあし！それは小学生がするということ事は中学生への道を歩むというもの！言い換えれば小学生だけの可愛さを失う破滅への第一歩だという事です！これによって小学生らしい可愛い子が激減するのですよおっ！

そんな事が有って良いのですか！？いいえ良い訳ありません！そんな事が有るならば私は可愛い女の子以外の全てを敵にまわしても阻止します！

それ以前にこの特星は不老不死の星！成長はしないこの星で成長の為の一步を歩む必要なんてまったく無し！この星の中では同じ日々を送る事が平和の秘訣なのです！勉強をして小学生が成長すればいつかは中学生並みの知識をつけるはずですよ！それは可愛い女の子達が減っていく それは世界経済の崩壊や宇宙消滅なんかより重大な大問題ですよ！特に！貴方やアミューリーさんがそうなってしまつては ああもう私は生きていけませんよおおおっ！！！！」

「あー、分かったから黙れ。」

本当は何を言ってるのか全然分からないが理解しない方が私は良いと思う。

「ドガアアッ！！」

！？

「オイお前等あ！！この学校内に有る金目の物と優勝トロフィーなどを全てこの場に持って来い！！」

強盗か？しかも十数人くらい居るな。ところで何かの要求をするなら此処じゃなくて職員室に行くんじゃないか？

「その貴方達、可愛い女の子を人質に取るのは良くない事ですよおっ！ってかどうどうと女の子に触れる事が出来て良いですねえ。」

「

「ハア！？」

強盗犯達は急な雑魚ベーの馬鹿発言に少し困惑する。何故か教室に来た犯人達も雑魚ベーほど馬鹿ではないようだ。

「お前何を言ってるやがる！第一こんなガキに触れて何がうれしいんだ！？高校生なら確かにまだ分かるけどなあ！」

雑魚ベーを小馬鹿にするように軽く笑いながらそういう強盗犯。それなら高校に行けば良いだろ。



「むむっ、そこおっ！さっき女の子を汚す発言をしましたねえ！？  
こうなったら私が小学生の女の子の良さを教えてあげましょっつ！」  
雑魚ベアーにスイッチが入ったか？この状態になると他人の発言権を  
許さないような雑魚ベアーの解説がしばらく続く。その勢いは相手を  
洗脳する時もあるらしい。

この状態の雑魚ベアーは一般的に『スケベープログラム』を発動した  
状態と言われてるらしい。

「いいですか！そもそも女の子と言っても範囲がかなり広い言い方  
のもの！しかし私はそれを完全に限定してしまう法則を見つけたの  
です！今は恐らく十八歳未満の女性 いや、十八歳以上でも可愛か  
つたら女の子と呼ばれてますがまだまだ甘い！女の子の表現を使う  
為には子供らしさが必要なのです！

そこの一番先頭に居る貴方！子供といえほどの位の子を想像します  
か！？」

「えっ？あ しょ、小学生かな？」

強盗犯は急に話を振られて動揺してるな。

「その通りです！すなわち女の子というのは子供を表しているので  
す！だから普通は小学生か保育園児、最悪でも小学生らしい中学生  
を表すものですよおおおおっ！！！！

また女子の言葉についても同様です！女子は女の子を短縮した言葉  
！ですからこれも基本は小学生に対して使うべきなのです！」

「分かったから要求に」

「甘い！甘すぎますよおおっ！！」

「バゴオオオッ！！」

早くしろと言いかけた強盗犯を蹴り飛ばす雑魚べー。普段と威力が違いすぎるぞ。

「私はまだ女の子の範囲について話ただけで女の子の良さについては話しては居ませんっ！！さっきまでの話は言っならば準備運動！！今からが本番ですよおおっ！！」

小学生の女子の良さはズバリ何か！その左側の貴方が答えなさい！！」

「ええ！？ 見かけ？」

「たわけ者おおおおっ！！」

「ドガアッ！バキイイツ！ズゴオオオオオオン！！！！」

さっきの答えで外れなのか？

「小学生の女子の良さ！それは当然全てです！小学生はバランスよく良さがあるもの！それを一つや二つだけ良さが有ると言う者は大違い！！可愛い女子小学生であればどんな衣装を着てもワンダフルと言いたくなる位の可愛さが必ずと言って良いほどついてくるのが良いのです！！その存在はまさに世界中が納得するようなものです！！当然異議は認めません！！」

しかしバランス良く何でも似合う小学生にでも差が出てきます！！  
何故なら口調や本人の特徴によりそれに合った服を着ることにより  
ポイントがプラスされるからですよおっ！！

さあ皆さんも想像してみなさい！自分好みの女の子が自分好みの衣  
装を着て自分好みの口調で話しかけてくれる姿を！！」

強盗犯の数人がそれぞれ自分好みの女子を想像出来たのか顔がにや  
けている。

「その想像出来てない人達は、論外ですっ！！ふう、それそ  
れそれそれそれそれええっ！！！！」

そういつて雑魚ベーは想像出来て居ないと思われる犯人達を蹴り飛  
ばす。見事に窓を割って飛んでいった。

「フツ、此処まで何か聞きたい事はありますか？」

やっと喋るチャンスを与える気らしい。まあ残りは洗脳された数人  
しか居ないが。

「あの！俺は現実の子よりアニメキャラの方が好きなんですが！」

単なるオタクじゃないかこの犯人。

「確かにアニメキャラでも確かに可愛いのも有りますねえ。まずア  
ニメキャラの良さを知る前に多少貴方達は萌えについて理解する必  
要があります！」

そもそも萌えの言葉自体が世間全体に知れ渡ったのは大よそ二千年前後！！言葉自体の発生はもう少し前です！しかし非常に浅い歴史だという事が分かります　が！！それもその筈です！何故なら元々、萌えの言葉自体はゲームやアニメなどのキャラに使われていたのです！！ですからそれらが普及する前にこの言葉が生まれるはずがないのです！！まあ発生当時はアニメやゲームにちゃんと使われていたから良いとしましょう！！しかし今はどうですか！？世間全体で言葉が有名になったせいで実際の人にはまで萌えの言葉が使われているんですよ！！　まあ私も時々普通の女の子相手に使いますけどね。だってアミューリーさんや雨双さんはとっても可愛いですし！！まあ、出来る限りは普通の人には使わないように努力をしているだけマシです！！しかし現代の人はそれに注意しようともせずそこから辺でバンバン使いまくってるんですよ！！第一！萌えはキャラの可愛さによって感情がそのキャラに好意を抱く事によってグラグラッときた時に使うべきなのです！！それなのに最近には単に可愛いだけで萌え萌え叫ぶ輩が多すぎです！！言葉自体が世間中に知れ渡る事は大いに構いません！むしろ一緒に語り合える仲間が増えるので大歓迎！しっかああし！流行する事によってその言葉の価値観がどんどん下がっていく事は私はどおおおおおしても許せません！！！！そのような迷惑を起こす者は論外！人間として一から修正するべきです！！そんな奴は私が武力も適用して強制解説しますよ　おおおおおおつ！！！！！！」

これだけの量を語りつくして息切れ一つしないとは　スケベープログラム　恐るべし。　ってか語り合われたら私が困る事になる気がする。

それ以前に作者は良くこれだけの長文を書けたものだ。　読者から誤解されて冷たい目線で見られても私は知らないぞ。

「それで次はアニメキャラについてですが私が嫌いな訳が有りません！しかしアニメの声優などで実際に小学生の役を小学生がやっているとこの事はほとんど有りません！ってか私もその例は聞いた事ありません！しかし本当の女の子好きなら声なんかよりもまずはアニメの絵に注目してみなさい！

例えばアニメで常に萌え要素を出してるアニメと稀に萌え要素が出るアニメが有ったとしましょう！その二つのアニメで萌える部分が出たとしたらどっちの方が心情の変化が大きいですか？実は稀に出る方が嬉しさというのは大きい筈です！常に萌える部分が出ていたら慣れてしまつて嬉しさが半減します！まあそれ以上のシーンがあれば話は別ですが　クフフフフ　

気持ち悪さ全開だ。　どうでも良いが小学生の男子数名が雑魚ベーの話に納得している。何か即帰りたいんだが。

あと私は雑魚ベーの話で周りが感染する状態をスケベーウイルスと名づける事にした。

「まだまだあつ！現実よりアニメの方が良い部分だつて有るのですよあつ！！そうですね　まずはやはり色での表現方法です！アニメの絵といえは現実の色に比べて少ない色で表現しなくてはなりません！が逆にシンプルな色合いで表現できるからこそアニメでの可愛さがあるのです！特に小学生や保育園児の女の子の女の子の絵なんか　あああああもうたまりませんよおおおおあつ！！後は擬人化キャラ！これは実際の人間ではまずありえませんがアニメでは十分オツケーです！まあ実際では猫耳などを使えば何とかありませんが実際に猫耳が生えている訳ではないので擬人化とは言いません！　あつ、今日の雨双さんとアミューさんの衣装は猫耳に決定しておきましょう。他にアニメの良いところ有るとしたらやっぱり

髪や瞳の色ですよねえ！これがアニメの中で特に重要な事なのですよおっ！！例えば可愛い水色の髪の子のアニメがあったとしましゅう！！もしもそのキャラのコスプレを本物の人がやっても必ずアニメほど可愛くはない筈です！何故ならそのような髪の色はアニメだからこそ似合うのです！！実写版でやっても微妙に絶対に可愛さが出ません！！瞳の場合も同様！！」

「それを言ったらこの小説のキャラの場合はどうする？髪や瞳が異色のキャラも多いぞ。」

「甘いですよ雨双さん！！小説自体は文字によって面白さを表現するもの！！キャラがどのような見掛けなのかは読者の皆さんが決めるのです！！異色の髪などのキャラが出てくる小説で実写版のキャラをイメージしますか！？違いますよねえ！恐らく全てのキャラはアニメのような状態で読者の前の皆には表されてる筈ですよおっ！！！！」

妄想と現実をピッタリ混ぜたような発言だな。

「さて、私の話は此処までですよおっ。この中に私の意見に賛成してくれる人は居ますか？もし賛成するなら変態になる覚悟で可愛い女子探し同盟を結成してください！！」

『おおおおおおおおおっ！！！！』

クラスのほとんどの男子生徒が雑魚ベーに賛成するとは。残った犯人達も完全に洗脳されたな。もう私は帰る。

この後に私とアミューリーは雑魚ベーによって猫耳を装着されるのだ  
った。

77話：強盗（より雑魚べー）を何とかしよう！（後書き）

@ 悟視点 @

「77話&イラスト更新！今回のイラストはウィルの絵だ。」

「おおっ！お前にしてはなかなかの出来じゃないか！」

「ちなみにその絵のテレビバージョンも描いたからその内投稿する。」

「やっぱりウィル最高！元勇者万歳！」

「ツッコミ役の言う台詞かそれ？まあ良いか。それでは皆さん次回もお楽しみに！」



## 78話：事件が起これば巻き添え食らう

@ 悟視点 @

「悟君！悟君！大ニュースだミュン！」

学校が休みの朝、俺が朝飯を食つてるところ廊下から騒いで走ってくる若如。近所迷惑なのは置いてどうしたんだ？

「学校だよ！学校！私達の学校で」

「ツルツ」

「「あ」」

「ドガアアン！ガツシャアアアアアン！！」

「ああ！俺の朝飯が じゃなくて！大丈夫か若如？」

「あちゃー、派手に突っ込んでしまったね。」

全然無事の様子。さっきの状況を説明すると若如が滑つてそのまま俺の朝食とテーブルを巻き込んで窓ごと庭に突っ込んだ。

「それで大ニュースって何だったんだ？ついでにお前の分の朝食はそのガラス残骸の下敷きになってるから残ってないぞ。」

「マジですかい！？それで大ニュースって言うのは学校だよ！」

「学校がどうした？」

新しく茶を入れてきて飲む。テーブルとガラスの残骸は片付けが面倒なのでスルー。ってか茶が熱い！

「今日の数時間前に学校の不老不死ベールの宝石が盗まれたのさ！」

「そうか。」

「ありえ？」

予想外の答えだったらしくたった二文字を咬んでしまった若如。不老不死ベールの宝石って前も盗まれた事が有った石だし別に俺は動じないぞ。

「不老不死ベールの宝石っていうのはこの星の大事な宝石でこの星で不老不死なのはその宝石のおかげなんだ！」

「ああ知ってるぞ。」

「しかも犯人は魅異の可能性が高いんだって！」

「そうか。」

「あれれれれえ？」

いや、別に驚かないぞ俺は。魅異なら宝石を盗む事だって簡単に出て来るだろうし珍しいからという理由で盗んでもおかしくはない。

「それで今は特星本部で取り調べ中らしいよ！」

「マジで!?!」

「いやいや驚くところが違うよね!」

だつて魅異だぞ!面倒な取り調べなんかに同行するはずがない!捕まった率はもつと低い!あの魅異を捕まえれる奴なんかこの世にもあの世にも居るはずがない!

「それでどうなったんだ?」

「それが魅異の目撃情報が本人が取調べを受けてる時にも有ったのさ!特星本部ではそれが偽者の魅異だという人と本物の魅異の分身だという人が居るといふ人に分かれてるんだよ!」

「それは大変そうだな。」

「つて訳で悟君の出番なのさ!」

「何で?」

いや確かに前回に盗まれた時も俺が何とかしたけどそれは帝国に行かないと俺が魅異にやられていたからであり本当は行く気はなかったんだぞ!

「それは悟君が…主人公だからだよ!」

主人公だから!?!なるほどそういうことか!!

「よし分かった!後は俺に任せとけえええ!!」

俺は若如が壊した窓から庭に出てダッシュで走り抜ける！

「あつ、でも行くなら私の分を朝食を作って……って行っちゃった。」

「勢いで飛び出してきたまでは良いが何処に行けばいいんだ？」

とりあえず靴位は履いてくるんだっとな……でも今頃戻るのもカッコ悪いしな！。

今までは行く場所とかが決まってたから良いが今回は敵の場所も分からないし。

「とりあえず無料配布場所に行くか。」

（寮（烈の部屋））

日用品無料配布場所として俺が扱ってる烈の部屋に到着。烈とジャルスがのんびりケータイゲームでバトル中だった。

「って訳で使えそうなものを貰いに来てやったぞ。」

「どついう訳だよ！？」

「今日の朝の事件の事だ。」

「不老不死の石が盗まれた事件なら新聞に載ってたよ。魅異は特星中のレアなスライムと引き換えに取り調べに同行したって書いてあったよ。」

まあ魅異だし当然といえば当然か。おつ、虫除けスプレー発見。後は非常食とかも貰っておく。その他にも使えそうな物はいただいたぜ！

「ところでお前たちも暇なら行かないか？」

「俺は退屈だし行くぜ！！」

「僕は大変そうだから遠慮しておくよ。」

って訳でやられる事が分かりきってる烈が行くことになった。ジャルスは安全第一だから出番も減るんだぞ。

「それで悟！何処に向かうんだ！？」

「俺に聞くな！」

ちなみに新品の靴は履き心地がそこまで良くはなかった。まあ悪くもないし無料で貰ったものだから文句は言えない。文句は…

「この靴の履き心地が悪い！」

「ガンッ」

「いつてえ！」

殴って言うてやった。別に烈のだし文句を言っても問題はない。

「そういえば不老不死の何とかが盗まれたんなら今は不老不死じゃないのか!？」

「確か不老不死オーラはタンクが何かに溜めてあるから大丈夫だったはずだ。まあ前回の話だが。」

だが若如がガラスに突っ込んだときも怪我はしてなかったしおそらく今回も大丈夫だろう。

まあ時間が経てば効果がきれる可能性も有るから宝石を取り返すなら急いだほうが良いな。

「そんじゃあまずは特星本部へ行くうぜ! 魅異何か知ってる可能性が高いだろ!!」

「お前にしたらまともな意見だな。」

ってか魅異の事だから真犯人の招待や宝石の場所を知ってたりするかもな。単に俺への嫌がらせで知らないフリをしてるだけだったりして。

「まあ良いか。それじゃあ特星本部へ向かうぞ。」

「ところで俺は特星本部の場所が分からないんだが! 悟は知ってるか!？」

「…知るか。」

よく考えたら俺って特星の事はあまり詳しくないんだよな。おそらく特星の地理の問題が出たら半分以上間違えるだろう。

「多分だが瞑宰京の中にはあると思う。」

「この町の中か！だがこの町だけでも結構な広さだぞ！！」

まあ特星の中心の町だからな。ちなみに特星中心の町と言われている理由は不老不死の宝石が保管されてるかららしい。

その点を考えれば特星の中心の建物は俺達の高校って事になるな。

「おっそうだ！ケータイのナビ機能を使えば良いんじゃないか！？」

「烈が一日二回以上も良い意見を出すとは…丁度俺はケータイを持つてるぞ。」

どれどれ現在地は…

【国外】

あっ…

「悪いが俺のケータイは日本地図しか出せない…」

「しょうがないな！俺のは特星の地図も出せるぜ！！」

流石だ。どれどれ…

【充電切れです。充電してください。】

「……………」

「…………… やっちゃったぜ」

「気色悪い!!」

「バゴォッ!!」

「ぐほあっ!!!!」

さて、馬鹿も殴ったし近くの建物で聞き込みでもするか。此処から一番近いのは…

〈勇者社〉

「まったく、本部の場所も知らずによく犯人を見つけようなんて思いましたね。貴方達の頭は大丈夫ですか？」

「コイツはもう取り返しがつかないけど俺は大丈夫です。」

「オイ!どういう意味だそれ!!」

俺達は勇者社で几骨さんにあったかいお茶を入れてもらってくつろいでいる。あったかいお茶を飲むともうすぐ冬だなと思う時とかないか?今はまさにその時だ。



「それで特星本部の場所は分かりますか？」

「ええ。此処から少し歩けばつきますよ。しかし魅異さんのところまでたどり着ける可能性は低いですよ。」

「じゃあ烈を囿に……」

「何でだよ!!」

でも烈の事だから俺のほうに悲鳴を上げながら走ってくるだろうしなあ。

勇者社の製品で中に入る為の物とかはないのか？

「ないことも有りませんが勇者社まで巻き込む位なら諦めてください。」

「……また読心術ですか？」

「何！この人は読心術が使えるのか!？」

「読心術では有りませんよ。」

それを聞いて少し落ち込む烈。いや別に落ち込まなくてもいいだろ。

（特星本部）

いやあ、俺の予想では入り口に見張りとかが居ていきなり入れないという予想だったんだが実際は普通の自動ドアで普通に中に入れた。あと中の雰囲気も静かだと思っていたがビルの中で屋台などがやっていて非常に楽しそうな雰囲気だ。

…一応特星の中でも重要な場所なんだよな此処。

「とりあえず屋台の人に話を…って勝手に食べ物を買っな烈！」

烈はもう場の雰囲気にも馴染んだようだった。こ焼きやお好み焼きやこの季節なのにカキ氷などを食べていた。

「おおーい悟！此処の屋台の食べ物はかなり美味しいぞ！しかも値段が原価に近いしお得だ！！」

俺の話なんか聞いてねえなアイツ。ハア…先が思いやられる。

「オイ悟！屋台の人達の話によるとこのビルは本部の一部らしいぜ！！」

「一部？」

「特星本部ってのは世間的には此処を含めた本部全体を表す時と本部の中でも重要な部分だけを表す時があるらしい！！俺には全然意味が分からないがな！」

なるほど。特星本部ってのは建物の集合体って訳か。あとに理解できたら小学生でも理解できるだろ。

「あと魅異は特星本部の超豪華特別ルームに居るらしい！」

「道は分かるか？」

「確か此処の裏口からいけるはずだぜ！！」

「じゃあ向かうぞ！」

「「広っ！！」」

裏口から出たところはかなり広かった。真ん中に大広場があつてそこを周りには建物がいくつもある。ちなみに此処全体を囲むように薄い結界みたいなのが張られているな。

こんなに嚴重なのになんで正面からは簡単に入れるようになってるんだか。

「で、どの場所に魅異の馬鹿は居るんだ？」

「確か噴水に隠しスイッチがあるとか言つてたぜ！！」

何で噴水なんかスイッチをつけるかな。押す側の事も考えるよ本部。

「それじゃあ烈、押して来い。」

「嫌なんで俺なんだよ！此処は悟が行けよ！」

「逆になんで俺だよ！どうせお前なら濡れても普段と大して問題ないだろ！」

「そういえばそうだな！よっしゃ行つて来るぜ！！」

つて今ので納得したのか烈！？普通そこは反論するべきだろ！

「おっ、これかぁ！？」

「ポチッ、ガコーン」

んっ？何か地面に立つてる感覚が…つて落とし穴ですかい！？

だがこの主人公の悟様を甘く見るなよ！このまま簡単なトラップにアッサリと引つ掛かる俺じゃない！

落とし穴の端の部分を掴んで落ちるのを防ぐ！後は上にあがれば…

「このボタンか！？」

「ポチッ、ザッバァーン！」

次は大量の墨が降り注ぐ。つてか新品の靴が真っ黒になった！

「おい烈！ちよつと来い！」

「何だ！？つてお前は地獄からのモンスターか！」

へっ？いや俺は人間だが。

「なるほどコイツを倒したら魅異の部屋への道が開かれるって訳か  
！！」

確かにゲームとかで良くあるけど実際に有るかは冷静に考えてみる。  
どういう仕組みなのかが謎だろ。

「覚悟しろお！うおりやああああ！！」

つて突っ込んできた！全身真っ黒なだけでモンスターと決め付ける  
な！

「ツルン」

「のわぁっ！」

「ガスウツ！」

「おぼがはっ！」

烈が地面に溜まってた墨で滑ってそれでこける際に偶然足が俺の顔  
に見事にヒット！

それで俺は…落ちてます。

「ぎゃあああああああ！」

「チクシヨー！転ぶとは…って！モンスターは！？」

お前がさっき蹴り落としたから！

「…ハッハッハッ！この俺の前に空へでも逃げて行っただか！！」

んな訳あるかあっ！

「そついえば悟の悲鳴が聞こえたが…怪物に食われたか！！」

お前に蹴り落とされたんだよ！ああ…もう聞こえなくなってきた。

「この穴が隠し部屋への道だな！魅異の事だから豪華なものを食ってるはず！！是非横取りしに行くぜ！！！」

「結構高いところから落ちたな。ってか此処は何処だ？」

「おゝ、やっと来たねゝ。」

「おつ、魅異。」

落ちた場所はやけに豪華な部屋で城の一室みたいな感じだった。まあテレビとかゲームとかパソコンとかが有るから雰囲気は半減してるんだけどな。

そして魅異が居るから城の雰囲気は十パーセント位にまで激減している。

「真っ黒だから変人に見えるよゝ。」

「本物の変人が何を言うかと思えばそんな事か。」

「まあね〜。」

そこで威張るな。どうやったら今のが褒め言葉に聞こえるのか不思議なものだ。

「ところでゴハアツ！」

何か上から落ちてきた！

「おっ！魅異じゃないか！！！」

「いらっしやい〜。」

烈かよ。こいつめさつき蹴り落としやがって！

「ところで魅異！悟が真っ黒なモンスターに食われちまったんだ！！！」

「真っ黒なモンスターってそれだよね〜？」

そういつて烈に踏まれている俺を指差す魅異。それ扱いかよ！？

「うおわっ！こんな所に居たのか地獄からのモンスターめっ！！！」

「だから違うつての！」

「のわあっ！このモンスターの腹の中でまだ生きてたのか悟！？恐らくお前は死んでもしっこく悪霊として残るだろうな！！！」

「食われてない食われてない。ってかお前の方が悪霊になる可能性は高いだろ！」

「烈さとる、あれは悪霊じゃなくてダーク悟ンジャーRっていうんだよ」。

なんだその変な名前は！？

「何っ！あの有名なダーク悟ンジャーRだったのか！！モンスターと間違えて悪かった！！」

「有名なのかよ！？ってか何故にR！？」

「雷之の苗字からRが付いたって公式に決まってるみたいだね」。

公式設定決めた奴は出て来い！名誉何とか罪で訴える！

「ダーク悟ンジャーRの公式設定を決めたのは俺だ！」

ボケ役か。相手するのも面倒だからスルーの方針で。

「うおい！」

「ダーク悟ンジャーR！伝説の神離銃しんじゅうを見せてくれ！」

ボケ役、神離銃って？

「相手するのも面倒だからスルーの方針で。」

うおい！モノマネするな！



「はいはい。神離銃ってのは神離槍に並ぶ伝説の武器の一つだ！」

マジでそんなものを持つてるのか！？

「ああ当然！魅異の力が封じ込められた武器だからな！神離槍もそうなんだが普段は力が封印されてるぞ。魅異は力を封印した神離槍であの実力だからな。」

って事は神離槍は普通の竹槍と同じか？

「基本は絶対に折れたり壊れたりしない事以外はまあ同じだな。」

それで神離銃は何処にある？

「秘密だ。烈には今日は朝飯を食べてないから出せない言ひ訳をしておけば良いんじゃないか？」

分かった。

「悪いが今日は朝飯を食ってないんだ。」

「それならしょうがないな！また今度見せてくれよ！！」

「はいはい。」

まあ俺がダーク悟ンジャーRとして現れる事はもう無いだろうからボケ役に頼む事だな。

「そういえば神離の文字が付く武器ってどの位あるんだ？」

「そうだね、神離槍・神離剣・神離銃・神離刀・その他にもいろいろあるよ。それぞれ種類ずつしかないけどね。」

恐らく全部神離槍みたいな弱そうな武器なんだろうな。

「ところで今回の事件の犯人の場所を知らないか！？」

おっと本来の目的を忘れてた。

「知ってるけど言ったら面白くないから自分達で探せば。」

ちっ、やっぱり聞き出せないか。

「しょうがないから他の場所に聞きに行くぞ。」

「ちよつとまて悟！豪華なものをまだ食べてないぞ！！」

それが目的かよ！

「おっ！小さめの饅頭発見！いただきだ！！」

そういつてパックに入ってた小さめの饅頭を食べる烈。盗み食いの罪だな。

「ってか食べたならパックぐらい片付けろ。」

とりあえずゴミ箱に捨てるためパックを持つ。

「魅異、ゴミ箱は何処だ？」

「そのコンビニの袋だよ。」

豪華な部屋に合わないものをまた発見。とりあえずゴミ袋にゴミを捨てておく。

「ていやー!!」

「えっ…のあつ！」

顔に何かがついてる！誰か取ってくれ！

「このやろ！このやろ！」

「皮膚を引っ張るな！って！ちょ 痛い！」

「そこら辺にしといたら？」

「むう。」

魅異の言葉で何とか引っ張り攻撃を止める小さな子供。 小さな子供。 凄くミニサイズだ。

「ってかなり小さっ！なんだお前!？」

「アタイはロミヤ！世界の人気者のロミヤ！」

「ジャッジャジャーン」

…また変な奴が現れたな。あー、次回へ続く。

## 78話：事件が起これば巻き添え食らう（後書き）

@ 悟視点 @

「78話&イラスト更新！また冒険系に入ってしまった…」

「毎回俺は巻き込まれて迷惑なんだが。」

「いやぁ、日常生活を描いてると冒険させたくなくて冒険シーンを書いてると日常生活を書きなくなる症状がでてさ。だから冒険の時は終わりが微妙になりがち。」

「オイオイ。」

「それでは皆さん次回もお楽しみに！」

## 79話：世界の人気者ロミヤ登場！

@悟視点@

「さて、単刀直入に聞くとお前は何者だ？」

「世界の人気」

「いやそれは前回に聞いたから！」

魅異に聞こうにもいつの間にか居なくなってるし烈は饅頭を食べて眠くなったらしく寝ている。結局俺が聞きだすしかないのか

「それじゃあその体は何なんだ？」

手乗りサイズの大きさなんだぞコイツ。明らかに普通じゃないだろ。

「アタイの胸が小さい理由？それを説明するにはまず貧乳の良さを」

「そんな事聞いてねええ！お前が小人みたいな理由を聞いてるんだ！」

「アタイは小人みたいじゃなくて実際に小人なんだよ！フフフン」

「だから小人じゃなくて ってあれ？………小人かお前。」

「確かにロミヤは小人だよ。」

っていつ来たんだ魅異。まあ恐らくさつきだが。

「魅異、コイツの詳細を教えてくださいないか？」

「別に良いよ。この子はロミヤって名前の女の子で見ての通り小人なんだよ。私の弟子の一人なんだけど弟子にしたのは特星に来てからだよ。ちなみに特殊能力はトラップを操る事だよ。」

「トラップ？」

「まあ狙った相手だけに発動する罠とかを仕掛けたりだよ。」

「アタイの実力は世界を揺るがすんだよ！」

こんな奴に揺るがされてたまるか。

「魅異！魅異！アタイが世界的に有名な事も説明してあげてよ！」

「そうそう忘れるところだった。ロミヤは本当に特星の一部で有名なんだよ。」

「マジでかよ！？」

「えっへん！」

威張り方が古いし子供っぽいぞ。

「ちなみに何で有名なんだ？小人だからか？」

「違うよ。ロミュは世にも珍しいスケベープログラムの使い手なんだよ。」

スケベープログラムって確か前に小学校が襲われた時に雑魚ベーが発動したってやつだよな。

確かネタのない作者でさえ小説で書くのを戸惑うほどの長文らしい。

「って、スケベープログラムの使い手って事はまさか…」

「当然だけど変態キャラだね。ちなみに雑魚ベーと同じくロリコンだけど雑魚ベーが狙う相手が保育園児から小学生高学年までののに対してロミヤの場合は小学生から高校生の貧乳キャラなんだよ。でも雑魚ベーみたいに暴走する事は少ないけどね。まあ変態界では人気が高いね。」

確かにある意味世界の人気者だな。

「そういえば何で俺は蹴られたんだ？」

「それはアタイの饅頭を勝手に食べたからだよ！」

「饅頭？」

「そう！ほらそのゴミ箱に入ってるパックの饅頭！」

ああ俺が捨てたやつか。なるほどそれで俺が食べたという事になって…ってちよつと待てい！饅頭を食ったのは烈だ！

「饅頭を食べたのは俺じゃな」



「問答無用だよ！覚悟！てりゃあ！」

ロミュの急な攻撃で俺はダメージを あれ？

「ていてい！とりゃ！ていてい！とりゃ！必殺パーンチ！」

ロミュ的にはコンボを決めてるつもりだろうが服にちょこちょこ当たる程度で俺にダメージは無い。

「ありえ？」

「それ。」

首を傾げてるロミヤをデコピンで弾き飛ばす。

「にゃうああ！」

「ボチャン」

弾き飛んだロミュは部屋に飾ってあった水槽の中に見事に入った。

「あわわわわあ！」

って！水槽の中に居る魚はピラニアじゃないか！

「いやぁ手ごたえのない相手だったよ！」

それでロミヤはピラニア数匹を串刺し状態でコンロで焼いてバクバク食べていた。言っとくがロミヤよりピラニアの方が大きいぞ。

「どんな胃をしてるんだコイツ？」

「自分の身体の数倍の量の食事じゃないと足りないんだよ。」

そういえば烈が食べた饅頭もロミヤからしたら巨大饅頭くらいの大きさだよな。通常サイズなら大食い選手じゃないか！

「今のアタイはせーちよーきだから沢山食べて通常の間人サイズになるんだよ！」

「それは無理だろ。」

「いやアタイになるって言うてるんだから絶対になる！地球はアタイを中心に回って」

「それは無い。」

いや それ以前に此処は特星だから地球がコイツ中心に回ってても意味が無いな。

「まあ変なのが居たのは良いとして手がかりなしか。」

「変なのってなんだー！もうちょっとアタイを尊敬しろー！」

「即断る！」

「手がかりを探すならまずは事件現場に向かうべきじゃない？」

「事件現場って事は 俺達の高校か！」

確かに犯人の手がかりとかあるかもしれないな。

「高校に向かうならロミヤも連れてってくれない？」

「そりやまたなんで？」

「いやゝ、頭のレベルが瞳がレモン色のアミューリーと同じ位だからねゝ。」

「ああなるほど。」

だが保育園児以下の賢さなのに高校で勉強させる意味があるのか？

それ以前に今は冒険編の筈なのにいつも無いシリアス感がマイナスになってる気がする。

「あとロミヤは神様をやってるからアミューリーと面識があるはずだよ。」

嘘おっ！？こんな馬鹿が神様をやってるのか！？ この星では神の存在は大した事無い存在なんだな。

「他にも変態メンバーだから雑魚ベーと面識が有るし私の弟子だから雨双とも面識がある筈だよ。」

「とりあえず雑魚ベーのメンバーを見つければ良いんだな。よしじやあ行くぜ！」

「烈はどうするの？」

「起きたら高校に行ったと伝えといてくれ！」

そういつてロミヤを肩に乗せ落ちてきた穴についていた梯子で上る。  
ってか梯子なんてあったのか！

まあ、そういう訳で高校まで来てみた。ハア 俺って何で問題ごとに巻き込まれるのかな？

アニメや漫画の主人公の苦勞がよく分かる。痛いほど分かる。

まあ俺も小説の主人公だからこそ苦勞するんだろうな。改めて主人公は大変だと思う今日の今この頃である。

まあ愚痴を言っても始まらない訳だが。

「大きいねえ。アタイの住んでる家でも犬小屋並の大きさなのに！」  
小人からしてそのサイズは大きい方なのか？

「そういう訳でアタイは疲れたからアイスでも買って！」

何がそういう訳でだ。話の繋がりがまったくないぞ。第一俺の胸ポケットに入ってるのにどうやったら疲れるのか問い詰めたい。

「断るっ。お前がそう言う時は次々何かを買っ事になりかねん。」

「むう、アタイの事をあまり知らないくせに。」

んっ妙に鋭いな。だがこういう奴には大抵多くの物を買わされると相場は決まっているのだ。だから用心するのに超した事は無いが

「しょうがない、今回だけだぞ。」

「やったあー！」

確か高校内にアイスの自販機が有ったはずだ。もちろんだが校長に許可をもらった上で設置してあるんだぞ。設置したいと言い出したのが校長だった気もするが。

「悟も食べれば！」

「いや断る。」

ロミヤは買ってやったアイスをバクバク食べ続ける。言っとくがアイスの量は恐らくロミヤ三人分位に値するがそれを一人で食べきった。

皆は自分の身長より少し高いくらいのパックに入ったアイスを全部食べきれんだろうか？いや恐らく普通は無理だろう。それを全て食べきるのであるから凄いな。小人でなければ食費が原因で生活できなくなるな。

「ところでどうすれば良いんだ？」

よく考えたら高校に来たのは良いが新しくなった高校の何処に不老不死の宝石があるのやら サッパリだ。

………考えても答えはでない。

だが考える。考え付かないと次の行動が起こせないし適当に行動して時間を無駄にするのは俺の主義に反する。

………そういえば腹減ったな。

だが今日は休みだし高校の購買屋もやってない。だがアイスを腹一杯食うのも悪くはない。…そんなにも金がないか。

「ZZZZZZ…」

ロミヤはアイスを食って満足したらしく熟睡中。俺も眠くなってきたが時間がもつたないので何とか睡魔と空腹に耐えてヒントを探す。

あと俺はどうするか考えて自販機の前で一時間近く立ってたみたいだ。時計がそれを物語っている。

「あー、眠い。」

この学校に本当に何かあるのか？とりあえず詳しい人に聞かないと。

「とはいえ…流石に誰も居ないか。」

休日の校舎にわざわざ来る奴なんか馬鹿が変態か泥棒くらいだろ。

「……………平和だな。」

何かのBGMをかけながら見ている人はヤル気のなさそうなのをかけてみれば雰囲気が出るぞー。

今の状況は何かヤル気に欠ける。今までなら事件が起これば走ったり戦ったりしてるだろ。今回はそんな事も無い。

まあ分かりやすく言うとアレだ。アニメとかの日常編でヤル気のなさそうな曲がかかってる時みたいな状況。

ってか俺が普段過ごしてる時より平和なんて俺の日常って一体：

と、まあいろいろ考えながら探しているわけだが何も無い。

「っだー！何も無い！」

アレから探し回って数十分だが特に結果はなし。

第一この校舎の広さは反則だ反則、レッドカード三枚。十階建ての高校なんか聞いたことも見たこともない。それに地下にはいろんな物があるし。

「ZZZZZZZ…」

チクショー、気持ち良さそうに寝やがって。

そういえば魅異とロミヤに勉強させるとかいう話をしたような……い  
かん、頭が平和ボケしてきた。

確かロミヤを連れてきた理由もそれだったな。だがそんな事をして  
いる場合じゃないよなあ……

今の俺には二つの選択肢が有る。ロミヤに勉強をさせてからヒント  
を探すか星一つの運命が懸かっているんだからヒントを探して勉強  
は今度にするかの二つだ。

「つてか眠気が……」

うーん……普通なら……ヒント探しを優先するだろう。しかし それだ  
となあ……

………

「あー、まったくもって何も見つからん！やっぱり此処には何も無  
いのか？」

「悟、アタイはこんな所を探し回るより外を探した方が良いと思う  
よ！」

「それもそうだな。外に何も無ければまた此処を探せば良いか。」



…アレから数日が経ったが特星中の何処を探しても見つからない。

「ないね。」

「ないな。」

外にも無いって事はやっぱり高校か？だが高校にも無かったしな。

「さて次は…」

「ほお、お前が我々の計画の邪魔をするものか。」

「「おお！敵発見！！」」

「えっ？ハア？いや確かに敵だが…」

「「覚悟…」」

「「グサアッ」

へ？

「ぎゃあああ！何か斬られた！何で怪我をする！？」

「フツ、不老不死の効果がきれた事にも気付かなかったのかアホが。」

意識が…だが敵は去ったからよし！後は誰かに助けてもらえば

「あ、それはムリムリ。」

「って作者ああ…!？」

イテテテ…斬られた場所が痛む。

「何故ムリかという途中で選択肢を間違えたから!…ってわけで諦める。」

「いや助けるよ…」

「現実をやり直そうなんて甘い甘い。」

「コンテニユーを」

「ノーコンテニユー! まあ選択肢を間違えた自分を後悔する事だな。ハッハッハッハッハッハッ! ほげえ!」

最後の最後で滑りやがった。

………

「あれ？」

目の前に見えるのは天井。そして俺の上にはかけ布団。下には病院にあるような固めのベッド。

「…夢オチ？」

って事は宝石も盗まれてなければ偽魅異も居ないのか？

…よっしゃあああ！！

「ワッショイ！」

何がワッショイだ？季節外れだしカタカナだし。

「うるせえ！これは全季節完全対応の完成品だあああ！！」

日本語は正しく頼む。そうじゃないと文字の入力ミスだと思われる  
だろ。

「それは作者が気にすべきところだろ。」

それにしても夢で良かったぜ。

「ってか作者は自分の評価を下げるような内容で自分のキャラを小説内に出す事はあまり無いからな。夢オチで当然だろ。」

やっぱりな。

「それじゃあさっさと宝石探した。」

へ？…もう一度言ってくれ。

「それじゃあさっさと宝石探した。」

…もう一度正しい日本語に直して頼む。

「それでは急いで宝石を探すぞ。」

…マジか？

「当然。あとお前が下向いて寝てたから小さいのが潰れてるぞ。」

「ふゆゝ…」

「本当だ。」

夢才チなのは選択肢の後からか。よく見れば此处は保健室だな。

「お前が廊下で寝たから俺が保健室まで歩いてやったんだ。お前視点だったから分からなかったと思うけどな。」

なるほどな。夢の中のシーンでもヤル気のないBGMをかけてた人おめでとう。

さて、それじゃあロミヤに勉強でもさせるか。

場所はやっぱり使い慣れた二年D組の教室だな。

よしもうすぐ到着だ。だが到着の前にロミヤすべきだろう。

「おーい、朝だぞ。」

実際は昼だがそこは置いてくれ。ってか起きないし。

教室に確か目覚まし時計があつたな。それを耳元で鳴らして起こすか。何でそんなものが有るかは分からないが有るんだからしかたない。

ドアを開けて中に入る。

「カツ、ドゴオオオオオオオン!!」

うお!何だ!?

「フッフッフ、主人公の現れる場所に必ず現れる!」

「そして毎回やられていく。」

「それが常識のライバルとその仲間だってば!」

「その名も永遠のライバル雑魚ベー!」

「氷使いの雨双。」

「五つの瞳をもつアミューリーだってば!」

「三人揃って此処にただいま参上ですよおおおつ!!」

そっいつて決めポーズをとる三人。痛い 痛すぎる。

「ふあああゝ、さて、ぐっすり眠ったしアタイ復活!」

「あれ、ロミヤさんじゃありませんか!」

「あつ！雑魚ベ―！それに雨双にアミユリー！」

ロミヤが起きて三人と世間話を始める。とりあえず俺は休憩しておくか。

「さて、それじゃあ勉強を始めるぞ。はいプリント。」

まずは基本中の基本の国語のプリントを配る。ちなみにロミヤのは小さいプリントに小さい鉛筆などちゃんとミニサイズの物を渡してある。

席は四つともくっつけてあってロミヤと雨双が隣同士で雑魚ベ―とアミユリーが隣同士だ。そして雑魚ベ―と雨双が向き合う形でロミヤとアミユリーが向き合う形だ。

「まずは俺が今から言う文字を書く事だ。」

「はい！質問！」

「なんだロミヤ？」

「鉛筆がどうやって使うのかアタイは分からないよ！」

「アタシも分からないんだってばー！」

「ズササアアア！」

ま、まずそこからかよ

「雑魚ベーと雨双、教えてやってくれ。」

こりゃプリントどころじゃないな。

「悪いが問題の内容を変更するぞ。俺が黒板に書いた文字を当てる練習だ。ついでに雨双と雑魚ベーは今から未参加だ。まず一問目。」

まずは覚えやすそうなのでいくか。まずは『か』だ。

「はい！」

「はいロミヤ。」

「力の進化バージョン！」

「はいハズレ。」

確かに点をつけて少し曲げただけに見えるがそれなら大の進化は犬つてのも有りなのか？それ以前に文字は進化しないが。

「はいだってばー。」

「はいアミユリー。」

「外国の国旗の印だってばー。」

「はいハズレ。」

こんな国旗が有るわけない。それ以前に文字当ての問題だぞこれ。

「ヒントをやるのか？」

「ヒントって何？」

「…答えを解きやすくする物もしくは言葉だ。」

「答えは何だってばー？」

「答えはい　ってか自分で解くから意味があるんだ。」

危ない危ない、答えを言うところだった…

「で、ヒントだがヒントは一文字だ。」

「はいはい！」

「…はいロミヤ。」

「がの退化系！」

「ハズレ！　ってかヒント聞いてないだろ！？」

「アタイはヒントの内容が分からないから良いの！」

がの退化系までいけばもう答えは分かるところが。

「はいだってばー。」

「…はいアミユリー。」



「答えは蛾だってばー。」

「ハズレ！いやもう何かどうでも良くなってきた…」

これ以上やると答えからどんどん離れる気がする。

「ってわけで次は数学だ。例の如くこれも読み方から。」

まずは○《ゼロ》の文字を黒板に書く。

「はい！」

相変わらずの速さでロミヤが手を上げる。

「はいロミヤ。」

「丸！」

「はいハズレえっ！」（即答）

「はい！」

もう一回連続で手を上げるロミヤ。アミユリーはまだ考え中。

「はいロミヤ！」

「中身がカラッポの丸！」

「ハズレ！言つとくが数字だぞ。」

「はいだってばー。」

おつ、ヒントで答えが分かったかアミユリー？

「はいアミユリー！」

「《オー》だってば！」

「だから数字だって…」

次はプリント問題。文字が読めないし書けないのにプリント問題をする意味があるのかは分からないからまずは数字の読み方のプリントだ。

テストが終わるのを待ってる間に雨双がアイスの差し入れをくれた。マジで感謝するけど氷を操れるからって氷の塊の中に保存するのは止めてくれ。中身が出せないから。

テストは両方とも激悪。四の数字を地図の上の方についてるアレとか書いてあったり二の数字をダブルって書いたりなど滅茶苦茶だ。

ちなみにこの後にした地理の問題だけはアミユリーは俺より成績が良かった。何故だか凄く悔しいんだが…

でも二人の基本的な成績は非常につてか異常にヤバイ。

「正直な感想を言わせてもらつとそこの二人は非常に成績が危ないぞ。」

そう言ってアミユリーとロミヤを指差す。

「アタシは瞳の色が変化したら知識も上がるから大丈夫だってばー。」

「あつ、そうか。それならそのミニ一匹。」

「アタイは小さくない！」

誰がどー見ても小さいだろ。

「まあ成績の事は置いておこう。」

俺は勉強より何故か教室の床に正座しているこいつらに言いたい事がある。その言葉の量は数知れず。

ちなみに正座の順番は俺から見て左から雨双、アミユリー、ロミヤ、雑魚ベーの順だ。

「頭が悪いのは良いとして毎回アホツ面を見せて登場するのはやめてくれえ。俺まで回りに変人だと思われたら困る。」

いや、もう思われてるかもしれないが。

「いいか？お前達全員がバカな事は知ってる。だが毎回毎回お前たちみたいなのに勝負を挑まれる俺もまた変人という法則が生まれる可能性が高い。」

「なるほど。（私もバカに含まれてるのか！？）」

椅子に座りながらのんびりとしたペースで話し続ける。だから一部が眠そうにしている。

つてか雨双がほんの一瞬驚いたような顔をしたな。納得はしているのか？

とりあえず全員の表情を細かくチェックしながらそれによって言う言葉を変えるか。

「雨双、お前は自分がバカだと思えるか？」

「えっ？あ…思えない。」

「では単刀直入に言おう。お前はバカだ。」

「はうあっ！？」

雨双の表情が固まる。アミューリーが雨双の目の前で手を振ってるが反応はない。

少し待ったら雨双は俺と逆方向を向いて落ち込んでいた。

まず一人脱落つと。次は…

「ロミヤ、お前が女子をターゲットにするときの最低条件って何だっけ？」

「えっ！？やっぱり小学生から高校生でしょ！もちろん貧乳で！」

「そこ、早口と大声は禁止だぞ。」

「あつ、ゴメン。」

スケベープログラムを発動されると厄介だしこっちのペースに巻き込まないとな。

だが相手の興味をこっちに寄せるのも基本だ。

「じゃあ聞くが何故に貧乳？」

「えっ？えゝつと、それは…可愛いから かな？」

俺が知るわけ有りません。だが此処で早期決着を付けておくか。

「単に自分に胸が無いからじゃないのか？」

「そんな事ないよ！アタイはいっぱいご飯とか食べてるもん！」

「大声と早口は禁止だつて。あと、大量に食事を取った結果が今のお前だ。すなわち食事を取ろうが取らなかつた結果は同じだ。」

「はによおっ！」

雨双の時と同様、固まった。小人なのに一応胸とか気にしてたんだな。

次の相手はどっちにする？雑魚ベーはスケベープログラムを発動で

きるし発動率が高い。だがアミユリーの場合は落ち込む事がまず無いと思う。

「おーい！やつと追いついたぜ！」

烈が場の空気を読まずに來やがった。

「お前なんかお呼びじゃないから帰れ。」

「何いいい！？」

烈も雨双の横で落ち込む。教室に入ってから約五秒の最速記録だ。

残りの二人は飽きてきたので諦めよう。決して落ち込ませるのが無理だからじゃないからな。

「ってか雑魚ベーとアミユリーと雨双は何で此处に居るんだ？」

「おっと、本来の目的を忘れるところでしたねえ！今回こそ宿敵の貴方を倒すために來たんですよおっ！」

やっぱり？まあ大方予想はついていたがな。

「今回は私達全員で行きますよおっ！雨双さん！」

「分かった。特技・氷具装備。」

烈・ロミヤ・雑魚ベー・アミユリー・雨双の五人に氷の武器と防具が装備される。って一部が裏切った！

「じゃあまずはアタイと」

「俺が行くぜ!!」

まずは裏切り二人か。恐らくさっき俺が落ち込ませたのが原因だろう。

「必殺・スーパー烈キイック!」

「おっと。」

とび蹴りをしてくるので避ける。氷の靴だし当たったら痛そうだな

「カチッ」

「え?」

「ドゴオオオオン!」

チクショー、トラップが有ったとは。そういえばロミヤの特殊能力はトラップを操るとか言ってたな。

「「これぞ必殺コンビネーション!!」」

「まだまだあ!ビーム砲!」

「キーン!」

「って跳ね返っ」

「ドガアアアン！」

「アタイのトラップは攻撃用の他にも防御用や回復用とかあるんだよ！だからアタイ達に手出し無用！これでアタイの勝利は確定ね！それっ！」

「ズガアアアン！」

床が崩れた！？落とし穴の類か！

「ぎゃあああああ！」

「やったー！アタイ達の勝利！」

「よっしゃあー！！」

「流石にアタイ達の実力に適う事はなかったね！」

「ああ！まったくだぜー！！」

「バスー力砲。」

「ドゴオオオオンー！！」

「「ぎゃあああああー！！」」

「油断大敵だぞお前等。確かに一階下に落ちるのは痛かったが甘いつて。ビーム砲。」



「ズガアアアン！！」

「まずは二人撃破だ！次は誰が相手だ！？」

「私が行くか。」

「アタシも行くんだってばー！」

次はアミユリーと雨双の強力コンビだな。

「氷々襲<sup>ひょうひょうしゅう</sup>。」

「アルミナイフ・カッターだってばー！」

大量の氷と大量のナイフが飛んできた！

「なんの！机ガード！」

冗談抜きの防御技だ。机を盾にして何とか防ぐ。

「ってかレモン色の瞳のアミユリーの特殊能力って何だ？」

「武器や道具を複製する能力だってば！これはアタシの本当の能力だからどの色の瞳の時でも使えるんだってば。」

「なるほどな。いやちょっと待てよ。瞳赤の時に使える特殊能力はなんだっけ？」

「磁力を操る能力だってば。」

そうだよな。だがそれだと計算が合わないぞ。

「確か前に瞳赤の時に衣装チェンジが特殊能力とか言ってたなかったか？」

確か五十九話の時に言ってたはずだ。もしかして作者のミスか？

「あの能力は神様になった時に覚えたんだってば。今も使えるんだってばー。」

「別に使わなくて良いから！」

「話についていけないんだが」

まあ雨双が登場する前の話だからな。

「まあ良いんだってば。アイアンナイフ・ストレートだってばー！」

「バキッ！」

机を貫通した！危なく刺さるところだったぞ！

「イメージアイス・ニードル。」

次は上か！小さい氷の棘が大量か。

「魔法弾・ペタファイアショットオオ！！」

「カツ、ボオオオオオオオオン！！！！」

上の方に炎が広がる。って熱っ！ヤバイ威力が高すぎた！せめてテラにしとくんだった！

だが大量の氷が溶けて水になって炎が消えたので火事にはならずですんだ。

まあ熱い湯がそこら辺に降り注いだがな。さて、これは大チャンスだ。

「まだまだだつてば！スチールナイフ・ストレートだつてば！」

「イメージアイス・ソード！」

ナイフと氷を飛ばしてくるが好都合だ。

「魔法弾・プラズマショット！」

俺の撃ったプラズマショットはナイフと少し溶けかけている氷の剣を辿って二人にヒットする！二人とも氷の装備をしているので良く通じるだろ。

二人とも電気攻撃により目を回して気絶している。

「二人とも大丈夫ですかあああ！？」

「いや大丈夫だろ。」

雑魚ベーがオーバーに心配してるが普通のプラズマ弾だから大したダメージにはなっていないはずだ。

「そういえばお前の特殊能力って聞いてなかったな。一体なんだ？」

「私の特殊能力ですか？私の特殊能力は何かを操ったり増やしたりとは違うので聞いても面白くないと思いますよおっ！」

「つまらなかったらすぐ忘れるから問題ない。」

「では私のパーフェクトな特殊能力を教えてください！私の特殊能力は……」

えっ！？此処で終わりかよ！？ちよつとまで特殊能力を何か言わせてから終われ！コラー！

## 79話：世界の人気者ロミヤ登場！（後書き）

@悟視点@

「79話更新！イラストも更新したぞ。」

「今回の終わり方は納得いかないぞ。」

「本当は前々回の時に雑魚ベーの特殊能力を書こうと思ってたんだが書き損ねたんだ。だから今回描こうかと思っただがたまにはこんな感じの終わり方に見てみたいなと思ってさ。」

「この気まぐれ作者め。」

「まあ気まぐれなのはいつもの事だ。それでは皆さん次回もお楽しみに！」

80話：日本に新しい県が追加されたようです。

@悟視点@

「私の能力はああ　戦いに敗れる度に問答無用で強くなる能力ですよおっ！」

「嘘付け。」（即答）

「ええ！？いや本当の事ですって！」

お前が強くなるなんて事は魅異がテストで満点か〇点以外を取るくらいありえない。

第一お前が強かったら雑魚べーって言えなくなるだろ。

「まあ良いでしょう。今回の私の強さを見たら嫌でも信じる事になるでしょうからねえ！」

「信じてない信じてない。」

「行きますよおっ！必殺・操られし運命の輪ですよおっ！」

琴刀と逆刀を取り出し大量のカムを輪型に放ってくる雑魚べー。ってか普通に刀として使った事ないだろ。

まあ隙間があるだけマシだ。何とか隙間をくぐって避ける。

「毎回しつこいってのー！」

「ズキューン！ズキューン！ズキューン！」

「その程度私に効きませんよおっ！超必殺・可愛い少女は私のものですよおっ！」

巨大なカムを放ってきやがった！ってかその技名はお前の本音じゃないのか！？

「ぎよはっ！」

避けれないので防御するが流石に防ぎきれないな。

「フフフツ、このカツコよさ抜群の私の実力を思い知りましたか？」

「変態にカツコいいの言葉は普通は使わないぞ。」

「ならば変態度抜きのカツコいい私の姿を見せてあげましょう！変身ですよおっ！」

雑魚ベーが変態抜き！？いやいやいやいや絶対にありえない！

「キーン」

「海パン雑魚ベー登場ですよおっ！！」

「やっぱり変態だああー！！！」

何で冬なのに海パン！？ってか何故海パン！？

「フッフッフッフ、普通にパンツだけで登場すると変態かと思われる可能性があるのであえて海パンにしたんですよ！あつ、ちなみに中に普通のパンツを着いてますよ。ほら。」

「別に見せなくて良い！むしろ見せるな！」

とりあえず何とかズボンを穿くように言わないとな

「とりあえず雑魚ベー、ズボンくらいは穿け。」

「何故です？」

「ほらあれだ！今はパンツの上に海パンだろ？さらにその上にズボンを穿けば三段階のシステムになるじゃないか！」

「なるほど！ではさっそく穿きましょう！」

適当に何か言ったら納得してくれた。この調子で服も着るように言うか。

「って何故半ズボン！？」

「さっき着ていた物はさっき窓から外に全部投げ捨てたので代理ですよおっ！」

「そうか。服は！？」

「残念ながら持ち歩いてませんねえ。」

アホオオオオ！投げ捨てるなよ！半ズボンで上半身裸って 変態だ。



まだ海パンの方が普通だったか？

「今の私のカッコよさに雨双さんもアミューリーさんもむしろ世界中の少女がメロメロになるはず。そうすれば　フフフフフフ、アハハハハハハ」

妄想に溺れてる様子。鼻血を出しながら教室の床をアハハハ言いながらクネクネしつつ転がり回っている。猫かお前は！？

正直言つてこれ以上無いくらいの気持ち悪さだ！攻撃する気もなくなる！

「頭が痛くなってきた」

「さあ皆さん、私について来るのですよおっ！」

クネクネ状態から急に立ち上がり叫ぶ雑魚べー。こいつが電車の中で妄想をしたら非常に近所迷惑だろうな。

「そうそしてこれが悲劇の始まりなのですよおっ！世界中の少女達は私を取り合い喧嘩が起こります！」

妄想に解説が入ってきたぞ。ってか世界中のどの少女がお前を取り合うんだよ？

「そして喧嘩は発展して大戦争に！」

発展早いな

「駄目ですねえ！私はこの様なストーリーは望んでませんよおっ！  
！やっぱりハッピーエンドが望ましいですねえ！まずは告白シーン  
からですねえ！」

「まずそこから！？」

「私が告白するのが普通ですよねえ！フッフッフ！まずは私はこ  
う言う訳です。アミユリーさんと雨双さんの両方が大好きですよ  
おおおおおおおっ！！！！！！」

お前が言つと告白というよりいつもの会話にしか聞こえないぞ。っ  
てか騒がしい。

「そしてこの告白によつて二人との好感度が異常なほどアアアップ  
！！二人と仲良く暮らし始めるのですよおっ！！」

「都合よすぎる気がするが…」

「しかし私達の仲を見て嫉妬する奴が現れるのです！」

ベタな…

「それこそ悟さんと烈さんなのですよおおおっ！！」

「何で俺までえええ！？」

「この二人は特室内で特にモテない高校生で変態でした！しかし同  
じ仲間の私がモツテモテのラブラブに暮らす事が許せないの  
でしたああ！！まあ実力の違いって奴ですねえ！」

烈はともかく俺は変態じゃねえ！モテない事は否定はしないが。そして最後の言葉が非常に忌々しいっ！

「そして二人は私に挑みましたが私の圧勝に終わり二人は地に伏せるのでしたあ！アツハツハツハツハツ！これが一番現実的ですねえ！」

「どこがだ！？」

「あれまだ居たんですか悟さん？もう一回地に伏せたいようで…」

「バコオツ！」

「あげふうっ！」

妄想と現実の区別をつけるために頭を五キロのハンマーで殴ってやった。

「…………ふはははは！！復活ですよおおっ！」

「しっこいー！」

「バゴオオツ！」

次は十キロのハンマーで殴る。流石に耐えられないだろ！

「無駄無駄無駄あつ！私にその程度の攻撃が通じると…」

「いい加減にしろー！」

「バギイイツ！！バゴオオオツ！！」

はい五十キロ攻撃！しかも二回の連打だ！凄く疲れるんだが。

「少女の力がある限り私は何度でも蘇るのですよおっ！！」

「三回死ねええ！！」

「ズツゴオオオオソツ！！！」

五百キロハンマーで全力で攻撃する。威力がかなりあったため雑魚ベーの上半身が床にめり込んだ。勢い余って近くの柱まで破壊してしまった。まあとにかく下の階からは上半身と顔が見えるだろう。

床にめり込んだから無事ではあるが出られない状態になっている様子。

今頃だけどよく五百キロなんか持てたな俺。

「ゴゴゴゴゴゴゴ！」

……………嫌な予感がするんですけどー。

「ゴゴゴゴゴゴ…ドガシヤアアアアアアアン！！！！！」

「崩れたああああああ！！！」

「痛たたた…」

此処は何処だ？高校の何処かである事は確かなんだが…

「他の全員も居るな。まあ気絶してるみたいだし周りを調べるか。」

それにしても全体暗いな。目が慣れてくれば何とかなるが。

「おっ、階段発見。」

上には何があるんだ？とりあえず上ってみるか。

「あつ、此処は地球へのワープゲートのある場所じゃないか。よし壊れてないみたいだな。」

だが此処から上に行く階段は防がれてるな。何かベタに逃げられない…

「ってか何で瓦礫は此処までしかきてないのに俺達はさらに下の階に落ちてたんだ？」

まあ俺の推測では全員此処に落ちた時に勢い余ってさらに階段から転がり落ちたんだと思う。

おっ、監視カメラ発見！これでどうして俺達がさらに下の階に落ちたのかが分かるぞ！

えっと、学校が崩れて…あつ！落ちてきた！うおマジで転がり落ちてる！

「やっぱり俺の予想通りだったか。」

正直簡単すぎてつまらないな。

「おおっ！！此処に居たのか悟！！」

「おっ、起きたか。ってか響くから叫ぶな。」

下を見ると全員起きてるようだった。あつ、ロミヤは寝てるな。

「いやあ、大変な事になりましたねえ。」

「この学校が崩壊するのは良くあることだけだな。」

「でも主に魅異が原因だよな！」

そうそう。まあ今回は俺がハンマーで柱を壊したからだろうが…

「そういえば下が宝石を保管しておく場所のようですねえ。さつき防犯カメラを見つけたので暇つぶしに見ていたら宝石を盗む人の姿が映ってましたからねえ。まあ暗くて誰かは分かりませんがスローで見ないと見えないスピードでしたよおっ！」

って事はやっぱり犯人は魅異か？でも魅異かどうか分からないしな。そういえばこのカメラは今日の朝からの記録が映ってるはずだよな。

「よし調べるか。えっと巻き戻しっと。」

盗まれたのは今日の早朝だったはず。映っていても不思議じゃない。

「よし。再生だ。」

..... おっ、映ってた！確かに魅異に似てるな。本物かどうか  
が分からんが

おいボケ役、これに映ってる魅異は本物か？

「ようやく俺に頼るほど場がピンチって訳か！」

ピンチじゃないが 俺じゃあ見分けがつかないんだ。他の奴はアテ  
にならないからな。

「なるほどな。んで結論から言うと偽者だなあれは。」

理由は？

「まずはキヨロキヨロと辺りを見回しているが魅異ならそんな事はない！むしろ防犯カメラに向かって自己紹介をしているはずだ。」

それはそれで迷惑だと思うが。

「次に地球への移動方法だ。そのカメラに映ってる魅異は何処へ行く  
こうしてる？」

えっと 立回県たちえけん？日本にこんな県はない筈だが。

「本物の場合は普通に宇宙から地球に行く事のほうが多いんだぞ。  
一人での場合は特にな。まあ、犯人を自分だという事を証明するた

めに此処に来てワープゲートを使わずに地球に行き証拠がなくて困  
つてゐる状況を見て楽しむて事はありえるけどな。」

本物の方が性格は悪いじゃないか

「ちなみに魅異なら今回の事件の場合もあらかじめ誰がどんな風に  
事件を起こすか分かつてた筈だし自分で捕まえられるはずだ。」

じゃあ何で自分で捕まえないんだ？

「参加するより見てるほうが面白いからだろ。」

本気で性格悪いな まだ今回の事件の犯人の方がマシだ。

そういえば雑魚ベーター達がいつの間にか居ないな。

「下で骨のモンスターが出たからカルシウムを補給できるとか言っ  
て騒いでたぞ。」

食うのかよ！？

「ちょっと見てくるか。」

「食うのか？」

食わねえよ！

「おおーい。」



「おつ、悟！今寒くないか！？」

来るなりなんだ烈？まあ寒いが。ちなみに他の奴は奥のほうで何かをしている様子。

「寒いがそれがどうした？」

「よし！それでも飲んで体を温めろ！！そうじゃないと凍死するぜ！！！」

差し出されたのは温かそうな牛乳？

「これは何だ？」

「見れば分かるだろ！カルシウムたっぷりのあの飲み物だ！」

モンスターの骨じゃないだろうな？普通に牛乳と答えないところが怪しい

「名称を答えろ。」

「牛乳に決まってるだろ！」

「本当だな？」

「当然！」

信じ難いが一応本当と言ってるので貰って飲む。味的に牛乳だな。もし違う飲み物だったら烈を薬物の実験台にしてやろう。

「やっぱり寒い時は温かいものを飲むに限るだろ!？」

「ああ、まったくだ。」

「やっぱりな!ほらよ!」

二本目を渡されたのでそれも全部飲む。

「それで証拠かなんかは見つかったか!？」

「ああ。どうやら日本に居るらしい。」

「おっ!それじゃあまた地球に旅行に行けるな!」

「旅行じゃない。」

それにしても立回帰って日本の何処なんだ?まあ行けば分かるけど。

「ところで悟!体とか大丈夫か!？」

「んっ?別に大丈夫だぞ。」

急に何言い出すんだこいつ?

「おおーい皆!別に体に影響はないらしいから飲んで大丈夫だぞ!」

「分かりましたよおっ!」

向こうから雑魚ベーの返事が返ってくる。ってかどういつ事だ?

「烈、状況説明を頼む。」

「まあ簡単に言うとな悟が飲んだのは骨を溶かして固体にならない程度に改良したものだ!!」

「お前っ！？牛乳って言っただろ！」

「確かに一本目は牛乳って言ったが二本目が牛乳なんて言ってないぜ!!」

確かに言ってないけどさ まあ確かに二本目は一本目に比べて味が薄くて濃厚な香りが漂う牛乳にしては不自然な飲み物だったわけだが。

体に影響はないから良いか どうせ俺以外の誰かが飲んで大丈夫なら俺も飲んでただろうし。

「ふう、とりあえず立回県まで着いたな。」

あの後には防犯カメラの映像を他の全員に見てもらってワープゲートで此処まで来たんだ。

「悟さん！私達は少し周辺探索に行きますねえ！」

雑魚ベーが右腕にアミュー、左腕に雨双を抱えながらそういう。だが目はこっちを向いておらず涎を垂らしながら凄くにやけた顔で小学校の方を向いている。

まあ、上半身裸の奴が俺達と居ると周りから誤解される可能性も高いし別に良いか。

「別に構わないが問題だけは起こすなよ。」

「全然大丈夫ですよっ！それでは後は任せましたよおおおっ！  
！」

ありえないスピードで小学校の方に向かっていく雑魚ベー。後は雨双が何とかしてくれるだろう。

「じゃあ俺達も行動するか。」

「だが何処に行くんだ！？」

「はい！アタイに良いアイディアがあるよ！」

「飯なら却下だ。」

「ええ！」

やっぱり図星か。俺だって腹が減ってるさ！だけどセルしか持っていないんだ！

「烈ー、日本円とか持ってないか？」

「俺が持つてるはずないだろ！」

やっぱりな。第一、地球人でもないからな。

今頃だけど特星の人って宇宙人に分類されるのか？変わった髪の色  
の奴も居るから分類されるか？ってか地球出身なのに雨双みたいに  
髪の色が変な奴も居るけどなんでだ？

そこは製作者の都合が有るだろうから気にしないでおいでやろう。  
いずれ真実が分かるかもしれないしな。

「雑魚ベーさん達が走っていったからもしやと思って来てみたら  
やっぱり貴方達ですか。」

「「「あつ羽双！！」「」」

「どうも。」

いつの間にか現れたのは魅異の一番弟子である羽双だった。いやそ  
れよりも！

「手に持つてる物はもしかして 焼き鳥？」

「そうですね何か？」

「「「欲しい！！」「」」

「駄目です。」

何かよくハモる俺達の意見を完全拒否される。左手のパックにまだ  
まだあるんだから一本ぐらい良いだろ！

「ところで何でこんな所に居るんですか？ロミヤさんまで居ますし

「

「実は」

「説明中」

「まあそういう訳だ。」

「でもアタイ達の実力を持ってすれば！」

「この程度の事件は無事解決だぜ！！」

「そうですか。じゃ、頑張ってくださいよ。」

「「「ちよつと待ったあ！！」」」

「ハア、何ですか？早く帰りたいんですが。」

このまま帰られたら俺達は餓死すかもしれない 何とか引き止めなければ！

「そういえば此処って実際に日本にはなかった場所だよな。いつ出来たとか分かるか？」

「此処は数週間前に出来たらしいですよ。場所は北海道と青森の間から少し西にずれたところです。広さはそこまで広くはないようです。あと正式な県としてはまだ認められてないようですね。」

「特産物とかはあるのか？」

「特にありません。」

特産物なしか あれ？そういえば烈とロミヤは？

「おおおい悟！デパートの福引で缶詰が当たったぜ！！」

「マジか！？よっしゃよくやった烈！」

多分デパートの試食品を食べに言って偶然当てたんだろう。だがよくやった！

「ふう、何とか空腹の壁を乗り越えたな。」

「アタイはまだまだ足りないよ。」

「お前は食いすぎだ！！俺位が一番丁度いいんだぜ！！」

「……………」

「あれ？どうした羽双？」

羽双が黙って離れたところにある木を見て……ってか睨んでいる。

「あの木から人の気配がするんですが。」

「気配？それがどうかしたのか？」

「この県には確か人が居ないはずなんですよ。」

「人が居ないって…デパートとか建ってるのにか？」

「はい。」

とりあえず話を聞く。後ろで烈とロミヤが缶詰の取り合いをしてるが気にしないでおく。

「此処の県が出来た時に日本はこの県を調査するためヘリや船で調査隊を向かわせたらいいんですがどうしても暴風が発生して入れずに諦めたらいいんですよ。…なのに人が居るのはおかしいと思いませんか？」

「それは俺達にも言えるような…」

「そこがポイントです。もし此処に入るための方法があるとしたら二つ、暴風を超えるかワープゲートを使うかのどちらかしかないんです。」

「って事はだな…特殊能力を使える奴しかこの県に居ないわけか。」

「その通りです。…そして僕の予想ではこの県に居る人達は全員敵です。」

やっぱりそうか！まあ大方予想通りというわけだ。

えっ、いつ予想したか？さあそれは記憶にないな。

ってか待てよ…

「烈！ロミヤ！お前たちの行ったデパートってどんな感じだった！



「？」

「確か従業員の人が沢山居たよ！」

「後は開店前って言うてたぜ！」

「頭は大丈夫ですか？…言っときますけど此処には確かに建物はいくつかがありますがデパートなんか有りませんよ。」

「「嘘だ！？本当に見たって！」」

だが辺りにそんな建物は見当たらないしな。二人だけに見えたって事はまずないな。

「とりあえず木に居るっていう敵を倒したらどうだ？」

「その敵ならそこに居ますよ。」

「「「へ？」「」」

羽双が何も無いところを指差す。だが誰か居る様には見えないぞ。

「へえ、よく気付けたね。」

あつ、誰か居るな。

「異空間移動！」

「キーン！」

〈羽双視点〉

別空間ですか 面倒な。

「別空間にようこそ。僕の作った此処は気に入ってくれたかな？」

「残念ながら和風の方が好みます。第一、こんな殺風景な所を気に入る人なんか居ないと思いますよ。」

「それは残念。あつ、そうそう。僕の名前は」

「別に名乗らなくて良いですよ。」

「……………僕の名」

「時止。」

時止は相手の時間を止める技です。本当は技名を言わなくても使えるのですが…見分けをつける為に一応技名も考えてあります。

「そうですね…しばらく放置してから苦し 懲らしめる事にしましょう。」

〈烈視点〉

「何処だ此処は!？」

「アタイの予想では別空間だと思うよ！」

「その通りっ！」

俺達の前に現れたのは小人だ！！

「分かったぜ！ロミヤの生き別れの妹だな！！」

「「違う！」」

何っ！違うのか！？

「私はシラア！その大食い馬鹿とはただの知り合い！」

「誰が大食いって言ったのそこ！アタイは馬鹿だけど大食いじゃない！そっちこそ小人の中でも特に小さいチビじゃない！」

「なっ！？もう許さないよ！」

「こっちこそ許す気はないんだからね！」

「じゃあ俺は避難してるから後は任せた！！」

これぞやられないための鉄則！避難して実況役を務めるぜ！！

「特技・特大ボム！」

「特技・ミラートラップ！」

「おおおつと！シラア選手は巨大な爆弾を投げつけるがロミヤ選手が鏡のトラップで防いだ！！」

「特技・ナパームボム！」

「アタイに攻撃を当てようなんて千年早いよ！」

「シラア選手のナパーム弾のような爆弾も防がれる！あとシラア選手の特特殊能力は爆弾を作る能力のようです！！」

「それなら 硫酸ボム！！」

「おおおおつ！！シラア選手が硫酸で鏡の壁を溶かしたああああ！！！！」

「まだまだ！レインボム！」

「さらに追加で爆弾の雨をお見舞いしたあつ！！ロミヤ選手どうするのか！？」

「アタイの方がまだまだ完璧だね！」

「おつとロミヤ選手は俺のポケットに隠れた！俺を盾にして防ぐようです！って待て！！」

「トトトトトトトトトトガガガアアン！！」

結局俺は巻き添えかよ！！

「口ほどにもないみたいね！」

「アタイは全然無事だよ！」

「なら勝負を再開するよ！」

「望むところ！」

「させるかあっ！！！」

「サッ」

袋の中に二人を閉じ込めたぜ！！だがまだ！！

「そらそらそらあっ！！」

「うわあああああああ！！！」

その袋を回しまくる！！

「どうだ！？」

「こ、降参…」

「何でアタイまで…ううつ…」

よっしゃ！！俺達の勝利だ！！

そして今思ったが地球で爆撃を受けて生きてる時点で結構凄い事じゃないか！？

く悟視点く

「あれ、此処は何処だ？」

「さあ、此処は何処ですかね？」

「って、校長！？」

いつの間にか隣に校長が！

「あつ！貴方は悟ンジャーブラックじゃありませんか！」

あゝ、そういえば俺って前回から真っ黒のままだったっけ…

「俺は悟です！」

「なんだ悟君でしたか。まさか貴方が悟ンジャーブラックの役者さんですか！？」

「まあ…一応そうですけど。」

でも実際はボケ役がやってるんだよなあ…

「いやゝ、俺のおかげで人気上昇中だな！」

それが大迷惑なんだけどな。

「ところで校長は何で此処に？」

「いやあ、教師の給料が少ないのでバイトしてるんですよ。日給千セルで。」

「教師がバイトして良いのかよ！？そして給料安っ！」

「私の学校は全然オツケーですよ。ちなみに日給は千セルですが一回の戦闘につき十万セル追加で更に怪我をしたら五十万セルで死亡した時には三千万円が送られるんですよ。」

「死亡保険つきかよ！？」

「地球での戦闘は危険ですからその位はついてこないとやってられませんよ。」

確かに…

「それでは悟君がどのくらい強くなったのか見させてもらいますよ。」

「戦うんですか！？」

「私もバイトですから仕方ありません…」

地球で銃を使う訳にはいかないし…此处はあの武器で！

「いきますよ。波動球！」  
ハルマ

「ハエ叩きアタック！」

野球ボールを投げるような感じで波動を投げってくる校長。だが俺の  
八工叩きで全てかき消す。

「ならば…波動砲はどうほうです!」

「なんの八工叩きスルー!」

ビームのように飛んでくる波動砲を八工叩きで軽く弾いて別方向に  
受け流す。

ちなみに波動砲は俺も銃で使えるぜ。

「流石は私の生徒の中でもツツコミ役だけの事がありますね。」

「本当…ボケ役に生まれたらどれだけ気楽に暮らせた事か。」

「どういう意味だオイ。」

「どうせですから面白い技をお見せしましょう。特技・最新兵器  
波動砲 零式です。」

「ジャキーン!」

校長が何処かとりだしたのは巨大な大砲。ってかあれって戦闘機と  
かについてるタイプのやつじゃないのか?

「この武器は私の作った波動砲の中で二番目に作られた武器なので  
すよ。」

「二番目に作られたのに零式!?!」



「一番目に作られたのは波動砲 試作版と言って使い捨てタイプなんですよ。あつ、これが試作品です。」

試作版を渡される。大きさはバスターカ砲と同じくらいのものだ。

「ちなみに私が作った波動砲は数十種類くらいですね。」

「多っ！」

つて待てよ…

「校長、それじゃあ零式は最新兵器じゃなく旧型兵器になっちゃいますよ…」

「えっ！そうなんですか！？」

「そりゃそうですよ。」

「この校長…三十代の年にしてついに老化ボケが始まったか？」

失礼な事いうな。まあその可能性はない事もないが。

「悟ンジャーブラック君…私はどうすれば良いのでしょうか…」

「何がやりたかったのか分からないし校長がどうすれば良いのかも分からないけど…とりあえず悟ンジャーブラックではありません。」

ってか何で急に呼び方変わったんだ？

「そういえば此処からどうやって元の場所に戻るんですか？」

「確か羽双君と戦っているはずですよ。」

「あれ？何で羽双の事を知ってるんですか？」

「何度かあった事がありますよ。最後に会ったのは私が和風料理店でバイトしていた時に客として来ました。」

本当、何処でもバイトしてるんだなこの校長…

「キーン！」

「いきなり景色が変わったかと思えばそこは元の場所であつた！！」

何か烈が叫んでるがスルー。とりあえず元の場所に戻ったみたいだ。

「あれ？校長が居ないぞ。」

「校長さんも来てたんですか？…名前無き雑魚も居なくなってますね。」

「シリアはアタイに脅えて尻尾を巻いて逃げたんだね！」

「尻尾有るのかあの小人！？」

何があつたか知らんが全員無事なようだ。

「それにしても…何も起こりませんね。」

「もう一回そこら辺を見回ってきたらどうだ？」

「面倒なのでお断りします。」

「そーですか。」

最初は全員で立回県内を探し回ってたんだが何も無いから烈とロミヤが何処かに遊びに行ってしまった。

羽双の特技で世界中の時間の進み具合を遅くしてもらってさらに時速<sup>そく</sup>という技で俺達の時間の進み具合を上げてもらっている。

驚いたのは老化が影響するかしなないかを変えれるという事だ。老化しない時速を使えば速さだけ速くなるという。

「時間を操れるなら魅異でも倒せるんじゃないか？ほら時間を止めたりとかでさ。」

「特星に来てから何回か魅異さんと勝負した事がありますが無理です。」

「何で？」

「魅異さんは時間を止めても動けるんですよ。」

時間を止めても動ける？

「効かないって事か？」

「いえ、確かに魅異さんは当たっても無効にする事もありますが違います。効いてますですけど動けるのです。」

「羽双、日本語で頼む。」

「…簡単に言うと魅異さんは〇秒で好きな所に移動できるということですよ。」

…………マジで？

「それって人間として異常だろ。」

「生き物として…いや、存在自体が異常だと思いますよ。」

「怒らせたらどうなるんだよ…」

「魅異さんが本気で怒ったら存在するもの全てがなくなるでしょうね。」

のんびりムードで話す話題がこれって…怖い怖い。

「そういえば魅異流技ってどんなのなんだ？この小説であまり登場して無いからよく知らないんだが。」

「言うならば絶対に魅異さん本人しか使えない技ですね。僕でも使えません。…魅異さんから聞いた話では名前に自信の有る技が多いと言っていました。」

「名前に自信…ねえ。」

魅異に限ってまともな名前の技を使う可能性は極めて低い。

「ちょっと調べてみるか。」

「…ノートパソコンですか。」

その通り！おつ、発見だ。

「七十話で修式って技を使ったみたいだな。…ネーミングセンスは微妙だ。」

「修式は魅異さんの名前を覚える度ランキングでDクラスですね。」

「Dクラスってどの位だ？」

「クラスの中では一番下から二番目ですね。クラス別の評価の紙がありますけど見ます？」

「どれどれ？」

確かに名前の覚えやすい度ランキング！って書いてあるな。

Eクラスの技は『作者に技の存在自体忘れられるクラスの技』らしい。

Dクラスの技は『作者に大体の効果しか覚えてもらえてない技』らしい。

Cクラスの技は『作者が思い出そうとしないと効果と名前が分からない技』らしい。

Bクラスの技は『効果を覚えていて名前は思い出そうと思ったら思い出せる技』らしい。

Aクラスの技は『名前を覚えていて効果も多少覚えている技』らしい。

Sクラスの技は『名前と効果をしっかり覚えている技』らしい。

…全部作者が覚えてるかどうかじゃないか。

「Sクラスの技とか何か知らないか？」

「…確かミネラルレーザーとか言う技はSランクに入ってるらしいですよ。でも通常攻撃技なので最初に魅異流技とはつけないようですけど一応分類上は魅異流技に分類されるらしいです。」

あれで通常攻撃かよ！？

「おおい！助けてくれ！！」

「烈！ってその後ろの奴は誰だ？」

いつの間にか後ろに烈とロミヤが居たが何か変な奴に捕まってるみたいだった。後ろの奴は剣を持ってるな。

「おいお前達、この二人の命が惜しければ我々に同行しろ！」

「何ですか？」

羽双が何故かと聞く。確かになんでその二人の人質程度で俺達が行かないといけないんだ？

「お、お前達！この二人がどうなっても良いのか！？」

「ええ。煮るなり焼くなり自由にどうぞ。」

「あつ、でも煮ても焼いてもそいつ等は食えないと思うぞ。ってか焼いたら多分蒸発するぞ。」

「裏切り者おつ！！」

裏切りって酷いこと言うな…助かりたければ自力で逃げたらいいと思うが。

「ハハハハ！お前達は特星暮らしが長いから忘れてるかも知れんが此処は地球だ！剣で斬るだけでも致命傷だぞ！」

「別に構いませんが…あ、やっぱり同行します。」

あれ？予想外の展開だな。

「お前らしくないぞ羽双。一体どういう風の吹き回しだ？」（ヒソヒソ）

「分かりませんか？…このまま着いていけば本拠地を探す手間が省けるからですよ。」（ヒソヒソ）

「なるほど。考えたもんだな。」（ヒソヒソ）

「オイ！早くついて来い！」

「分かってるって。」

まあそういう事で敵についていく事にした俺達だった。そーろそろクライマックスか？ってわけで次回に…続かないっ。次回の次回に続くっ！



80話：日本に新しい県が追加されたようです。（後書き）

@ 悟視点 @

「80話更新完了。更新が遅れたのは半分位はテストのせいです多分。」

「それはそうと何で次回に続かないんだよ？」

「おっとそれを言わないとな。それでは次回予告！次回はいろいろな技（ほとんど魅異の技）を紹介しようと思います！それでは皆さん次回もお楽しみに！」

## 81話：技紹介

@ナレ君視点@

どうもナレ君です！今回は私がいろいろな技を紹介していきますのでよろしく願います！

「とりあえず技名の由来とかを紹介するために来ました。作者であるアキステです。」

って訳でいきなりですが紹介に移りましょう！

ゆうしゃけん  
勇者拳

勇者流技の基本技で魅異が恐らく一番多く使っている技。

勇者は剣というセオリーを完全無視した素手の技である。

力を溜めて一気に爆発させる技だが魅異の場合は溜めなくても使える為、連続で撃つ事もできる。

武器は無くても良いし近距離としても遠距離としても使えるので案外便利だったりもする。

威力は使いこなせば普通の人でも岩を砕ける程度の威力が出るが勇者しか使えない。魅異が使えばエクサバーストを軽く上回る。

「勇者拳は説明に書いてあった通り勇者は剣のセオリーを無視して  
るのがポイントだ。勇者の格闘技はいつでも使えて便利そうという  
アイデアで考えた技だから普段でも頻繁に使うというのが重要だ。  
」

頻繁に使う技があんな危険な技なんですか？

「出来る限り威力が高いほうが覚えやすいだろ。」

ミネラルレーザー

魅異の通常攻撃技。分類上は魅異流技に分類されるが流技ではない。

勇者拳と同じくらい頻繁に使う技。

槍技だが実は素手でもつかえるらしい。

ミネラルとついてるが鉱物が含まれているわけではない。また、レーザーとついているが光が技なわけでもない。

遠距離攻撃で槍を突き出す衝撃波的な攻撃を何らかの方法で一直線に飛ばすように改良したのがこの攻撃である。

何故魅異流技に入っていないのかは不明。

「何故魅異流技に入っていないのかを作者的な理由で言うと頻繁に使うのにいちいち最初に魅異流技と付けると執筆が大変だからつても有るな。」

それは酷い理由ですね。

「他の作者的理由を言うと魅異流技そのものよりミネラルレーザーの方が先に登場させたからというのもある。」

なるほど。

「ちなみにこの技の名前を考えてた時は『ミネラル何とか』もしくは『何とかミネラル』のどちらにするか非常に迷ってました。」

勇者連拳  
ゆうしゃれんけん

勇者拳の連続バージョン。

勇者拳の連続版だが実は魅異しか使えない為、勇者流技と魅異流技の両方に分類されている。しかし名前が勇者流技に近いので勇者流技として扱われる事が多い。

ちゃんと遠距離としても近距離としても使える。

もし一般人が使いこなせば宇宙から大量の隕石が来ても（種類によつては）これで粉碎だ！

「勇者連拳の速度はかなりの速さだ。」

どの位ですか？

「本気を出せば〇秒に何回でも撃てるらしい。」

魅異さんですからねえ…

ぶつりがくむしほう  
物理学無視法

魅異の反則的な技。  
チート

熱や音や光などが一定に感じられるようになり相手の攻撃などはすり抜ける。

何とか重力などが効果がある。だが魅異自体が異常な威力でないとダメージを受けない。

この技は魅異流技（常識無視）の代表技である。

原理などは特に無く魅異流技の上級クラスの技と言っても過言ではない。

だが効果がかなり良いので魅異はあまりこの技を使う気はないらしい。

「ちなみに重力の他にも時間の影響なども受けるが魅異自体に効果は無いんだ。」

ある意味無敵状態ですね。

「いや、この技の上級技もあるんだぞ。」

しんりがくむしほう  
神離学無視法

物理学無視法の上級技で魅異流技の異技。

熱や音や光や重力などが自分が望んだように感じられるようになる。

時間なども完全に無効化できる。

すり抜ける状態かぶつかる状態かは念じる事で変える事が出来る。

ぶつかる状態だとちゃんと相手に攻撃を当てる事が出来る。またぶつかる状態だと相手からの攻撃は当たるが絶対に効かない。

この技を使ってる時は能力が異常なほど上がり気分が良くなり体力も回復する。

あまりに反則的な技なので魅異はこの技を使う事はほとんどない。

「この技は魅異流技の中でも異技に分類されるほど技だ。」

明らかに反則ですよこの技は。

「だから魅異は使わないようにしてるんだろっな。」

修式しゅうしき

回復技で魅異流技に分類される。

自分以外にも他人を回復させることも出来る。

名前が覚えにくいからあまり使わないかも。

「この技は…名前が覚えにくい。」

そうですか。

勇者ゆうじやレッガー



勇者流技の中では最強の異技。

どんな武器でも使うことが出来る。

使う相手を選ぶ技で魅異の場合は最大威力が異常に強く、最小威力は異常に弱い。

『名前が短い』・『攻撃範囲を指定できる』・『威力調節の範囲が広い』・『遠距離版と近距離版がある』・『連続して使える』・『反動が少ない』といった感じで欠点が非常に少ないのが特徴。

ウィルも練習すれば使えるようになるが魅異ほど上手には使えないだろう。

「レッガーっていうのは作者の俺が何となく考えた言葉だ。」

何となくですか？

「そう。何となくだ。」

コンテニユー

魅異流技の特技。

やられる前もしくはやられた後に使つと体力やヤル気や装備などが完全回復する。

ちなみに死者を蘇らせる位の威力を持つ。

魅異の様な第何形態などが有るキャラにあらかじめ使っておくと次の形態にならないまま回復する。

「この技は効果はお得だし名前が覚えやすいから便利だぞ。」

作者が使う場合も…ですね。

「ああ。ちなみにコンテニューは今のところは未登場技だ。」

エクサバースト

エクサスターガンで撃つ事の出来る危険技。

宇宙を消滅させる威力の爆発を圧縮したものを撃つのでエクサバーストを使って宇宙が消えてなくなるという事はない。

「今のところ悟の使える最強技だな。」

危険な技ですけど案外使われますよね。

「確かに。ちなみに魅異が持つてるのはこれを威力三倍に改造した品だ。」

時止<sup>じし</sup>

羽双の特殊能力のうちの一つ。

相手もしくは味方の時間を止めて動けなくする。

単体にも使えるが複数のキャラに使うことも可能なので囲まれた時などは便利。

羽双はこの技で相手の動きを止めてその間にくつろぐ事があるが相

手は時間が止まっているので気付かないらしい。

「この技を喰らってる間は年も取らなくなるぞ。」

特星は元々不老不死の効果がついてますけどね。

「まあな。」

時遅<sup>じち</sup>

羽双の特殊能力の一つ。

敵もしくは味方の時間の進み具合をゆっくりにする。

単体にでも複数にでも使えるので便利。

年齢に影響するかしないかを選ぶ事が出来る。

時止の方が便利なのであまり使う機会はないが相手の動きの観察などには使える。

「時止を使うとその間に行動しても分からないので競争をする時は時遅の方が便利だぞ。」

羽双さんが競争とかしますか？

「面倒だからやらないだろうな。」

時速<sup>じそく</sup>

羽双の特殊能力のうちの一つ。

敵もしくは味方の時間の進み具合を速くする。

単体にでも複数にでも使えるので便利。

年齢に影響するかしないかを選ぶ事が出来る。

「最初は名前を時即にしようかと思ったんだがパツと見て分かりにくいからそのまま時速にしたんだ。」

でも一時間どれだけ進むの時速と漢字が被りますよ？

「うるさい…」

時動<sup>じどう</sup>

羽双の特殊能力のうちの一つ。

時止などで操った時間を元に戻す技である。

ちなみにこの技名は一応つけてあるだけなので技名を言わずに時間を戻す事もある。

単体でも複数でも使えるので便利。

時止で時間を止めた相手くらいは元に戻して上げましょう。

「ちなみに時動を使わずに放って置いてもしかしたら直ります。」

「

しばらくってどの位ですか？

「結構後だ。」

時間移動  
じかんいどう

羽双の特殊能力のうちの一つで別名はタイムワープ。

過去や未来に行けるが体力分のダメージを受けたら元の時代に戻る。

ただしこの技で過去や未来に行って何かをしても実際の過去や未来には影響はない。

この特徴を利用して魅異は過去や未来の宇宙を消滅させるという性質の悪い遊びをする事があるらしい。

ちなみにこの技で過去や未来の物を持ち帰るためには特別なバッグに入れば持ち帰れるが大きなものは入らないので持ち帰れない。

「ついでに言うとその技で過去や未来に行ってコンテニューを使えば元の時代に戻らず一回だけ復活するぞ。」

僕も未来や過去に旅行したいですねー。

「羽双と仲良くなつとけば？」

勇者突  
ゆうしゃとつ

勇者流技の中でも非常に簡単なもの。

結構な速さと力で相手を突き刺す技である。

使える武器は突き攻撃が出来るものなら何でも良く素手でもできる。

使いこなせば武器の大きさに合わせた針の形の衝撃波が出るが魅異並に使いこなさないと出来ない。

この技はウィルも最近魅異との練習によって使えるようになった。

「この技はウィルに適当に勇者流技を覚えさせたいなー。という気



まぐれから生まれた技なんだ。だからウィルでも使えるように常識ハズレの技じゃないんだ。」

ウィルさんが魅異さんみたいになったら大変ですね。

「ただでさえ少ないまともキャラが一人減るから確かに大変だな。」

カム

雑魚ベーの考えたオリジナル技。

一定の温度の気体を球体になるように集めて相手に撃つ技である。

基本は素手で使う技だが雑魚ベーは中国刀の琴刀と逝刀で使うことが多い。

温度を自由に調節する事が出来るので熱いカムと冷たいカムを使い分けれる。

熱くても冷たくても色はオレンジである。

大きさは最大で人間一人分くらいの大きさが撃てるが大きいと速さが若干落ちる。逆に小さいと速さが若干速くなる。

形は基本は球体だが自由自在に変える事が出来てレーザー型にした

りできるが速さは光速には遠く及ばない。

他にも大量のカムを一定の向きに一定の動きで飛ばす必殺技がいくつか有るがネーミングがまともな時とまともじゃない時がある。

ちなみにカムの動きは途中で急に止まってすぐに動き出したりなど様々な種類がある。

「この技を運動場で雑魚ベーが時々やるんだがそれを小学校の二階から見ると非常に綺麗だという事で名物になりつつあるらしい。」

雑魚ベーさんでも人気になれるんなら私も…

「お前はまず無理だな。」

ジャンピングキック

雑魚ベーの得意技や必殺技の中でも代表技。

その名の通り空中で横に無駄に回転しながら下の敵にキックをお見舞いする技である。

実は結構強力な技で木で出来た船なら一撃で沈めることが出来る。

発展技が沢山存在するがこのジャンピングキックの方が強い場合もある。

しかし命中率が低い上に場所によっては地面に突っ込んで抜けなくなる事もあるので雑魚ベーのような乱用はしないほうが良い。

「この技を使って地面に突っ込んだら余裕で負けるから注意が必要だ。」

それなのになんで雑魚ベーさんはジャンピングキック系をよく使っているでしょうね？

「さあ？これ位しか直接攻撃技をしらないからじゃないか？」

変身

魅異や雑魚ベーが時々使う技だが二人とも効果が違う。

雑魚ベーが使う場合は着ている服装や見掛けなどが変わる変身を使える。時々人以外になる事もあるかも。

魅異が使う場合は服装などに加えてほとんど相手そのものに変身する事が出来るし、変身した相手と似たような技も使えるようになる。他にも微生物や宇宙外物質など変身できる種類はとても多い。

「魅異の場合はほとんど何にでもなれるが変身自体はあまりつかわないぞ。」

貴方も魅異さんの変身姿ですよね。

「んな訳あるか！」

スルー

悟や魅異や羽双などの通常技。

相手の攻撃を無視して会話に突入する。

その会話中は攻撃してきた相手を無視し続けると精神的ダメージが

大きくなる。

覚えやすく、案外成功率が高いので便利。

だが失敗するとともに直撃したり相手が怒って強力な攻撃をしてくる事があるので注意。

「これは誰でも使えるし技名を言わなくて良いから楽だ。」

アキステさんもですね。

「まあそれは置いといて 次はいくつかの道具の紹介だ。」

しんりそう  
神離槍

魅異の力が込められている武器のうちの一つ。

魅異の愛用品で竹で出来ているが魅異が使えば常識外の威力を誇る。

魅異の力が込められているせいか折れたり燃えたりしない。

だが魅異は大抵の敵はこの武器を使わなくても倒せるから使うことは多くはない。

## エクサスターガン

世界に五つしかない銃で充電式。

宇宙を消滅させる爆発を無理矢理圧縮したエクサバーストを撃つ事が出来る。あくまで圧縮した爆発を撃つのでこれが原因で宇宙が消滅する事はない。

悟の最終兵器でもあるが悟はテレビ番組の商品として手に入れたらしい。テレビ局が何故そんな物を持つてるのか非常に不思議である。ちなみに魅異はこれを三倍の威力に改造したものを持っている。

## 神離銃 しんりじゅう

魅異の力が込められている武器の一つ。今のところは名前だけ登場。

悟ンジャーブラックの武器としてポケ役の悟は使っている。

他の神離武器と同じく壊れない。

スライムスーツ

魅異の持っている防具。

意外に強力な装備だが今はダンボールの中に入れてある。

ちなみに特星でユニークアイテム大賞を過去に取った。

恐らくこれからの出番はないと思われる。

ノートパソコン

悟の部屋にあるノートパソコンで勇者社製。

重くなる事がないのが特徴で回線をつながなくてもインターネットが出来る。

他にも充電は無限で要領は無限で価格もお得。

あとウイルスにかかった場合は即座に除去してそのウイルスを制作したパソコンに勇者社ウイルスを強制転送して相手の個人情報及びインストールしてある機能などを全て奪い取り勇者社の特別なコンピュータに保存する。(ウイルスを作ったパソコンが壊れていたりデータを消去しても回避できない)

他にもいろいろと機能がついている。

あと何故これが此処で紹介されているかは不明である。

「以上、技紹介でした。」

後半技じゃないですね。

「無駄に紹介してその技を使わないという事がないようにと気を付けてたらこうなったんだ。」

ってかノートパソコンやスライムスーツは何で登場させたんですか？

「何となくだ。…さて、それではそろそろ帰るとするか。」

そうですね。それでは皆さん



「次回もお楽しみにっ！」

## 82話：解決法は簡単です

@悟視点@

前回いろいろあつて敵の本拠地に連れてこられた俺達。クライマックスの予感！でも早くボスを潰さないと特星から不老不死の効果が消えて大変な事になるかもしれない。

この基地の中は全体的に機械的だ。

「ところでこの基地に他の人は居ないんですか？」

羽双がそう聞いてみる。ちなみに此処は立回県の地下にある基地のようだ。

「ああ。此処に居るのは私と私の雇い主の二人だ。」

「お前雇われてるのか！雇い主ってどんな奴だ！？」

オイオイ、敵がそう簡単に教えるわけ…

「実際あつた事はないが声の高さからして小学生くらいだ。恐らく女の子だろう。」

「教えたっ！？」

「あんた達を基地の適当な場所まで案内しろっていうのが仕事の内容だからな。じゃ、私はそろそろ帰るぞ。」

「じゃあ皆、また後でねー！」

「グチャツ！」

自然に雇われた奴に着いて行って逃げようとしたロミヤを羽双が容赦なく踏み潰す。

「羽双 此処は地球だぞ。」

「ロミヤさんはギャグキャラ的な生物ですので大丈夫です。」

確かに紙のようにペラッペラになっただけで平気そうだ。

「あつ、ちよつと待て。」

「私に何か用があるのか？」

雇われた奴を呼び止める。聞きたい事が有ってな。

「宝石が盗まれた場所の防犯カメラに魅異みたいなのが映ってたんだが宝石を盗んだのもその雇い主か？」

「いや、宝石を盗んだのは私だ。逃げる時には機械にのみ効果のある幻影を使ったから防犯カメラにその何とかが映ってたんだろつ。」

それだけ言って雇われた奴は帰っていった。

「さて！雰囲気が出てきたな！！」

「何でお前はそんなに元気なんだよ？」

「元々だぜ！！」

まあ正直烈の性格がどうだろうが知った事じゃないがな。まあ静かな烈は想像できないが。

「とりあえず敵の場所を探すか。」

「…僕は此処で待ってます。」

「えっ、何で！？まさかアタイ達をおいて逃げよう！」

「ズガアアアン！！」

復活した途端に何かを言うロミヤに踵落としをお見舞いする羽双。オーイ、生きてるかー？

踵落としがヒットした瞬間に大きく地面が揺れたんだが。

「理由ですが増援が来る可能性がありますし面倒ですし不老不死の宝石を捜す役も必要でしょうから。」

「なるほど。それじゃあ任せたぞ。」

「「残って良い！？」」

「お前達は駄目だ。行くぞ！」

無理矢理ロミヤと烈を連れて行く。面倒がるのは羽双もなんだが

この二人の場合は敵が来たら倒さずに逃げ回りそうだし宝石を見つけたら盗んでいきそうだからな。

「と走ってきたのは良いんだが何処だ此処？」

「俺は行きたくないぞ!!」

「お腹減ったよ!!」

何処かと聞くが無視しやがった まあこの二人が知ってる事はないだろうけどな。

「やっぱり適当に歩き回るだけじゃ無理か？」

「悟！そんなネガティブ思考は捨てろ!!いまさら帰ることも出来ないんだし今は前に進むことを考えろおっ!!!!」

「いちいち響くから叫ぶな。」

「まだまだ道は続いてる！ならばやる事は一つ！前に進むことだぜ!!」

「烈って良い事言うキャラだっけ？」

「それ以前に良い事なのかコレ？」

ただの単純思考だと俺は予測しよう。

「お前もあのテンションで行けば？」

出てくるなり何を言い出すんだ？

「ヒートアップすればお前もあんな感じだろ。」

ヒートアップ中の事は思い出したくないんだが。

「今は冷静を装ってるお前だがヒートアップの時がお前の本性が出てるとき」

それはない。

「たまにはいろいろ叫ばないとストレス溜まるぞ？」

お前もその原因のうちの一つだろ。

「イエー！だがここはヒートアップしないと抜けられないぞ。」

でもヒートアップは無意識のうちになるものだぞ。

「全てはやろうと思えば必ず出来るぞ！ここを抜けようと思えば良いだけだ！」

そうか？ そうだよな！やろうと思えばできないことなんて無いんだな！

「ああその通りだ！（フツ、単純だなツッコミ役。）」

「おい烈！こんな壁ないと思えば通り越せると思わないか！？」

「ああ俺もそう思っぜー!!」

「この程度の壁は破壊するぞー!!」

「おおおおおっ!!」

今ならこんな壁もただの薄っぺらの紙に思える!!この程度の壁なら壊せる!!

「壊れるおおお!!」

「カーン!!」

「ぎゃああああ!!」

「大丈夫?」

俺達のダブルパンチはヒビの入る効果音となって響き渡る。(そう俺には聞こえた)

ロミヤが心配そうに見ているがそれよりも痛い!だがまだ俺達で破れないと決まったわけじゃない!

「今のは準備運動だ!なあ烈!」

「その通りだ!今の俺達に破れない壁はないかもしれないぜ!!」

無いかも知れないじゃない!ないんだ!この壁はその破れない壁の第一歩に過ぎない!

「うおおおおお！！」

「ガン！」

「ぐぎゃああああ！！」

次は頭からの突進でいつてみたが無理だったか！地球だから頭にコブが出来た！

「あ、扉だ。これを見つかるなんてアタイって凄いね！」

「なかなか硬い扉だがこの程度ならまだ大丈夫だ！！」

「流石は悟だ！良い事言っぜ！！」

「ちょっと覗いてもアタイは悪くないよね。」

よし！次こそ多分この壁を壊せる！！

「あ、誰か居る。あれがもしかして黒幕かなあ？」

「必殺・壁破りキイイック！！」

「ガン！」

「やっぱり無理iiii！！」

「ねえ！扉があって中に人が居るよ！」



「確かに扉から入れれば楽だ！だがロミヤ、わざわざ扉を用意して待ってるなんておかしいと思わないか！？これは罠に決まっている！」

たとえば落とし穴があったりするかもしれないだろ！いや、落とし穴以外にも床がペンキ塗りたてだったりとか壁に落書きがしてあったりとか蚊が潜んでたりとか恐ろしい罠があるに違いない！！

「（あつ、読者の全員に適當に言っておくがヒートアップしてる時は知能が低下するとかしないとか噂があるぞ。まあ、俺の知能はいつでも最高だがツツコミ役の場合低下してるな。）」

「アタイが見たところトラップはなさそうだけど。」

「甘いっ！！初心者が見た程度で曖昧な判断をすると死に繋がるぞ！！！」

「悟の言つとおりだ！！」

「（どつちかというところロミヤはトラップを操れるから初心者じゃないぞ。あー、何故か俺がツツコミ役みたいになってる気がする。つてか俺のキャラ設定が曖昧すぎるぞ作者め。）」

【曖昧で悪かったな。】

「うおっ！何処から沸いてきた！？」

【沸いてきたって言い方酷いな いやー、最近出番が減多に減ったんで偶には登場してやろうかなって。】

「毎回後書きで出てるし前話で登場したばかりだろ。」

【ボケ役がツツコミを入れてどうする！】

「俺はパーフェクト万能型だから問題なし！単にツツコミ役がツツコミ専門なだけだ。でも魅異がボケだから合わせてボケてやるのが一番か　フフフ。」

【やっぱりお前はボケ役だ。】

「ツツコミも出来る！ってか結局何で来たんだ？」

【嫌がらせ。】

「ツツコミ役にやってこい。」

【断る。本編での俺とツツコミ役の実力の違いは圧倒的で哀れだからな。さて、そろそろ帰るか。】

「もう二度と来なくて良いぞ。」

【何で俺ってこんなに自分小説キャラの主人公に嫌われるんだ？】

「（そんな風にお前が執筆してるからだろ。ってか俺も一応主人公の扱いか。）」

「全然破れそうにないが俺達の実力ならいつかは破れる!!」

「その通りだぜ!だが悟!手が非常に痛い!!」

「しょうがない、こうなったら扉から突入だ!!」

だが扉は何処だ!?

「此処だよ此処!アタイの目の前!」

「なるほど確かに扉だな!」

だが小人サイズの扉じゃないか!これじゃあ俺達はいれないぞ!

「此処でアタイの必殺トラップを使えば完璧!その名も壁抜けトラップ!向こうに繋がる隙間とかがあればそこから壁をすり抜ける事が出来るんだよ!」

「最初から使えよ!」

「ツルーン」

「ほらね!アタイの能力を甘く見てもらっちゃ困るよ!これさえあれば銀行強盗なんか楽勝だからね!じゃ、アタイはポケットで寝てるから。」

「すり抜けるときの効果音がおかしかったぞ!!」

烈、お前がツツコミをやると不自然だ!ってか寝るなロミヤ!

「あれ、もう来たんだ？」

「お前誰だ！？ってか悟！あいつの持つてるものを見る！」

「おっ、宝石じゃないか！」

「って事は黒幕はアイツか！確かに小学生くらいだし女子だな！」

「おい！今すぐその手に持つてる宝石を渡せ！」

「ヤダ！これは面白い事に使えそうだから絶対に渡さないよ！」

「面白い事だと！？」

「面白い事ってなんだ！？」

「知らない人には教えないよ！」

「悟！普通、自分達なら何に使うかを考えるんだ！俺なら漫画を買いまくって高級料理店の常連になるぜ！」

「なるほど！俺ならタイムカプセルに埋める！」

「私はそんな使い方しないよ！もっと こう、大きな革命みたいなことをするの！」

「大きな革命？そんな事企んでも多分、一人のチート的なキャラによって碎かれるぞ！」

「まあお前みたいな悪者はこの悟ンジャーブラックと！」

「烈火のジャージブラザーによって成敗してやるぜ!!」

「（勝手に悟ンジャーブラックのキャラを使うなよ。あと烈火のジャージブラザーって何だ？俺の予想では悟ンジャーブラックの仲間だな。）」

「そうはいかないよ！特技・響きの音！」

「キイイイイイイイン!!」

ぎゃああ！耳に響く音が！

「これはキツイぞ!!」

「ZZZZZZZZ」

流石の烈も耳を塞いでるな。ロミヤはポケットで寝てないで起きろっ!!

「私の特殊能力は音を操る事！それを応用して音速の攻撃を繰り返す事も出来る優れものなんだよ！」

何で皆はこんな良い特殊能力ばかりなんだ！？俺なんか武器に限られるんだぞ！まあ銃は元々使い慣れてるが。

「特技・ミニ超音波だよ！」

「何も起こってないぜ!!失敗だな!!」

「いや！油断するな烈！多分、超音波とか言って石を投げてる気だ！」

「だからそんな事しないって。超音波は人間には聞こえないの！」

「それなら意味はないっ！烈、石でも投げて攻撃だ！」

「おおっ！！…って動けないぞ！！」

うそおん！？って本当に動けないぞ！

「不法侵入したんだから覚悟してね。」

「ってヤバイ！誰かヘルプミー！烈は別に良いから俺だけ助けてくれ！地球で音速攻撃なんか喰らったらシャレにならないぞ！」

「フッフッフ！困ってるようですねえ。」

「って誰！？」

あの小学生は誰だか知らないようだがこの喋りは間違いない！ここまで俺たちを助けに来たのは…

「女子小学生や宿敵の居る所に私あり！天才、強力、カッコいい、三要素を持つ私の名はあああ…全ての可愛い小学生を愛する者・雑魚ベーですよおおおっ！！」

「「おおおおっ！！」」

こんなにこいつが登場して喜ばしい事なんかあっただろうか？いや、上半身裸の変態の登場を喜んだ事なんかないはずだ。

…どうでも良いが何故か雑魚ベーはボロボロだ。半ズボンがところどころ破れて海パンが見えている。

その姿でそこら辺を歩いてたのかよ？

「雑魚ベー、その姿はどうしたんだ？ってか雨双とアミユリーはどうしたんだ？」

「この基地の入り口で羽双さんに敵と間違われて軽くやられましてねえ。二人は気絶したので私だけが来たんですよっ！」

羽双の軽くは恐ろしいけどな。

「それなら何で私の基地の場所が分かったの？」

「それは貴方の愛の力で此処まで引き寄せられたからですよっ！」

敵の質問に答える雑魚ベー。雑魚ベーなら確かに半径数キロ以内に  
いる女子小学生の場所とか分かるかもな。

あと烈が途中から空気並みに喋ってないのは喋りだすタイミングが  
分かってないからだろう。

「それにしても小学校に居た女の子は親切でしたねえ。その子にこ  
の場所も教えてもらったんですよっ。」

「学校？女の子？それはありえないよ。」

「俺もそう思うぞ。」

相手と意見が一致。だってこの立回県には人は俺たち以外に居ないんだぞ。それに学校なんかない筈だし相手の仕業にも思えない。

そういえば烈とロミヤもデパートに行ったとか言ってたが何か関係が有るのか？

羽双も焼き鳥を持ってたが…羽双の場合は時間を操って海越えでもしたんだろう。

「そんな筈はありません！アミユリーさんと雨双さんも一緒でしたからねえ！」

「まあ…いいや。それよりお兄さんも私と戦うの？」

「のおっはあああつ！お兄さんって言われちゃいましたよおおっ！…もう数百回お願いします！できれば次はお兄ちゃんって言ってくださいねえ！！」

とりあえず落ち着け。仮にも敵なんだから…

「お兄ちゃん」

「ドゴオオオオオオン！！」

「何で爆発？…あつ、もしかして爆破オチ！？」

相手が何か言ってるけど全然違うと思う。ってか意味分からん。



ってか爆発した本人が居ないし。人間爆弾雑魚ベーの行方はいかに！？ってところか？

「あああ、もうこの世に未練はありませんよぉ」

あつ、居たか。ってか未練がなくてもお前が来たら天国も地獄も困るだろ。こいつなら小学生か保育園児であれば神様や閻魔様の孫だろうが関係なしに飛び掛るだろうからな。

この状態の雑魚ベーを復活させるなら…

「雑魚ベー、お前が死んだらアミユリーと羽双はどうするんだ？」

「ハッ、そうでした！私はあの二人のためにも負けられないのですよあつ！しかし女の子に手をだすのも正直心が痛みますねえ。」

俺はお前の行動に頭が痛むよ。いや本当に。

「どうやったらその宝石を返してくれますか？」

「うーん、じゃあ私と一緒にあるアニメの歌を歌ってくれたらいいよ。」

最初っから俺達にそれを言ってくれよ！

「しかしこの小説は著作権に非常に注意してますからねえ」

「じゃあ歌ってるシーンをカットしたら？」

「それは良いアイデアですねえ。それじゃあカットしますよおっ。」

「作者と著作権の都合によりカットされました」

「いやあ、歌うついでに踊ってしまいましたねえ。」

「ありがとう。じゃあこれはあげるね。」

とりあえずは無事解決か？何か出番を取られた感がするんだが。

「ゴゴゴゴゴゴオッ！！」

流石にこのパターンにも慣れてきたぞ。恐らく崩壊寸前だな。

「大変ですよおっ！皆さん早く逃げないと手遅れに」

「ガシャアアアアアン！！」

「って手遅れだあああああ！！」

「ってあれ？無事だ。」

「まったく」

「羽双！」

周りの時間が止まってるって事はお前が助けてくれたのか！

「もう少し先の事を考えて行動してもらえませんか？」

「「「言い返す言葉もありません」「」」

相手と雑魚ベーと俺が正座させられる。脱出してからにしてほしい。

「そつえば羽双、此処に小学校なんてないよな？」

「ええ。」

「そんな筈はありません！私とアミユリーさんと雨双さんの三人で確かに行きましたよおっ！なんなら二人に聞いたらどうですか？」

「やっぱり……ああ、あと二人共寝てますよ。」

「本当ですか！？よおおっしっ！寝顔を見に行きますよおっ！！」

で、とりあえずその後俺が宝石を学校に届けて事件は無事に解決した。

あの犯人の女の子は本部の人に怒られてたな。雑魚ベーも付き添いで一緒に。

まあ無事に終わって良かった。

「そのあと」

「つどはあつ！何とか生き埋めにならずにすんだ！チクショー、羽双め俺が埋もれた後に時間を止めやがつて！しかもその後動かすから生き埋めになるとこだったじゃねえか！！」

「その他」

「あれ、羽双から私のところに来るなんて珍しいね。」

「とりあえず釈放されて良かったですね。：ところで立回県のデパートや小学校、あれは魅異さんの仕業でしょう？」

「よく分かったね。どうして？」

「いえ、一時的に作り出しすぐ消したりできる人なんてあまり居ませんからね。」

「流石。」

「普通に協力すれば良いと思いますよ。」

「まあ雰囲気を読んでの行動ってやつだよ。」

## 82話：解決法は簡単です（後書き）

@悟視点@

「83話更新！ここで少し重要なお知らせがあります。」

「なんだ？珍しいな。」

「変な星でツツコミ生活！？の更新を一時停止します！」

「ズキーン！」

「ぎゃあああ！！何するコラ！」

「いや、作者の存在意義がなくなったから…理由は？」

「この小説の続編を考えてるんだけどそっちの執筆をしようと…」

「何でだよ！？この小説が終了してからでいいだろ！？」

「それだとお前は二度と主人公として登場できないかもしれないぞ？」

「えっ？」

「続編を作るって事は主人公も変わるんだ。俺が描く小説ではだが。」

「マジかよ！？」

「変な星でツツコミ生活！？が終了してからの場合はお前はもう主人公になれないんだ。だが続編は早く書かないといけない。だから変な星でツツコミ生活！？を一時停止してもう片方の小説を執筆する。気が向いたらまたこっちの小説も執筆できるだろ。」

「なるほど…俺が主人公で居るためにはしょうがないのか。」

「そういう事だ。まあもう一つの小説でもお前は時々登場するがな。」

「へえ。」

「それでは皆さん早ければそのうち書く次回をお楽しみに！」

### 83話：廃校は新たな始まり

@ 悟視点 @

いやあ、宿題もなく気楽なのが春休みだよな。春休み最高！なのに…

何で生徒全員に集合するよう言っんだ校長おおおっ！

せつかくの春休みなのに学校集合なんて嫌だあっ！

まっ、重大発表らしいから良いか。夏休みを冬まで続ける校長が、春休み中に集合するように言うくらいなんだから期待してよさそうだ！

「えー、春休みに集合なんてさせてスミマセン。しかし重大な発表が有るので聞いてください！というか、もう来ちゃったんだから諦めて下ださい。」

諦めまーす。

「実は、此処が廃校になります。以上です。」

おお、そうなのか。それは凄いな……………ってマジですか！？

『ええええええええええっ！？』

驚くのがワンテンポ遅いぞ皆！

「理由ですが資金不足です。本部に送らないといけないお金が、五

十セル足りなかつたんです。そして廃部指令が出たんです。私も徹夜でバイトしてたんですが足りなくて。」

ギリギリ足りなかつたのか。俺に言ってくれば五十セルくらいは貸してやったのに！勿論利子付きで返してもらっけどな！

「随分前に（四十六話で）大会社に偶然要求した五十セルが、寄付されていたら高校は、存続できたのですが。」

大企業に偶然五十セル要求してたのかよ！？ってか大会社も五十セルくらい寄付してやれよ！

「でも高校生活は、続ける事ができるので安心して下さい。」

いやいや廃校になったなら無理だろ。

「実は、転校したい人は、別の高校に転校できます。ただし、春休み前に取ったアンケートに書いた場所に行ってもらいます。」

そのためのアンケートだったのか。実は、春休みの前に今の高校以外の行きたい高校を書くアンケートが配られたんだ。

「此処に残りたい人は、残っても構いませんが寮は、閉鎖しますの  
で使えません。転校先の寮は、全て無料で使えますけどね。」

分かりやすく言うと寮に住んでる人は、転校しないと生活が大変になるって事だろ。

俺は、今住んでる所が有るが俺は、アンケートで確か魅異と別の場所を書いた筈：転校すれば普通の生活が出来るじゃないか！

「転校希望者は、体育館に集まってください！転校を希望しない人は、帰って結構です。」

よし、体育館に向かうか。

「体育館」

「あつ、悟だよー。」

「おおーい！悟！」

こっちに向かってくるのは…

「烈にジャルス！お前達も転校するのか？」

「僕達は、寮に住んでるからねー。」

「ちなみに俺とジャルスは、レベラー高等学校に行くんだぜ！」

レベラー高等学校？何処だったわけ？

「何処だそれ？」

「此処からかなり南東に行った所にあるだよー。冬のフルーツが名産の場所だけどねー。」

「勉強のレベルが高いけど可愛くて性格の良い女子が多いらしいぞ



「まあ、絶対に転校できるから勉強のレベルなんて関係ないぜ！」

「おおー、そんな場所をアンケートで書いたとは、ラッキーだなこの二人。」

「悟はー？」

「俺か？俺は、秋方<sup>しゅちう</sup>高等学校<sup>こうとうがく</sup>って所だ。」

アンケートの時、この場所しか覚えてなかったからな。

「秋方<sup>あきがた</sup>ってあの変わった読み方の場所だよねー？」

「俺も知ってるぜ！よく秋方<sup>あきがた</sup>と読み間違えられる場所だよな！でもよくアンケートの時に思いついたな悟！」

「流石は、悟だねー。なかなか良い場所だよー。」

「えっ？ああ…まあな！」

本当は、換わった読み方だから覚えてただけなんだって…

「それでは、転校希望の皆さんに移動する時の券を渡します。それぞれの高校には、転校の知らせをしましたので安心してください。」

俺は、明日に船で行くみたいだな。

ちなみに烈とジャルスは、一週間後に飛行機で行くらしい。

「さて、明日に備えて家で準備でもするかな。」

「家と言う名の…貸家」

「魅異も若如も居なそうだなっと。」

そつえばあの二人は、暝宰京に残るのか？

「まあ、どっちでも良いけどなあ。」

家具とかは、一部を除きこの家に残しておくか。

「さて、寝よう。」

理由？小説の進行を早める為だ！

「次の日」

「ほらみる！もう次の日になった！」

「あつ、やっと起きた！」

部屋を飛び出して廊下に出ると、若如が居ました。

「そうそう悪いが俺は、別の高校に行く事になったからな。」

「その船は、あと数時間で出航するけどね。」

「え？」

時計を見るがまだ六時だ。そういえば券の出航時間を見てなかった。取り出して見てみると出航時間は…うえ！なんと八時だった。

俺の移動手段は、自分のこの脚のみ！タクシー代なんか持ってない。此処からの港への距離を考えると…間に合う確率が低い。

「ぬあああああああつ！」

荷物を持ち、無駄に大声を上げて飛び出す。こうなったら休憩無しで突っ走る！

（数十秒後）

「ああー、疲れた。」

ただいま公園のベンチでジュースを飲んで休憩中。突っ走った結果がこれって情けない！

「よし、休憩終了だ！」

空き缶を既に燃えてるゴミ箱に入れて走り出す。あっ、座ってたベ  
ンチに燃え移った！

く港く

途中に何台かの消防車とすれ違いながらも、何とか港の船に乗り込  
んだ。

時間は、七時五十分…案外ギリギリだな。

「えっ、今回の話は、これだけ？」

ヤバイ、カッコイイ言葉で締めくくらないと！

「それじゃあ…俺の新しい人生がこの先に待ってるぜ！」

### 83話：廃校は新たなる始まり（後書き）

@ 悟視点 @

「で、この無理矢理な展開は、どういう事か説明してもらおうか作者！」

「いや…あの…今回で『変な星でツツコミ生活』は…」

「終了とか言ったら許さないぞオイ！主人公を何の為にやってきたのか分からないだろ！」

「違う誤解だ！終了だけど終わらないから！落ち着け！」

「よし落ち着いた。それでどういう事だ？」

「確かに『変な星でツツコミ生活！？』の連載は、終了する。だが『変な星でツツコミ生活！？第二期編』を新たに連載するつもりだ。勿論主人公は、お前だ。」

「アニメでよくあるパターンだな。」

「まあな。」

「じゃあ何でこの小説：第一期の方で連載を続けないんだ？」

「いろいろと理由が有る。」

「どんな？」

「例えばイベントを多くするから、どうしてもコメディ率が少なくなるんだ。まったく無い訳でもないけどな。」

「ジャンルやキーワードやカテゴリに微妙な違いが出るのか。」

「そう。でもシリアスな訳でもないんだよねー。」

「どっちだよ…」

「次の理由が新キャラ出したいな的なノリで…」

「何て奴だ。…この小説でも出せるだろ。」

「だって微妙な登場とかが多すぎて、レギュラーキャラが分からない状態だろ。」

「自業自得だ。」

「続編の番外編である『変な星で平凡生活!?!』に出てるキャラや、『変な星でツツコミ生活!?!』からキャラを何人かを引き継いで出す予定だ。ってか続編だから当たり前か。」

「当たり前だろ。」

「そして次の理由だが…『変な星でツツコミ生活!?!』の文章とかって読みにくいよな?」

「まあ、そうだな…ってまさか!」

「文章が読みにくいのは、大問題だと思うんだ。だから新たに小説を作る事でカバーする。」

「それって切り捨てるって事じゃ……」

「何を言う！カバーだカバー！第二期を新たに連載する事で一期の読者が増えるかもしれないだろ！」

「しかし文章の読みにくさが……」

「だから二期から読み始めても話が分かるようにする！そうすれば完璧だ！まさに天才的アイデア！」

「やつぱり切り捨てる気だよ……最低で最悪な作者だなお前！人間のクズだ！人間止めろ！」

「いやいや、時間が余裕でこの事を覚えてたら文章とかも直すつもりだよ、うん直す！もしくは、第一期とまったく別の話にするとかも考えてるぞ！」

「非道な悪徳商法か詐欺に近いぞ！」

「………それなら本編よりサブストーリーの方が凄く面白いゲームとかアニメも有るじゃないか！名前を言ってやろうか！？」

「いや、著作権に関わるから止めとけ！」

「本編のネタが足りないから、オマケ的な要素で楽しませるのは、業界の常識中の常識だぞ！普通のファンタジーゲームにギャグ的要素のストーリーが、入ってるのもプレイヤーを楽しませる為だろ！」

それが小説に入ってたって良いだろうが！」

「分かった分かった！お前の理論は、よく分かった。だから黙れ！」

「よし、理解できたか。」

「いや全然だ。何が言いたいのかまったく分からん。ってか業界は、関係ないし知らないだろ。」

「ええ！？」

「とりあえず次作も俺が主人公だから問題なしだ。」

「そ、そうか？…それでは皆さん次回じゃなくて…次作の小説をお楽しみに！」

「期待は、出来ないけどな。」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0221e/>

---

変な星で仮にツッコミ生活！？

2011年9月7日12時01分発行